田辺城下町遺跡

―元町新庄線外１線道路改良事業に伴う発掘調査報告書―

2010年6月

財団法人　和歌山県文化財センター

田辺城下町遺跡

―元町新庄線外１線道路改良事業に伴う発掘調査報告書―

2010年６月

財団法人　和歌山県文化財センター

１．Ｖ区　第３（２）遺構面（東上空から）

２．Ⅱ区　弥生時代土壙墓・遺構654（南から）

序

田辺湾に面する会津川の下流域は、温暖な気候に育まれて原始以降の多くの遺跡が遺され、縄文時代早期「高山寺式土器」の標準遺跡である高山寺貝塚や磯間岩陰遺跡・三栖廃寺塔跡が国指定史跡となっています。古代・中世には紀南地域の経済・文化の中核として、また交通の要衝として、江戸時代には紀州徳川家の付家老である安藤氏の城下町として繁栄しました。

田辺城下町遺跡は、安藤氏の城下町の東側部分を範囲とし、弥生時代の墓地や中世の古銭出土地としても知られていました。しかし、発掘調査がおこなわれたことがなく、遺跡の内容はほとんど明らかになっていませんでした。

このたび、道路の改良事業にともなって発掘調査を実施し、弥生時代の土壙墓や鎌倉時代の集落がみつかりました。また、城下町の町屋を構成する建物跡を検出し、土器類などの生活用具が多く出土しました。これらは、城下町が形成される以前の土地活用を窺うものであるとともに、江戸時代の町屋の生活を復元できる資料といえます。

ここに、発掘調査の成果をまとめ、報告書を刊行いたします。本書が郷土の歴史を知る上で一資料となれば幸いかと存じます。

最後となりましたが、調査及び報告書作成にあたりご指導・ご協力をいただきました関係各位の皆様方に深く感謝申し上げるとともに、今後とも当文化財センターへの一層のご理解とご支援を賜りますようお願いします。

平成22年６月10日

財団法人　和歌山県文化財センター

理 事 長　鈴　木　嘉　吉

例　　言

１．本書は、和歌山県田辺市南新町・湊に所在する田辺城下町遺跡の発掘調査報告書である。

２．調査は、元町新庄線外１線道路改良事業に伴うもので、平成19・20年度の２箇年にわたって発掘調査を実施し、平成21年度から同22年度にかけて報告書作成に伴う遺物整理業務を実施した。

３．発掘調査及び遺物整理業務は、和歌山県の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。

４．発掘調査・整理業務の調査組織は下記の通りである。

事　務　局　長　松田長次郎専務理事（平成19年度・平成20年度５月まで事務局長兼務）
酒部三依（平成20年度６月から　管理課長兼務）
田中洋次（平成21・22年度）

事務局次長　山本新平（平成19年度　管理課長兼務）
酒部三依（平成20年度６月まで　管理課長兼務）

管　理　課　長　冨加見泰彦（平成21・22年度）

埋蔵文化財課長　村田　弘（平成19～22年度）

発掘調査業務担当　平成19年度（第１次調査）：川崎雅史、手島芙実子
平成20年度（第２次調査）：冨加見泰彦、川崎雅史、手島芙実子

遺物整理業務担当　平成21・22年度：川崎雅史

５．本書の執筆・編集は川崎がおこなった。

６．遺構写真は調査担当者が、遺物写真は川崎が撮影した。

７．発掘調査及び遺物整理業務に際し、下記の方々や団体からからご協力を得た。記して感謝を表します。

桑原康弘、積山洋（大阪歴史博物館）、玉井伸明（田辺市教育委員会）、寺西貞弘（和歌山市立博物館）、中川貴（田辺市教育委員会）、西村鋼児（田辺市教育委員会）、濱岸宏一（南方熊楠顕彰館事務局長）、前田敬彦（和歌山市立博物館）、森村健一（堺市教育委員会）、山口一夫、山下奈津子（和歌山市立博物館）、御坊市教育委員会、田辺市立図書館、広川町教育委員会

８．発掘調査及び遺物整理業務で作成した実測図・写真・台帳などの記録資料は、財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。

９．発掘調査において、下記作業を委託業務により実施している。

平成19・20年度　航空写真撮影・基準点測量：株式会社共和

凡　　例

１．調査ならびに本書で使用した座標値は、直角平面座標系（世界測地系）第Ⅵ系のもので、値はkm単位で使用している。図面に使用している北方位は座標北で、標高は東京湾標準潮位（Ｔ．Ｐ．＋）の数値である。

２．土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」に準じ、土質は調査担当者の任意の判断でおこなっている。

３．発掘調査において、地区名は各年度の調査ごとに個別に付していたが、煩雑さを避けるため本報告では新たに付している。なお、遺構番号は発掘調査時のものを踏襲し、遺構の種類にかかわらず１からの通し番号である。

４．遺物図面の縮尺は原則として1/4で、銭貨や鉄製品については1/2で掲載しているが、遺物写真については任意の大きさである。

５．調査で使用した調査コードは、第１次調査：０７－35・104、第２次調査：08－35・104で、記録資料はこのコードを用いて管理している。

本 文 目 次

巻頭図版

序・例言・凡例

第１章　調査の経緯と経過 …… 1

第１節　調査の経緯 …… 1

第２節　調査の経過 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 3

第１節　位置 …… 3

第２節　歴史的環境 …… 3

第３節　田辺城と城下町 …… 6

第３章　調査の方法 …… 8

第１節　調査区 …… 8

第２節　地区割り …… 8

第３節　基本層位と遺構面 …… 9

第４章　調査の成果 …… 10

第１節　Ⅰ区の調査 …… 10

１．江戸時代の遺構と遺物 …… 10

２．中世の遺構と遺物 …… 13

３．弥生時代の遺構と遺物 ……20
４．包含層等出土遺物 ……21
第２節　Ⅱ区の調査 ……21
１．江戸時代の遺構と遺物 ……21
２．中世の遺構と遺物 ……24
３．古代の遺構と遺物 ……26
４．弥生時代の遺構と遺物 ……26
５．その他の遺物 ……26
第３節　Ⅲ区の調査 ……26
１．江戸時代の遺構と遺物 ……30
２．中世の遺構と遺物 ……33
３．その他の遺物 ……34
第４節　Ⅳ区の調査 ……35
１．江戸時代の遺構と遺物 ……35
２．中世の遺構と遺物 ……36
３．その他の遺物 ……46
第５節　Ⅴ区の調査 ……46
１．江戸時代の遺構と遺物 ……49
２．中世の遺構と遺物 ……51
３．その他の遺物 ……59
第６節　Ⅵ区の調査 ……59
１．江戸時代の遺構と遺物 ……61
２．中世の遺構と遺物 ……64
３．その他の遺物 ……64
第５章　まとめ ……65
第１節　弥生時代 ……65
第２節　古代 ……66
第３節　中世 ……67
第４節　江戸時代 ……68
１．絵図と町屋の成立 ……68
２．糖漏について ……69
３．南紀男山焼 ……70
４．墨書と朱書 ……71
主要遺構一覧表 ……73
出土遺物観察表 ……76
報告書抄録 ……87
写真図版

挿 図 目 次

図１　周辺の遺跡 …… 4
図２　調査区位置図 …… 8
図３　基本層位 …… 9
図４　Ⅰ区遺構全体図 ……11
図５　Ⅰ区遺構（１） ……12
図６　Ⅰ区遺構（２） ……14
図７　Ⅰ区出土遺物（１） ……15
図８　Ⅰ区出土遺物（２） ……16
図９　Ⅰ区出土遺物（３） ……17
図10　Ⅰ区遺構（３） ……18
図11　Ⅰ区出土遺物（４） ……18
図12　Ⅰ区出土遺物（５） ……19
図13　Ⅰ区出土遺物（６） ……20
図14　Ⅰ区出土遺物（７） ……21
図15　Ⅱ区遺構全体図 ……22
図16　Ⅱ区遺構（１） ……23
図17　Ⅱ区遺構（２） ……24
図18　Ⅱ区出土遺物（１） ……25
図19　Ⅱ区出土遺物（２） ……26
図20　Ⅲ区遺構全体図 ……27・28
図21　Ⅲ区遺構（１） ……29
図22　Ⅲ区遺構（２） ……30
図23　Ⅲ区出土遺物（１） ……31
図24　Ⅲ区出土遺物（２） ……32
図25　Ⅲ区出土遺物（３） ……33
図26　Ⅲ区出土遺物（４） ……34
図27　Ⅳ区遺構全体図 ……37・38
図28　Ⅳ区遺構（１） ……39
図29　Ⅳ区遺構（２） ……40
図30　Ⅳ区出土遺物（１） ……41
図31　Ⅳ区出土遺物（２） ……42
図32　Ⅳ区出土遺物（３） ……43
図33　Ⅳ区出土遺物（４） ……44
図34　Ⅳ区出土遺物（５） ……45
図35　Ⅳ区出土遺物（６） ……46
図36　Ⅴ区遺構全体図 ……47・48
図37　Ⅴ区遺構（１） ……50
図38　Ⅴ区遺構（２） ……51
図39　Ⅴ区出土遺物（１） ……52
図40　Ⅴ区出土遺物（２） ……53
図41　Ⅴ区出土遺物（３） ……54
図42　Ⅴ区出土遺物（４） ……55
図43　Ⅴ区出土遺物（５） ……56
図44　Ⅴ区出土遺物（６） ……57
図45　Ⅴ区出土遺物（７） ……58
図46　Ⅴ区出土遺物（８） ……59
図47　Ⅴ区出土遺物（９） ……60
図48　Ⅴ区出土遺物（10） ……61
図49　Ⅵ区遺構全体図 ……62
図50　Ⅵ区遺構 ……63
図51　Ⅵ区出土遺物 ……64
図52　砂丘上の墓地 ……65
図53　砂丘上から出土した弥生土器 ……66
図54　中世の主要遺構 ……68
図55　田辺城下図 ……68
図56　糖漏使用法 ……69
図57　県下出土の糖漏 ……70
図58　男山陶器場の図 ……70

表　目　次

表１　調査工程 …… 1
表２　周辺遺跡一覧 …… 4
表３　調査区新旧対照表 …… 8
表４　中世の土器組成 ……67

写 真 目 次

写真１　改良前の海蔵寺通り …… 1
写真２　発掘調査風景 …… 2
写真３　遺物整理業務 …… 2
写真４　現地説明会 …… 2
写真５　高山寺式土器 …… 3
写真６　山田代銅鐸 …… 5
写真７　磯間岩陰遺跡鹿角製品 …… 5
写真８　三栖廃寺塔跡 …… 5
写真９　闘鶏神社 …… 6
写真10　泊城跡 …… 6
写真11　田辺城水門跡 …… 7
写真12　今福町遺跡検出の中世溝 …… 7
写真13　遺構57出土鉄滓 ……10
写真14　消された銘（497） ……71
写真15　墨書陶器（207） ……72

図 版 目 次

巻頭図版１．Ｖ区　第３（２）遺構面
　　２．Ⅱ区　弥生時代土壙墓・遺構654
図版１　１．田辺市街遠景
　　２．田辺城の現状
　　３．調査地近景
図版２　１．Ⅰ区　第１遺構面全景
　　２．Ⅰ区　第２遺構面全景
図版３　１．Ⅰ区　第１遺構面　土坑群
　　２．Ⅰ区　第２遺構面　土坑群
　　３．Ⅰ区　第２遺構面　掘立柱建物１ほか
図版４　１．Ⅰ区　第１遺構面　遺構60
　　２．Ⅰ区　第１遺構面　遺構126～129ほか
　　３．Ⅰ区　第２遺構面　遺構62
図版５　１．Ⅰ区　第２遺構面　遺構63
　　２．Ⅰ区　第２遺構面　遺構90
　　３．Ⅰ区　第２遺構面　遺構91
図版６　１．Ⅰ区　第１遺構面　遺構60断面
　　２．Ⅰ区　第１遺構面　遺構10断面
　　３．Ⅰ区　第１遺構面　遺構44断面
　　４．Ⅰ区　第１遺構面　遺構57断面
　　５．Ⅰ区　第２遺構面　遺構９・74
　　６．Ⅰ区　第２遺構面　遺構74遺物出土状況
　　７．Ⅰ区　第２遺構面　遺構90遺物出土状況
　　８．Ⅰ区　第２遺構面　遺構91遺物出土状況
図版７　　Ⅱ区全景
図版８　１．Ⅱ－１区全景
　　２．Ⅱ－２区全景
図版９　１．Ⅱ区　遺構654
　　２．Ⅱ区　遺構672断面
　　３．Ⅱ区　礎石列１・遺構699
　　４．Ⅱ区　遺構694断面
　　５．Ⅱ区　遺構654断面
図版10　１．Ⅲ区　第１遺構面全景
　　２．Ⅲ区　第２遺構面全景
図版11　１．Ⅲ－１区全景
　　２．Ⅲ－２区　第２遺構面全景
　　３．Ⅲ－４区　第１遺構面全景
　　４．Ⅲ－４区　第２遺構面全景
図版12　１．Ⅲ区　第１遺構面　遺構755
　　２．Ⅲ区　第１遺構面　遺構766
　　３．Ⅲ区　第２遺構面　遺構803
図版13　１．Ⅳ－１・２区　第１遺構面全景
　　２．Ⅳ－１・２区　第２・３遺構面全景
図版14　１．Ⅳ－３区　第１遺構面全景
　　２．Ⅳ－３区　第２遺構面全景
　　３．Ⅳ－４区　第１遺構面全景
　　４．Ⅳ－４区　第３遺構面全景
図版15　１．Ⅳ－１区　第２遺構面土坑群
　　２．Ⅳ－２区　第２遺構面
　　３．Ⅳ－２区　第３遺構面
図版16　１．Ⅳ区　第１遺構面　礎石建物１
　　２．Ⅳ区　第１遺構面　遺構453
　　３．Ⅳ区　第２遺構面　遺構264断面
　　４．Ⅳ区　第２遺構面　遺構277断面
　　５．Ⅳ区　第２遺構面　遺構185断面
　　６．Ⅳ区　第２遺構面　遺構210・213
　　７．Ⅳ区　第３遺構面　遺構320
　　８．Ⅳ区　第２遺構面　遺構459断面
図版17　１．Ⅴ区　第１遺構面全景
　　２．Ⅴ区　第３（２）遺構面全景
図版18　１．Ⅴ区　西側　第１遺構面・遺構515
　　２．Ⅴ区　東側　第１遺構面
　　３．Ⅴ区　第１遺構面　西部土坑群
図版19　１．Ⅴ区　西側　第３（２）遺構面
　　２．Ⅴ区　第３（２）遺構面　遺構600・602
　　３．Ⅴ区　第３（２）遺構面　遺構560・569
図版20　１．Ⅴ区　第１遺構面　遺構515断面
　　２．Ⅴ区　第１遺構面　遺構493断面
　　３．Ⅴ区　第１遺構面　遺構530断面
　　４．Ⅴ区　第２遺構面　遺構580断面
　　５．Ⅴ区　第２遺構面　遺構572断面
　　６．Ⅴ区　第３遺構面　遺構569断面
　　７．Ⅴ区　第３遺構面　遺構600断面
　　８．Ⅴ区　第３遺構面　遺構602断面
図版21　１．Ⅵ区　第１遺構面全景
　　２．Ⅵ区　第３（２）遺構面全景
図版22　１．Ⅵ区　第１遺構面全景
　　２．Ⅵ区　第３（２）遺構面全景
　　３．Ⅵ区　第１遺構面　遺構350
図版23　Ⅰ区出土遺物
図版24　Ⅰ区出土遺物
図版25　Ⅰ・Ⅱ区出土遺物
図版26　Ⅲ区出土遺物
図版27　Ⅲ・Ⅳ区出土遺物
図版28　Ⅳ区出土遺物
図版29　Ⅳ区出土遺物
図版30　Ⅴ区出土遺物
図版31　Ⅴ区出土遺物
図版32　Ⅴ区出土遺物
図版33　Ⅴ区出土遺物
図版34　Ⅴ・Ⅵ区出土遺物

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

元町新庄線外１線道路改良事業に伴い、田辺城下町遺跡の範囲内にある田辺市南新町－湊間の海蔵寺通りが改良されることになった。遺跡内には弥生土器・須恵器・古銭の出土地があり、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡であることが明らかになっていた。ただ、これまで出土した遺物は不時発見であり、また周辺で大規模に開発が行われているものの発掘調査には至っておらず、遺跡の内容はほとんど明らかになっていなかった。

平成18年度、道路改良工事に先立ち、すでに建物の解体・撤去が済んでいた開発予定地の西側部分を対象に県文化遺産課が側溝設置工事に伴う工事立会をおこなった。その結果、近世と中世以前の遺構面があること、それぞれの面に遺構が存在することが確認された。この成果を踏まえ県文化遺産課と西牟婁振興局建設部道路課との協議がなされ、本調査をする運びとなった。

その後、開発予定地の東側部分についても建物の解体・撤去が進み、平成19年度に県文化遺産課が側溝設置工事に伴う工事立会をおこなうとともに、道路本線部分の確認調査を実施した。その結果、近世と中世の遺構面が存在し、西側部分と同様に遺構密度が高いことが明らかになり、調査を実施することになった。

写真１　改良前の海蔵寺通り

発掘調査は、平成19・20年度の２箇年にわたって実施している。

第２節　調査の経過

平成19年度の調査（第１次調査）　平成19年度の発掘調査は、調査範囲の西側部分（Ⅰ区）で面積330㎡を対象に、６月から７月にかけて実施した。調査は工事請負方式で実施し、掘削作業等は株式会社かねやす建設に、基準点測量・航空写真撮影は株式会社共和に委託した。

表１　調査工程

	平成19年度												平成21年度												平成21年度												平成22年度			
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
第1次調査			■	■																																				
第2次調査															■	■	■	■	■	■																				
出土遺物整理																															■	■	■	■	■	■	■	■		

平成20年度の調査（第２次調査）　平成20年度の発掘調査は、平成19年度の工事立会・確認調査で本調査をおこなうこととなった東側部分（Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区）と平成18年度の工事立会で調査が決まっていた西側部分の一部（Ⅱ区）を対象に、６月から実施した。

写真２　発掘調査風景

発掘調査の期間中に、開発予定地の中央付近を占めるⅢ区の建物解体・撤去が完全に終了し、これをうけて県文化遺産課が側溝設置工事に伴う工事立会と道路本線部分の確認調査を実施した。その結果、他の調査区と同様に遺構が展開していることが確認できたことから、Ⅲ区の発掘調査が追加された。

現地調査は11月末まで、面積1,587㎡を対象に実施した。調査は工事請負方式で実施し、掘削作業等は株式会社濱本組に、基準点測量・航空写真撮影は株式会社共和に委託した。また、発掘調査と並行し、応急整理として出土遺物の洗浄・注記作業等をおこなっている。

写真３　遺物整理業務

出土遺物整理業務　報告書作成に伴う出土遺物整理業務は、平成21年11月から平成22年４月にかけて実施した。発掘調査で出土した遺物収納コンテナ92箱（平成19年度20箱、平成20年度72箱）の土器類について、水洗い・登録・注記・接合・実測・トレース・拓本・写真撮影などの作業を実施し、報告書用の原稿を作成した。また、これらと並行して実測図や写真の整理、各種台帳の作成をおこなっている。

普及活動　普及活動の一環として、発掘調査で得られた成果を地元をはじめ多くの人々に広く知ってもらうため、第２次調査実施期間中の平成20年８月13日（土）に現地説明会を開催した。当日は出土遺物の展示コーナーを設け、Ⅴ区で検出した遺構とともに公開し説明を行った。暑い中、盆の期間中でもあったので参加者は18名と少なかったが、説明を熱心に聞き入っていた。

写真４　現地説明会

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　位置

田辺市は和歌山県の中央部に位置し、古代より紀南地方の政治・経済・文化の中心的な役割を果たしてきた。平成17年に旧田辺市に日高郡龍神村、西牟婁郡大塔村・中辺路町、東牟婁郡本宮町の１市・２町・２村が合併して現在の市域となっている。県下の主要河川である日高川・富田川・日置川・熊野川流域の一部を市域にもち、面積は約1,027㎢とほぼ和歌山県の1/5以上を占め、県下一の広域な市である。人口は平成22年３月末現在81,938人で、その大部分が旧田辺市に集中している。臨海するのは旧田辺市のみで、市域の大半は山間部となり、平野部は会津川下流域に形成された沖積平野以外、各河川に沿う狭小な河岸段丘に求めるのみである。

交通はＪＲきのくに線が海岸部に沿って走り、芳養・田辺・新庄駅があり、田辺駅は各方面へのバスが発着する当地方のターミナルとなっている。主要道路は国道42号で、国道168号・311号・424号などが市内を通過している。近畿自動車道紀勢線は平成19年度に南紀田辺ＩＣまで完成し、京阪神と高速道路で繋がった。

田辺城下町遺跡は旧田辺市にあり、田辺湾に面した会津川河口左岸に形成された海岸砂丘上、標高５ｍ付近に立地する。砂丘は現地形では確認できないが、周辺地域の状況からも数時期にわたって形成されたと考えられ、現海岸線に沿って約２㎞、奥行き約800ｍの範囲に広がる。市街地の大半がここに築かれている。

第２節　歴史的環境（図１、表２）

会津川流域には原始・古代からの多くの遺跡が遺されており、国指定史跡も３件（高山寺貝塚・磯間岩陰遺跡・三栖廃寺塔跡）を数えることができる。

縄文時代の代表的な遺跡としては、会津川河口近くの丘陵に営まれた高山寺貝塚がある。過去の調査で３箇所の貝塚が確認されており、ここから出土する尖底押型文土器は、近畿地方の早期後半の標識である「高山寺式土器（写真５）」として周知されている。このほか中期の船元式・里木式が出土する目座Ⅱ遺跡、後期から晩期の土器が出土する矢矧遺跡、晩期の土器が出土する鳥ヶ谷岩陰遺跡などがある。

写真５　高山寺式土器
（田辺市史・史料編Ⅰから転載）

稲作を受け入れた頃の最初の弥生集落としては、海岸砂丘背後の沖積平野に立地する八丁田圃遺跡をあげることができる。この遺跡は前期から中期

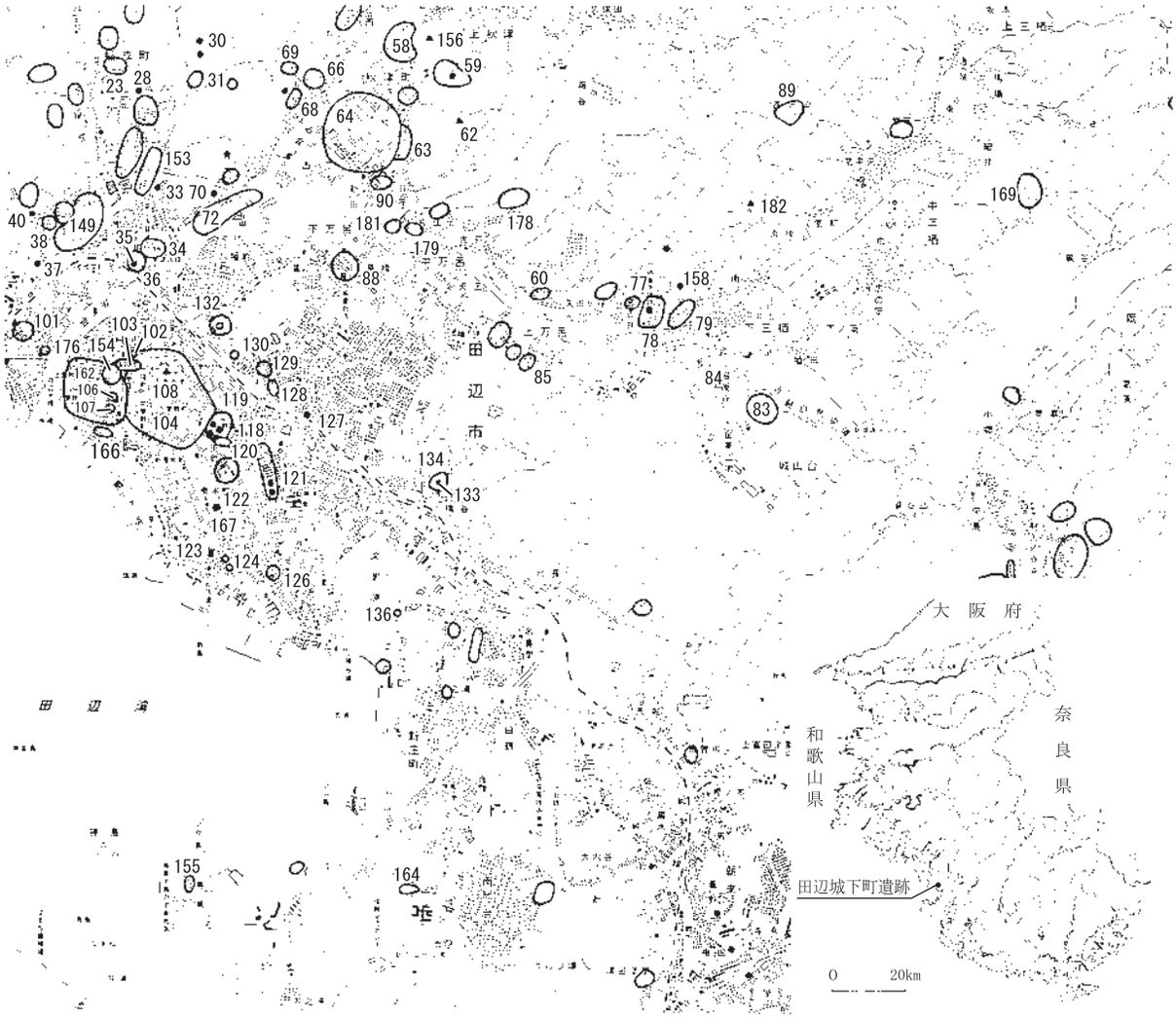


図１　周辺の遺跡（S＝1/50,000）

表２　周辺遺跡一覧（番号は図１に対応）

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
23	奥江原窯跡	窯跡	古墳～奈良	79	高坊遺跡	散布地	弥生～古墳	128	松が谷Ⅱ遺跡	散布地	中世
28	稲成山古墳	古墳	古墳	83	城山遺跡	散布地	室町	129	松が谷Ⅰ遺跡	散布地	鎌倉
30	丸橋丘火葬墓	墳墓	奈良	84	岩屋谷岩陰遺跡	岩陰	古墳	130	宝乗院岩陰遺跡	岩陰	古墳
31	丸橋丘遺跡	散布地	弥生	85	三光寺裏山遺跡	散布地	縄文～弥生	131	山崎窯跡	窯跡	古墳
33	東江原火葬墓	墳墓	奈良	88	上万呂Ⅰ遺跡	散布地	縄文	132	山崎遺跡	散布地	弥生
35	糸田古墳	古墳	古墳	89	衣笠山城跡	城跡	中世	133	葉糸古墳	古墳	古墳
34	高山寺貝塚	貝塚	縄文～弥生	90	目座Ⅱ遺跡	散布地	縄文	134	葉糸遺跡	散布地	縄文
36	糸田遺跡	散布地	古墳	101	上野山遺跡	散布地	平安～近世	136	鳥ヶ谷岩陰遺跡	岩陰	縄文～弥生
37	西沖代陶器窯跡	窯跡	江戸時代	102	栄町通遺跡	散布地	平安～室町	149	下村遺跡	散布地	弥生～奈良
38	西沖代遺跡	散布地	古墳～平安	103	今福町遺跡	散布地	室町～近世	153	稲成遺跡	散布地	弥生～平安
58	矢矧遺跡	散布地	縄文～室町	**104**	**田辺城下町遺跡**	**散布地**	**江戸**	154	上屋敷Ⅲ遺跡	出土地	古墳～中世
59	岩倉山遺跡	散布地	弥生～平安	106	上屋敷Ⅰ遺跡	出土地	鎌倉～室町	155	新庄遺跡	墓	弥生
60	矢田ヶ谷遺跡	散布地	弥生	107	上屋敷Ⅱ遺跡	散布地	鎌倉～室町	156	山田代銅鐸出土地	出土地	弥生
62	岩倉山銅鐸出土地	出土地	弥生	108	南新町古銭出土地	出土地	室町？	158	後口谷古墳	古墳	古墳
63	目座遺跡	散布地	弥生	118	仮庵山経塚	経塚	鎌倉	162	田辺城跡	城跡	近世
64	八丁田圃遺跡	散布地	縄文～鎌倉	119	闘鶏神社遺跡	出土地	中世	164	トビトビ山遺跡	散布地	弥生
66	秋津廃寺跡	寺院跡？	奈良～平安	120	神田古墳群	古墳	古墳	166	扇ヶ浜台場	砲台	江戸
68	脇ノ谷瓦窯跡	窯跡	奈良	121	浜田古墳群	古墳	古墳	167	東本町遺跡	散布地	中世
69	堂ノ谷瓦窯跡	窯跡	奈良	122	神田遺跡	散布地	弥生～古墳	176	浄恩寺境内遺跡	散布地	弥生、中世
70	青木古墳	古墳	古墳	123	磯間岩陰遺跡	岩陰	古墳	178	万呂大谷遺跡	散布地	弥生
72	綾代遺跡	散布地	弥生～古墳	124	鬼橋岩岩陰遺跡	岩陰	縄文～古墳	179	楠本城跡	城跡	中世
77	寺山窯跡	窯跡	奈良	126	西菖蒲谷遺跡	散布地	古墳～平安	181	初山城跡	城跡	中世
78	三栖廃寺	寺院跡	奈良	127	礫山古墳	古墳	古墳	182	後口谷銅鐸出土地	出土地	弥生

にかけて営まれた遺跡で、当地域の中核となる遺跡であると考えられ、東海・伊勢地方の土器が多く搬入されている。中期の遺跡は少ないものの、後期の遺跡は急増する。この時期の遺跡は水田耕作には適さない丘陵や山上に立地することが多く、数の多さは当地方の特徴と言える。また、海岸砂丘上ではこれまで中期の弥生土器が単独で出土することが多く、これらは穿孔した土器であることからも墓に供献したものであり、一帯に墓域が営まれていたと考えられる。会津川と隣の芳養川流域では農耕祭祀に使われたとされる銅鐸が伝承も含めてこれまで６個出土しており、秋津山田代（写真６）と下三栖後ロ谷で出土した突線鈕式銅鐸が田辺市歴史民俗資料館に展示されている。

写真６　山田代銅鐸
（田辺市史・史料編Ｉから転載）

古墳時代の集落の内容は明らかになっていないが、この時期の当地域を特徴付ける遺跡として磯間岩陰遺跡と古目良岩陰遺跡がある。岩陰遺跡は田辺湾周辺に集中しており、海蝕された岩陰が縄文時代以降中世にかけて墓地などに利用されている。磯間岩陰遺跡は発掘調査で８基の石室が見つかっており、刀装具をはじめとする多くの鹿角製品（写真７）や鉄器・須恵器などが出土し、海人集団の首長クラスの墓であると考えられている。古目良岩陰遺跡は弥生時代から中世にかけての遺跡で、古墳時代には大規模に製塩が行われており、当地域ではいち早く製塩が行われた遺跡と考えることができる。

写真７　磯間岩陰遺跡鹿角製品
（田辺市史・史料編Ｉから転載）

古墳の数は比較的少ないが、葉糸古墳が発掘調査され馬具や須恵器などが、後ロ谷古墳からは、紀南地方では唯一のミニチュア竈セットが出土している。また、この時期の須恵器を焼いた窯跡として山崎窯跡がある。

写真８　三栖廃寺塔跡

会津川流域一帯は古代には牟婁郡に属し、牟婁郡五郷のうちの牟婁郷に比定することが

できる。当地域の古代寺院としては三栖廃寺（写真８）があり、寺に使われていた瓦などを焼いた窯跡として脇ノ谷・堂ノ谷窯跡がある。また、この時期の須恵器を焼いた窯跡として奥江原窯跡がある。牟婁の郡衙は当地域にあったと考えられるが、これまで遺構などは確認されていない。ただ、稲成地区の北沖代遺跡では都で使われるような黒色土器や緑釉土器、灰釉土器などが出土し、すぐ近くの稲成遺跡からは人形などの形代が出土することなどから、隣接する場所に郡衙が存在した可能性がある。

写真９　闘鶏神社

平安時代末期から、皇族・貴族を中心に熊野三山への参詣が盛んに行われるようになり、参詣道も整備されるとともに道沿いには王子社が造られる。中・近世にかけては「蟻の熊野詣」の例えどおり一般庶民までもこぞって熊野詣を行うようになる。この参詣道である中辺路と大辺路は「紀伊半島の霊場と参詣道」として世界文化遺産になっているが、二つの道は現在の市街地で分岐している。

闘鶏神社（写真９）は、源平合戦の時に源氏に味方するか、平氏に味方するかを赤白の鶏を戦わせて決めたことに神社名が由来するとされる。この神社は新熊野神社とも呼ばれ、鎌倉時代には社を管掌する別当家が当地域に勢威を振るっていた。南北朝・室町時代には田辺は熊野三山の勢力下で、守護勢力も及びがたい状態であった。

第３節　田辺城と城下町

天正13年（1585）、羽柴秀吉の紀州攻めのあと、この攻撃に加わった杉若越後守が湯川氏の居城であった芳養泊城（写真10）に入城して牟婁地方の統治にあたった。その後、天正18年（1590）に、杉若氏は平野部を一望できる会津川右岸の上野山城に居城を移している。慶長５年（1600）、関が原の戦い後、和歌山城には浅野幸長が田辺には家老である浅野氏重が入る。氏重は、いったん上野山城に入城したが、慶長８年（1603）にその麓にある会津川河口付近の洲崎に平城を築いたとされる。現在、会津川河口右岸に「元町」や「古町」の地名が残るのは、上野山や洲崎に城があった時の名

写真10　泊城跡

残であるとされている。慶長10年（1605）に洲崎城が波浪で壊れたため、氏重は対岸に湊城を築くが、これが田辺城の前身であるとされる。湊城は元和元年（1615）の「一国一城令」でいったん廃城となったと考えられるが、元和５年（1619）に紀伊に徳川家康の十男である頼宣が入国するにあたって、付家老として安藤直次が遠江掛川から田辺に移り、湊城の跡に田辺城として整備する。

写真11　田辺城水門跡

田辺城は会津川左岸に形成された海岸砂丘上に立地し、河口付近を占めて築城されている。西方は会津川、南方が海で、北と東に堀を掘削することで城の内外を区画していている。城は東西約400m、南北約400mの規模で、内堀によって囲まれた方形区画の本丸と、内堀と外堀によって鍵型に画された丸の内に分けることができ、城域がほぼ現在の上屋敷町の範囲に相当する。本丸には天守閣はなく陣屋形式の平城である。丸の内は主に重臣の屋敷で、城の東には与力・足軽屋敷があり、その外側に本町・片町・紺屋町・長町・新町などの町人町が形成されている。

明治時代になって田辺城の堀は埋め立てられ、城内は市街地となり、平地の城であることからも城が存在したことは分からなくなっているが、会津川に向かって開口していた水門（写真11）のみが城の遺構として現在も見ることができ、街中の各所に残る鍵型路や袋小路が城下町の面影を残している。ただ、近年の道路拡幅等などに伴って、城下町風情も消えつつある。

写真12　今福町遺跡検出の中世溝

田辺城に関連する発掘調査としては、上屋敷Ⅲ遺跡・今福町遺跡の調査がある。上屋敷Ⅲ遺跡では大手門内の家老屋敷の一部が調査され、屋敷地を区切っていたと考えられる溝状遺構や築地塀あるいは建物の基礎部とされる根石などが見つかっている。また、中世の遺構としては、掘立柱建物や土壙墓がある。今福町遺跡では田辺城に沿う町屋付近が調査され、土師器皿が多量に投棄された中世の溝（写真12）が検出されている。江戸時代の遺構は対象とされなかったことから、建物等の存在は明らかでないが、近世の国産陶磁器をはじめ礫石経、硯、瓦などが出土している。

第３章　調査の方法

第１節　調査区（図２、表３）

調査区名は調査年度ごとに名称を与えているが、本報告では煩雑さを避けるために新たにⅠ～Ⅵ区の調査区名を与えた。また、Ⅰ・Ⅱ区は２分割、Ⅲ・Ⅳ区は４分割して調査をおこなっていることから、それぞれの小調査区名は算用数字を用いてⅠ－1区、Ⅳ－４区のように呼称する。

遺構番号は、すべての調査区を通しでナンバリングした調査時のものを使用する。

なお、新旧の調査区対照表は以下の通りである。

表３　調査区新旧対照表

年度	平成19年度の調査区		平成20年度の調査区											
新調査区名	Ⅰ－１	Ⅰ－２	Ⅱ－１	Ⅱ－２	Ⅲ－１	Ⅲ－２	Ⅲ－３	Ⅲ－４	Ⅳ－１	Ⅳ－２	Ⅳ－３	Ⅳ－４	Ⅴ	Ⅵ
旧調査区名	B	A	①W	①E	②NW	②NE	②SW	②SE	③－１W	③－１E	③－１SW	③－１SE	③－２W	③－２E

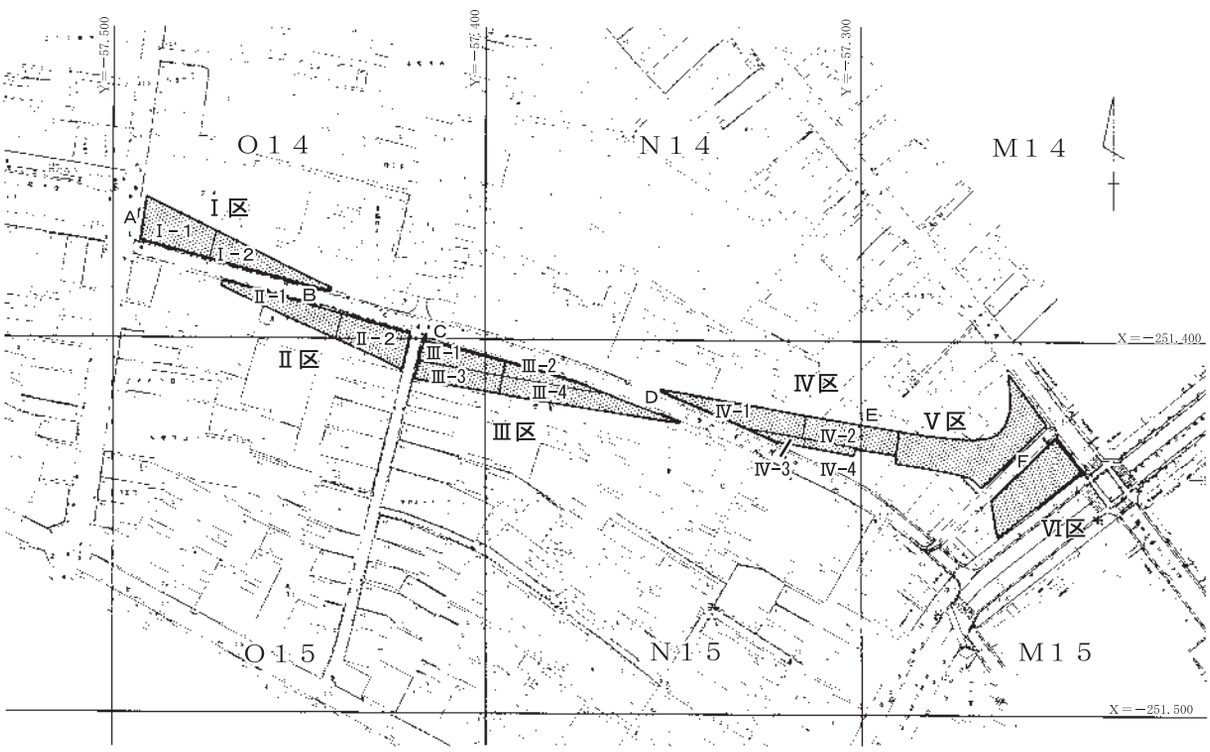


図２　調査区位置図

第２節　地区割り

調査地の地区割りは国土座標第Ⅵ系（世界測地系）を使用し、田辺城下町遺跡の範囲を網羅する北東（Ｘ＝－250.0km、Ｙ＝－56.0km）に基点を設け、その点から南に2.5km、西に2.5kmの範囲に大区画・小区画を設けて区割りをおこなっている。

大区画は基点をＡ１地点と定めて、西方向へ100ｍごとにＢ、Ｃ、Ｄ・・・、南方向に２、３、４・・・という軸を設定した１辺100ｍ四方の区画で、北東隅の地区名を用いてＡ１、Ｃ３などと呼称する。次に、この大区画の北東隅をａ1地点として、そこから４ｍずつ西方向へｂ～ｙ、南方向へ２～25とそれぞれの方向に25分割し、一辺４ｍの正方形区画を小区画とする。小区画は北東隅の地区名からａ１区～ｙ25区と呼称する。地区名は大区画－小区画（Ａ１－ａ1区など）で表す。

第３節　基本層位と遺構面（図３）

調査では、基本的な土層として１～４層に区分している。第１層は表土・現代の造成土、第２層が近世の整地土、第３層が中世の遺物包含層、第４層が地山である。遺跡が砂丘上に立地することから、各層は砂が主体であり、上位の層の方が土分を含む割合が多く、下位ほど土分が少なく、第４層では土分をほとんど含まない。

第２層は西端のⅠ・Ⅱ区とⅢ区の西側にはなく、Ⅲ区の東側から東方向に向かって厚く盛られており、Ⅳ区東側とⅤ・Ⅵ区では上・下２層（第２－1層、第２－2層）に分けることが可能で、ともに近世後半代の遺物を含む。第３層は、立会調査においてⅠ・Ⅱ区で確認されていたが、Ⅱ区では仮舗装時に削平され、調査時には殆ど残存していなかった。この層は平安時代末から室町時代のかけての遺物を包含している。第４層は均一な砂の自然堆積層である。第４層上面のレベルは東に向かって低くなっており、これは地形が砂丘ピークから後背地に向かうことに起因するものと考えられる。

Ⅰ区では第３層上面が第１遺構面、第４層上面が第２遺構面となる。Ⅱ区は先にも触れたように第３層が削平されていたことから、第４層上面ですべての遺構を検出している。Ⅲ区西側では第１層下の第４層上面ですべての遺構を検出している。Ⅲ区東側、Ⅳ区西側では第２－１層上面が第１遺構面、第４層上面が第２遺構面となる。Ⅳ区東側とⅤ・Ⅵ区では第２－１層上面が第１遺構面、第２－２層上面が第２遺構面、第４層上面が第３遺構面となる。

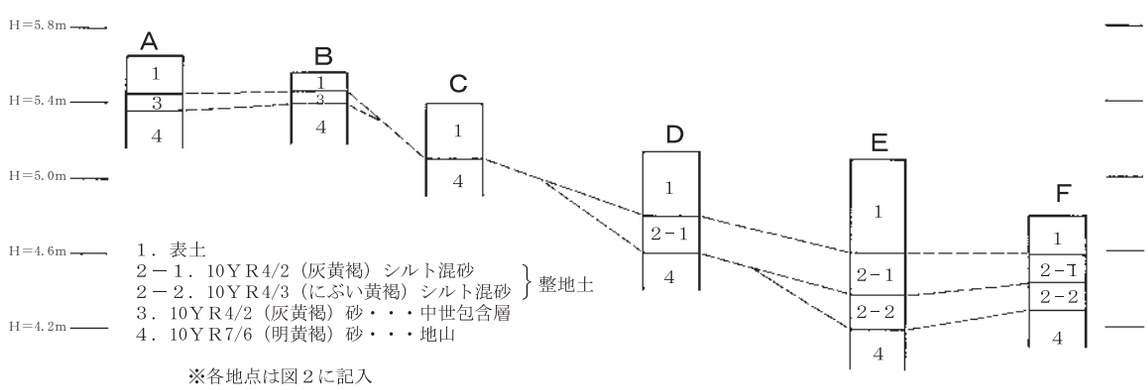


図３　基本層位

第４章　調査の成果

第１節　Ⅰ区の調査（図４、図版２・３）

排土置き場を確保するため調査区を二分し、西側をⅠ－１区、東側をⅠ－２区として、反転して調査をおこなった。遺構密度が高いものの、調査区全体に建物基礎や建物解体時・側溝建設時の撹乱が深く及び、遺構が検出できたのは調査区の約1/2程度である。

第１遺構面で江戸時代の遺構を、第２遺構面で弥生時代・平安時代末から鎌倉時代・室町時代の遺構を検出している。

１．江戸時代の遺構と遺物

江戸時代の遺構には土坑（遺構10・44・57・127など）、井戸（遺構126）、ピットのほかに建物に関連すると考えられる遺構（遺構60）がある。土坑は１ｍ前後のものが多く、シルトを含む粗砂を覆土にするものが主体である。ピットは柱痕があり柱穴と認められるものは１個のみで、掘立柱建物のプランも想定することができなかった。遺構から出土する遺物には近世後半代を中心とする国産陶磁器が多く、前半代のものはほとんど確認できない。

遺構10（図５・７、図版６）　調査区の東寄りで検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、長さ1.14m、幅1.00m、深さ0.4m で、断面形状は舟底状を呈する。遺物は肥前系染付の鉢蓋（１）や白磁、瀬戸･美濃系陶器、土師質土器、瓦などの近世の遺物のほかに、混入遺物として弥生土器や中世の土師器、瓦器、青磁などが出土している

遺構44（図５・７、図版６・23）　調査区の中央付近で検出した土坑で、北側が調査区外となる。平面形状は隅丸方形に近く、長さ2.2m、幅1.5m 以上、深さ0.66m を測る。底面はほぼ平坦で、断面は逆台形を呈する。遺物は肥前系染付・白磁、丹波焼、瀬戸･美濃系陶器、土師質土器の焙烙（４）や焜炉（５・６）などが出土している。

遺構57（図７、写真13、図版６・23）　調査区の中央付近で検出した土坑で、北側が側溝建設時に破壊されている。旧状の平面形は円形を呈すると考えられ、長さ0.6m、幅0.48m以上、深さ0.23ｍを測る。断面は舟底状で、土層は２層に区分できる。遺物は肥前系染付皿（12）、施釉陶器鉢・碗、堺･明石系擂鉢（13）、土師質土器などのほかに碗形の鉄滓（写真13）が多量に出土しており、周辺で鍛冶が行われていたことが窺える。

写真13　遺構57出土鉄滓

遺構60（図５・８、図版４・６）　調査区の中央付近で検出した。南側が調査区域外になることから全容は不明である。長方形の区画の周りに溝

113
117
126
129
127
128
119
X＝−251.380
Y＝−57.480
57
47
55
61
44
31
Y＝−57.460
60
18
19
20
16
10
Y＝−57.440
第１遺構面
148
掘立柱建物１
146
62
91
63
90
82
76
75
12
9
74
第２遺構面
0
10m

図４　Ⅰ区遺構全体図

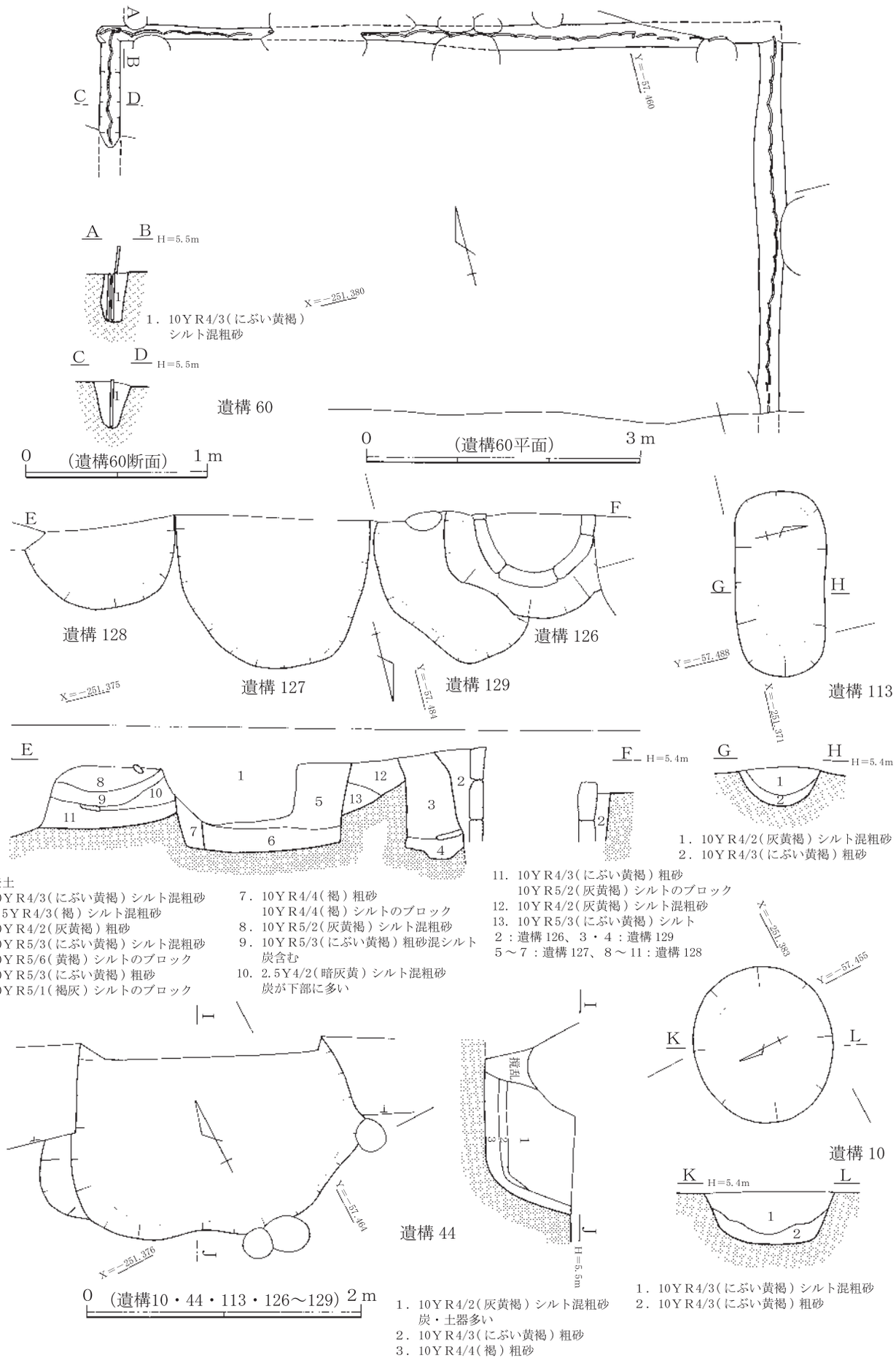

A
B
C
D
Y=−57.460
A
B H=5.5m
X=−251.380
1．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）
シルト混粗砂
C
D H=5.5m
遺構 60
0
（遺構60断面）
1 m
0
（遺構60平面）
3 m
E
F
遺構 128
遺構 127
遺構 126
遺構 129
X=−251.375
Y=−57.484
G
H
Y=−57.488
X=−251.371
遺構 113
E
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
F H=5.4m
2
G
H H=5.4m
1
2
1．10ＹＲ4/2（灰黄褐）シルト混粗砂
2．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）粗砂
1．表土
2．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）シルト混粗砂
3．7.5ＹＲ4/3（褐）シルト混粗砂
4．10ＹＲ4/2（灰黄褐）粗砂
5．10ＹＲ5/3（にぶい黄褐）シルト混粗砂
10ＹＲ5/6（黄褐）シルトのブロック
6．10ＹＲ5/3（にぶい黄褐）粗砂
10ＹＲ5/1（褐灰）シルトのブロック
7．10ＹＲ4/4（褐）粗砂
10ＹＲ4/4（褐）シルトのブロック
8．10ＹＲ5/2（灰黄褐）シルト混粗砂
9．10ＹＲ5/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
炭含む
10．2.5Ｙ4/2（暗灰黄）シルト混粗砂
炭が下部に多い
11．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）粗砂
10ＹＲ5/2（灰黄褐）シルトのブロック
12．10ＹＲ4/2（灰黄褐）シルト混粗砂
13．10ＹＲ5/3（にぶい黄褐）シルト
２：遺構 126、３・４：遺構 129
５～７：遺構 127、８～11：遺構 128
X=−251.383
Y=−57.455
K
L
遺構 10
K H=5.4m
L
1
2
1．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）シルト混粗砂
2．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）粗砂
I
I
Y=−57.464
X=−251.376
遺構 44
撹乱
1
2
3
H=5.5m
0
（遺構10・44・113・126～129）
2 m
1．10ＹＲ4/2（灰黄褐）シルト混粗砂
炭・土器多い
2．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）粗砂
3．10ＹＲ4/4（褐）粗砂

図５　Ｉ区遺構（１）

を掘り、その中に隙間なく一列に平瓦（16・17）を立て並べて埋めたものである。溝を含めた区画の大きさは東西約7.4m、南北4.2m以上である。調査区の南に接し江戸時代から存在する道との間隔から南北は５m余りであると想定でき、東西４間、南北３間の規模で造られていると考えられる。周囲を巡る溝の幅は15～30cmを測る。瓦は残りが良いところで２段に積まれていることが確認でき、深さ50cm以上の溝を掘って、全体に瓦を２段積み重ねていたと考えることができる。建物に伴う遺構の可能性が考えられるが、構造的なものは不明である。遺物は平瓦のほかに、肥前系染付碗（14）、土師質土器焙烙（15）、無釉陶器などが出土している。

遺構113（図５・８・13、図版23・24）　調査区の西端近くで検出した土坑で、平面形状は楕円形を呈する。規模は長さ1.35m、深さ0.65m、深さ0.3mで、断面形状は舟底状を呈する。遺物は肥前系染付碗（21）・蕎麦猪口（26）、肥前系白磁小杯（25）、瀬戸･美濃系染付碗（22～24）・皿（27）、南紀男山焼の可能性がある染付鉢（28）、京･信楽系の施釉陶器行平鍋（29）・合子蓋（30）、土師質土器灯明皿（31）、鉄釘、骨針（112）などのほかにイモガイ・スガイ・クマノコガイ、イシダタミなどの貝類が多く出土しており、遺構の性格としてはごみ穴の可能性が考えられる。また、出土した土器は幕末頃の良好な一括資料である。

遺構126（図５・８・９、図版４）　調査区の西部で検出した井戸で、遺構129を切り込んで築かれており、南側は調査区域外となる。砂岩を弧状に加工し、それを組み合わせて直径0.7mの井戸枠とする。遺物は掘形から瀬戸･美濃系染付小皿（39）、肥前系陶器鉢（40）、常滑焼捏鉢（41）、土師質土器焙烙（42）、軒丸瓦（43）などが出土する。幕末頃に築かれた井戸で、土層観察などから明治以降も使用されていたと考えられる。

遺構127（図５・９、図版４・24）　調査区西部で検出した土坑で、遺構128を切り込む。南側が調査区域外であることから全容は不明である。平面形状は円形を呈すると考えられ、直径約1.3m、深さ0.7mを測る。平面では検出できなかったが、断面精査で中央に直径約1.0mの落ち込みが確認できることから、埋桶遺構の可能性が考えられる。遺物は肥前系染付碗（44）、瀬戸･美濃系陶器鉢（45）、堺･明石系擂鉢（46・47）、土師質土器、瓦、石臼（48）などが出土している。

２．中世の遺構と遺物

中世の遺構には掘立柱建物１棟、土坑（遺構９・76など）、溝（遺構62・63）、ピットがある。遺構から出土する遺物には土師器、瓦器、山茶碗、国産陶器、中国製磁器などがある。土器のほとんどが細片であり、時期が判別できるものについては12・13世紀のものが主を占め、わずかに室町時代に下るものが認められる。

掘立柱建物１（図６・11、図版３）　調査区の南西端で検出した。東西１間（2.1m）、南北２間（4.0m）を検出したのみで、建物の全容は不明である。柱穴は直径25～35cm、深さ17～40cmであるが、柱の痕跡は確認できなかった。遺物は柱穴から土師器皿・甕（73）、瓦器椀などが出

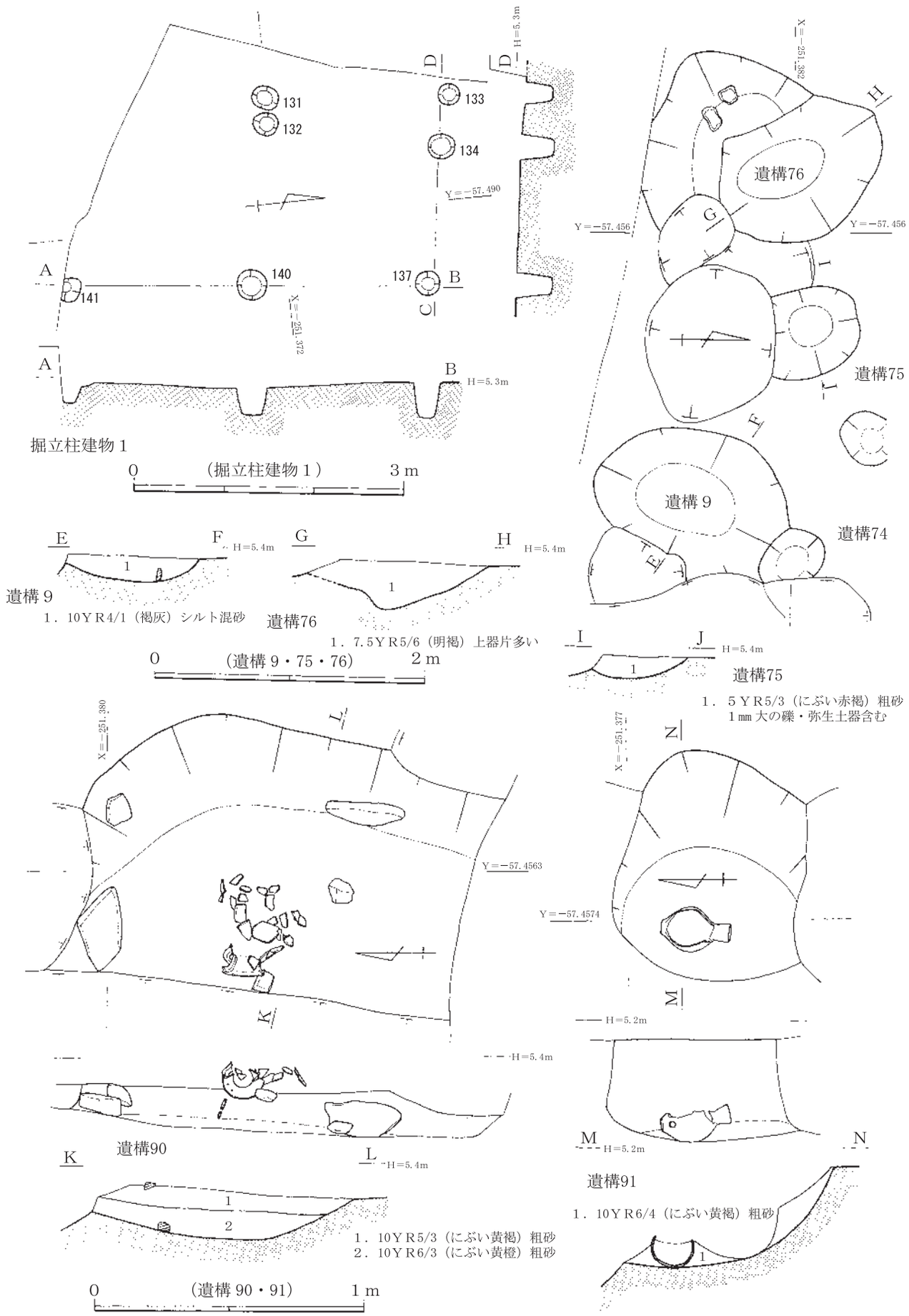
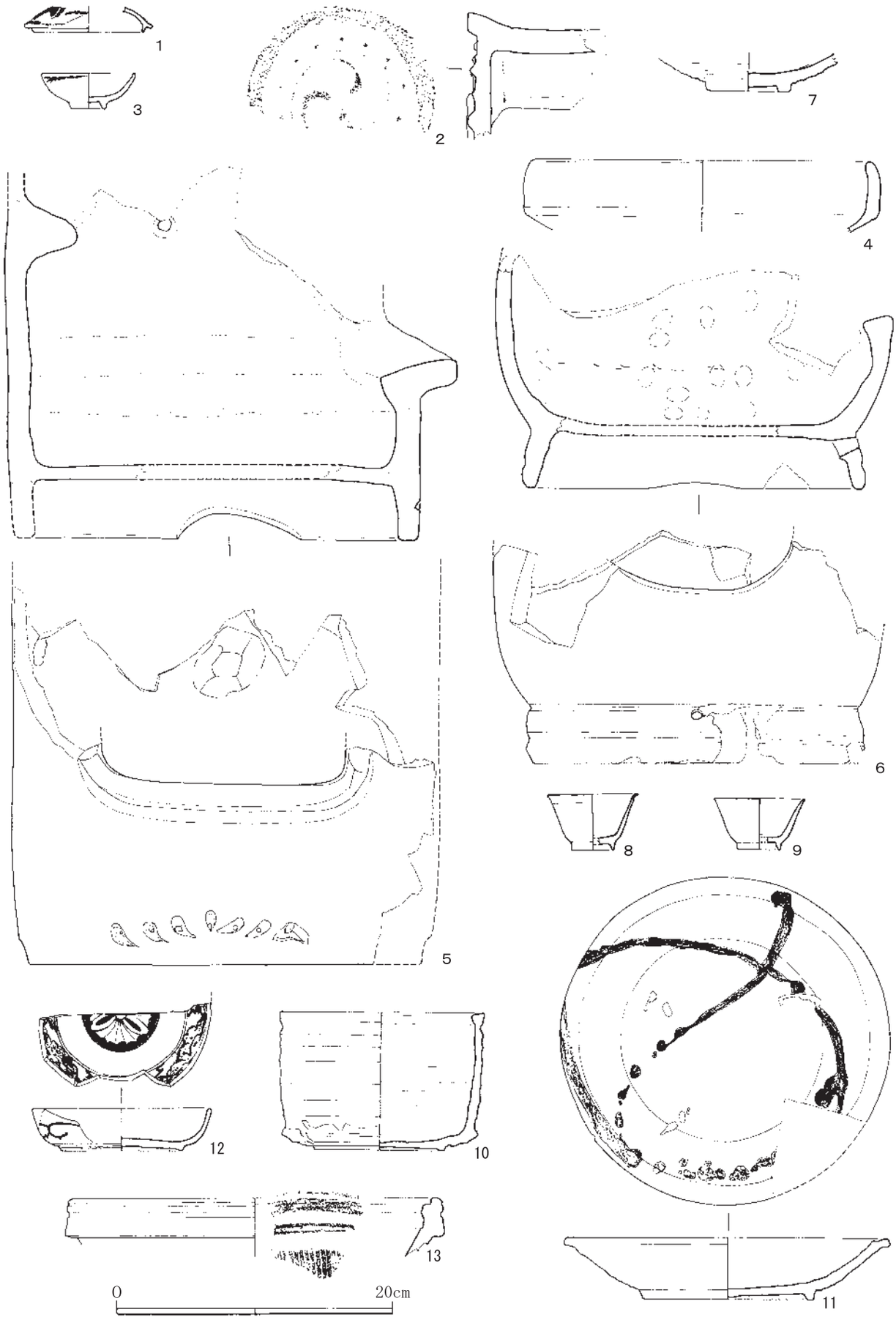
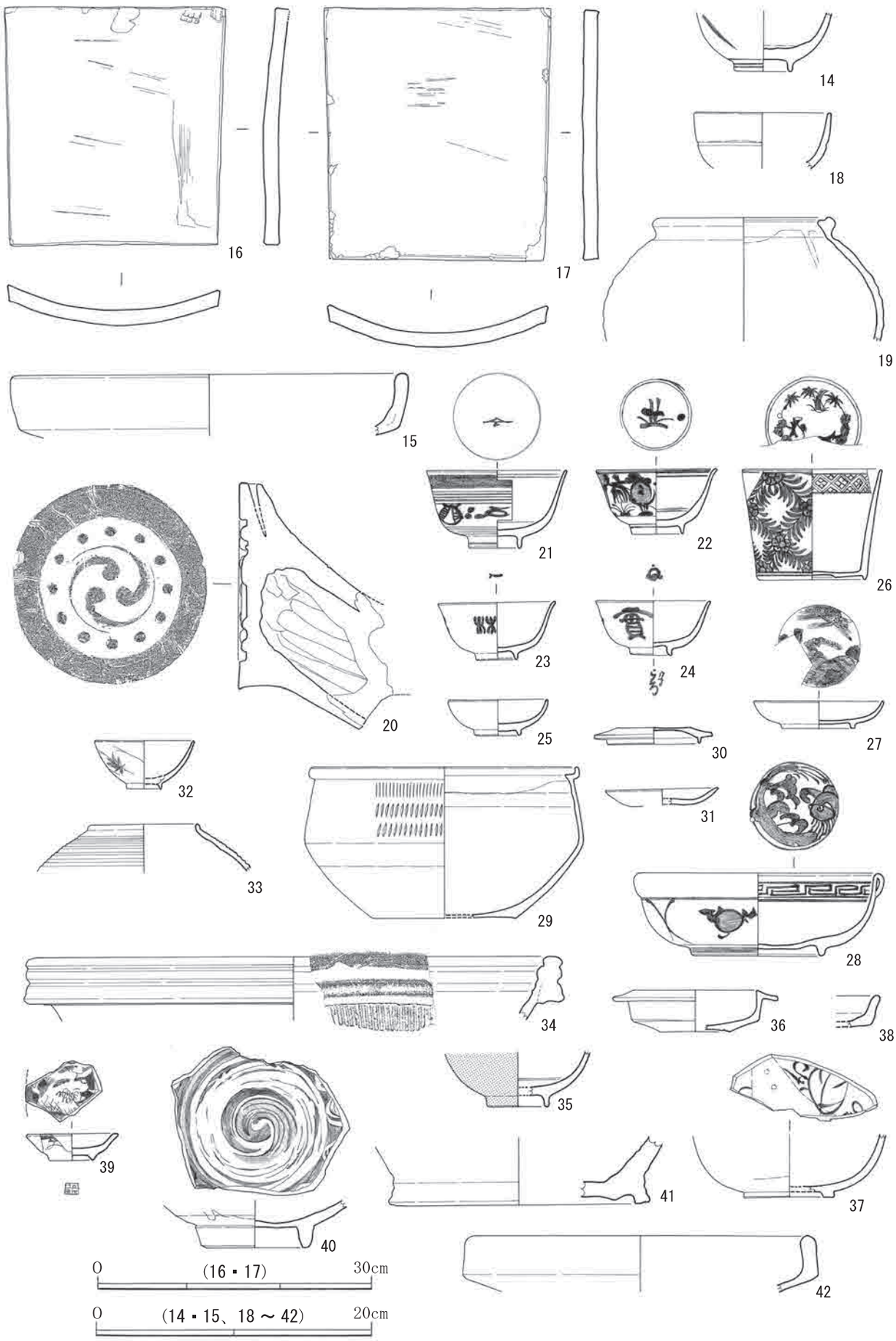

131
132
133
134
140
141
137
A
B
C
D
H=5.3m
Y=−57.490
X=−251.372
掘立柱建物１
0
（掘立柱建物１）
3ｍ
遺構76
遺構75
遺構74
遺構９
Y=−57.456
X=−251.382
E
F
G
H
H=5.4m
１．10ＹＲ4/1（褐灰）シルト混砂
１．7.5ＹＲ5/6（明褐）上器片多い
0
（遺構９・75・76）
2ｍ
I
J
１．５ＹＲ5/3（にぶい赤褐）粗砂
１mm大の礫・弥生土器含む
X=−251.380
X=−251.377
Y=−57.4563
Y=−57.4574
K
L
M
N
H=5.2m
遺構90
遺構91
１．10ＹＲ5/3（にぶい黄褐）粗砂
２．10ＹＲ6/3（にぶい黄橙）粗砂
１．10ＹＲ6/4（にぶい黄褐）粗砂
0
（遺構90・91）
1ｍ

図６　Ⅰ区遺構（２）



１：遺構 10、２：遺構 19、３：遺構 31、４～６：遺構 44、７：遺構 47、８～11：遺構 55、12・13：遺構 57

図７　Ⅰ区出土遺物（１）



14～17：遺構 60、18～20：遺構 61、21～31：遺構 113、32～34：遺構 117、
35～38：遺構 119、39～42：遺構 126

図８　Ⅰ区出土遺物（２）

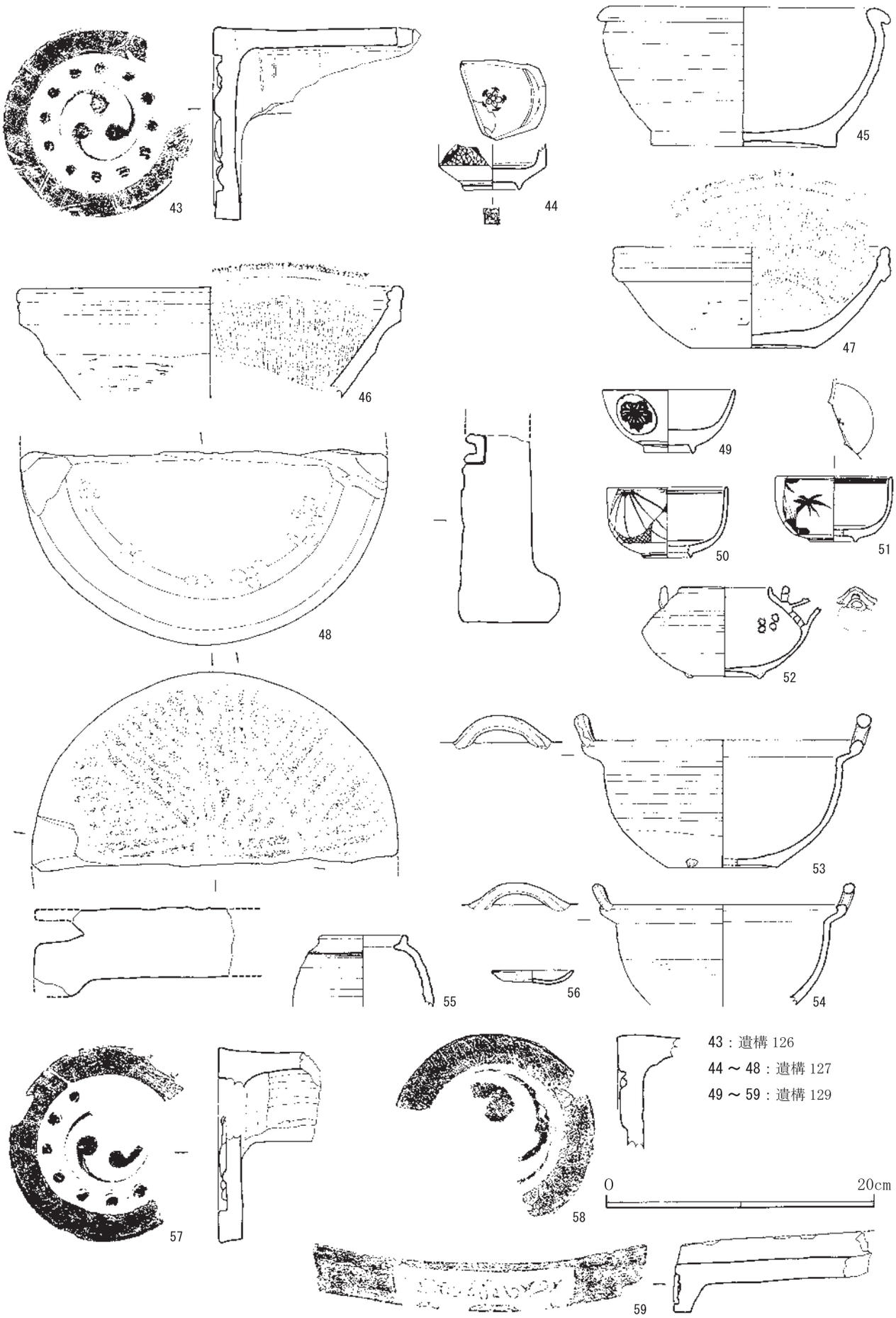

43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
43：遺構 126
44 ～ 48：遺構 127
49 ～ 59：遺構 129
0
20cm

図９　Ⅰ区出土遺物（３）

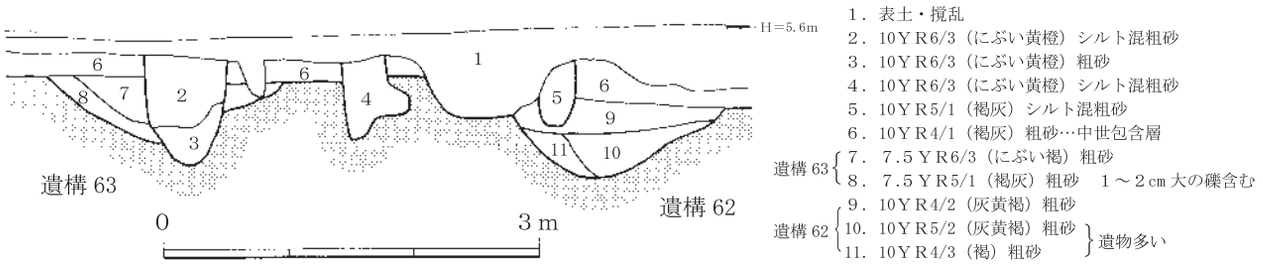


図10　Ⅰ区遺構（３）

土しており、平安時代末から鎌倉時代の建物であると考えられる。

遺構９（図６・11、図版６）　調査区の東寄りで検出した土坑で、平面形状は楕円形を呈する。規模は長さ1.5m、幅1.1m、深さ0.2m を測り、断面形状は舟底状を呈する。遺物は土師器皿、瓦器椀（60）が出土しており、土器の特徴から平安時代末から鎌倉時代の遺構と考えられる。

遺構62（図10・11、図版４）　調査区の中央付近で検出した溝であるが、大部分が撹乱を受けており、長さ2.8m を確認したに過ぎない。幅1.7m 以上、深さ0.7m で、断面は上広がりのＶ字状を呈する。遺物は土師器皿（62・63）・釜（64）、青磁皿（65）、白磁碗（66）、瓦器、山茶碗などが出土しており平安時代末から鎌倉時代の溝であると考えられる。砂地であることから排

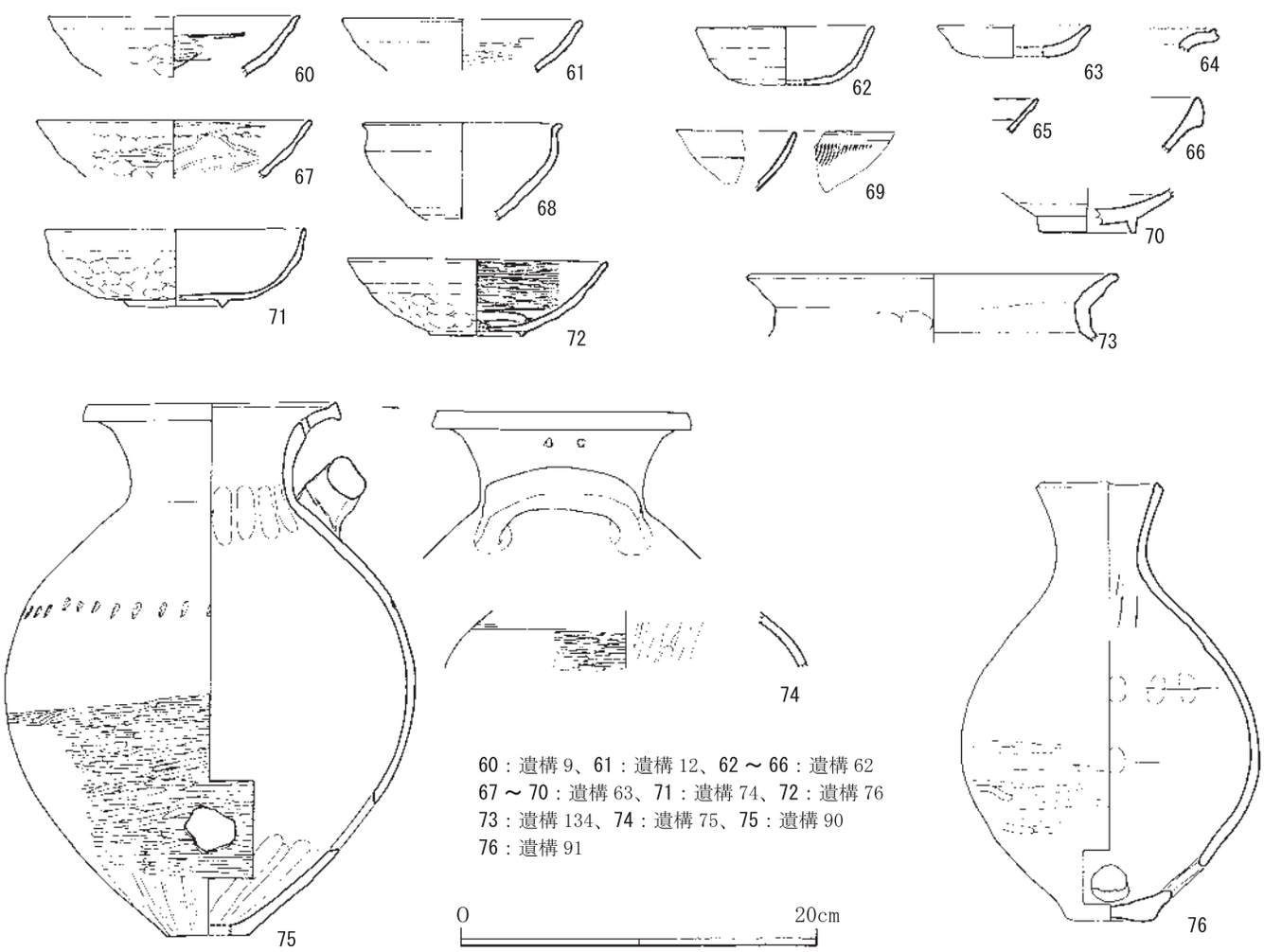


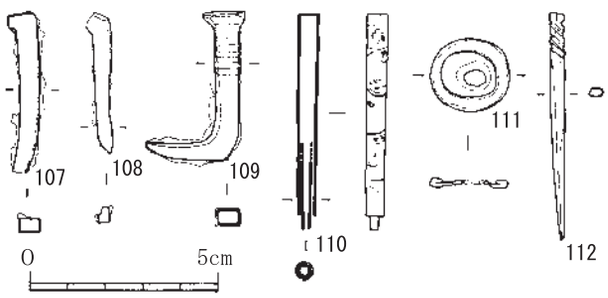
図11　Ⅰ区出土遺物（４）

77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
77～106：包含層ほか
0
20cm

図12　Ⅰ区出土遺物（５）

水を目的としたものではなく、区画溝の可能性が考えられる。

遺構63（図10・11、図版５）　調査区の中央付近で検出した溝で、遺構62と同じ方向に伸び、調査区内で約7.5m を確認した。幅1.5～2.0m、深さ0.6m で、断面は上広がりのＶ字状を呈する。遺物は土師器皿、瓦器椀（67）、瀬戸･美濃系陶器の天目碗（68）、青磁碗（69）、白磁碗（70）などが出土しているが、細かい破片で図示できなかった軒丸瓦の特徴や天目碗から室町時代の溝であると考えられる。遺構62と同様に区画を目的とした溝の可能性がある。



107・110：遺構 16、108・111：遺構 20、109：遺構 82、112：遺構 113

図13　Ｉ区出土遺物（６）

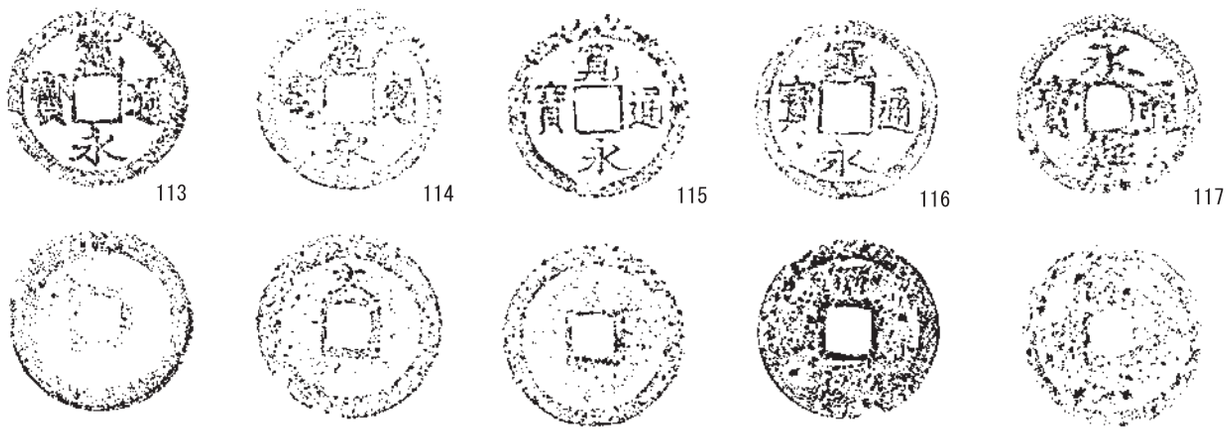
遺構76（図６・11）　調査区の東寄りで検出した土坑で、南側の一部が調査区域外となり、東側の一部が撹乱されている。平面形状は不整円形で、底の深さも一定でない。規模は長さ1.8m、幅1.45m以上、深さ0.36m を測る。遺物の出土は多く、瓦器椀（72）、土師器皿、白磁碗、山茶碗のほかに焼けた石なども出土している。出土遺物から平安時代末から鎌倉時代の遺構であると考えられる。

３．弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の土坑は３基検出している。このほか覆土の土質・色調などから弥生時代のものと考えられるものが２基ある。

遺構90（図６・11、図版５・６・25）　調査区の中央付近で検出した土壙墓で、西側が大きく撹乱され、南側が調査区域外となり全容不明である。平面プランは楕円形を呈すると考えられ、長さ1.7m 以上、幅1.1m 以上、深さ0.2m を測る。底面には10～30cm の川原石が４個据えられており、底面から15cmほど上で底部近くに穿孔を施した弥生土器（75）が出土した。壺は口縁部を西に向けて横位で置かれており、破片が底に向かって滑り落ちたような状態で検出できた。出土した壺は墓に供献されたもので、もともとは土壙墓の上面付近に置かれていたと想定できる。墓の時期は、弥生土器の特徴から弥生時代中期後葉とすることができる。

遺構91（図６・11、図版５・６・25）　調査区の中央付近で検出した土壙墓で、上半部を中世の溝で削平される。平面プランは楕円形または円形を呈すると考えられ、長さ0.85m以上、幅0.7m 以上、深さ0.38mを測る。底面には、供献された弥生土器（76）が口縁部を南に向けて横位で置かれていた。壺の体部下半の底近くには穿孔が施されている。墓の時期は、弥生土器の特徴から弥生時代中期中葉とすることができる。



113：遺構 19、114 ～ 116：撹乱、
117：第３層（中世包含層）

0　5cm

図14　Ⅰ区出土遺物（７）

４．包含層等出土遺物（図12・14、図版25）

図示した江戸時代の遺物はすべて機械掘削時や撹乱から出土したものであるが、遺跡の時期や特徴を示す資料として抽出している。また、中世と弥生時代の遺物に関しては図示できるものをできるだけ掲載している。

江戸時代の遺物には、肥前系染付碗蓋（77・78）・碗（79・80）・御神酒徳利（81）、肥前系紅皿（82）、肥前系京焼風陶器碗（83）、瀬戸･美濃系陶器と考えられる溲瓶（84）、備前焼大甕（86）、土人形（87）、銭貨・寛永通寶（114～116）がある。

包含層等から出土した中世の遺物には、土師器小皿（88）、山茶碗（89～91）、山皿（92）、青磁碗（93）、青磁皿（94・95）、白磁碗（96）、砥石（97）、銭貨・永楽通宝（117）がある。

平面精査時や後世の遺構への混入遺物として弥生土器壺（98～102）・高杯（103～106）がある。

第２節　Ⅱ区の調査（図15、図版７）

Ⅰ区同様に排土置き場を確保するため調査区を二分し、西側をⅡ－１区、東側をⅡ－２区とし、反転して調査をおこなった。調査区全体に建物基礎や建物解体時等の撹乱が深く及び、遺構が検出できたのは調査区の1/2程度である。

立会調査時には第３層の中世包含層が存在したが、仮舗装のための地盤改良によって削平されていた。このためすべての遺構を第４層の地山直上で検出している。

１．江戸時代の遺構と遺物

江戸時代の遺構には礎石列１列、土坑（遺構672・682など）、ピットがある。遺物は江戸時代後半を中心とする国産陶磁器類、硯、碁石があるが、ほぼ同じ面積のⅠ区に比して、遺物量は1/6程度である。

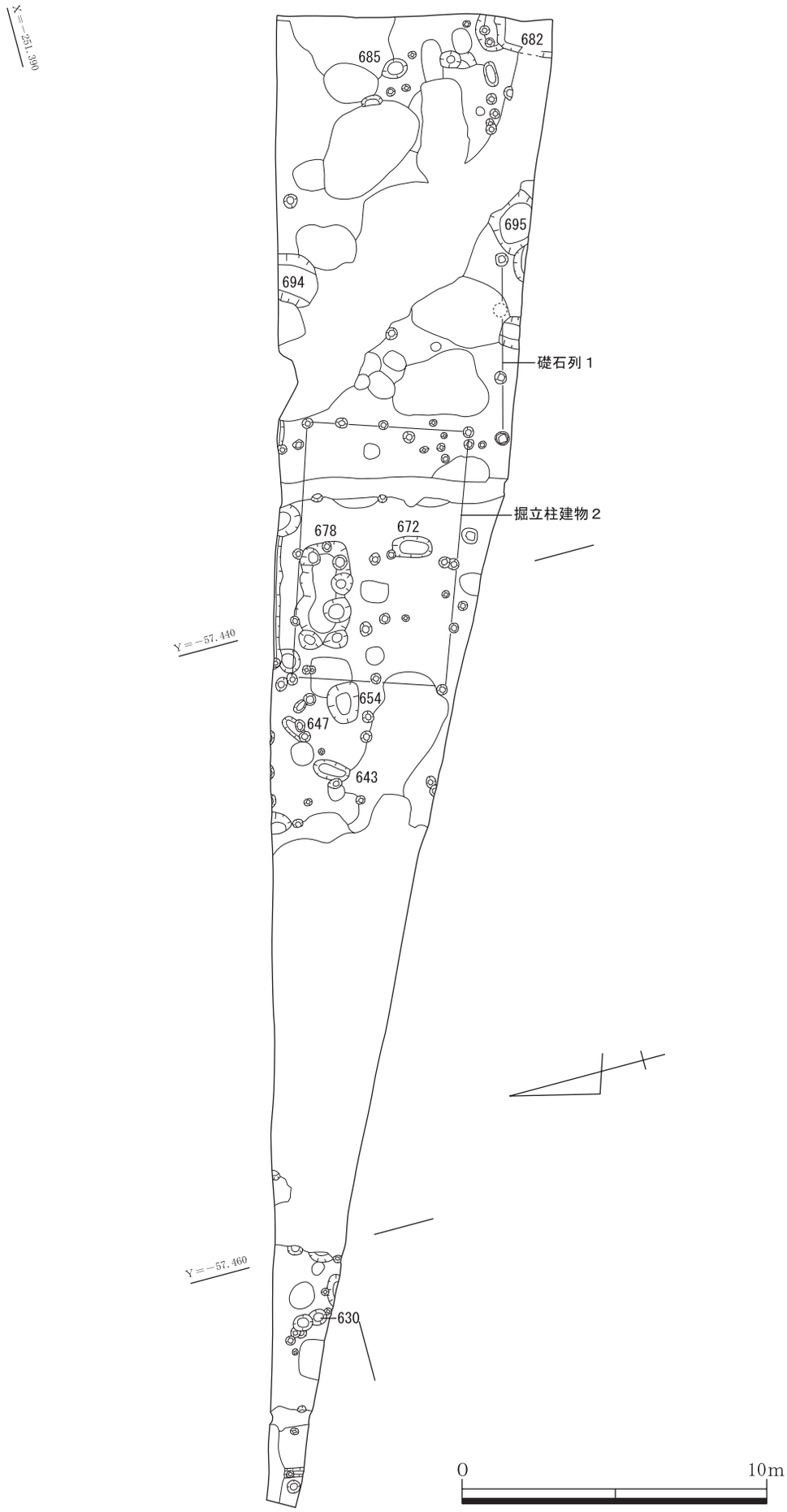

X＝−251.390
685
682
695
694
礎石列１
掘立柱建物２
678
672
Y＝−57.440
654
647
643
Y＝−57.460
630
0
10m

図15　Ⅱ区遺構全体図

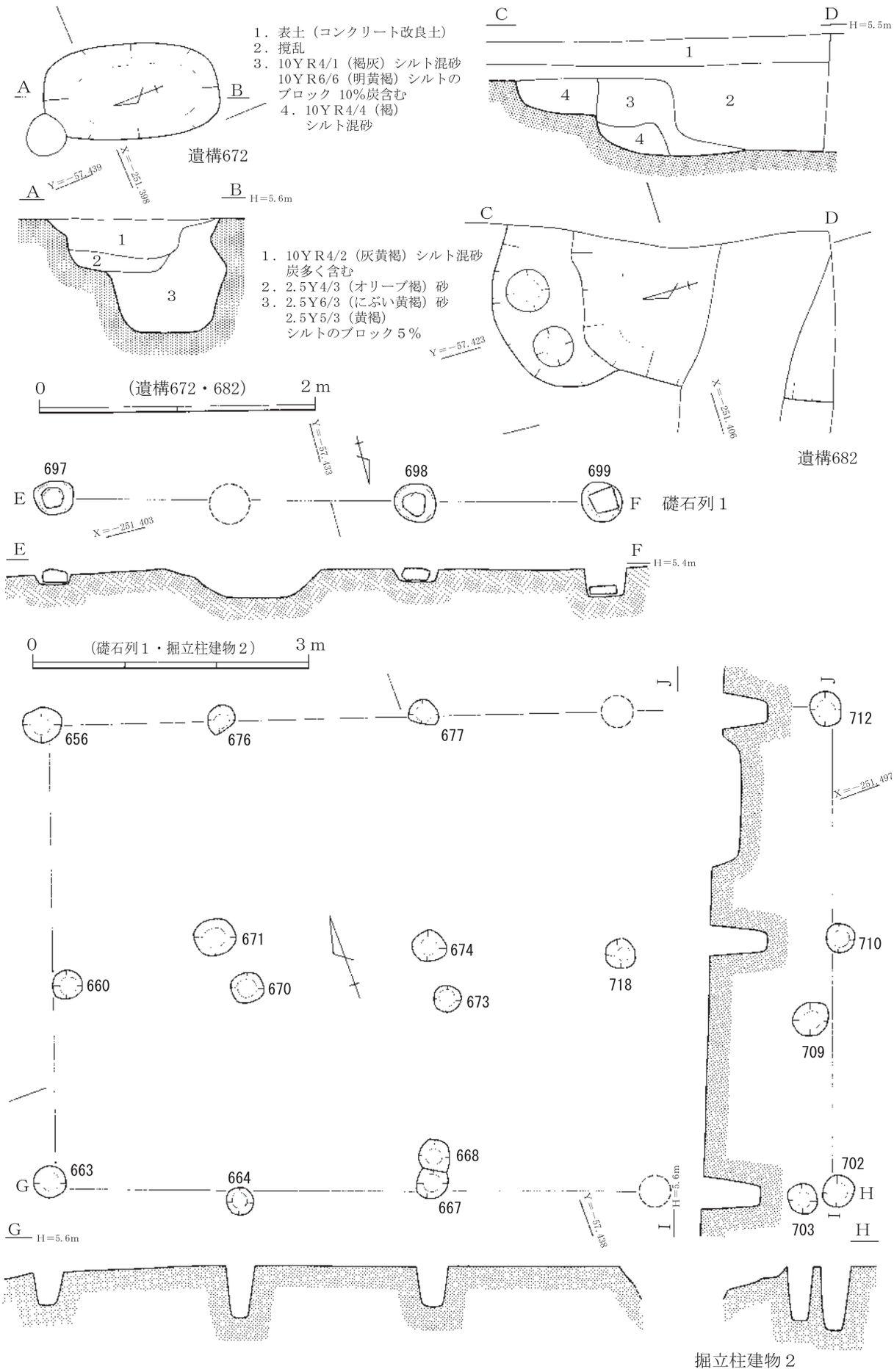

1．表土（コンクリート改良土）
2．撹乱
3．10ＹＲ4/1（褐灰）シルト混砂
10ＹＲ6/6（明黄褐）シルトの
ブロック 10%炭含む
4．10ＹＲ4/4（褐）
シルト混砂
遺構672
A
B
H=5.6m
C
D
H=5.5m
1．10ＹＲ4/2（灰黄褐）シルト混砂
炭多く含む
2．2.5Y4/3（オリーブ褐）砂
3．2.5Y6/3（にぶい黄褐）砂
2.5Y5/3（黄褐）
シルトのブロック５％
0
（遺構672・682）
2 m
遺構682
697
698
699
E
F
礎石列１
H=5.4m
0
（礎石列１・掘立柱建物２）
3 m
656
676
677
712
671
674
660
670
673
718
710
709
663
664
668
667
702
703
G
H
I
J
H=5.6m
掘立柱建物２

図16　Ⅱ区遺構（１）

礎石列１（図16、図版９）　柱穴の底に礎石を置く遺構は４基みつかっているが、このうち３基は江戸時代の地割に沿うように一直線に並んでおり、一連のものと理解できる。確認した長さは６ｍで、もともとは２ｍの等間隔で並んでいたものが、１基は撹乱坑により削平されたものと考えられる。柱穴は直径40～50㎝で、底面に扁平な礎石を据えているが、石上面のレベルは一定でない。建物を構成するものであったと考えられるが、撹乱が多いことや調査範囲が限られていたことからプランは明らかでない。柱穴からは遺物が出土していないが、覆土から江戸時代のものと判断した。

遺構672（図16・18、図版９）　調査区の中央付近で検出した楕円形を呈する土坑で、長さ1.3ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.8ｍを測る。底は平坦で壁は垂直に近い状態で立ち上がっている。遺物は肥前系染付鉢（120）、瀬戸･美濃系陶器碗（121）などが出土している。

２．中世の遺構と遺物

平安時代末頃から鎌倉時代の遺構には掘立柱建物１棟、土坑、ピットなどがある。

遺物は土師器、瓦器、山茶碗、国産陶器のほか特記できる遺物として石鍋がある。調査面積に比して遺物の出土量は少なく、輸入陶磁器は青磁が１点出土するのみである。

掘立柱建物２（図16・18、図版25）　調査区の中央付近で検出した総柱の建物で、規模は東西8.4ｍ、南北5.4ｍを測り、主軸方向はＮ－108°－Ｅを指す。柱間は東西が３間となっているが、撹乱により柱穴が削平されていると考えられ、間尺が２ｍ前後の４間に復元することができる。調査区域内でみつかった南北方向の柱間は２間であるが、増える可能性もある。柱穴は円形で、直径30～40㎝、深さ30～40㎝を測る。柱の痕跡は確認できなかった。

遺物は柱穴から土師器皿、瓦器椀（129）、山茶碗（131）、石鍋（132・133）などが出土しており、鎌倉時代の建物であると考え

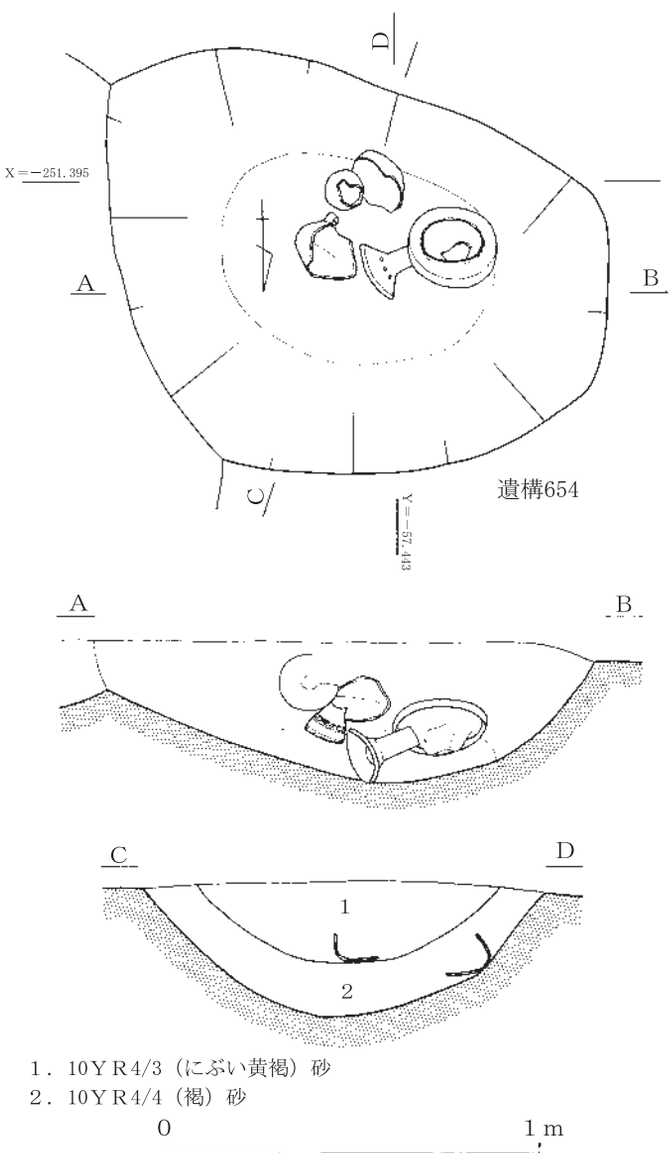


図17　Ⅱ区遺構（２）

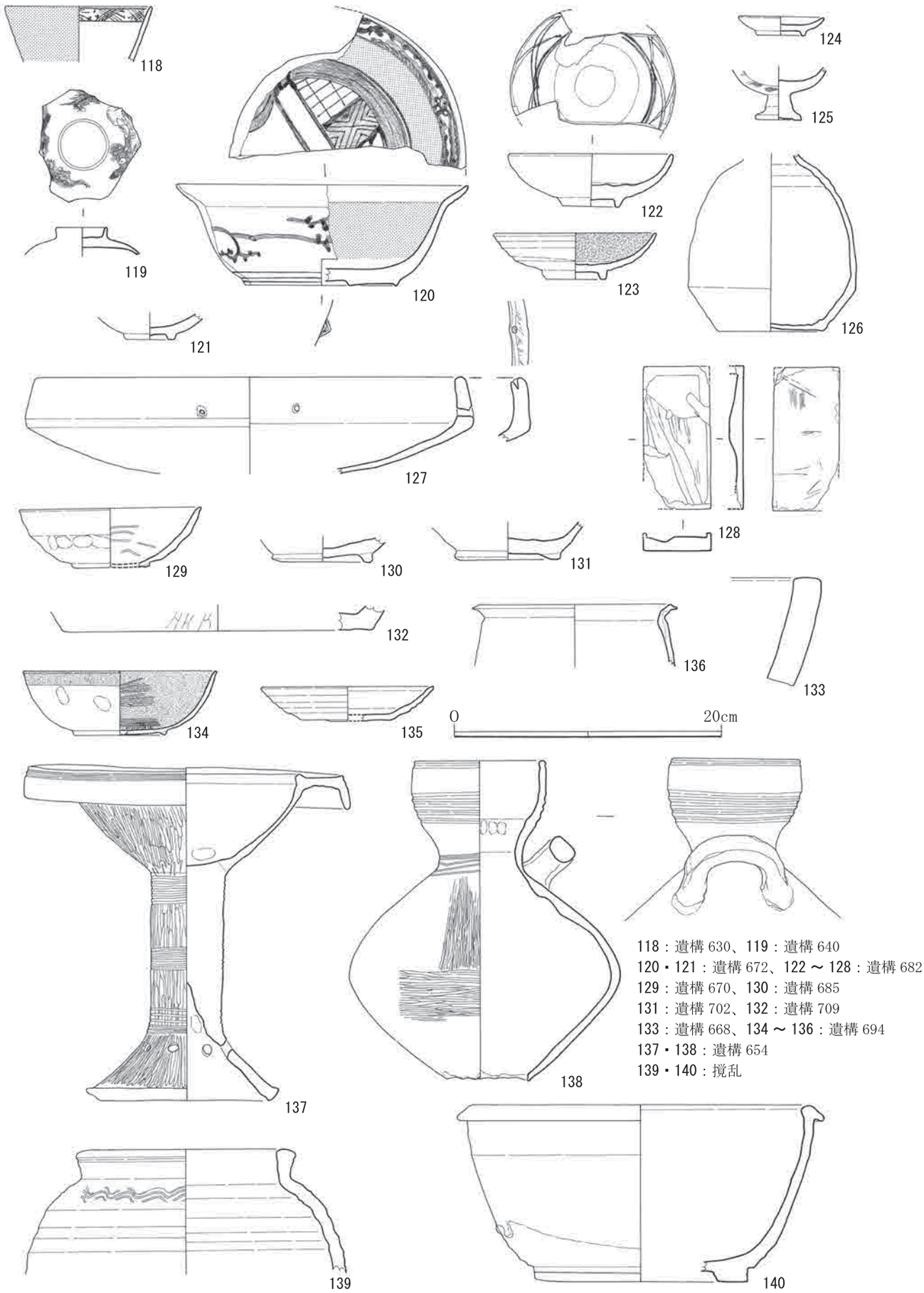

118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
0
20cm
118：遺構 630、119：遺構 640
120・121：遺構 672、122 ～ 128：遺構 682
129：遺構 670、130：遺構 685
131：遺構 702、132：遺構 709
133：遺構 668、134 ～ 136：遺構 694
137・138：遺構 654
139・140：撹乱

図18　Ⅱ区出土遺物（１）

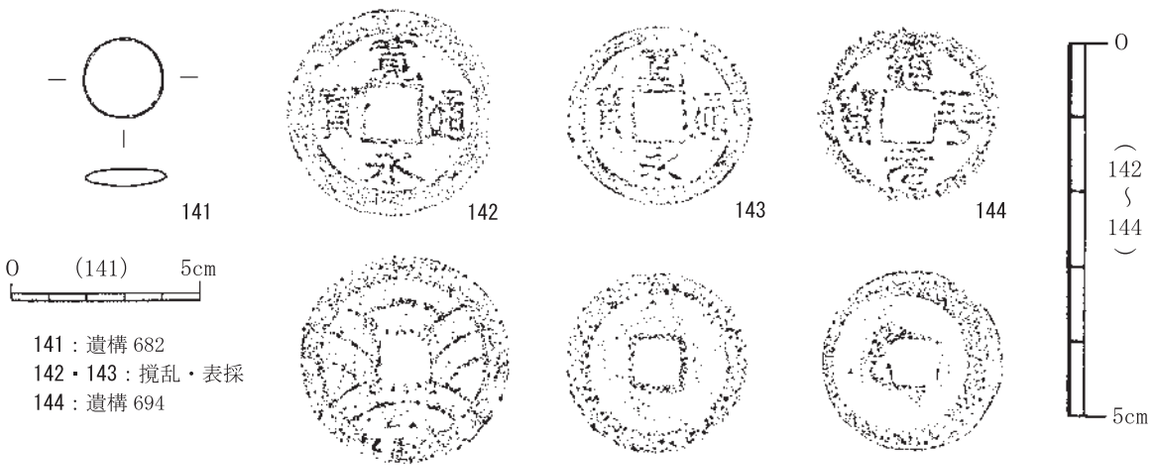


図19　Ⅱ区出土遺物（２）

られる。

３．古代の遺構と遺物

古代の遺構として土坑を１基（遺構694）検出している。２箇年の調査で検出した遺構のなかで唯一古代のものである。

遺構694（図18・19、図版９・25）　調査区の東寄りで検出したもので、北側が調査区域外となり南側は大きく撹乱され、全容は明らかでない。現存する規模は長さ1.3m以上、幅1.6m、深さ0.3mを測り、断面は舟底状を呈する。遺物は土師器皿（135）・甕（136）、黒色土器椀（134）、銭貨・□平元寶（144）があり、土器の特徴から平安時代後期に帰属すると考えられる。

４．弥生時代の遺構と遺物

土壙墓を１基（遺構654）検出している。弥生土器は土坑から出土する２点のみで、北側に接するⅠ区で一定量の出土があるのに比して少ない。

遺構654（図17・18、巻頭図版、図版９・25）　調査区の中央付近で検出した土壙墓で、東側は撹乱されている。平面形状は楕円形で、長さ1.3m以上、幅1.1m、深さ0.35mを測る。土坑の中央で弥生土器水差形土器（138）・高杯（137）を検出しているが、その出土状態から高杯は土坑の底面に、壺はそれより上位に供献されていたことが窺える。墓の時期は土器の特徴から弥生時代中期後葉とすることができる。

５．その他の遺物（図18）

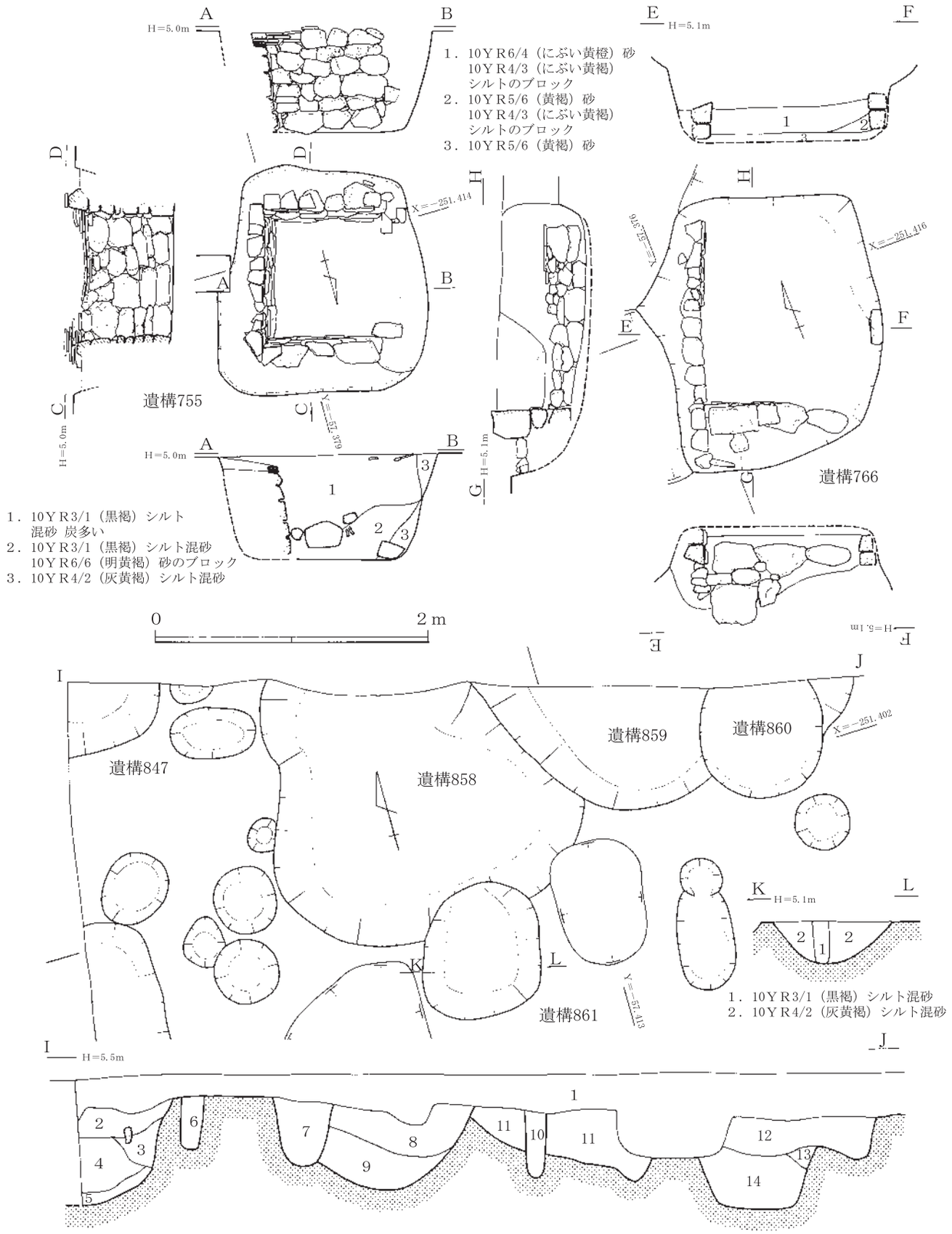
139・140は撹乱坑から出土した遺物で、139は備前焼壺、140は瀬戸･美濃系陶器の鉢である。

第３節　Ⅲ区の調査（図20、図版10・11）

Ⅲ区は現有の道路を通行止めにできないことから、調査区を南北に分けて道路幅を確保し、さらに南北の調査区も排土置き場を確保するため東西に二分したことから、４つの小区に分け反転

847
860
858
846
844
861
865
851
874
875
732
742
731
733
723
724
725
740
894
891
755
886
766
771
761
762
X＝－251.380
Y＝－57.400
Y＝－57.380
Y＝－57.360
第１遺構面
941
929
922
928
930
839
834
831
826
828
833
802
803
第２遺構面
0
10m

図20　Ⅲ区遺構全体図



1．表土・撹乱
2．10YR5/3（にぶい黄褐）砂
3．10YR5/4（にぶい黄褐）砂
4．10YR4/3（にぶい黄褐）砂
5．10YR5/3（にぶい黄褐）砂
6．10YR3/1（黒褐）シルト混砂
7．10YR4/1（褐灰）シルト混砂
8．10YR5/4（にぶい黄褐）砂
10YR3/2（黒褐）シルトのブロック
9．10YR4/4（褐）砂
10YR3/3（黒褐）シルトのブロック
10．10YR3/1（黒褐）シルト混砂
11．10YR4/1（褐灰）シルト混砂
12．10YR4/1（褐灰）シルト混砂
13．10YR5/4（にぶい黄褐）砂
14．10YR4/2（灰黄褐）シルト混砂

図21　Ⅲ区遺構（1）

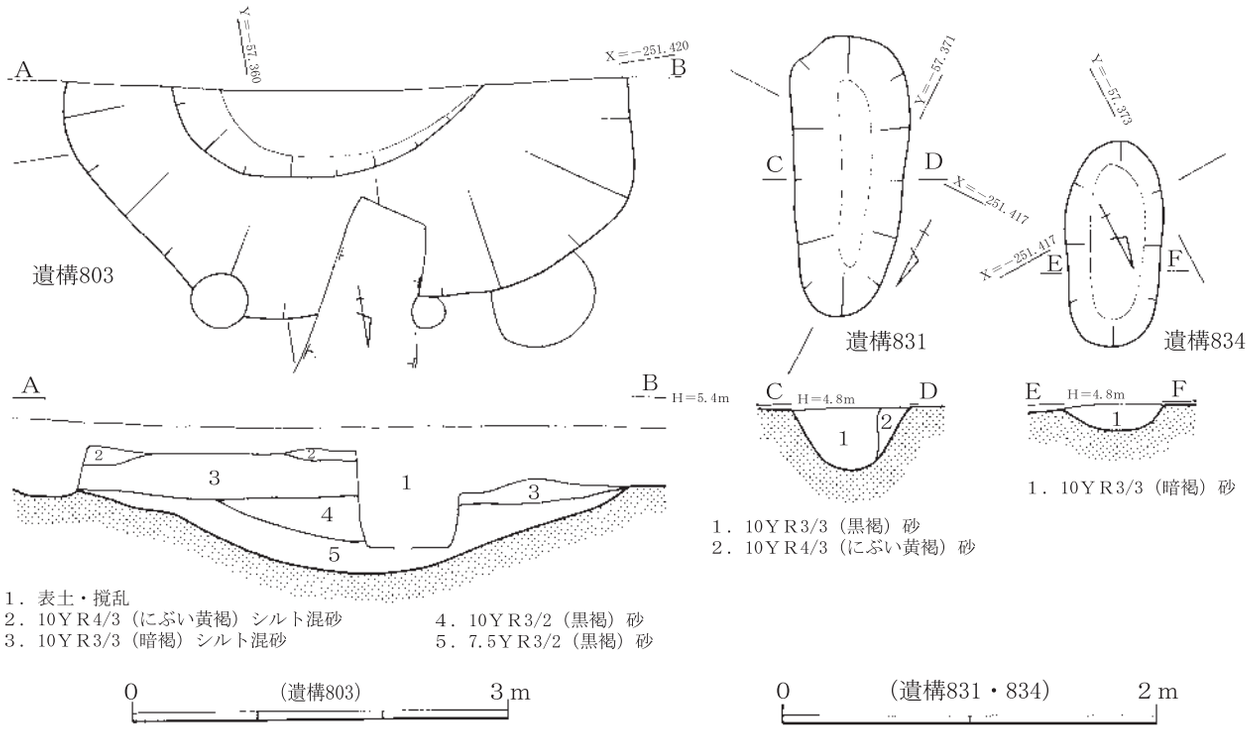


図22　Ⅲ区遺構（２）

を繰り返して調査をおこなっている。小区は北西側がⅢ－１区、北東側がⅢ－２区、南西側がⅢ－３区、南東側がⅢ－4区となる。

Ⅰ・Ⅱ区同様に建物基礎などの撹乱が多く、Ⅲ－１・３区では第１層下で第４層となり、同一面で中世から江戸時代の遺構を検出した。Ⅲ－２・４区では第２－１層が存在し、その上面で江戸時代の遺構を、第４層上面で中世と江戸時代の遺構を検出している。

１．江戸時代の遺構と遺物

検出した遺構には石組土坑２基（遺構755・766）、土坑（遺構847・858～861など）、柱穴、礎石がある。遺物は遺構などから江戸時代後半頃を中心とする国産陶磁器が多く出土しており、寛永通寶など銭貨の出土も目立つ。また、五輪塔の残欠も出土しているが、これは直近の海蔵寺に関わるものであると考えられる。

遺構755（図21・23、図版12）　調査区の中央付近で、第２－１層上面で検出した枡形の石組をもつ土坑である。西側の石組は、ほとんど崩壊していた。掘形は隅丸方形で、南北1.65m、東西1.55mを測る。石組の規模は、南北の長さが上端で1.0m、下端で0.85m、深さは0.8mを測る。石組の東西は、わずかに残る基底石から下端で0.8m程度であったと考えられ、ほぼ方形に近い平面形状であったと考えられる。石材は10～30cm程度の角のある砂岩質のものが多く、石組上端部を中心に平瓦を横積みに用いていた。また、サンゴも部分的に使用されていた。遺物は肥前系染付、施釉陶器、堺･明石系擂鉢（168）、土師質土器、軒丸瓦（169）、丸瓦（170）などが出土している。出土遺物から19世紀代の遺構であると考えられる。近くには同時期の建物を構成すると考えられる礎石があり、屋敷地内に存在した遺構であることからも、地下倉庫的な貯蔵穴である

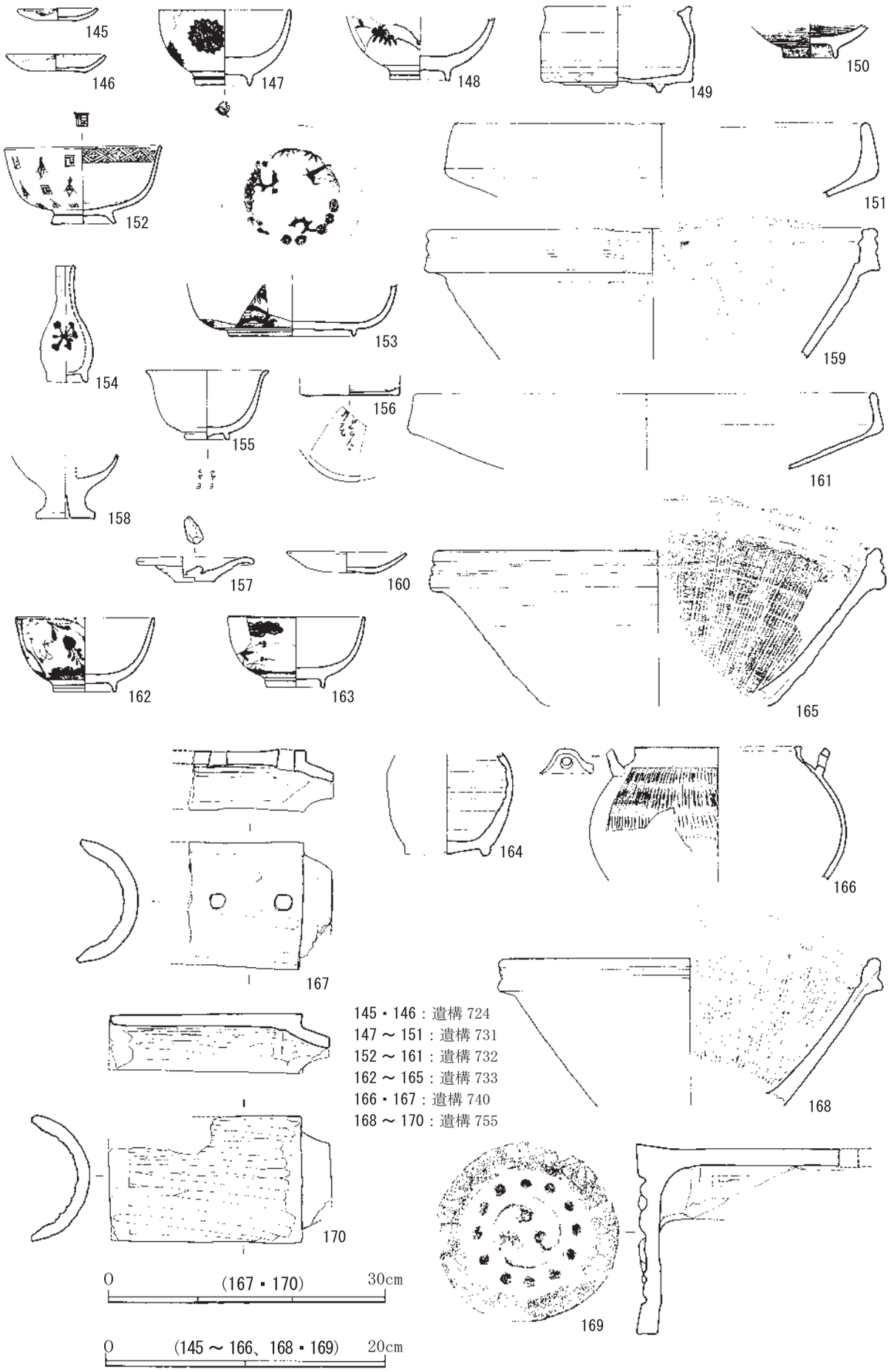
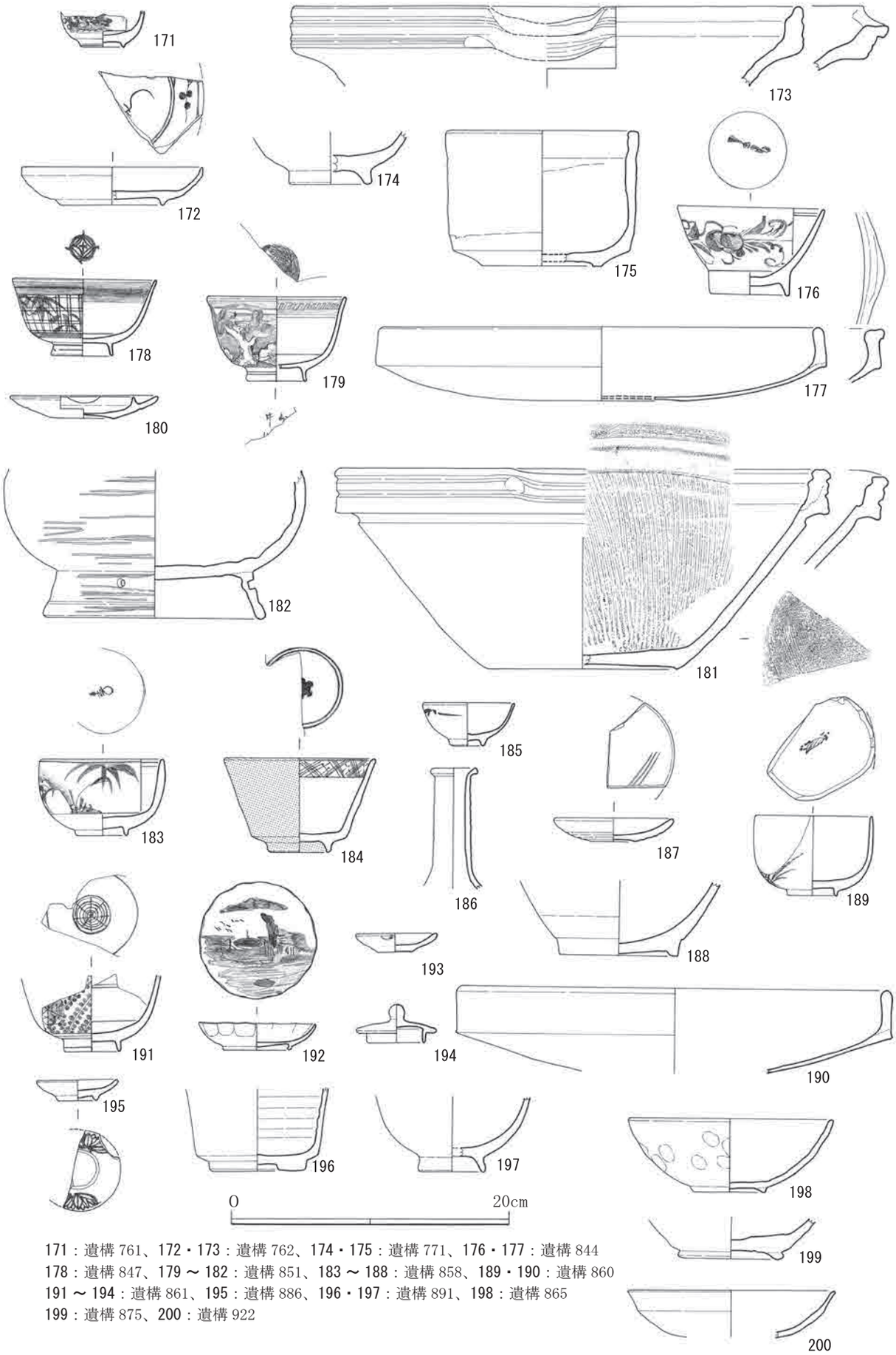

145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
145・146：遺構 724
147 ～ 151：遺構 731
152 ～ 161：遺構 732
162 ～ 165：遺構 733
166・167：遺構 740
168 ～ 170：遺構 755
0 (167・170) 30cm
0 (145 ～ 166、168・169) 20cm

図23　Ⅲ区出土遺物（１）



171：遺構 761、172・173：遺構 762、174・175：遺構 771、176・177：遺構 844
178：遺構 847、179 ～ 182：遺構 851、183 ～ 188：遺構 858、189・190：遺構 860
191 ～ 194：遺構 861、195：遺構 886、196・197：遺構 891、198：遺構 865
199：遺構 875、200：遺構 922

図24　Ⅲ区出土遺物（２）

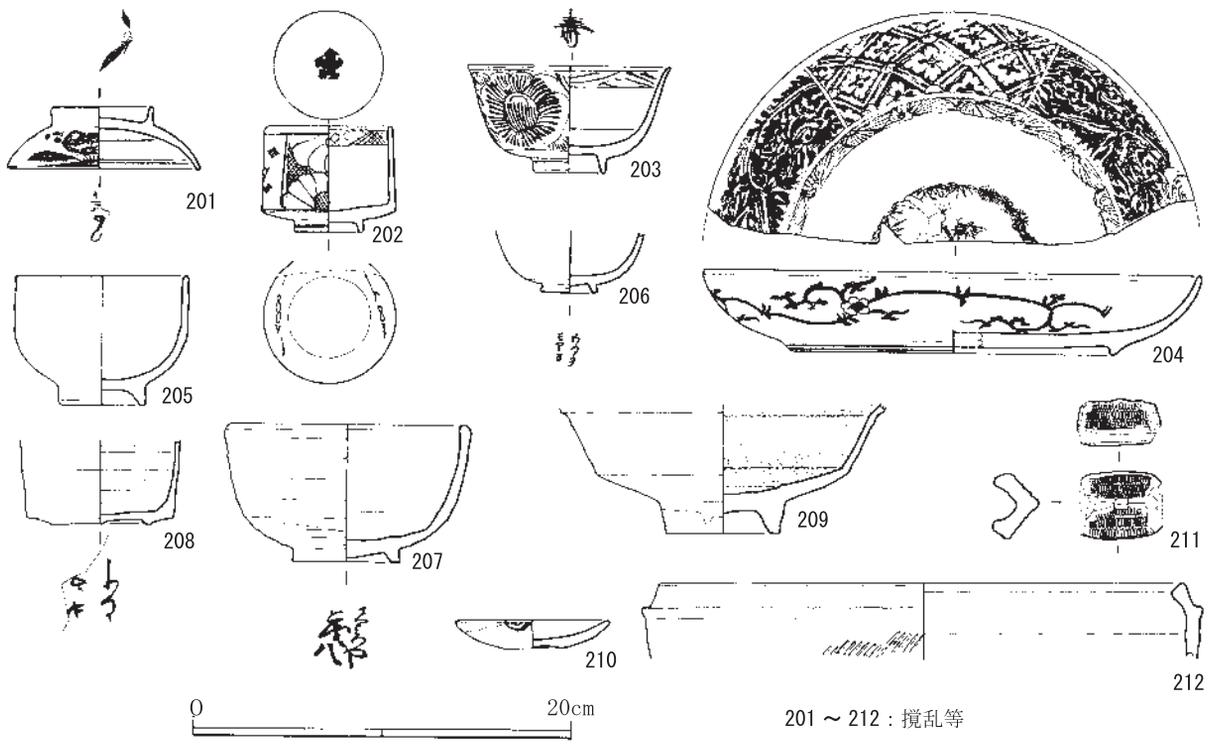


図25　Ⅲ区出土遺物（３）

可能性が高い。

遺構766（図21・26、図版12）　調査区の中央付近で、第２－1層上面で検出した石組をもつ土坑で、遺構755の東に約３ｍ隔てて位置する。上部を撹乱により大きく削平され、西側と南側の石組基底部と、東側の一部石組が残存するのみである。掘形は隅丸方形で、南北約2.0ｍ、東西約1.8ｍを測る。石組の規模は、掘形の規模などから復元して、東西・南北とも約1.2ｍ程度であったと考えられる。遺物は施釉陶器、平瓦、銭貨の寛永通寶（216～218）・天保通寶（215）、鉄製品（214）が出土する。遺構755と同様な性格の遺構で、天保通寶が1835年初鋳であることからも、幕末頃に帰属すると考えられる。

２．中世の遺構と遺物

中世の遺構には溝状遺構１条（遺構874）、大型土坑（遺構803）、土坑（遺構831・834など）、ピットがある。遺構などから出土する遺物には土師器、瓦器、山茶碗、青磁、常滑焼などの土器類のほかに、銭貨がある。瓦器・山茶碗の出土は他の調査区に比して少ない。

遺構874　調査区東寄りに位置する溝状遺構で、第４層上面で検出した。調査区内から始まり北方向に延びる。長さ4.6ｍ以上、幅1.0ｍで、深さ0.3ｍを測る。撹乱によって明らかでないが、遺構742と覆土が同じであることからも一連のものである可能性がある。遺物は土師器細片が出土しており、覆土からも中世の遺構であると考えられる。

遺構803（図22、図版12）　調査区の中ほどに位置する大型土坑で、第４層上面で検出した。

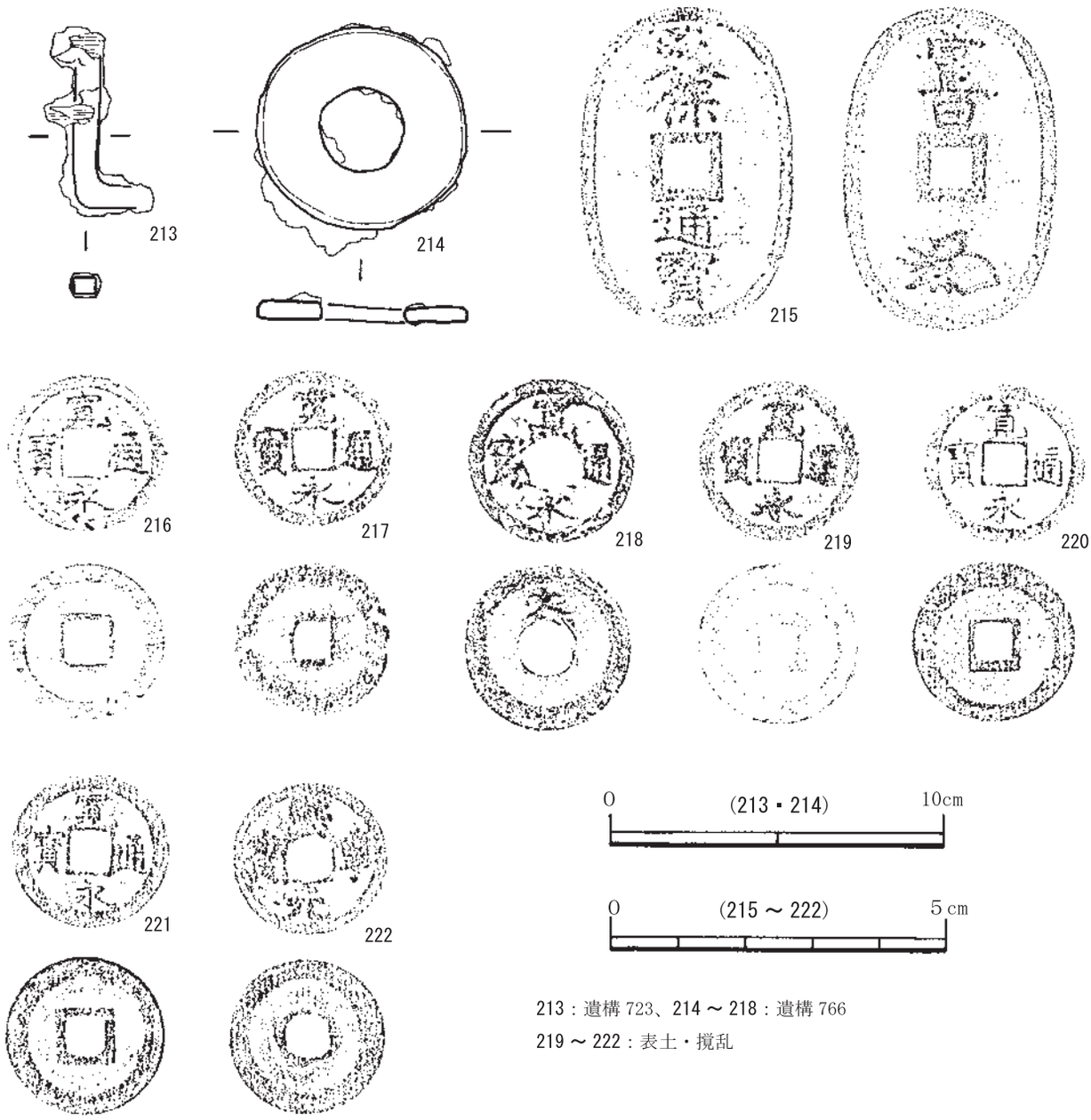


図26　Ⅲ区出土遺物（４）

南側が調査区域外で、検出した形状は半円形を呈し、東西4.5m、南北1.8mで、深さ0.6mを測る。井戸と考えられるⅣ区の遺構185との対比からも、井戸の掘形である可能性がある。遺物は土師器・瓦器が出土しており、平安時代末から鎌倉時代の遺構であると考えられる。

遺構831・834（図22）　調査区の中央よりやや東寄りで検出した土坑で、約１mの間隔を隔てて位置する。平面形状はともに楕円形を呈し、遺構831は長さ1.5m、幅0.65m、深さ0.35mを、遺構834は長さ1.1m、幅0.5m、深さ0.15mを測る。遺物は遺構831から土師器皿が出土しており、埋土などから両者とも中世の遺構であると考えられる。

３．その他の遺物（図25・26、図版27）

撹乱等から出土する墨書土器などの特徴的な遺物を図示している。201～211は江戸時代に帰属

するもので、201・202・204は肥前系染付、203は南紀男山焼の可能性もある染付である。205は肥前系陶器の呉器手碗である。206～208は高台内に墨書をもつ陶器で、206は京･信楽系陶器碗、207は瀬戸･美濃系陶器碗、208は京･信楽系陶器火入である。209は肥前系陶器鉢、210は京･信楽系陶器灯明皿で、211は家形の土人形である。212は16世紀代の土師器焙烙で、222は銭貨・熙寧元寶である。

第４節　Ⅳ区の調査（図27、図版13～15）

Ⅳ区は南半分を占める現有道路下の調査を後回しにして、北側部分を先行して調査をおこない、道路を切り替えて南側部分の調査をおこなった。北・南側部分についても排土置き場を確保するため東西に二分したことから、Ⅲ区と同様に４つの小区に分け反転を繰り返して調査をおこなっている。小区は北西側がⅣ－１区、北東側がⅣ－２区、南西側がⅣ－３区、南東側がⅣ－4区となる。

第１層の表土はかなり厚いものの、他の調査区と同様に建物基礎や建物解体時の撹乱が多い。Ⅳ－１・Ⅳ－３区では、第１層下で第２－１層となり、Ⅳ－２・４区では第２－１層下にさらに第２－２層が存在し、これらの整地土下で第４層の地山となる。遺構は第２－１層上面と第２－２層上面、第４層上面で検出しているが、撹乱が多いこともあって、調査区東端では第２－２上面の遺構を第４層上面で検出している。第２－１層上面の遺構の時期は江戸時代の幕末頃、第２－２層上面の遺構の時期は、江戸時代後半代から幕末頃で、第２－１層は幕末になっておこなわれた整地であることが窺える。

１．江戸時代の遺構と遺物

検出した遺構には礎石建物２棟、土坑（遺構166・170・264・277・453など）、柱穴などがある。遺物は、遺構などから江戸時代後半から幕末にかけての国産陶磁器などが多量に出土し、器種も豊富で食器以外の土器類も多い。

礎石建物１（図28・30・35、図版16）　調査区の西端で、第２－１層上面において検出した。南側が調査区域外で、西側と東側に大きな撹乱坑があることから全容は明らかでない。建物方向は江戸時代から存在する海蔵寺通りに沿っている。規模は東西6.5m以上、南北2.3m以上で、礎石は一直線に配されているものの、間尺は0.75～2.7mと一定でない。礎石の材質は砂岩で、深さ約20㎝の掘形内の底面からやや上位に据えられており、上面のレベルはやや高低差が認められる。礎石161の掘形内およびその横から、文字を書いた土師質土器皿（224・225・338・339）が出土しており、書かれた文字の内容からも地鎮に関わる遺物の可能性がある。

礎石建物２（図28）　調査区の中央東寄りで、第２－１層上面で検出した。周囲に撹乱坑が多いこともあって、検出できたのは礎石４個のみで全容は明らかでないが、建物方向は礎石建物１

と同じである。規模は東西4.0m以上、南北3.0m以上を測る。礎石建物１と同様に１直線に礎石が配されるものの、間尺は一定でない。礎石は扁平な砂岩で、地山を浅く掘り窪めて据えていた。

遺構166（図28・30）　礎石建物１・２の間で検出した土坑で、周囲を大きく撹乱されているものの、旧状は楕円形を呈していたと考えられる。規模は長さ1.1m、幅0.9m、深さ0.75mを測り、断面はU字状を呈する。土層観察からシルトや砂などで人為的に分割して埋め戻されたと考えられる。遺物は染付、施釉陶器、瓦などとともに文字を書いた土師質土器皿（226・227）が出土しており、混入遺物として中世の土師器や瓦器などがある。

遺構170（図28・30、図版27）　第２－１層上面で礎石建物２の南に接する位置で検出した溜枡状の土坑である。土坑堀形の形状は隅丸方形で、規模は南北1.5m、東西1.4m、深さ0.55mを測り、底を20cm程度埋め戻した後に、厚さ数cmから10cm程度のシルトで底・壁を堅く塗り固めている。枡の形状は隅丸方形で、一辺約1.0m、深さ0.3mの大きさである。遺物は肥前系染付碗（230）・碗蓋（231）、瀬戸･美濃系染付碗（232）、施釉陶器などが出土している。

遺構453（図28・31・36、図版16）　第２－１層上面で検出したもので、遺構170の南に約１m隔てて位置する溜枡状の土坑で、南側の一部が調査区域外になる。土坑堀形の形状は隅丸長方形で、規模は長さ1.8m、幅1.1m以上、深さ0.5mを測り、底をわずかに埋め戻した後に、厚さ10cm程度のシルトで底・壁を堅く塗り固めている。枡の形状は隅丸長方形で、長さ1.4m、幅0.9m以上、深さ0.4mの大きさである。遺物は掘形から肥前系染付杯（268）、土師質土器焙烙（269）が、溜桝の埋土から硯（270）、粉挽臼（271）、銭貨・寛永通宝（386）が出土している。

遺構264（図29・31、図版16）　第２－２層上面で検出したもので、調査区の中央東寄りに位置する埋桶遺構である。掘形の平面形状は円形で、直径1.2m、深さ0.5mを測る。桶は痕跡から直径約70cmで、平坦な底に10cm程度シルトを埋め戻して据えつけていた。遺物は肥前系染付小碗（247）、堺･明石系擂鉢（248）、土師質土器焙烙（249）などが出土している。

遺構277（図29・31、図版16・27・28）　第２－２層上面で検出したもので、遺構264の北西に４m隔てて位置する。桶の痕跡は明確でないが、土坑の平面・断面の形状から埋桶遺構であると考えられ、新旧２つの土坑からなる。当初の土坑は直径約1.2mで、東側にやや位置をずらして直径1.3mの土坑を掘り直している。深さは約0.7mを測る。遺物は肥前系染付碗蓋（253・254）・碗（255～258）・蓋付鉢（258）・皿（260）、肥前系白磁杯（259・261）、瀬戸･美濃系陶器碗（262）・京･信楽系陶器土瓶（263）、堺･明石系陶器植木鉢（264）、土師質土器焙烙（265）・秉燭（266）、瓦質土器鍋（267）などが出土している。

２．中世の遺構と遺物

第４層上面で検出した中世の遺構には井戸（遺構185）、土坑（遺構213・214ほか）、円形周溝遺構（遺構320）、ピットなどがある。また、中世の遺物としては遺構や整地土から土師器、瓦器、

第２遺構面
第２遺構面
第３遺構面
第２・３遺構面
第１遺構面
礎石建物１
礎石建物２
X＝－251.424
X＝－251.420
Y＝－57.300
Y＝－57.320
Y＝－57.340
0
10m

図27　Ⅳ区遺構全体図

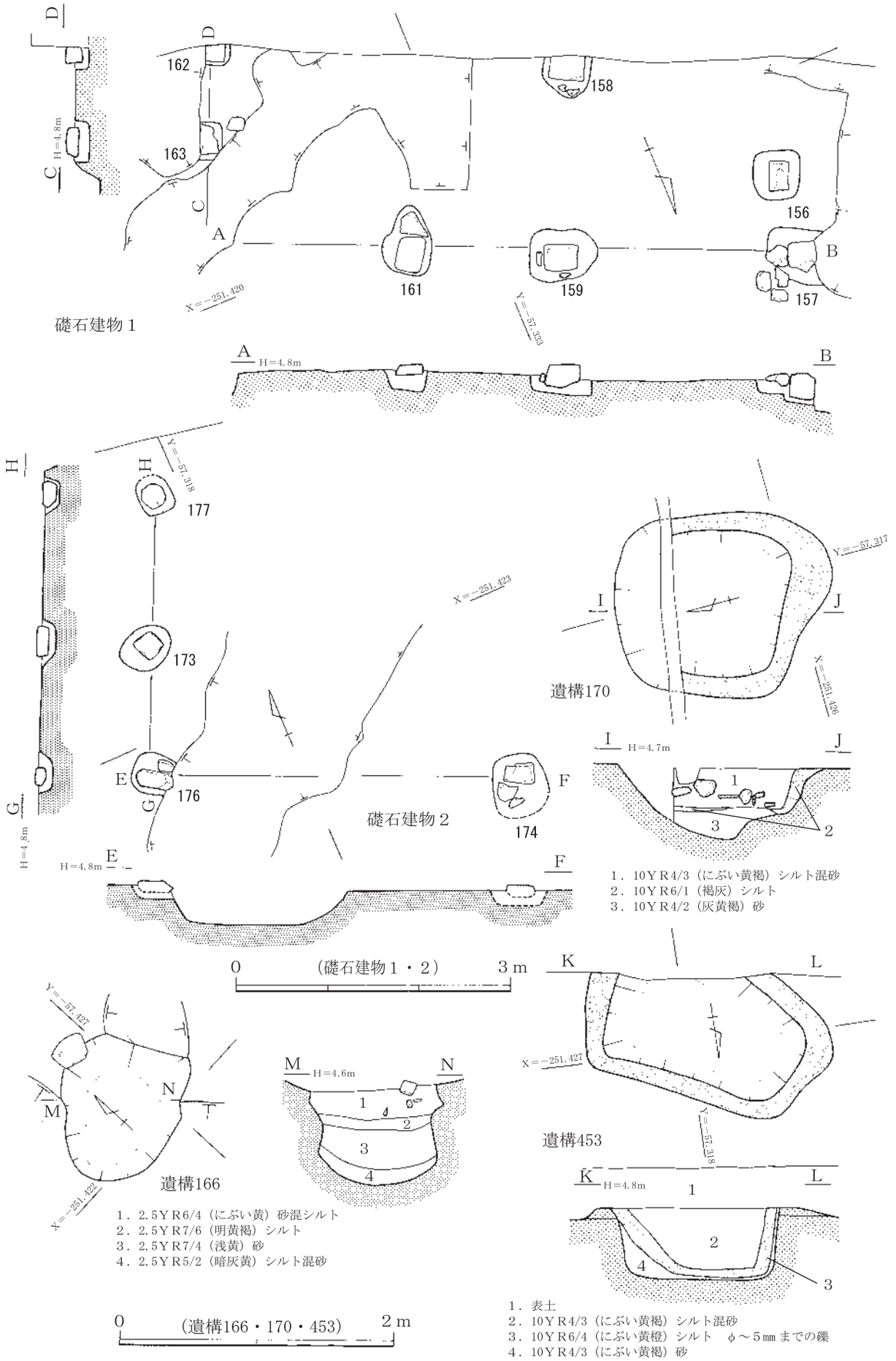

礎石建物１
礎石建物２
遺構170
遺構166
遺構453
(礎石建物１・２)
(遺構166・170・453)
1．10YR4/3（にぶい黄褐）シルト混砂
2．10YR6/1（褐灰）シルト
3．10YR4/2（灰黄褐）砂
1．2.5YR6/4（にぶい黄）砂混シルト
2．2.5YR7/6（明黄褐）シルト
3．2.5YR7/4（浅黄）砂
4．2.5YR5/2（暗灰黄）シルト混砂
1．表土
2．10YR4/3（にぶい黄褐）シルト混砂
3．10YR6/4（にぶい黄橙）シルト　φ～５㎜までの礫
4．10YR4/3（にぶい黄褐）砂

図28　Ⅳ区遺構（１）

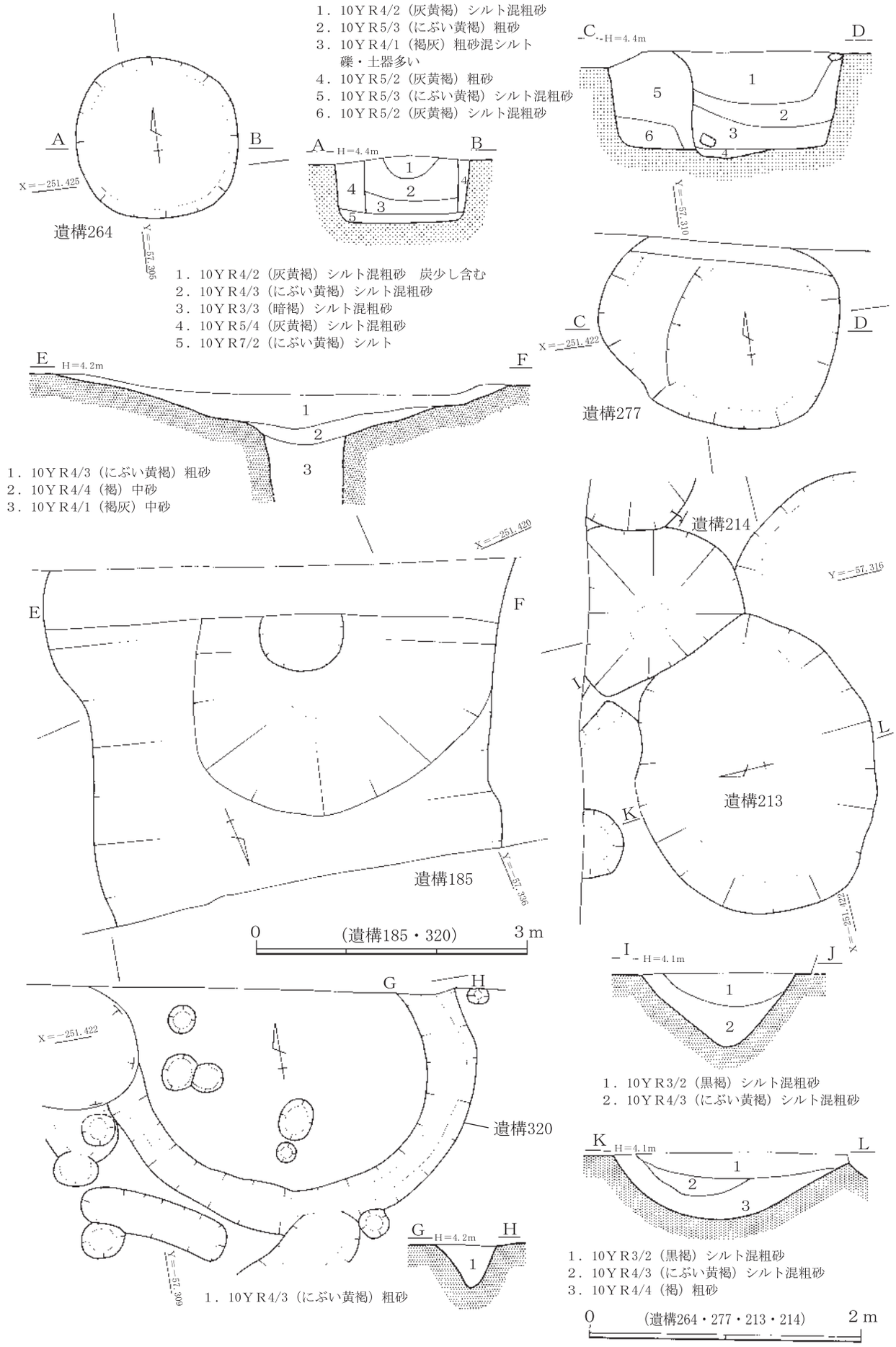
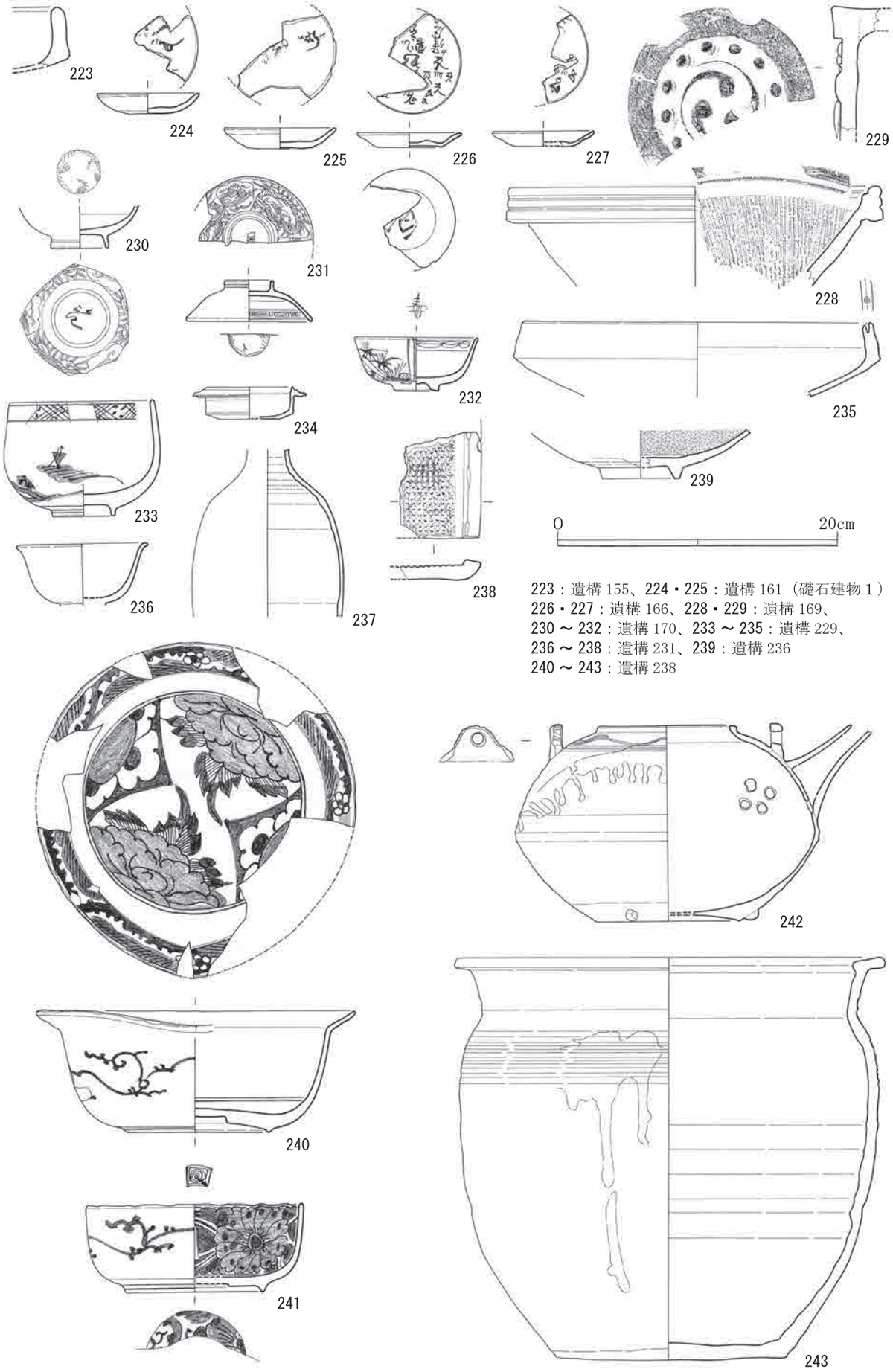
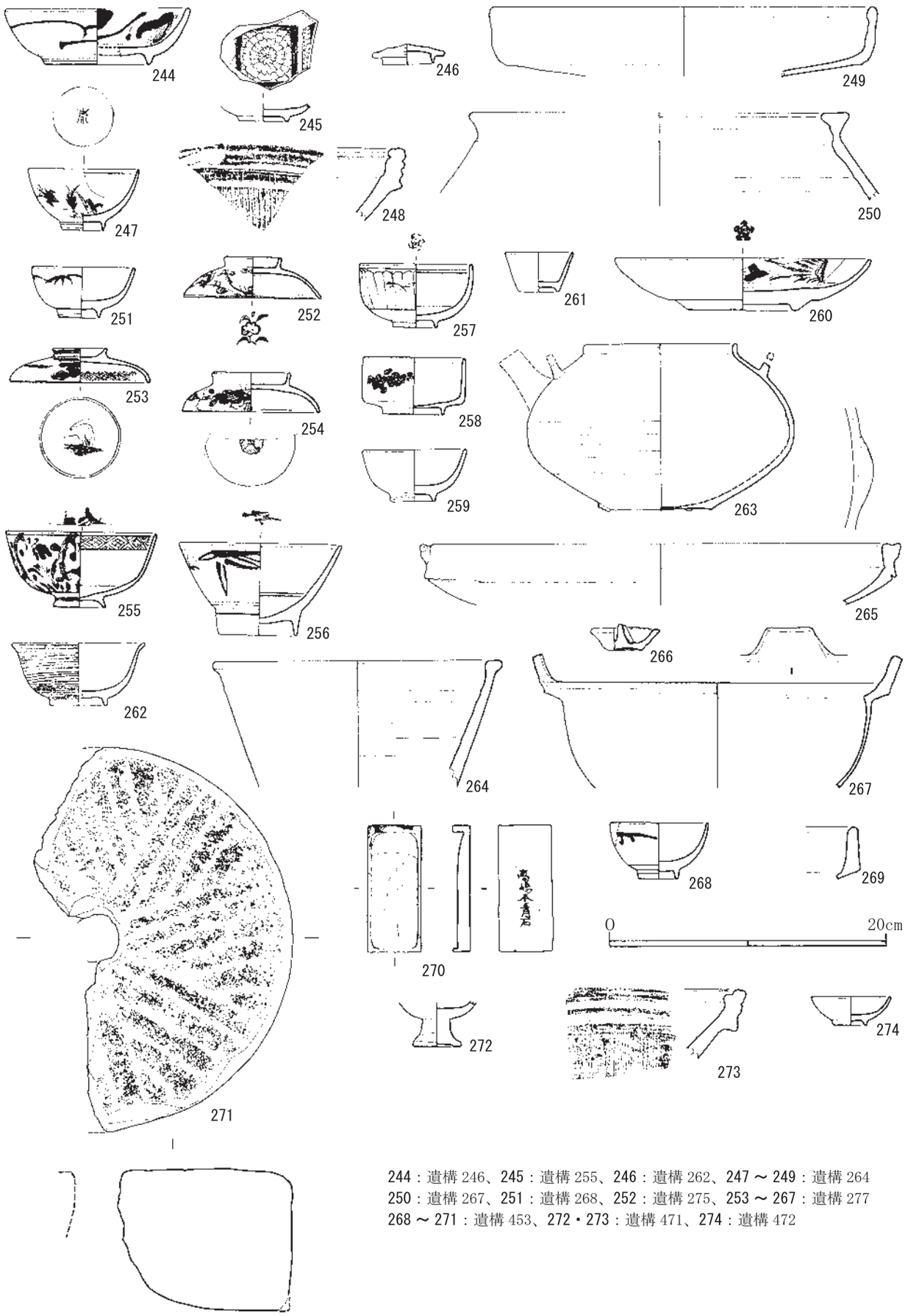

1．10YR4/2（灰黄褐）シルト混粗砂
2．10YR5/3（にぶい黄褐）粗砂
3．10YR4/1（褐灰）粗砂混シルト
礫・土器多い
4．10YR5/2（灰黄褐）粗砂
5．10YR5/3（にぶい黄褐）シルト混粗砂
6．10YR5/2（灰黄褐）シルト混粗砂
A
B
H=4.4m
X=−251.425
Y=−57.305
遺構264
C
D
H=4.4m
Y=−57.310
1．10YR4/2（灰黄褐）シルト混粗砂　炭少し含む
2．10YR4/3（にぶい黄褐）シルト混粗砂
3．10YR3/3（暗褐）シルト混粗砂
4．10YR5/4（灰黄褐）シルト混粗砂
5．10YR7/2（にぶい黄褐）シルト
X=−251.422
遺構277
E
F
H=4.2m
1．10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂
2．10YR4/4（褐）中砂
3．10YR4/1（褐灰）中砂
X=−251.420
遺構214
Y=−57.316
遺構213
遺構185
Y=−57.336
0
(遺構185・320)
3 m
I
J
H=4.1m
1．10YR3/2（黒褐）シルト混粗砂
2．10YR4/3（にぶい黄褐）シルト混粗砂
G
H
X=−251.422
遺構320
Y=−57.309
1．10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂
K
L
H=4.1m
1．10YR3/2（黒褐）シルト混粗砂
2．10YR4/3（にぶい黄褐）シルト混粗砂
3．10YR4/4（褐）粗砂
0
(遺構264・277・213・214)
2 m

図29　Ⅳ区遺構（２）



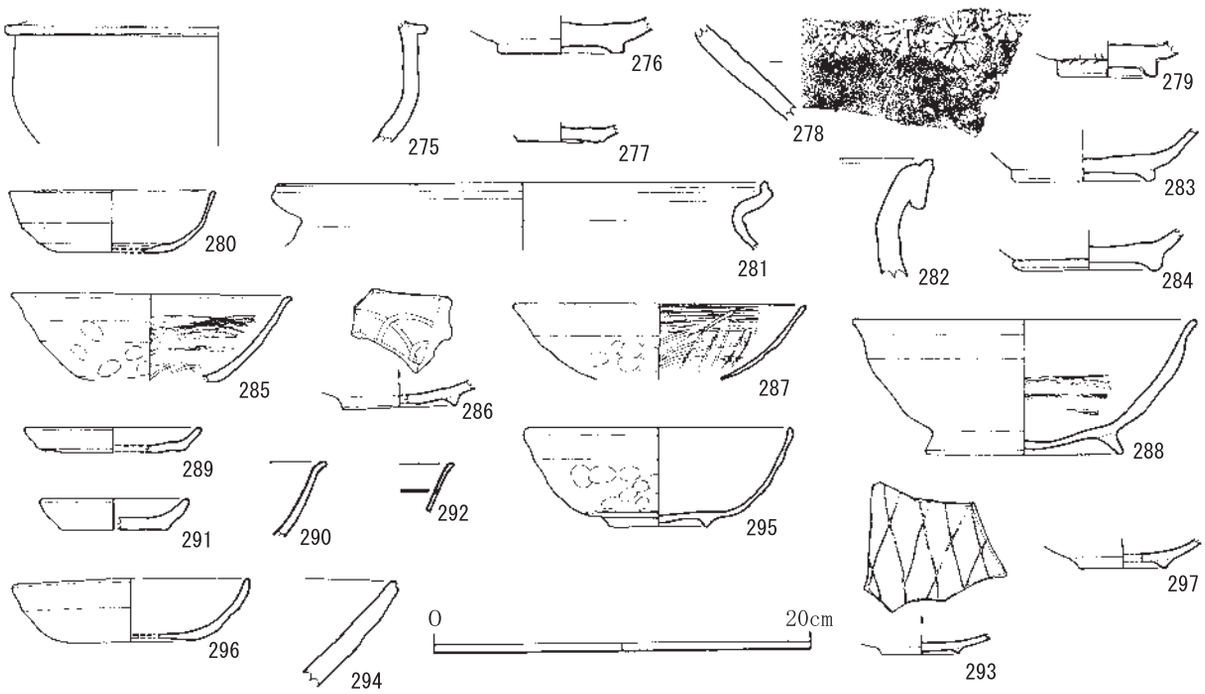
223：遺構 155、224・225：遺構 161（礎石建物１）
226・227：遺構 166、228・229：遺構 169、
230 ～ 232：遺構 170、233 ～ 235：遺構 229、
236 ～ 238：遺構 231、239：遺構 236
240 ～ 243：遺構 238

図30　Ⅳ区出土遺物（１）



244：遺構 246、245：遺構 255、246：遺構 262、247 ～ 249：遺構 264
250：遺構 267、251：遺構 268、252：遺構 275、253 ～ 267：遺構 277
268 ～ 271：遺構 453、272・273：遺構 471、274：遺構 472

図31　Ⅳ区出土遺物（２）



275～279：遺構185、280～282：遺構195、283：遺構203、284：遺構205、285：遺構210、286：遺構213、287：遺構289
288：遺構300、289・290：遺構301、291：遺構304、292：遺構327、293：遺構457、294：遺構458、295：遺構459
296：遺構477、297：遺構481

図32　Ⅳ区出土遺物（３）

山茶碗、青磁・白磁などの輸入磁器、東播系須恵器、備前焼・常滑焼などの国産陶器、滑石製石鍋などが出土している。遺物量は多く、中でも常滑焼の量が目立つ

遺構185（図29・32、図版16・28）　調査区の西端付近において、第４層上面で検出した井戸である。既往の道路と接する位置であったことから、崩壊を防止するため全掘はおこなっていない。井戸枠が存在したか明らかでないが、直径1.1ｍで、深さは1.5ｍ以上を測る。周囲は南北４ｍ以上、東西５ｍの範囲で窪んでおり、これは掘形か、井戸を埋め戻す際にできたものであると考えられる。遺物は土師器皿・釜、瓦器椀、山茶碗（276）・皿（277）、東播系須恵器捏鉢、常滑焼甕（278）、青磁碗（279）、瓦質土器鍋（275）などがある。遺構の時期は出土遺物から鎌倉時代前半代と考えられる。

遺構213（図29・32、図版16）　調査区中央西寄り付近において、第４層上面で検出した土坑で、平面形状は楕円形を呈する。重複する遺構210・212より新しいが、遺構214との新旧関係は明確でない。規模は長さ2.2ｍ以上、幅1.8ｍで、深さは0.5ｍを測る。遺物は比較的多く、土師器皿・釜、瓦器椀（286）、常滑焼甕、鉄滓、結晶片岩のほかに、混入遺物として古代以前の須恵器片が出土している。

溝320（図29、図版16）　調査区中央東寄りにおいて、第４層上面で検出した円形周溝遺構で、北側は調査区域外となる。幅0.4～0.6ｍ、深さ0.1～0.3ｍの溝を直径約3.2ｍの区画周囲に巡らしたものである。区画内でピットが検出されているものの伴うものかどうか明らかでなく、遺構の性格については不明である。遺物は出土していないものの、埋土の色調・土質から中世の遺構

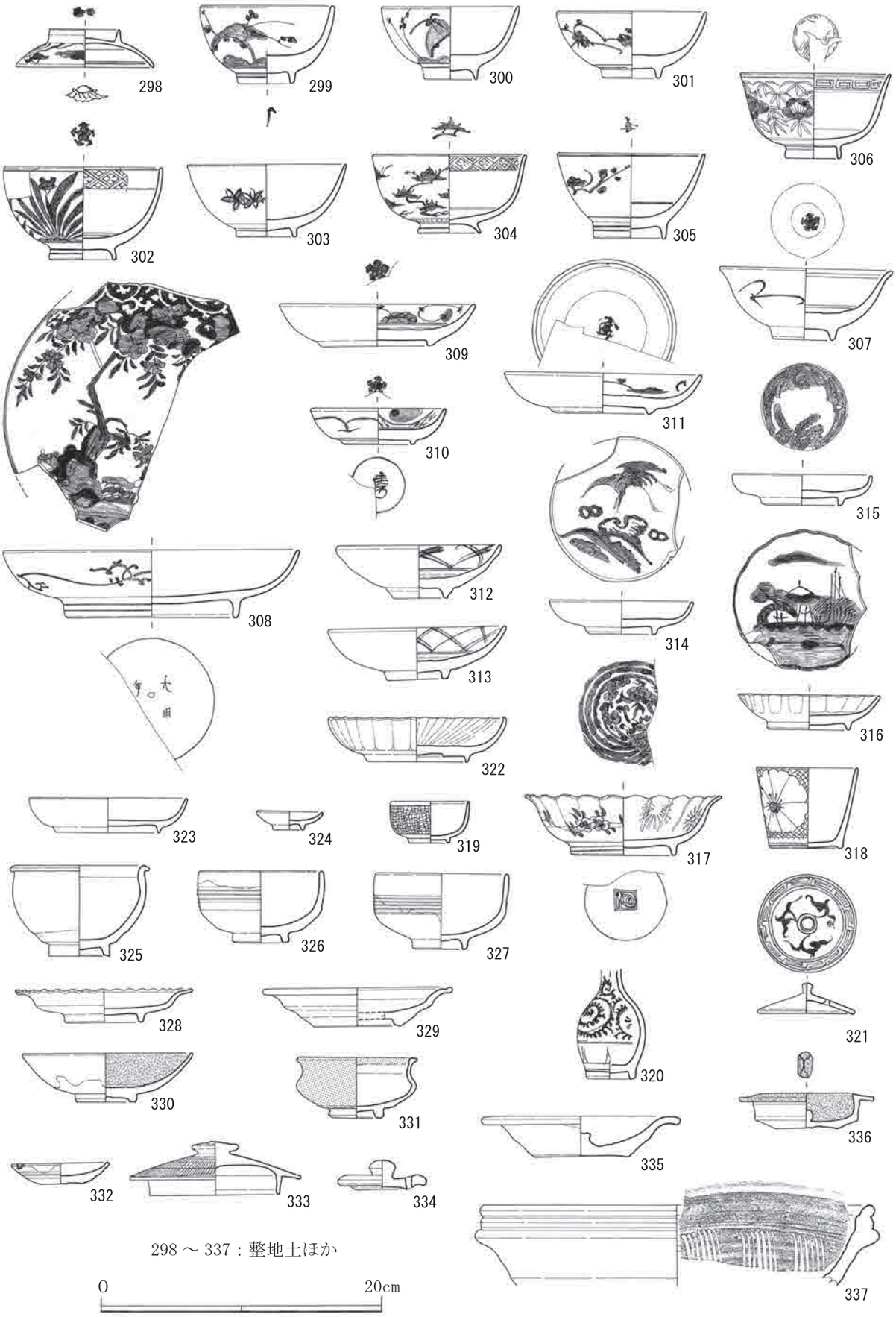
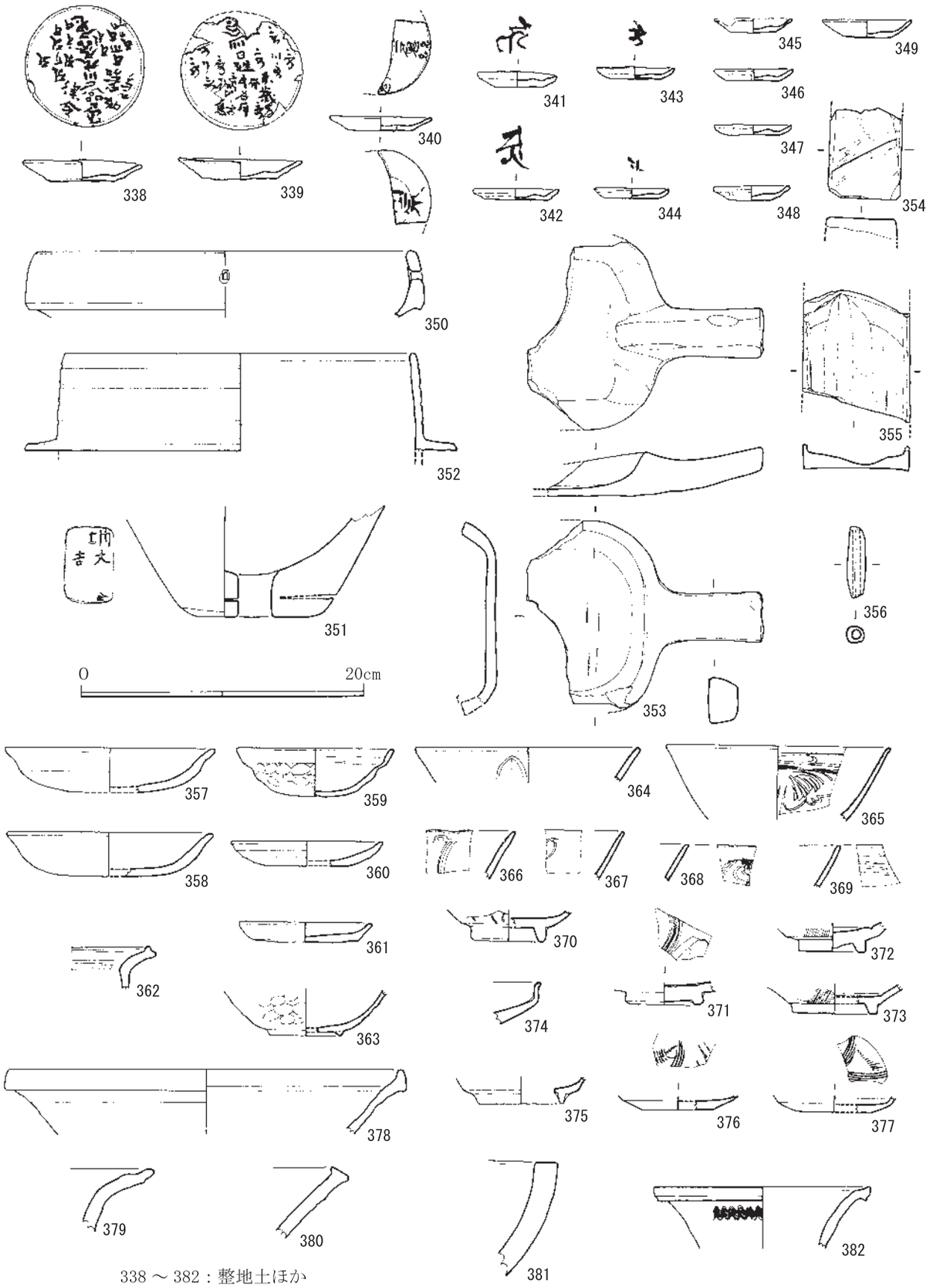
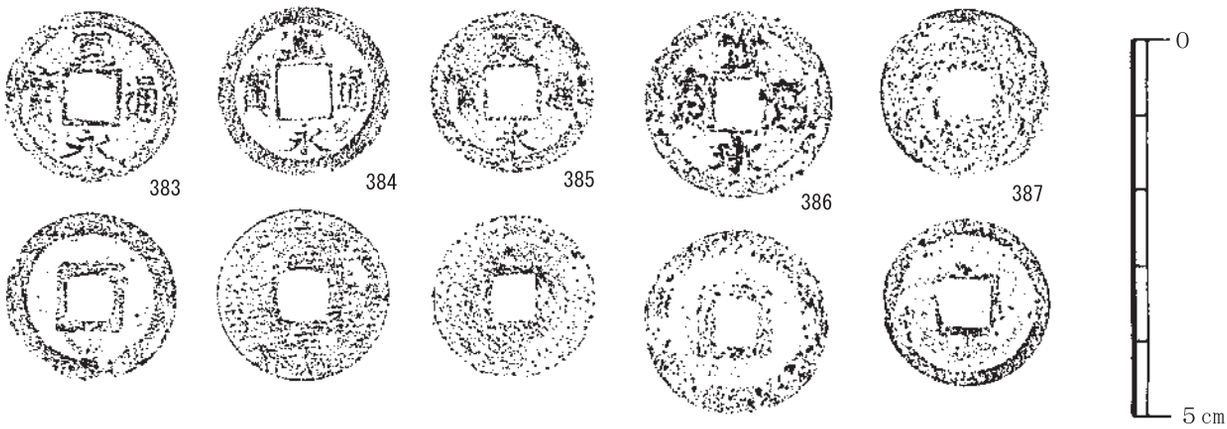

298
299
300
301
306
302
303
304
305
307
309
311
310
315
308
312
314
313
316
322
323
324
319
317
318
325
326
327
328
329
321
320
330
331
336
335
332
333
334
337
298 ～ 337：整地土ほか
0
20cm

図33　Ⅳ区出土遺物（４）



338 ～ 382：整地土ほか

図34　Ⅳ区出土遺物（５）



383・384：撹乱、385：遺構検出時、386：遺構 453、387：整地土

図35　Ⅳ区出土遺物（６）

であると考えられる。

３．その他の遺物（図33・34、図版29）

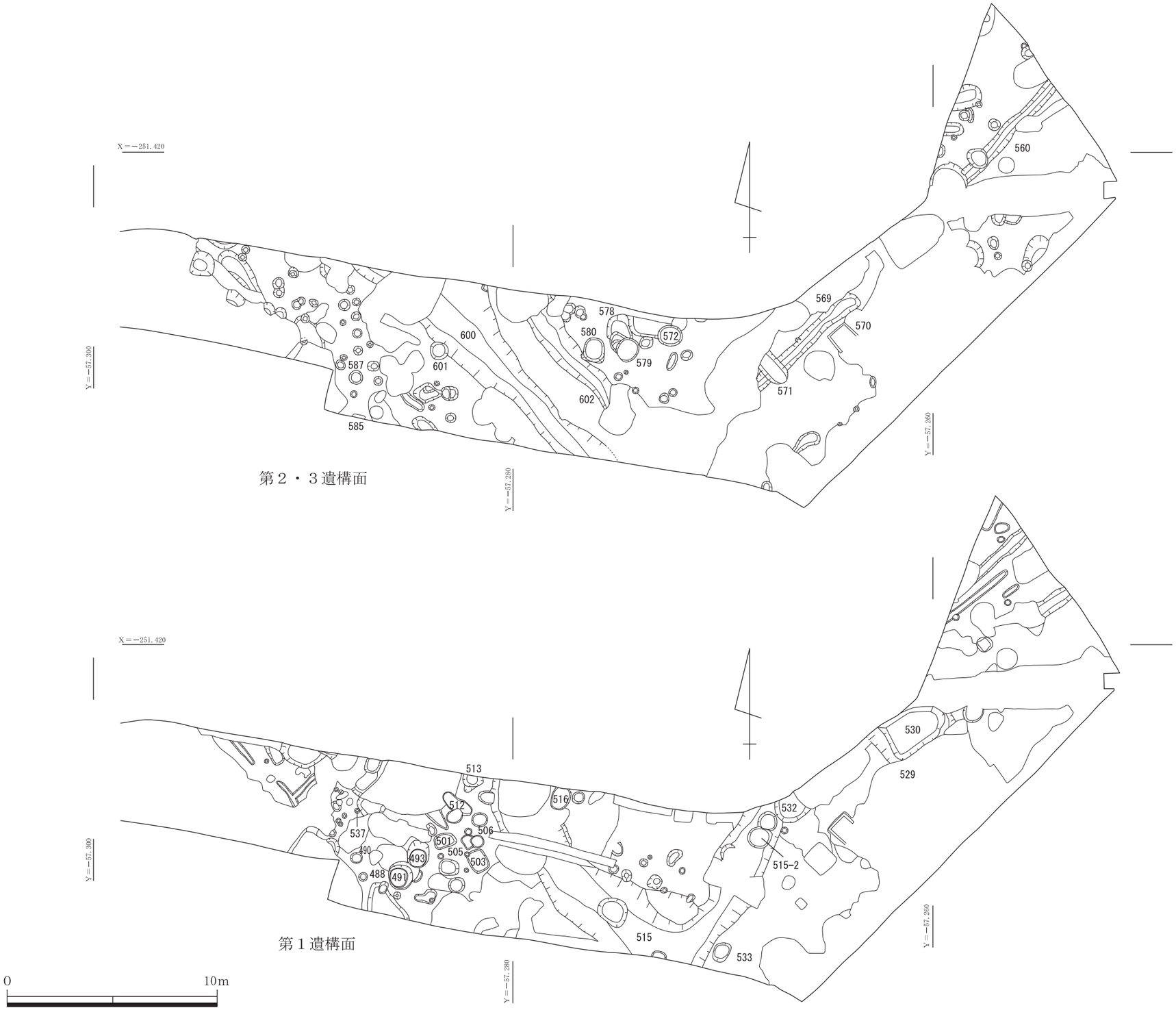
江戸時代の遺物は遺構以外にも整地土や撹乱から多く出土している。土器のバリエーションや遺跡の消長を考えるために、代表的なものを図示する。また、中世以前の遺物に関しては、図化できるものをできるだけ掲載している。298～356、383～385が江戸時代の遺物、357～381、387が中世の遺物、382が古墳時代の遺物である。

江戸時代の遺物では、298～321は染付で、315の瀬戸･美濃系以外はすべて肥前系である。332～336は施釉陶器で、このうち325～328は瀬戸･美濃系、329・330は肥前系である。332～336は京･信楽系陶器、337は備前焼である。338～351・353は土師質土器で、338～344は内面に墨書をもつ。352は瓦質土器、354は砥石、355は硯、356は土錘である。

中世の遺物では、357～362が土師器、363が瓦器、364～372・374～377が青磁、373が白磁である。378は東播系須恵器、379・380は常滑焼、381は石鍋である。

第５節　Ⅴ区の調査（図36、巻頭図版、図版17～19）

Ⅳ区の東側に続く調査区である。第２－1層、第２－2層とも存在するが、第２－2層の広がりが明確でなく、撹乱などによって削平されるなどして厚さもなかった。このため、第２－1層上面で第１遺構面の調査を行ったのち、第４層上面で第２遺構面と第３遺構面の遺構検出をおこなっている。また、第４層上面で検出した遺構は、出土遺物以外にも遺構覆土の違いで第２・３のどちらの遺構面に帰属するか判別した。なお、第１遺構面の遺構は、江戸時代の幕末頃、第３遺構面の遺構は中世で、同じ面で検出した第２遺構面に帰属する遺構は、江戸時代後期から幕末頃のものである。他の地区と同様に、建物基礎や建物解体時および側溝建設による撹乱が調査区全体に広がっている。



第２・３遺構面

第１遺構面

図36　Ⅴ区遺構全体図

１．江戸時代の遺構と遺物

検出した遺構には溝状遺構（遺構515）、埋桶（遺構572・579・580）、溜桶状遺構（遺構491～493）、土坑（遺構502・530など）、ピットがある。出土遺物は国産陶磁器をはじめとして、バリエーションにとんだ遺物が出土している。また、遺構515を境に、東側では遺構密度が薄くなり、遺物の量も少ない

遺構515（図38・41・42、図版18・31・32）　第２－1層上面で検出した溝で、調査区内でＬ字状に折れて北側は調査区域外に伸びる。直下で検出している中世の溝と方向がほぼ同じで、規模は最も残りの良い箇所で、幅3.5ｍ、深さ0.7ｍを測る。また、断面から再掘削されていることが観察でき、第２遺構面の時期にすでに掘削されていた可能性もある。砂地であることから区画を目的とした溝であると考えられ、溝底には、ごみなどを投棄したと考えられる直径１ｍ余りの土坑（遺構515－２など）が数箇所存在する。

遺物は多量に出土しており、肥前系染付碗（442・443）・皿（444～448）・御神酒徳利（449～451）、肥前系白磁小杯（452）・青磁香炉（453）、肥前系陶器鉢（457）、京･信楽焼系の青磁小壺（454）や陶器碗（455）・火入（458）・土瓶蓋（460）・皿（461）・鍋（462）、瀬戸･美濃系陶器皿（456）・汁入（459）、堺･明石系擂鉢（463～465）、備前焼擂鉢（466）、土師質土器灯明皿（467・468）・焙烙（469・470）、軒丸瓦（471）などが出土している。

また、遺構515－２からは肥前系染付碗（472・473）・皿（474）・小杯（475）、京･信楽焼系陶器碗（476）、土師質土器秉燭（477）・焙烙（478）のほかに、海亀の甲羅などが出土している。

遺構491・492・493（図37・39、図版18・20）　第１遺構面で調査区東端において検出した３基の溜桶状の土坑で、周辺には多くの土坑が掘削されている。３基の土坑は重なっており、遺構492を切り込んで遺構491・493が築かれている。遺構491・493が並存するかどうかは明らかでない。構造は３基とも同じで、直径１ｍ余りの円形または楕円形を呈する掘形内に、漆喰を含む淡黄褐色シルトを塗り固めて直径約80㎝の桶状の水溜を築くもので、深さは約60㎝を測る。

遺物は遺構491から肥前系染付碗蓋（393）・碗、瀬戸･美濃系染付、京･信楽系陶器植木鉢（394）、瀬戸･美濃系陶器鉢（395）、土師質土器焙烙、瓦、銅製火鉢（581）などが出土している。

また、遺構493からは肥前系染付小杯（397）・碗、瀬戸･美濃系染付碗（396）、施釉陶器灯明皿（399）・水注蓋（398）、瓦質土器羽釜、土師質土器などが出土している。

遺構572・579・580（図37・44・45、図版20・33・34）　調査区の中央付近で検出した３基の埋桶遺構で、すべて第２遺構面に帰属する。平面形状は円形に近く、直径は１ｍ前後、深さ約0.6ｍを測る。遺構580には直径約70㎝、遺構572には直径約80㎝の桶が据えられていたことが痕跡から分かるが、遺構579は抜き取られたためか桶の痕跡は確認できなかった。

遺物は遺構572から肥前系染付、施釉陶器が、遺構579からは肥前系染付碗（526）・皿（527）・

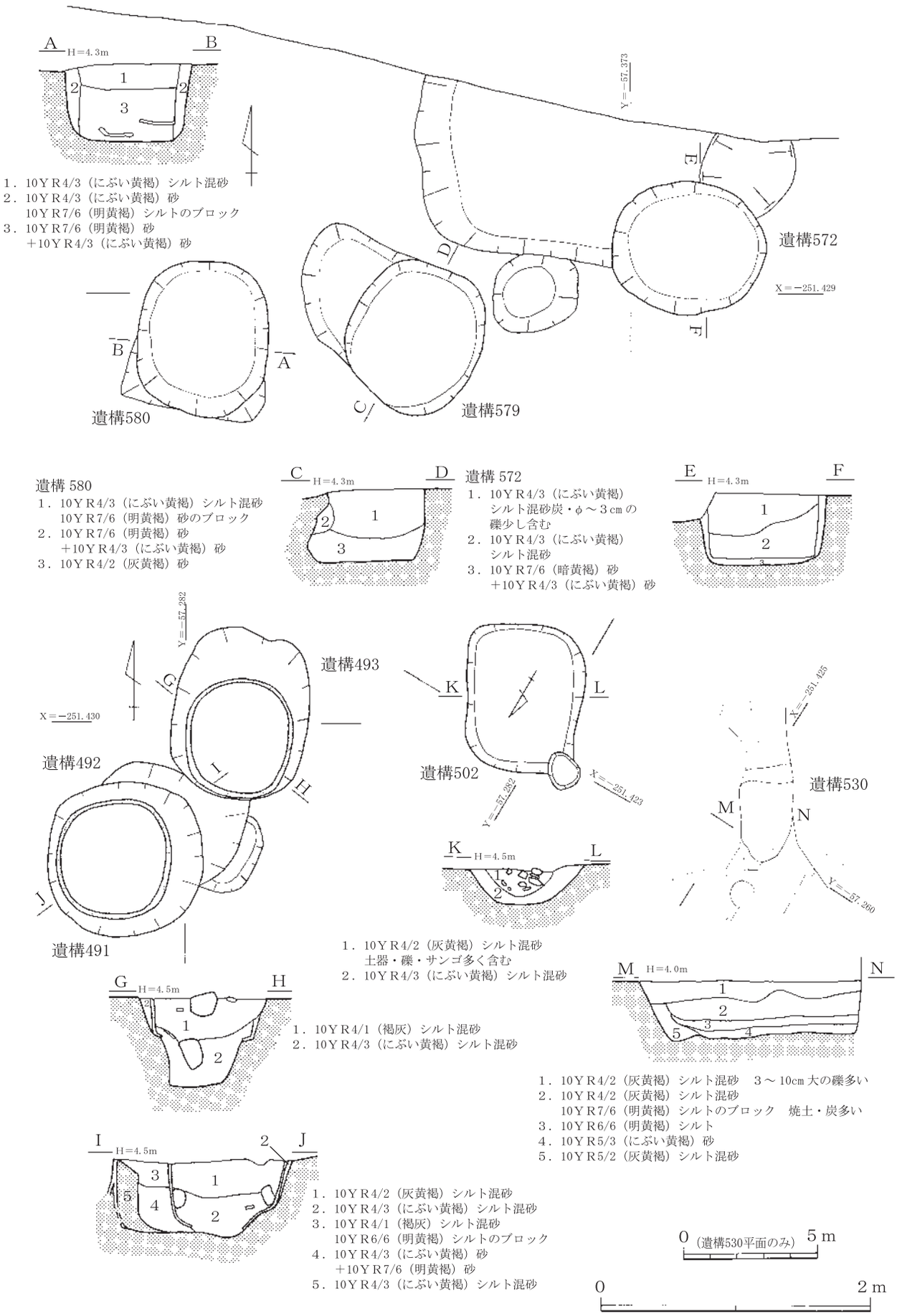

A H=4.3m B
1
2
3
1．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）シルト混砂
2．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）砂
10ＹＲ7/6（明黄褐）シルトのブロック
3．10ＹＲ7/6（明黄褐）砂
＋10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）砂
Y＝－57.373
遺構572
X＝－251.429
遺構580
遺構579
遺構 580
1．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）シルト混砂
10ＹＲ7/6（明黄褐）砂のブロック
2．10ＹＲ7/6（明黄褐）砂
＋10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）砂
3．10ＹＲ4/2（灰黄褐）砂
C H=4.3m D
遺構 572
1．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）
シルト混砂炭・φ～3cmの
礫少し含む
2．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）
シルト混砂
3．10ＹＲ7/6（暗黄褐）砂
＋10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）砂
E H=4.3m F
Y＝－57.282
遺構493
X＝－251.430
遺構492
遺構491
K L
遺構502
X＝－251.423
Y＝－57.282
K H=4.5m L
1．10ＹＲ4/2（灰黄褐）シルト混砂
土器・礫・サンゴ多く含む
2．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）シルト混砂
X＝－251.425
遺構530
M N
Y＝－57.260
G H=4.5m H
1．10ＹＲ4/1（褐灰）シルト混砂
2．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）シルト混砂
M H=4.0m N
1．10ＹＲ4/2（灰黄褐）シルト混砂　3～10cm大の礫多い
2．10ＹＲ4/2（灰黄褐）シルト混砂
10ＹＲ7/6（明黄褐）シルトのブロック　焼土・炭多い
3．10ＹＲ6/6（明黄褐）シルト
4．10ＹＲ5/3（にぶい黄褐）砂
5．10ＹＲ5/2（灰黄褐）シルト混砂
I H=4.5m 2 J
1．10ＹＲ4/2（灰黄褐）シルト混砂
2．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）シルト混砂
3．10ＹＲ4/1（褐灰）シルト混砂
10ＹＲ6/6（明黄褐）シルトのブロック
4．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）砂
＋10ＹＲ7/6（明黄褐）砂
5．10ＹＲ4/3（にぶい黄褐）シルト混砂
0 （遺構530平面のみ） 5 m
0 2 m

図37　Ｖ区遺構（１）

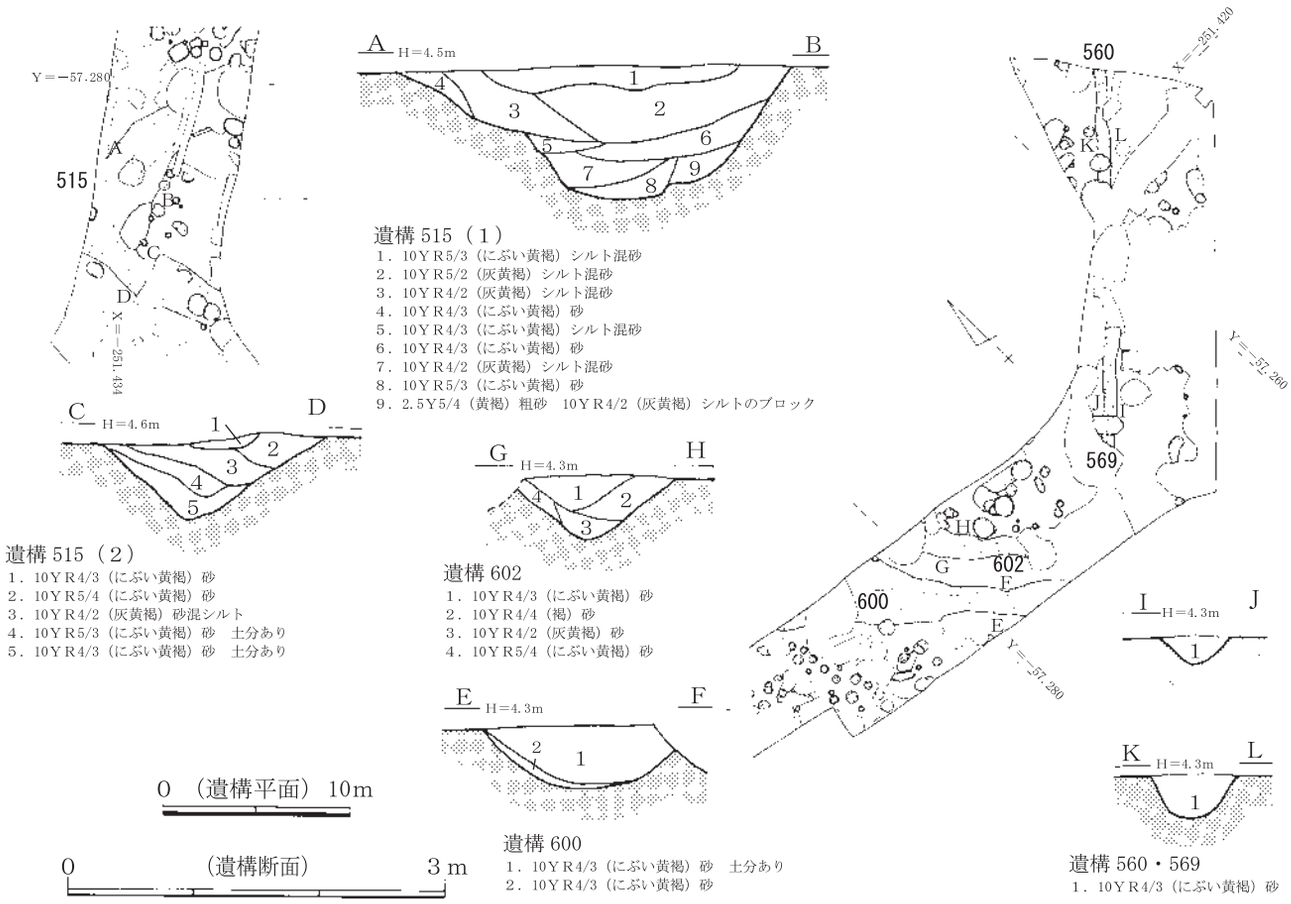


図38　Ⅴ区遺構（２）

肥前系白磁紅皿、施釉陶器、堺･明石系擂鉢、土師質土器焙烙などが出土している。

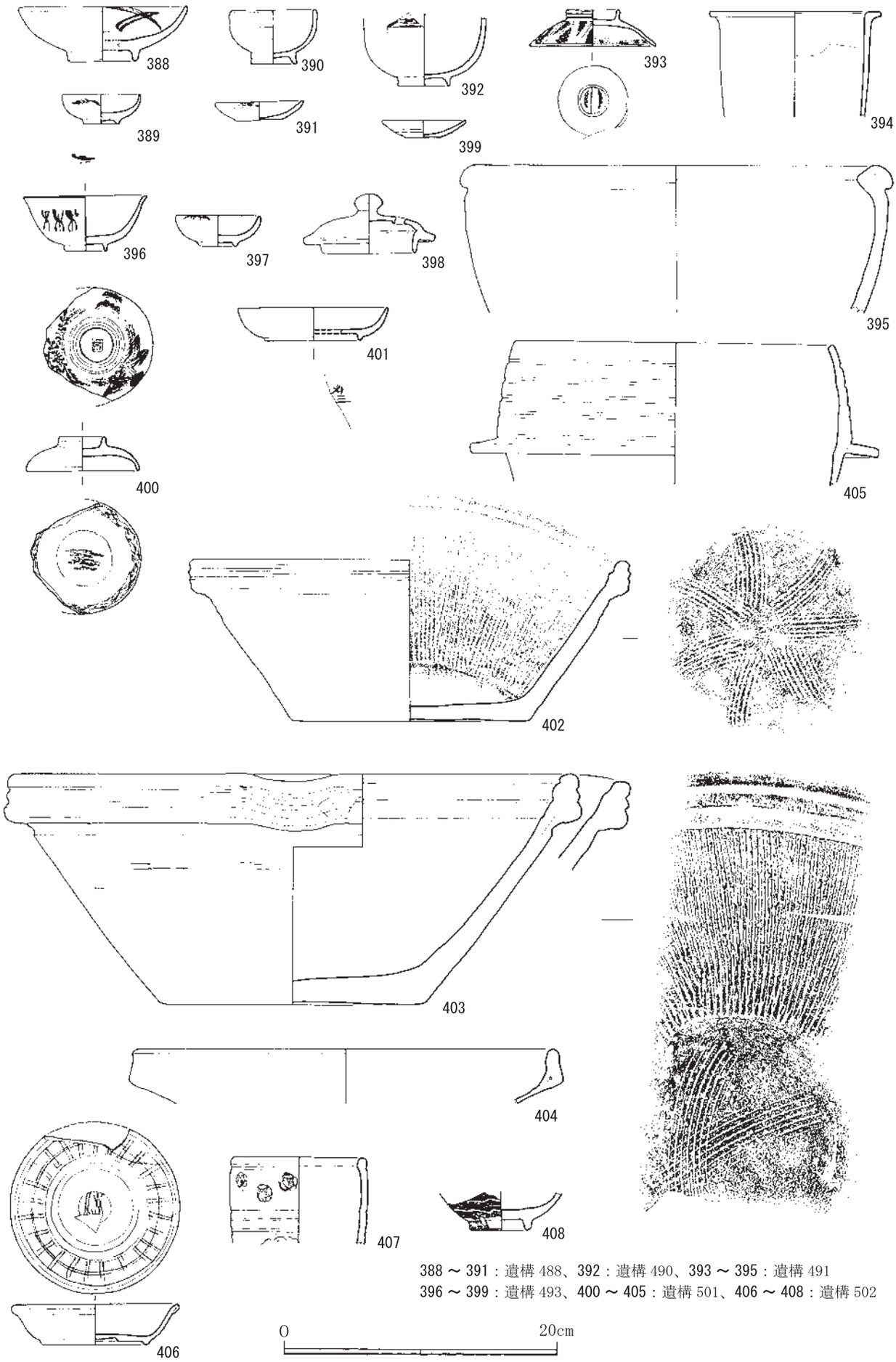
また、遺構580からは比較的残存状況が良い多くの遺物が出土しており、肥前系染付碗（528）・皿（529～532）・小杯（533）、京･信楽焼系陶器杯（534）、堺･明石系擂鉢（535）、土師質土器灯明皿（536～538）・焙烙（539）・糖漏（540）などがある。

２．中世の遺構と遺物

検出した中世の遺構には、溝状遺構（溝560・569・600・602）、土坑、柱穴がある。

溝560・569・602（図38・46、図版19・20）　第４層上面で検出した。３本の溝として扱っているが、出土遺物や軸方向から一連の溝であると考えられ、溝560・569と直交するように溝602が伸びる。一連の溝とした場合、北東－南西方向に約26m、南東－北西方向に約11mで、北東端と北西端は調査区域外に伸びる。溝の幅は0.7～1.4mで、断面形状は舟底状を呈する。溝の軸は、近接する現在の湊本通り周辺の地割りと同じで、砂地であることからも排水用ではなく、区画を目的とした溝であると想定できる。

遺物は遺構560から土師器皿（546）、青磁碗・皿、山茶碗が、遺構569から土師器皿が、遺構602から土師器皿、青白磁合子（552）が出土しており、平安時代末頃から鎌倉時代にかけての遺構であると考えられる。



388 ～ 391：遺構 488、392：遺構 490、393 ～ 395：遺構 491
396 ～ 399：遺構 493、400 ～ 405：遺構 501、406 ～ 408：遺構 502

図39　Ⅴ区出土遺物（１）

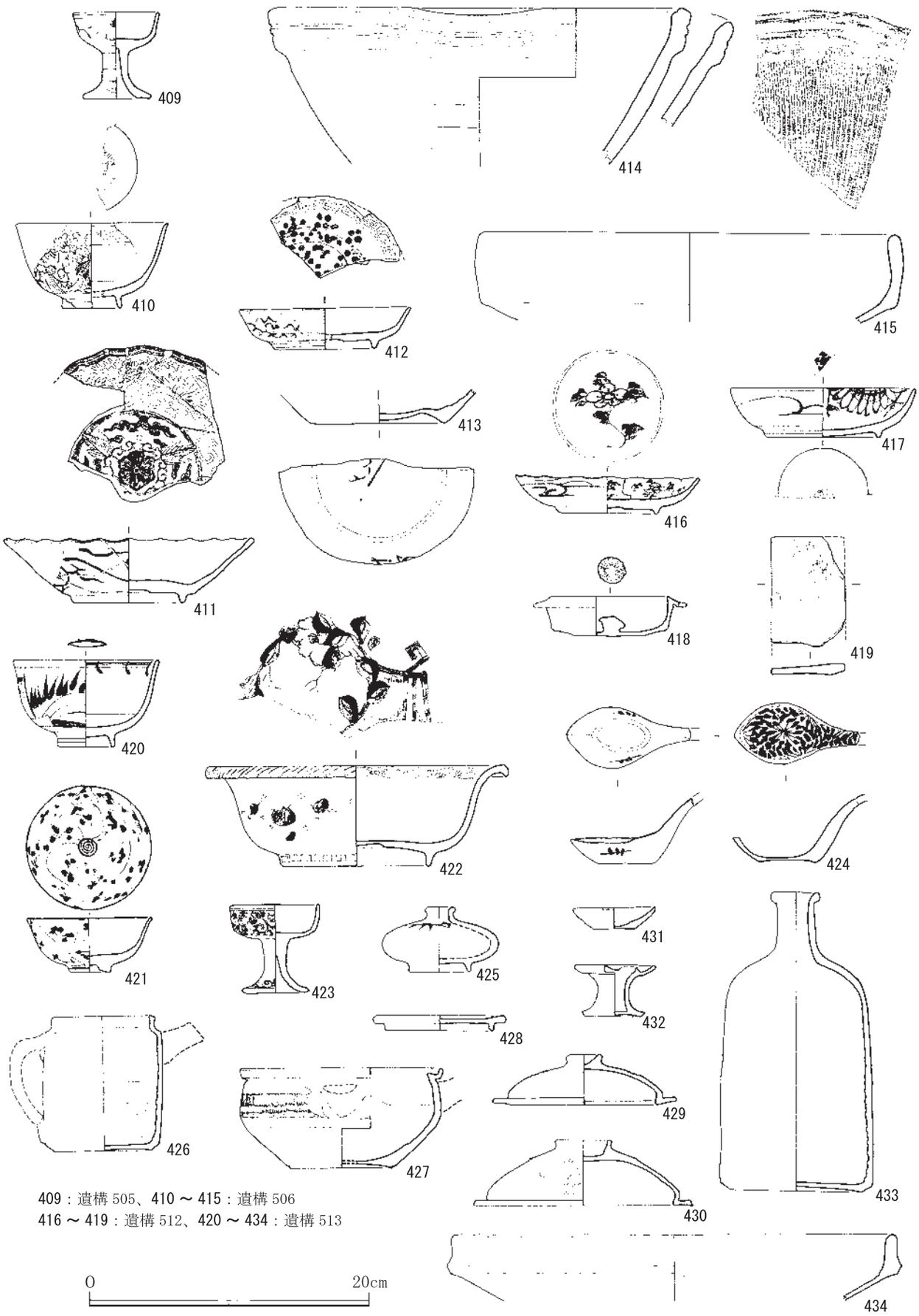

409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
409：遺構 505、410 ～ 415：遺構 506
416 ～ 419：遺構 512、420 ～ 434：遺構 513
0
20cm

図40　Ⅴ区出土遺物（２）

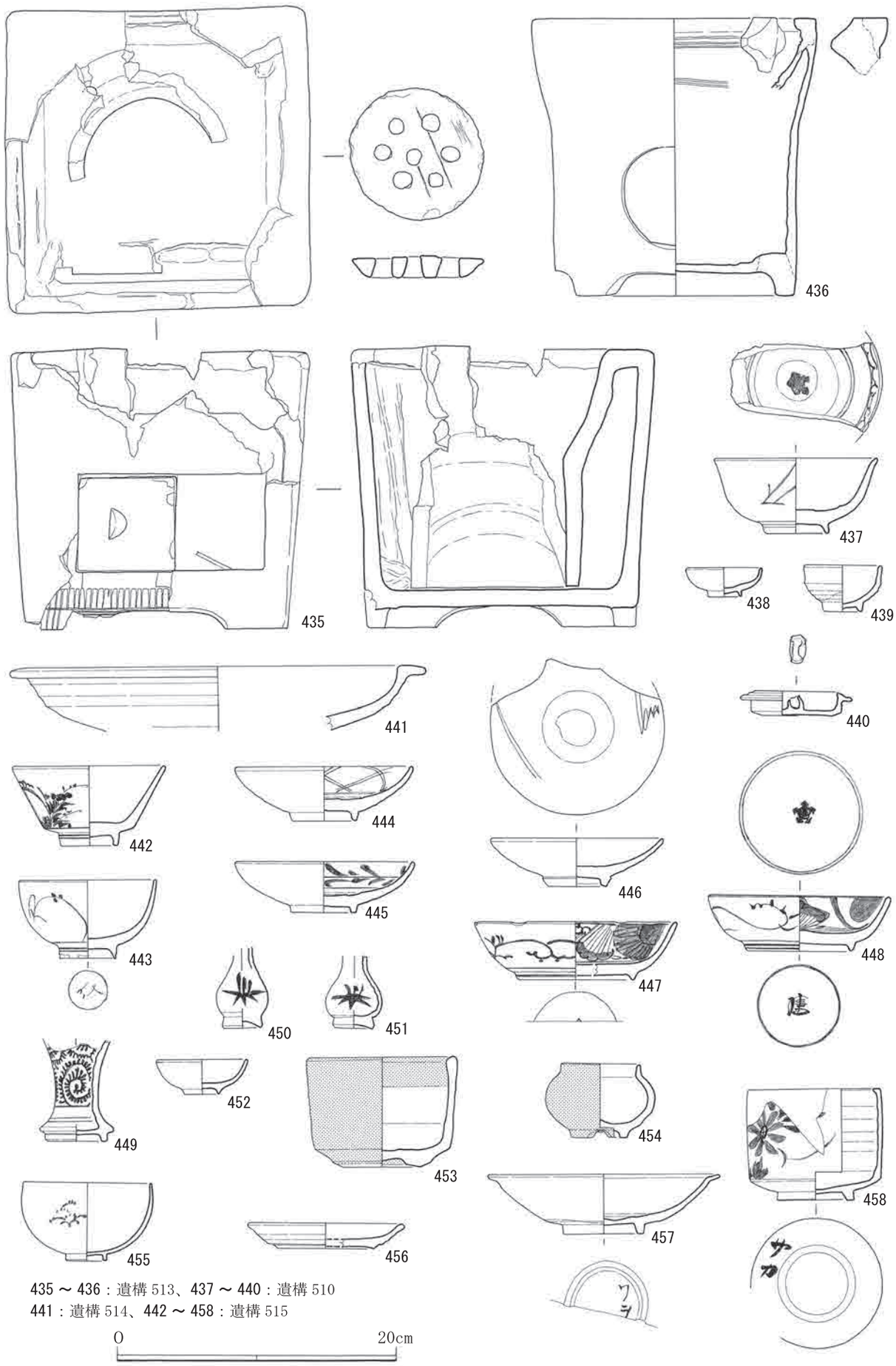
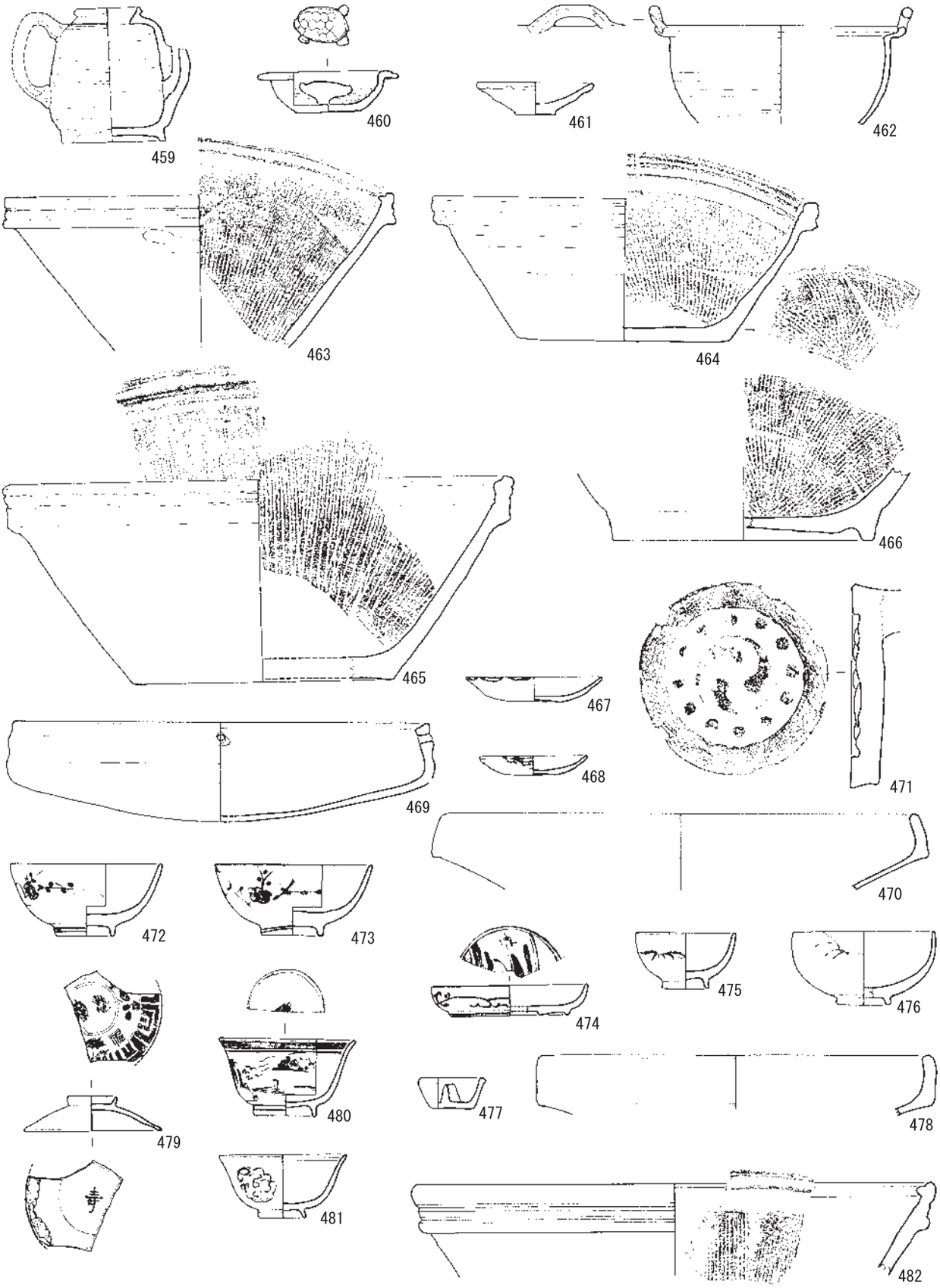

435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
435 ～ 436：遺構 513、437 ～ 440：遺構 510
441：遺構 514、442 ～ 458：遺構 515
0
20cm

図41　Ⅴ区出土遺物（３）



459 ～ 471：遺構 515、472 ～ 478：遺構 515－２
479 ～ 482：遺構 516

0　20cm

図42　Ⅴ区出土遺物（４）

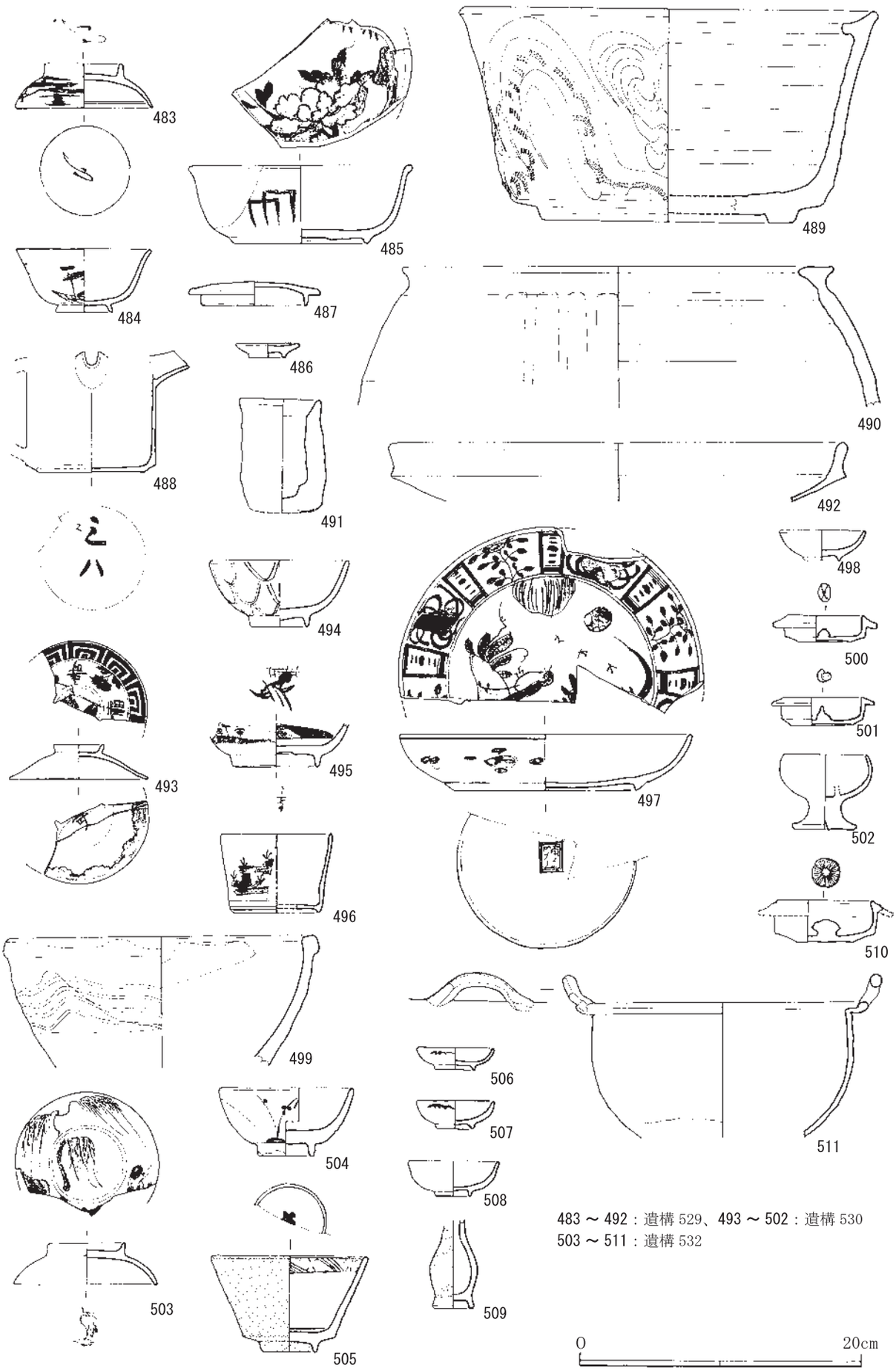

483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
483 ～ 492：遺構 529、493 ～ 502：遺構 530
503 ～ 511：遺構 532
0
20cm

図43　Ⅴ区出土遺物（５）

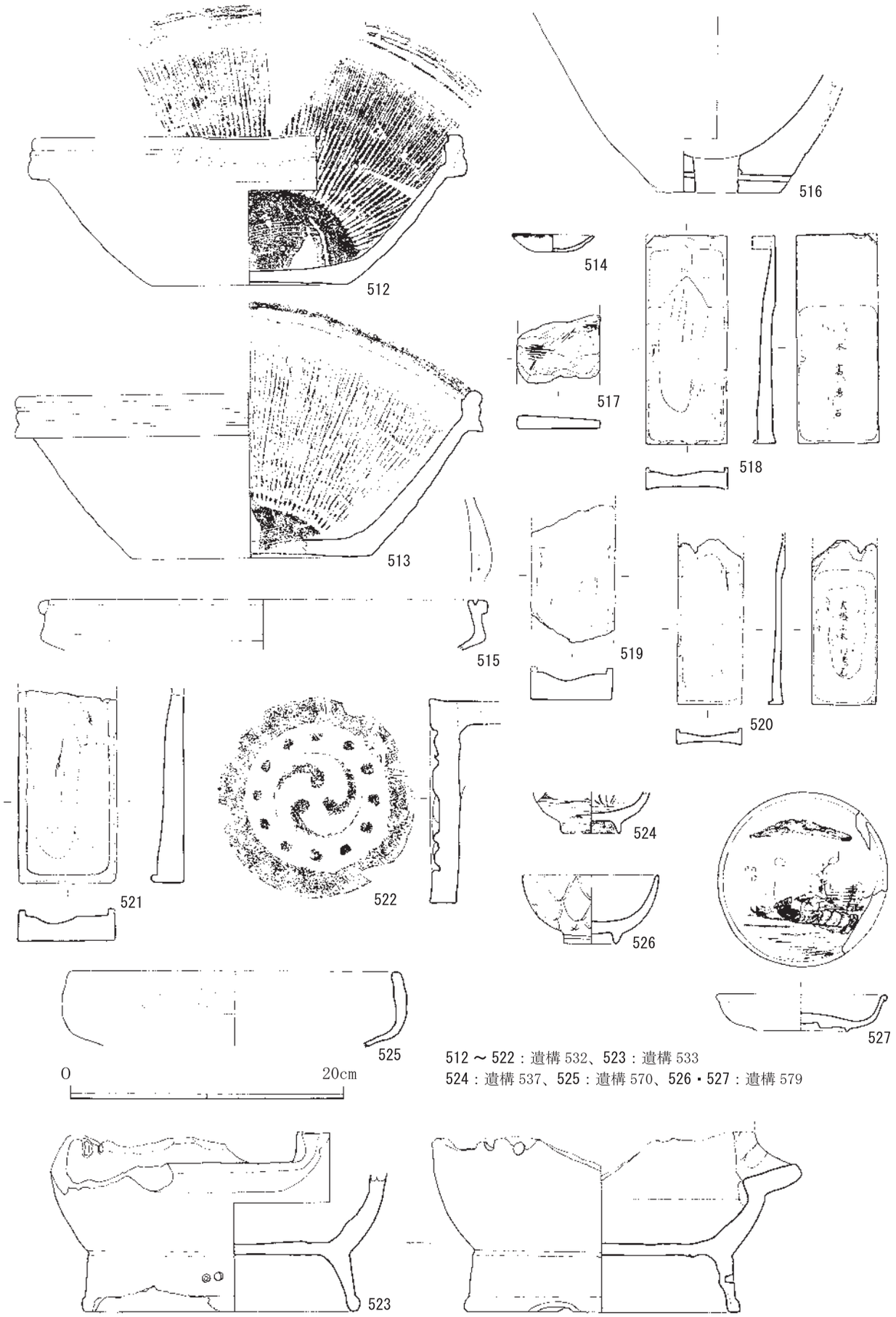

512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
0
20cm
512～522：遺構532、523：遺構533
524：遺構537、525：遺構570、526・527：遺構579

図44　Ⅴ区出土遺物（６）

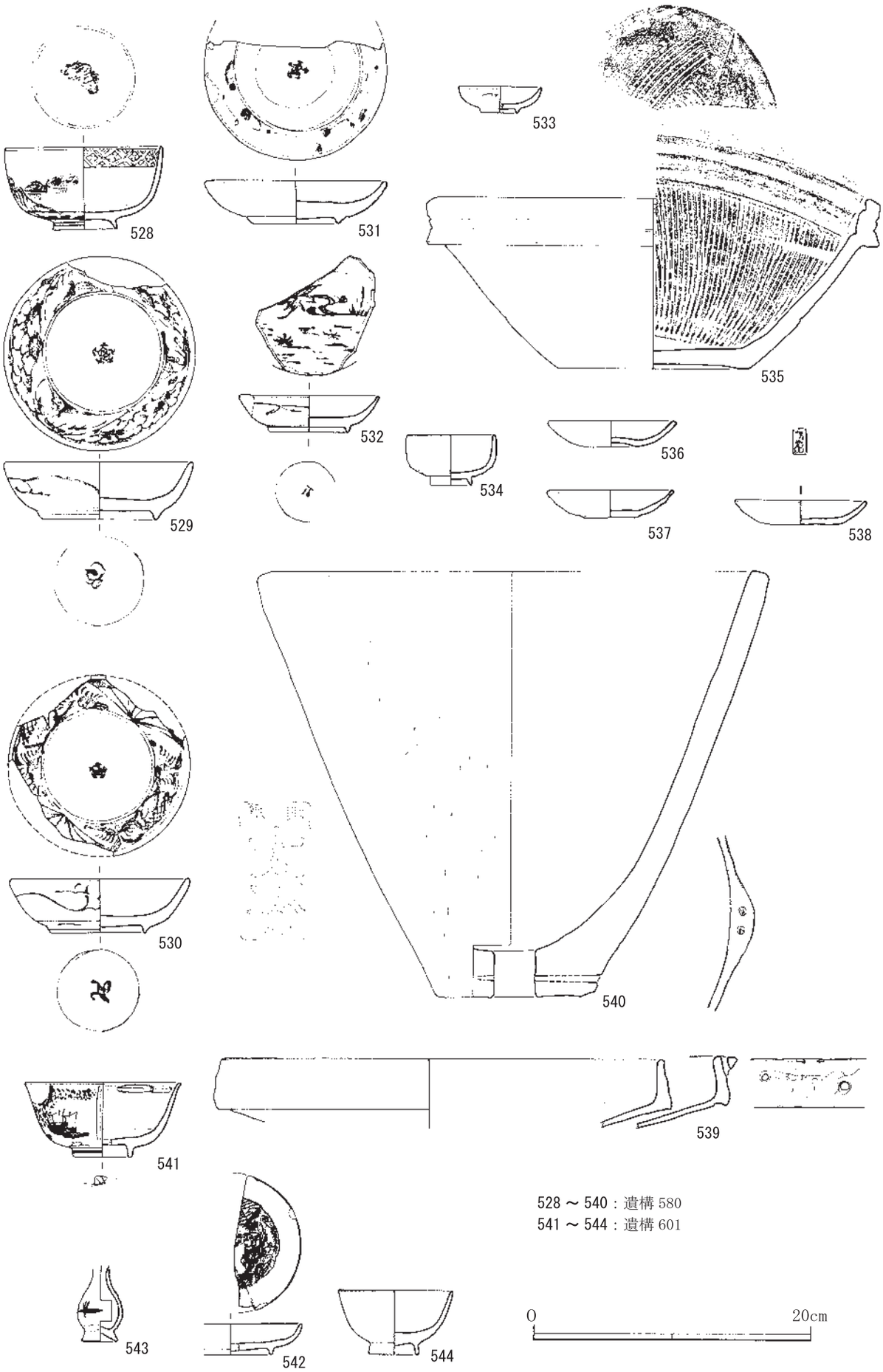

528
531
533
535
532
534
536
537
538
529
530
540
539
541
543
542
544
528 ～ 540：遺構 580
541 ～ 544：遺構 601
0
20cm

図45　Ⅴ区出土遺物（７）

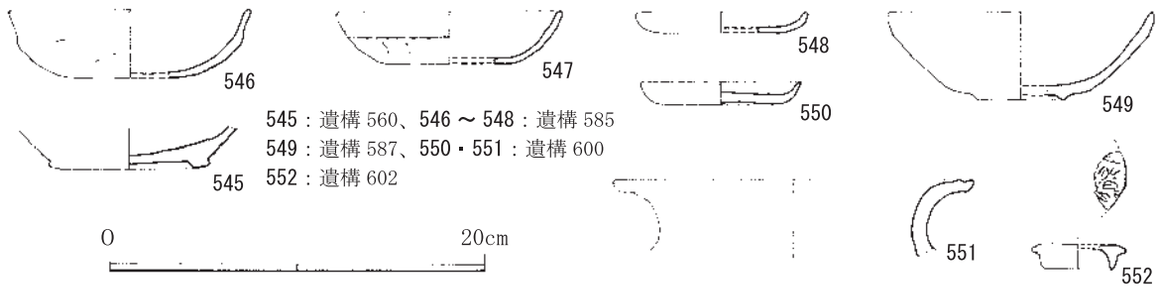


図46　Ⅴ区出土遺物（８）

溝600（図38・46、図版19・20）　第４層上面で溝602と平行するかたちで検出した溝で、北西端と南東端が調査区域外となり、調査区内で長さ約15mを確認した。最も残りの良い箇所で幅3.0m、深さ0.8mを測り、断面は舟底状を呈する。

遺物は土師器皿・小皿（550）・釜、瓦器椀、常滑焼甕、備前焼壺（551）・擂鉢、瓦、鉄釘（580）などが出土している。平安時代末から鎌倉時代の遺物が多いが、擂鉢の特徴などから室町時代の溝であると考えられる。現在の地割に沿うように平行して伸びていることや砂地であることから区画を目的とした溝であると考えられる。

３．その他の遺物（図47、図版34）

整地土や撹乱などから出土した江戸時代の遺物のなかで、バリエーションや遺跡の消長を考えるためのものや、特徴的なものを図示する。また、整地土や撹乱、後世の遺構へ混入して出土した中世以前の遺物に関しては、図化できるものをできるだけ掲載している。553～569・582・583が江戸時代の遺物、570～579、585が中世の遺物である。

江戸時代の遺物では553～560が肥前系染付、561・562が肥前系白磁、563が肥前系陶器、564・565が瀬戸･美濃系陶器、566が京･信楽焼系陶器、567が堺･明石系陶器である。569は石製硯である。

中世の遺物では、570～573が土師器、574～575が瓦器、577・578が山茶碗、579が青磁である。

第６節　Ⅵ区の調査（図62、図版21）

最も東に位置する調査区である。Ⅴ区と同様に第２－1層、第２－2層が存在するが、第２－2層が撹乱などによって削平され、調査区全体に広がっていなかった。このため、第１遺構面の調査をおこなった後に、第４層上面で、第２・３遺構面の遺構検出を同時におこない、帰属する面は出土遺物や覆土で判別した。第１遺構面で検出した遺構は江戸時代の幕末頃、第２遺構面の遺構は江戸時代後期から幕末、第３遺構面の遺構は中世となる。他の地区と同様に調査区全体に撹乱が存在する。遺構密度は他の調査区に比べ若干薄く、出土遺物の量はかなり少ない。

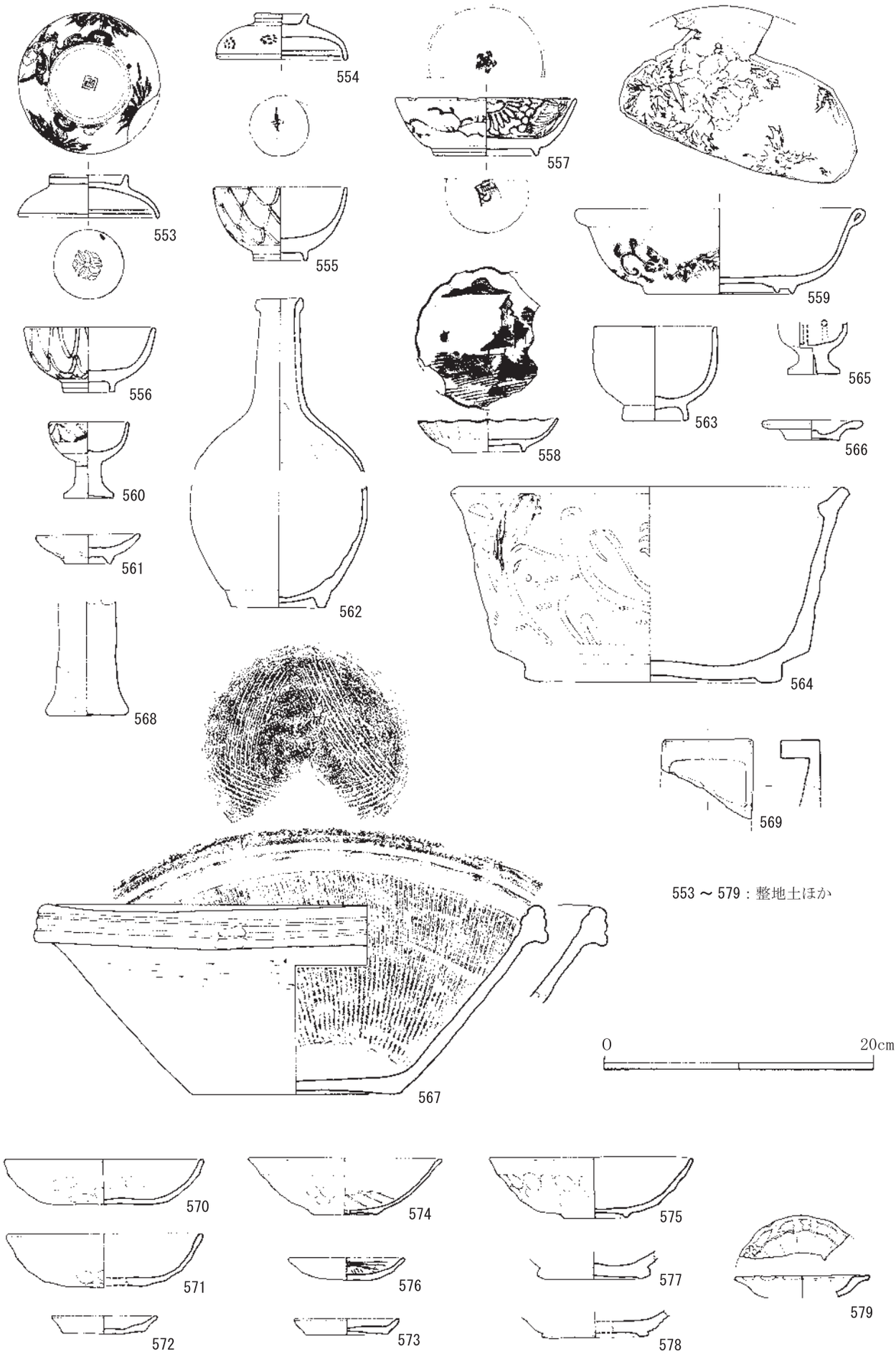

553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
553 ～ 579：整地土ほか
0
20cm
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579

図47　Ⅴ区出土遺物（９）

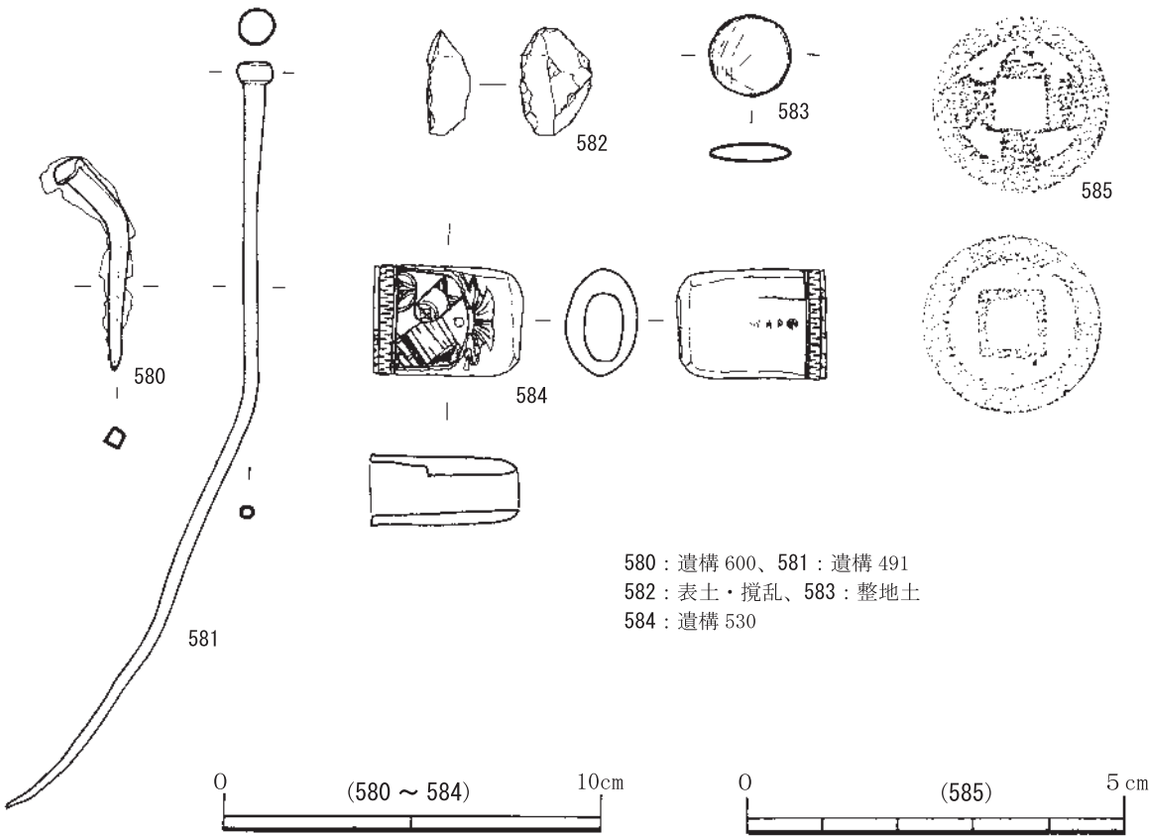


図48　Ⅴ区出土遺物（10）

１．江戸時代の遺構と遺物

江戸時代の遺構には、礎石建物２棟、方形区画溝（遺構350）、土坑、ピットなどがある。

礎石建物３（図50）　第１遺構面において、調査区の南西寄りで検出した建物で、礎石の多くが削平されている。建物軸は周辺の地割りに沿うように座標軸に対して約45度振っている。検出した規模は6.0m以上×4.6m以上で、柱並びは整然とするものの、間尺は一定でない。礎石は扁平な砂岩で、地山を掘り窪めて据えていた。

礎石建物４（図50）　第１遺構面において礎石建物３の東側で検出した建物で、礎石のほとんどが削平されている。建物軸は礎石建物３と同じで、周辺の地割りに沿っている。検出した規模は4.0m以上×1.0m以上で、柱並びは整然としている。礎石は扁平な砂岩で、地山を浅く掘り窪めて据えていた。

遺構350（図50、図版22）　第１遺構面で検出したもので、礎石建物３・４と同じ軸方向に並ぶ。第２－1層上面で検出した。長さ7.0m、幅3.5mの方形区画の周囲に、幅0.5m前後、深さ0.2～0.3mの溝を巡らしたものである。溝内には均一な2.5Y6/4（にぶい黄）シルトが充填されており、遺構が機能していたときは埋め戻された状態であった可能性がある。周辺でみつかっている礎石建物と軸が同じであり、建物の地下構造であったと考えられる。

遺物は近世の白磁片が出土している。

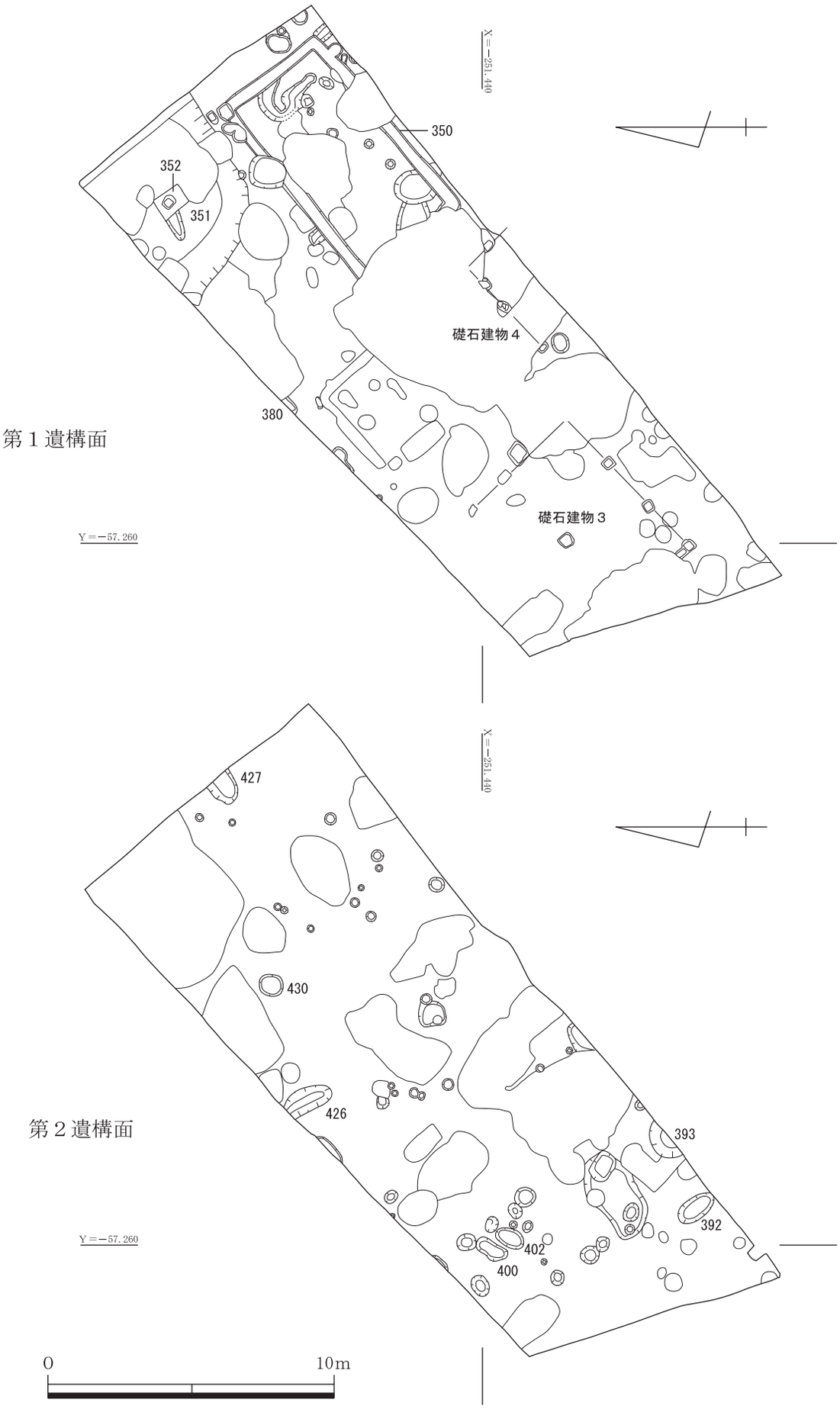

第１遺構面
X＝－251.440
Y＝－57.260
350
352
351
380
礎石建物４
礎石建物３
第２遺構面
X＝－251.440
Y＝－57.260
427
430
426
393
392
402
400
0
10m

図49　Ⅵ区遺構全体図

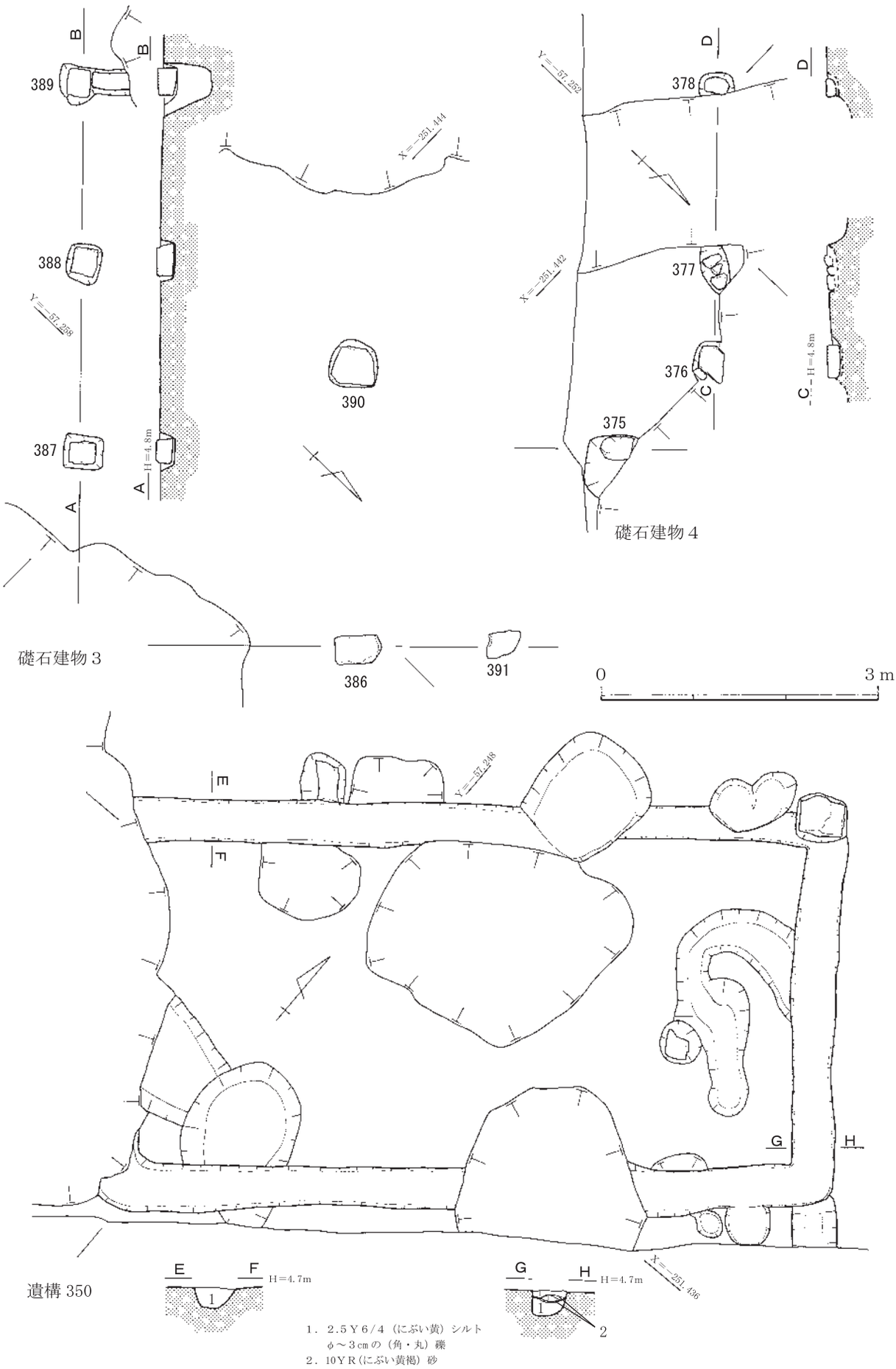

礎石建物３
礎石建物４
遺構 350
0
3 m
H=4.8m
H=4.7m
1．2.5Y6/4（にぶい黄）シルト
φ～3cmの（角・丸）礫
2．10YR（にぶい黄褐）砂

図50　Ⅵ区遺構

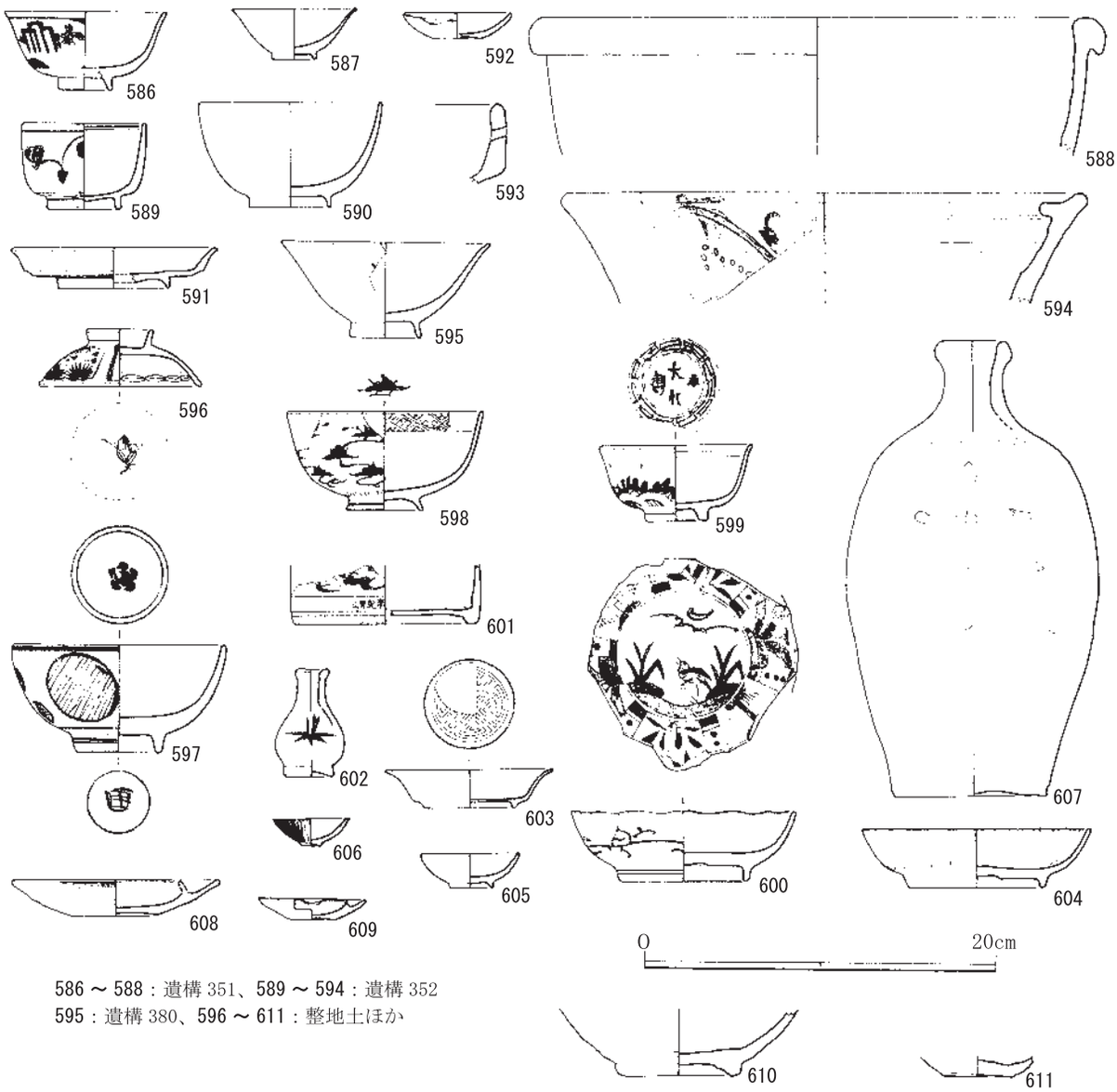


図51　Ⅵ区出土遺物

２．中世の遺構と遺物

第３遺構面で検出した中世の遺構には土坑、ピットなどがある。南西寄りにピットが多く存在するものの、掘立柱建物の建物プランは想定することができなかった。

３．その他の遺物（図63、図版34）

595～609が江戸時代の遺物、610・611が中世の遺物である。

江戸時代の遺物には、肥前系染付（596・597・599・601）、瀬戸･美濃系染付（595・598）、南紀男山焼染付（600）、瀬戸･美濃系白磁（602）、肥前系白磁（603～605）、瀬戸･美濃系陶器（606）、丹波焼（607）、京･信楽焼系陶器（608・609）がある。

中世の遺物には山茶碗（610）、山皿（611）がある。

第５章　まとめ

第１節　弥生時代

弥生時代前期から古墳時代にかけて、海岸砂丘上は墓地として活用されることが多く、南部川流域のみなべ町片山遺跡や日高川流域の美浜町吉原遺跡などで内容が明らかにされている。会津川河口左岸に形成された砂丘上でも、これまで弥生土器や須恵器などが単独出土しており、弥生土器には穿孔されたものがあることから、これらは墓に供献された土器であると理解されていた。平成元年に田辺第２小学校建設に伴う発掘調査で供献土器を伴う１基の土坑墓が確認され、墓地の内容の一端が明らかにされたが、墓地の広がりや消長などを推察できるに至っていなかった。

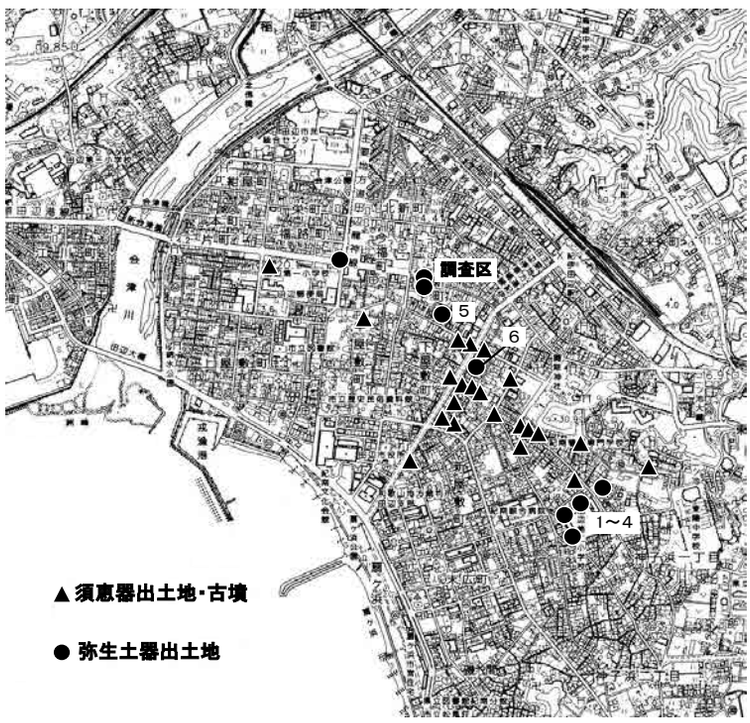


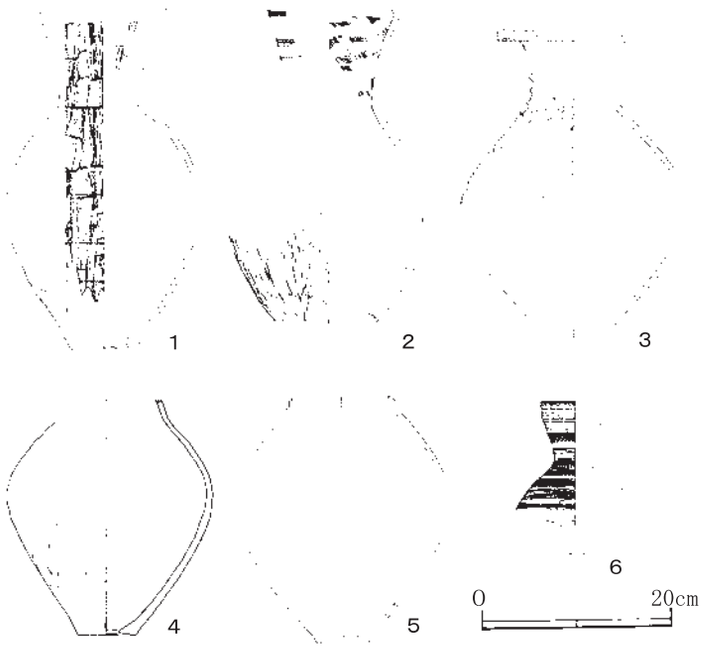
図52　砂丘上の墓地（S＝1/2,500）

図52は、田辺の海岸砂丘上で弥生土器が出土した位置を書き入れたもので、参考として古墳と須恵器が単独出土した地点も入れている。弥生土器の出土地点は、北西－南東方向に伸びる砂丘の中軸線付近に集中している。片山遺跡や吉原遺跡などの例では、弥生時代の墓地はもっとも新しく形成される砂丘上にはなく、それ以前に形成された砂丘の稜線近くに築かれている。改変が著しいことから田辺の砂丘の微地形を読み取ることは困難であるが、遺跡付近の標高や出土地点から窺う限りでは田辺の砂丘上の墓地も片山遺跡や吉原遺跡などのような立地を考えることができる。

片山遺跡や吉原遺跡の弥生墓地は土壙墓群で構成され、前期（Ⅰ様式）から中期後葉（Ⅳ様式）に営まれ、中期後葉末から後期（Ⅴ様式）に廃絶する。その後、後期末から古墳時代初頭にかけて、再度弥生墓地と重複するか近接して墓地が形成されるようになる。土壙墓には土器を供献するものと、土器の供献がないものとがあるが、土器以外に供献されるものはない。供献された土器の内容としては、中期前葉（Ⅱ様式）の土壙墓では甕が多く認められるが、中期中葉（Ⅲ様式）になるとほとんど供献されなくなる。代わって、中期中葉から中期後葉にかけては壺・高杯を供

献することが多く、甕を供献することは稀有となる。また、中期後葉に限れば、水差形土器が多く、脚台をもつ複合壺など特殊な形態が目立つ特徴もある。

今回の調査では、地山面が高い西端の調査区Ⅰ・Ⅱ区において土器を供献した土壙墓を３基検出した。また、撹乱などからも弥生土器が出土しており、周辺に墓域が展開していたことが窺える。一方、地山面が低くなるⅢ区より東側の調査区では、弥生時代の遺構も遺物も確認できない。これは、砂丘稜線付近に相当するⅠ・Ⅱ区付近を墓域として利用していたからであり、周辺地域の例に倣うものである。また、土壙墓に供献されていた弥生土器や撹乱などから出土する弥生土器はⅢ様式からⅣ様式の壺・水差形土器と高杯で、甕は出土していないが、このことも例外ではない。



１～４：神田遺跡、５：宮路通りⅠ遺跡、６：下屋敷遺跡

図53　砂丘から出土した弥生土器

墓に供献された土器には穿孔が施されたものが多く、これらは日常使う土器と区別するためだと言われている。周辺地域の例では、穿孔は壺だけでなくすべての器種に認めることができ、体部下半に施しており、大小数箇所の穴を穿つ例もある。田辺の砂丘から出土する土器には底部中央に穿孔する例が多く（図53の１・４・６）、Ⅱ区の遺構654出土の水差形土器（138）においても底部を穿孔している。一方、近接する片山遺跡や吉原遺跡などでは弥生時代を通じて体部下半に穿孔し、底部中央に穿孔を施す例がない。このことは、地域性を表すものであるかどうか検討する必要がある。

第２節　古　　代

現在の市街地となっている砂丘上は、弥生時代から古墳時代に墓地として利用され、中世以降は集落となっていることが、これまでの発掘調査で明らかになっている。ただ、古代における砂丘上の土地活用については、窺う資料がなかった。今回の調査では、平安時代後期の遺物を含む土坑が１基検出された。その性格については明らかでないが、少なくとも古代においても何らかのかたちで砂丘上が利用されていたことが窺える。

第３節　中　　世

中世の遺構としては、井戸や掘立柱建物、区画が目的と考えられる溝などがみつかっており、周辺に集落が広がっていたことが窺える。遺物では平安時代末頃から室町時代にかけてのものが出土しているが、時期的には12・13世紀代の遺物が最も多く、活況を呈するのは中世でも前半期であると考えられる。砂丘上では、各所で中世の遺物が見つかっており、上屋敷Ⅲ遺跡では12・13世紀の掘立柱建物や土壙墓などが検出されている。弥生～古墳時代に砂丘上は墓地として利用されていたものが、中世に至って本格的に集落として活用されるようになったと言える。

表４は調査で出土した中世の土器破片を調査区ごとに集計したものである。土師器に関しては、近世の土器も若干カウントしている可能性もあり、また、時期幅もあるため純粋な土器組成を求めることは不可能であるかもしれないが、大よその傾向はつかめると考えられる。このなかで、瓦器と山茶碗が同じ用途で、ほぼ同じ消長をもつ土器として押さえる事ができるが、瓦器と山茶碗の比率が86：14となる。和歌山県北部地域では山茶碗がほとんど出土しないことや、那智勝浦町の川関遺跡では瓦器と山茶碗が１：９の割合であることも踏まえると、両土器の占有割合は田辺の地域性を表すものであり、山茶碗が東海地方から海伝いに運ばれたことを物語るものである。また、常滑焼の出土量も一定量あるのは、山茶碗の搬入と切り離せないものであると言える。

このほか、中国製磁器や石鍋の出土も集落の性格を示すものであろう。

表４　中世の土器組成

	土師器		瓦器	青磁	白磁	青白磁	山茶碗	東播系	常滑焼	備前焼	瀬戸美濃	石鍋	瓦質土器	合計
	皿	釜												
Ⅰ区	319	2	115	16	5	0	21	0	5	0	6			**489**
Ⅱ区	16	2	11	1	0	0	6	0	0		0	2		**38**
Ⅲ区	197	5	5	6	0	0	2	0	4	0	0			**219**
Ⅳ区	702	30	157	26	2	0	17	8	39	1	0	1	2	**985**
Ⅴ区	132	2	28	3	0	1	4	1	1	1	0	0	0	**173**
Ⅵ区	5	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	**7**
合計	**1371**	**41**	**316**	**52**	**7**	**1**	**52**	**9**	**49**	**2**	**6**	**3**	**2**	**1911**

現在、街中に残る地割りは、少なくとも江戸時代にはすでに形成されていたことが当時描かれた絵図などから窺える。地割りは田辺城に近い方では縦横に直交して整っているが、城下の東側となる今回の調査区付近では、それらとは異なる地割りで道々に方向性を見出せない。

調査では、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区で海蔵寺通りの地割りに沿う中世の掘立柱建物や溝を、Ⅴ区では直近の湊本通りの地割りに沿う溝を検出した。また、今福町遺跡で検出されている溝も、現在あるいは江戸時代の道路と同方向に伸びることからも、田辺城下町遺跡周辺の地割りは江戸時代よりさらに遡り、周辺が集落として使われるようになる平安時代末頃から鎌倉時代のものを踏襲していることが窺え、さらに田辺城の築城も中世にあった地区割を利用していることが考えられる。

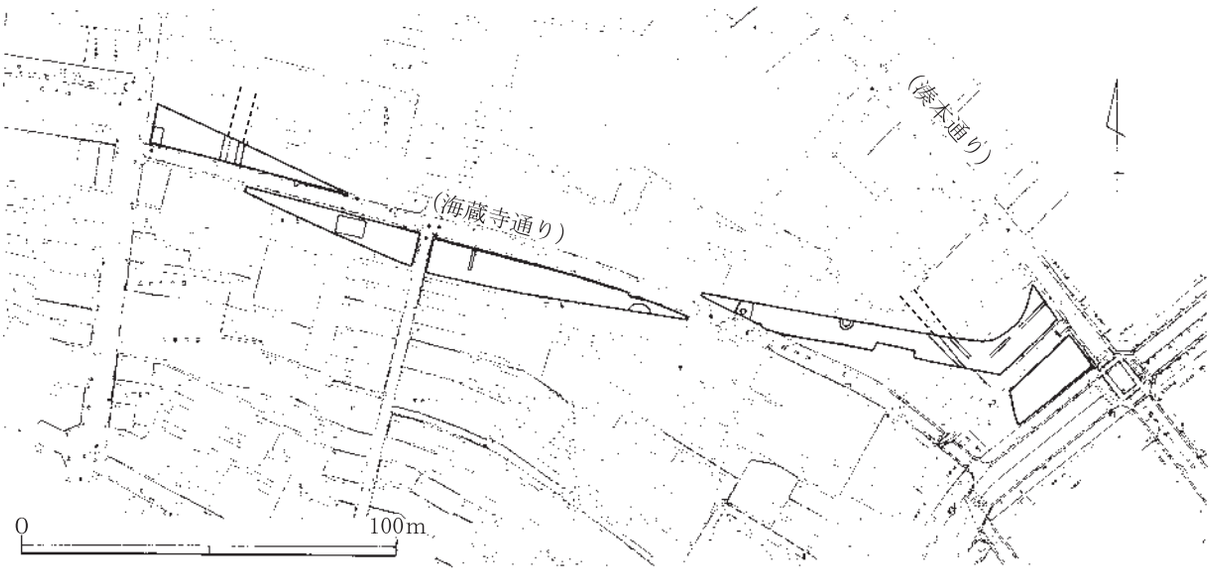


図54　中世の主要遺構

第４節　江戸時代

１．絵図と町屋の成立

江戸時代の田辺城下を描いた絵図は何枚か残されている。最も古いものは江戸時代初期の寛永頃（1624～1643年）に描かれたもので、田辺城の堀や城域は幕末の絵図と比べてもほとんど違っていない。江戸初期の城の形態が大きな改修も加えられず幕末まで受け継がれたことになり、城

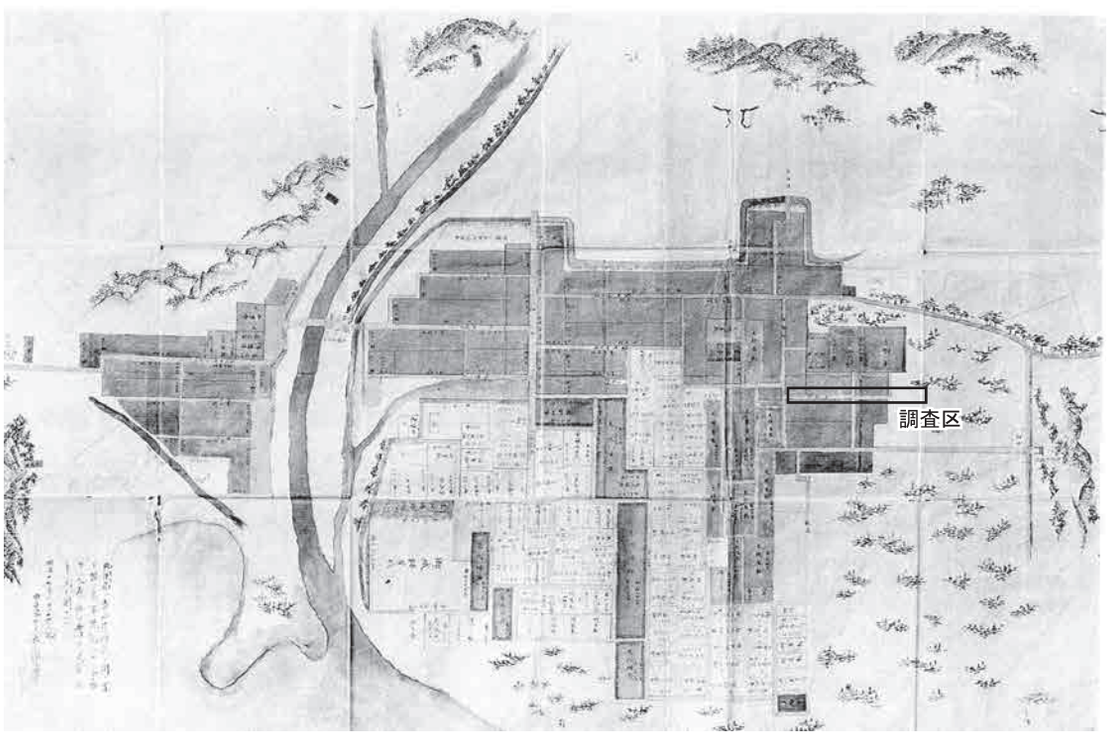


図55　田辺城下図（田辺市立図書館蔵）

の周辺で現在も残る道路、町割なども寛永頃までには出来上がっていたことになる。ただ、今回の調査区の北側にある海蔵寺や本性寺などが描かれているものの、海蔵寺通りは描かれておらず、調査区付近は空白で町屋として成立していなかった可能性がある。

図55は、宝永年間（1704～1710年）に描かれた絵図を明治時代になって写したものとされるが、堀、足軽屋敷、寺、町屋などが色分けして克明に描かれている。これには、寛永の絵図にはない海蔵寺の南を東西に走る現在の海蔵寺通りが描かれ、道に沿って町屋の彩色がされており、調査区付近が町屋となっていたことが分かる。また、幕末頃の絵図では闘鶏神社周辺まで町屋が広がっていることから、時代とともに東側に城下町が拡大していることが窺える。

発掘調査では、礎石建物や土坑、埋桶などがみつかっており、これらは町屋にかかわる遺構であると言うことができる。出土する江戸時代の遺物には前半代のものはほとんどなくなく、18世紀以降ものが中心で、なかでも幕末頃のものが大勢を占めている。このことから、調査区付近が町屋として成立したのが18世紀頃であったことが遺物からも窺え、画期を迎えるのは江戸時代でも終わり頃になってからであると考えられる。遺物には日常雑器や生活道具が揃っており、茶道具や碁石などの出土もあり、当時の町屋の生活を復元することが可能である。

２．糖漏について

発掘調査ではⅣ・Ⅴ区で白砂糖を製造する糖漏が３個体出土した。糖漏は漏斗や瓦漏などとも呼ばれるもので、形態は逆円錐台形を呈し、底部には穿孔を有している。国産の白砂糖製造は18世紀前半に和歌山が発祥とする説もあり、徳川吉宗によって生産が奨励された。使用方法等については「天工開物」や「砂糖製作記」から窺うことができ、サトウキビを圧搾して出た汁を煮詰めたものから製造するものである。

糖漏は大阪府泉南地域を中心として出土例が多く報告されており、江戸の尾張藩上屋敷でも出土が知られている。県下では、これまで和歌山市秋月遺跡や御坊市小松原Ⅱ遺跡のほかに田辺市上の山でも出土しており、形態はどれも田辺城下町遺跡のものとほぼ同じである。田辺城下で白砂糖を製造していた記録には行き当たっていないが、小松原Ⅱ遺跡の例では、遺跡近くの橋本太次兵衛家が砂糖の販売に係わっていたことが文献資料から分かっており、地域で砂糖生産していたことが明らかになっている。

図56　糖漏使用法（天工開物より）

県下の発掘調査では、江戸時代を対象とすることが少ないこともあって、報告例が少なく考察を加えるまでに至らないが、これまで県下で

出土した糖漏のうち、田辺城下町遺跡以外のものを図57に紹介しておく。

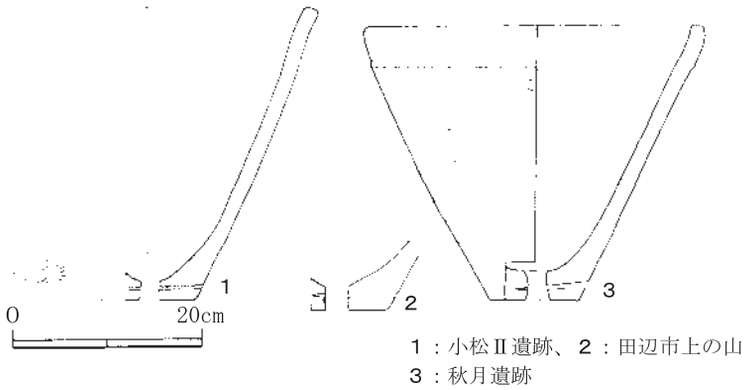


図57　県下出土の糖漏

3．南紀男山焼

南紀男山焼は、広川町にあった陶磁器窯で焼かれた製品で、窯は文政10年（1827）に紀州藩の支援のもと崎山利兵衛により開かれ、明治11年（1878）まで操業されている。製品の大半は染付であるが、青磁・白磁・交趾写のほか陶器なども焼かれていたとされる。当時の時代背景としては、中国景徳鎮の染付が衰退し、伊万里焼の需要が急速に増した時期であり、伊万里焼の文様も中国的な傾向を示すようになる。それを受け、南紀男山焼の文様も中国製品や中国模倣の肥前製品を再模倣したもの、肥前系オリジナルを模したものなどがある。南紀男山焼の窯跡から出土した染付群を肥前系の染付群と対比した場合、明らかに識別ができるものの、そのなかで１個体だけ抽出してどちらの製品か判別するのは難しい。このため、窯跡出土の遺物でない限り、「南紀男山」の銘のみで南紀男山焼と判断するしかないのが現状である。南紀男山焼は伊万里製品の流通に係わった箕島の宮崎陶器商人によって、「伊万里」のブランドで大量に京・大阪や江戸に出荷されたとされる。当然地元でも流通していたはずであるが、ほとんどの製品に銘がないこともあって発掘調査で確認された南紀男山焼は和歌山市鷺ノ森遺跡で出土した銘をもつ碗と急須のみである。

今回の発掘調査では、「南紀男山」の銘をもつ染付が２点出土した。１点はⅥ区の撹乱から出土した火入（601）で、底部側面に右から銘が記されている。銘は「南」が大きく左にむかって徐々に文字が小さくなる特徴がある。もう１点はⅤ区遺構530から幕末の土器などとともに出土した芙蓉手皿（497）である。この皿は高台内の二重圏線内に銘を持つが、銘は釘先などの先が尖った金属で意図的に消されている。ただ仔細に見れば、二重の方形枠内に描かれた篆書体の銘が判読できるが、南紀男山焼の製品を伊万里製品と偽るための行為である可能性も考えられる。

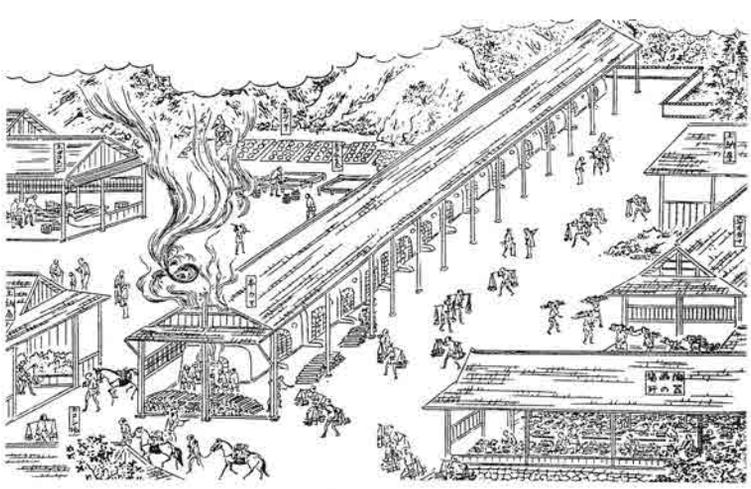


図58　男山陶器場の図

田辺城下町遺跡からは幕末を中

心とする染付が多量に出土しているが、これらのなかに銘をもつ南紀男山焼があることからも、銘を持たない南紀男山焼も一定量存在していると考えられる。先にも触れたように、銘がない限り文様などで南紀男山焼を判別するのは困難であるが、今回出土した染付のなかに、肥前系でも瀬戸･美濃系でもないと考えられる一群が存在することから、これらの一部が南紀男山焼の可能性がある。また、窯跡採集資料などから南紀男山焼の特徴としては①芙蓉手文様が多い、②雷文帯を多用する、③皿などの見込み部に窯道具であるハマの痕跡を顕著に残すものが多い、④口縁端部に特徴をもつものがあり、口縁部を肥厚あるいは折り返して玉縁状にしたものが多いなどある。以上は南紀男山焼と判断する絶対的な特徴ではなく、南紀男山焼と断定するには理化学的分析などに委ねないといけないが、今後の検討資料として南紀男山焼の可能性がある資料は、28（鉢）、203（碗）、306（碗）、406（皿）、412（皿）、411（皿）、422（鉢）、423（仏飯器）、481（碗）、485（鉢）、484（碗）、527（皿）、559（鉢）などをリストアップすることができる。

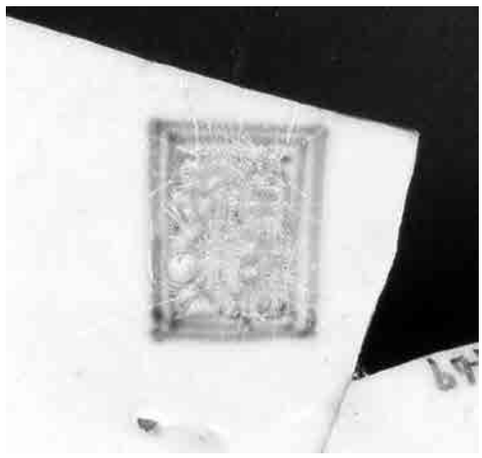


写真14　消された銘（497）

４．墨書と朱書

土師質土器や陶磁器に墨書や朱書を施す土器は10点あまり出土しており、これらには、使用目的などによっていくつかに分けることが可能であることから、おおまかに分類してみたい。

漢字・梵字を書く土師質土器皿　幕末頃の遺構や遺構面などから多く出土し、大きく２タイプに分けることができる。一つは224～227、338～340のような無釉の皿で、内面あるいは外面に梵字、漢字、異体字を書き連ねたもので、もう一つは341～344のように薄く釉薬をかけた内面に梵字一文字を書くものである。建物礎石やその傍などで出土していることからも地鎮に用いられたもので、出土状況などから２つのタイプとも２枚が１セットになると考えられる。書かれた文字では338には「急急如律令」、226には「如律令」、339には「未歳　男　姓」などの漢字を読み取ることができる。「急急如律令」は中国漢代の公文書の末尾に書かれた決り文句で「急いで律令の如く行え」の意であり、 陰陽道や密教など呪文に取り入れられ「悪魔よ早く退散しろ」や「願いを早く叶えたまえ」のような意味で用いられたものである。

朱書　24・79・179・401は高台内に朱書を施す。これらは染付あるいは白磁で、鉛ガラスによる焼継ぎで補修されたものであることから、文字は焼継師が発注者に返却する際の識別のために付したと考えられる。 文字が識別できるものとしては79が「海蔵　大・」、179が「・牛・」があり、79の文字に関しては、発注者が海蔵寺の僧か、海蔵寺町に住む住人であることを示すものであったと考えられる。

墨書陶器　施釉陶器の155・156・206・207・208・413・457・458・488には高台内や底部付近に墨書がある。漢字・カタカナ・ヒラガナと文字は様々で、判読できるものとしては155・206の「ウアヨ　モヤヨ」、207の「志ミつや茂八」、488の「三八」などがある。これらは陶器の所有者を表すものが多いと考えられる。

写真15　墨書陶器（207）

（註１・出土遺物観察表）　白神典之「堺摺鉢考」『東洋陶磁』VOL.19 1989-92　　口縁部の形態などからⅠ・Ⅱ・Ⅲの３型式に分類し、Ⅰ型式は18世紀前半から中頃、Ⅱ型式は18世紀後半、Ⅲ型式は19世紀前半～後半としている。本遺跡での共伴資料をみると擂鉢の方が若干古い傾向がでている。

参考文献

・『和歌山県地名大辞典』角川書店　1985年
・『田辺市史』第四巻史料編Ⅰ　田辺市　1994年
・『吉原遺跡』（財）和歌山県文化財センター　1990年
・『片山遺跡Ａ地点発掘調査概報』南部町教育委員会・片山遺跡調査委員会　1978年
・『片山遺跡Ｂ地点発掘調査概報』和歌山県教育委員会・（社）和歌山県文化財研究会　1979年
・『片山遺跡Ｃ・Ｄ地点発掘調査概報』和歌山県教育委員会・（社）和歌山県文化財研究会　1979年
・『片山遺跡Ｇ地点発掘調査概報』和歌山県教育委員会　1983年
・『安養寺跡』南部町教育委員会・御坊市文化財調査会　2002年
・丹野拓「紀伊山地の霊場と参詣道」の考古学的検討－瓦器と山茶碗の分析を通して－『紀伊考古学研究』第７号　紀伊考古学研究会　2004年
・『藤倉城跡・川関遺跡』（財）和歌山県文化財センター　2004年
・『今福町発掘調査概報』（財）和歌山県文化財センター　1987年
・吉信英二「田辺に現存する古地図について（1･2･3）」『田辺文化財』4･5･6　田辺市教育委員会　1960・1961・1962年
・『馬川遺跡―94-4区―』　阪南市教育委員会　2001年
・『秋月遺跡　第８次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　2000年
・『湯川神社境内遺跡（湯川氏館跡）発掘調査概報Ⅲ』御坊市遺跡調査会　1984年
・小林克「江戸の瓦溜（がろう）」『江戸遺跡研究会会報№109』江戸遺跡研究会　2007年
・（宋応星『天工開物』1637年）平凡社　1979年
・木村喜之 撰『砂糖製作記』1797年（早稲田大学古典籍総合データベースを閲覧）
・『御坊市史』第１巻通史編Ⅰ　御坊市　1981年
・『南紀男山焼』　財団法人和歌山県文化財センター　1992年
・寺西貞弘『南紀男山焼－その歴史と美－』　和歌山市立博物館　2008年
・『田辺市史』第二巻通史編Ⅱ　田辺市　2003年
・『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会　2000年

主要遺構一覧表（1）

遺構番号	図	図版	調査区	遺構面	遺構種類	形状	規模			遺物	備考
							長さ(m)	幅(m)	深さ(m)		
9	6･11	6	Ⅰ	第２	土坑	楕円形	1.50	1.10	0.70	土師器皿　瓦器椀（60）	中世　遺構74と重複
10	5･7	6	Ⅰ	第１	土坑	楕円形	1.10	1.00	0.40	肥前系染付（１）、瀬戸・美濃系陶器　土師質土器　瓦ほか	江戸時代
12	11		Ⅰ	第２	ピット	楕円形	0.42	0.38	0.10	瓦器椀（61）	中世
16	13		Ⅰ	第１	ピット	楕円形	0.44	0.38	0.16	釘(107)　銅製筆軸（110）	江戸時代
18	12		Ⅰ	第１	土坑	楕円形	0.82	0.76	0.16	弥生土器（100）　瓦器　染付	江戸時代
19	7･14		Ⅰ	第１	ピット	楕円形	0.50	0.38	0.17	瓦（２）　銭貨（113）	江戸時代
20	13		Ⅰ	第１	ピット	楕円形？	0.51	0.18以上	0.22	釘（108）　銅製品（111）	江戸時代　北側削平される
31	7		Ⅰ	第１	土坑	楕円形	0.87	0.65	0.45	肥前系染付（３）　施釉陶器　瓦　貝	江戸時代
44	5･7	6	Ⅰ	第１	土坑	隅丸方形	2.20	1.50以上	0.66	肥前系染付・白磁　丹波焼　瀬戸・美濃系陶器　土師質土器（４～６）ほか	江戸時代
47	7		Ⅰ	第１	ピット	円形？	0.34	0.18以上	0.62	瀬戸・美濃系陶器（７）　染付　瓦	江戸時代
55	7	23	Ⅰ	第１	土坑	不整形	1.76	1.70以上	0.34	肥前系白磁（８・９）・染付　瀬戸・美濃系陶器（10・11）	江戸時代
57	7	6･23	Ⅰ	第１	土坑	楕円形？	0.64	0.48以上	0.23	肥前系染付（12）　堺・明石系陶器（13）　土師質土器　鉄滓ほか	江戸時代
60	5･8･13	4･6	Ⅰ	第１	建物？	長方形	7.40	4.20以上		平瓦（16・17）　肥前系染付（14）　土師質土器（15）	江戸時代
61	8		Ⅰ	第１	ピット	円形	0.27	0.25	0.32	瀬戸・美濃系陶器（18）　丹波焼（19）　瓦（20）	江戸時代
62	10･11	4	Ⅰ	第２	溝	直線状	2.80以上	1.70以上	0.70	土師器（62～64）　青磁（65）　白磁（66）　瓦器　山茶碗ほか	中世
63	10･11	5	Ⅰ	第２	溝	直線状	7.50以上	1.50～2.00	0.60	土師器　瓦器（67）　瀬戸・美濃系陶器（68）　青磁（69）　白磁（70）	中世
74	6･11	6･24	Ⅰ	第２	ピット	楕円形	0.50	0.40	0.10	瓦器（71）　土師器	中世
75	6･11		Ⅰ	第２	土坑	楕円形	0.67以上	0.63以上	0.16	弥生土器（74）	弥生時代
76	6･11		Ⅰ	第２	土坑	不整円形	1.80	1.45以上	0.36	瓦器（72）　土師器　白磁　山茶碗　焼石	中世
82	13		Ⅰ	第２	ピット	楕円形	0.47	0.29	0.12	土師器　釘（109）	中世
90	6･11	5･6･25	Ⅰ	第２	土壙墓	楕円形？	1.70以上	1.10以上	0.20	弥生土器（75）	弥生時代
91	6・12	5･6･26	Ⅰ	第２	土壙墓	楕円形？	0.85以上	0.70以上	0.38	弥生土器（76）	弥生時代
113	5･8･13	23・24	Ⅰ	第１	土坑	楕円形	1.35	0.65	0.30	肥前系染付（21・26）・白磁（25）　瀬戸・美濃系染付（22～24・27）　南紀男山焼？（28）　京・信楽系陶器（29・30）　土師質土器（31）　鉄釘　骨製針（112）	江戸時代
117	8		Ⅰ	第１	土坑	円形	0.75	0.70	0.35	肥前系染付（32）　京・信楽系陶器（33）　堺・明石系陶器（34）	江戸時代
119	8		Ⅰ	第１	土坑	楕円形	0.66	0.52	0.21	肥前系染付（35）　京・信楽系陶器（36・37）　土師質土器（38）	江戸時代
126	5･8･9	4	Ⅰ	第１	井戸	円形	1.12以上	0.76以上		瀬戸・美濃系染付（39）　肥前系陶器（40）　常滑焼（41）　土師質土器（42）　瓦（43）ほか	江戸時代　石の井戸枠径0.7m　遺構129より新
127	5･9	4･24	Ⅰ	第１	土坑	円形？	1.30	1.10以上	0.70	肥前系染付（44）　瀬戸・美濃系陶器（45）　堺・明石系陶器（46・47）　土師質土器　瓦　石臼（48）	江戸時代　埋桶　径約1.0m　遺構128より新
128	5	4	Ⅰ	第１	土坑	円形？	1.10	0.60以上	0.54	肥前系染付　鉄　瓦　土師器　弥生土器	江戸時代　埋桶？　遺構127より古
129	5･9	4･24	Ⅰ	第１	土坑	楕円形？	1.20以上	0.50以上	0.72	肥前系染付（49～51）　瀬戸・美濃系陶器（55）　京・信楽系陶器（52～54）　土師質土器（56）　瓦（57～59）ほか	江戸時代　遺構126より古
134	6･11	3	Ⅰ	第２	ピット	円形	0.30	0.28	0.37	土師器（73）	中世　掘立柱建物１の柱穴
146			Ⅰ	第２	土坑		1.70以上	0.80以上	0.29		弥生時代？　南側が調査区域外
148			Ⅰ	第２	土坑		1.20	0.38以上	0.20		弥生時代？　西側が調査区域外
630	18		Ⅱ	第１・２	土坑	楕円形	0.60	0.50	0.27	肥前系染付（118）	江戸時代
647	18		Ⅱ	第１・２	ピット	楕円形	0.42	0.30	0.09	肥前系染付（119）	江戸時代
654	17･18	9･25	Ⅱ	第１・２	土壙墓	楕円形	1.30以上	1.10	0.35	弥生土器（137・138）	弥生時代
668	16･18		Ⅱ	第１・２	ピット	円形	0.34	0.34	0.34	石鍋（133）　瓦器	中世　掘立柱建物２の柱穴
670	16･18	25	Ⅱ	第１・２	ピット	楕円形	0.38	0.34	0.41	瓦器（129）　土師器	中世　掘立柱建物２の柱穴
672	16･18	9	Ⅱ	第１・２	土坑	楕円形	1.30	0.70	0.80	肥前系染付（120）　瀬戸・美濃系染付（121）	江戸時代
682	16･18･19	25	Ⅱ	第１・２	土坑	楕円形？	2.52以上	1.20以上	0.58	肥前系染付（122・125）・白磁（124）　肥前系陶器（123）　丹波焼（126）　土師質土器（127）　硯（128）　碁石（141）	江戸時代
685	18	25	Ⅱ	第１・２	土坑	楕円形	0.89	0.63	0.16	山茶碗（130）	中世
694	18･19	9･25	Ⅱ	第１・２	土坑？		1.30以上	1.6	0.30	黒色土器（134）　土師器（135・136）　銭貨（144）	古代
702	16･18	25	Ⅱ	第１・２	ピット	円形	0.38	0.37	0.46	土師器　山茶碗（131）	中世　掘立柱建物２の柱穴
709	16･18		Ⅱ	第１・２	ピット	楕円形	0.40	0.36	0.33	土師器　石鍋（132）	中世　掘立柱建物２の柱穴
723	26		Ⅲ	第１・２	土坑		0.56以上	0.11以上	0.25	無釉陶器　瓦　鉄釘（213）	江戸時代　西側調査区域外
724	23		Ⅲ	第１・２	土坑		1.06以上	0.43以上	0.19	染付　土師質土器（145・146）　施釉陶器　無釉陶器	江戸時代　南側調査区域外
731	23	26	Ⅲ	第１・２	土坑		0.71	0.68	0.19	肥前系染付（147・148）　瀬戸・美濃系陶器（149）　肥前系陶器（150）　土師質土器（151）　瓦	江戸時代
732	23	26	Ⅲ	第１・２	土坑	不整形	3.40	1.60	0.40	肥前系染付（152～154）　京・信楽系陶器（155・156）　不明施釉陶器（157・158）　堺・明石系陶器（159）　土師質土器（161）	江戸時代　落ち込み
733	23	26	Ⅲ	第１・２	土坑	楕円形	0.80	0.65	0.2	肥前系染付（162・163）　丹波焼（164）　備前焼（165）　土師質土器　珊瑚	江戸時代
740	23		Ⅲ	第１・２	土坑		1.40以上	0.45以上	0.42	京・信楽系陶器（166）　染付　瓦（167）	
755	21・23	12	Ⅲ	第１	石組土坑	隅丸方形	1.65	1.55	0.80	染付　施釉陶器　堺・明石系陶器（168）　砥石　鉄片　瓦（169・170）	江戸時代　石組は方形で一辺約1.0m
761	24		Ⅲ	第１	土坑		2.30以上	1.50以上	0.52	肥前系染付（171）　無釉陶器　土師質土器	江戸時代　南側は調査区域外　762より新
762	24		Ⅲ	第１	土坑		0.98以上	0.70以上	0.46	肥前系染付（172）　備前焼（173）	江戸時代　南側は調査区域外　761より古

主要遺構一覧表（2）

遺構番号	図	図版	調査区	遺構面	遺構種類	形状	規模 長さ(m)	規模 幅(m)	規模 深さ(m)	遺物	備考
766	21・26	12	Ⅲ	第１	石組土坑	隅丸方形	2.00	1.80	0.65	施釉陶器　瓦　鉄製品（214）　銭貨（215～218）	江戸時代　石組みは方形で一辺約1.2m
771	24		Ⅲ	第１	土坑	楕円形	0.68	0.63	0.57	肥前系陶器（174）　瀬戸・美濃系陶器（175）　土師器質土器　砥石	江戸時代
802			Ⅲ	第２	土坑	楕円形？	1.28	1.14以上	0.45	青磁　常滑焼　土師器	中世
803	22	12	Ⅲ	第２	土坑	楕円形？	4.50以上	1.80以上	0.60	青磁　瓦器　土師器　常滑焼　土師器皿	中世　井戸掘形？
831	22		Ⅲ	第２	土坑	楕円形	1.50	0.65	0.35	土師器	中世
834	22		Ⅲ	第２	土坑	楕円形	1.10	0.50	0.15		中世
844	24	26	Ⅲ	第１・２	土坑	楕円形？	0.84	0.78	0.20	肥前系染付（176）　施釉陶器　無釉陶器　土師質土器（177）	江戸時代　西側調査区域外
847	24	26	Ⅲ	第１・２	土坑		0.68	0.56	0.50	肥前系染付（178）　施釉陶器　瓦	江戸時代　北と西側調査区域外
851	24	26	Ⅲ	第１・２	土坑	楕円形？	0.68以上	0.64	0.25	肥前系染付（179）　京・信楽系陶器（180）　堺・明石系陶器（181）　瓦質土器（182）　瓦	江戸時代　北側削平
858	21･24	26	Ⅲ	第１・２	土坑	不整楕円形	2.30	2.16以上	0.64	肥前系染付（183～185）・白磁（186）　京・信楽系陶器（187）　瀬戸・美濃系陶器（188）　無釉陶器　瓦質土器　土師質土器　瓦　五輪塔（空輪）	江戸時代　北側調査区域外
860	21･24		Ⅲ	第１・２	土坑	円形？	0.90	0.82以上	0.68	肥前系染付（189）・白磁　施釉陶器　土師質土器（190）	江戸時代　北側調査区域外
861	24		Ⅲ	第１・２	土坑	楕円形	1.00以上	0.87	0.32	肥前系染付（191・192）　肥前系陶器（193）　京・信楽系陶器（194）　無釉陶器　瓦質土器１　瓦	江戸時代　北側削平
865	24	26	Ⅲ	第１・２	ピット	円形	0.42	0.42	0.20	瓦器（198）	中世
874			Ⅲ	第１・２	溝	直線状	4.60以上	1.00	0.30		中世
875	24		Ⅲ	第１・２	ピット	楕円形	0.36	0.27	0.27	山茶碗（199）	中世
886	24		Ⅲ	第１	ピット	楕円形	0.45	0.42	0.27	肥前系染付（195）	江戸時代
891	24		Ⅲ	第１	土坑	隅丸方形	0.82	0.70	0.50	肥前系陶器（196・197）	江戸時代
922	24		Ⅲ	第２	土坑	不整形	3.30	0.85	0.15	土師器（200）	中世　北側調査区域外
155	30		Ⅳ	第１	土坑	楕円形	0.64	0.50	0.23	染付　施釉陶器　土師質土器（223）	江戸時代
161	28･30		Ⅳ	第１	礎石掘形		0.76	0.56	0.22	土師質土器（224・225）	江戸時代
166	28･30		Ⅳ	第１	土坑	楕円形	1.10	0.90	0.75	染付　施釉陶器　土師質土器（226・227）	江戸時代
169	30		Ⅳ	第１	土坑		1.60以上	0.50以上	0.43	施釉陶器　堺・明石系陶器（228）　瓦（229）軒丸瓦２　桟瓦１　軒平瓦１　土師器皿１　施釉陶器１	江戸時代
170	28･30	27	Ⅳ	第１	土坑	隅丸方形	1.80	1.10	0.50	肥前系染付（230・231）、瀬戸・美濃系染付（232）施釉陶器	江戸時代　溜桝状
185	29･32	16･28	Ⅳ	第２	井戸		5.00	4.00以上		土師器　瓦器　山茶碗（276・277）　東播系須恵器　常滑焼（278）　青磁（279）　瓦質土器（275）	中世　井戸は直径約1.1m、深さ1.5m以上
195	32	28	Ⅳ	第２	土坑		0.78	0.36	0.15	土師器（280・281）　常滑甕（282）　鉄釘	中世
203	32		Ⅳ	第２	土坑	楕円形	1.90以上	1.55	0.15	山茶碗（283）	中世
205	32		Ⅳ	第２	土坑	楕円形	1.04	0.87	0.10	山茶碗（284）	中世
210	32		Ⅳ	第２	土坑	隅丸方形	3.80	2.50	0.10	瓦器（285）	中世
213	29･32	16	Ⅳ	第２	土坑	楕円形	2.20以上	1.80	0.50	土師器　瓦器（286）　常滑焼　鉄滓　結晶片岩	中世
229	30		Ⅳ	第１	土坑		1.30以上	0.30以上	0.75	肥前系染付（233）・白磁　京・信楽系陶器（234）無釉陶器　土師質土器（235）　瓦	江戸時代
231	30		Ⅳ	第１	土坑	楕円形	1.05以上	0.60以上	0.11	肥前系染付・白磁１　京・信楽系陶器（236・237）土師質土器　卸皿（238）　釘	江戸時代
236	30		Ⅳ	第１	土坑	楕円形	0.64	0.50	0.10	肥前系陶器（239）	江戸時代
238	30	27	Ⅳ	第１	土坑	不整形	0.97	0.75	0.12	肥前系染付（240・241）　京・信楽系陶器（242）丹波焼（243）　瓦質土器　土師質土器	江戸時代
246	31		Ⅳ	第２	土坑	楕円形	0.62	0.57	0.18	肥前系染付（244）　土師器　青磁	江戸時代
255	31		Ⅳ	第２	ピット	円形	0.25	0.24	0.27	瀬戸・美濃系染付（245）　施釉陶器　瓦器　鉄片	江戸時代
262	31		Ⅳ	第２	ピット	楕円形	0.28	0.24	0.17	京・信楽系陶器（246）	江戸時代
264	29･31	16	Ⅳ	第２	埋桶	円形	1.20	1.20	0.50	肥前系染付（247）　堺・明石系陶器（248）　土師質土器（249）	江戸時代　桶の直径0.7m
267	31		Ⅳ	第２	土坑	楕円形	0.74	0.55	0.16	染付　丹波焼（250）	江戸時代
268	31		Ⅳ	第２	ピット	楕円形	0.48	0.40	0.19	肥前系染付（251）　施釉陶器	江戸時代
275	31		Ⅳ	第２	土坑	円形	0.56	0.54	0.25	肥前系染付（252）　施釉陶器　土師器	江戸時代
277	29･31	16･27･28	Ⅳ	第２	埋桶	円形	1.20 1.30		0.70	肥前系染付（253～258・260）・白磁（259・261）瀬戸・美濃系染付（262）　京・信楽系陶器（263）堺・明石系陶器（264）　土師質土器（265・266）瓦質土器（267）	江戸時代
289	32		Ⅳ	第３	ピット	円形	0.50	0.50	0.49	瓦器（287）　土師器	中世
300	32		Ⅳ	第３	土坑		0.70以上	0.45以上	0.38	瓦器（288）	中世　南側削平
301	32		Ⅳ	第３	土坑		0.98以上	0.65以上	0.50	土師器（289）　瓦器　青磁（290）	中世　南側削平
304	32		Ⅳ	第３	ピット	円形	0.23	0.22	0.32	土師器（291）	中世
320	29	16	Ⅳ	第３	溝	円形	径3.20	0.40～0.60	0.10～0.30		中世　北側調査区域外
327	32		Ⅳ	第３	土坑		1.05以上	0.80	0.16	山茶碗　白磁（292）	中世　北側削平
453	28･31･35	16	Ⅳ	第１	土坑	隅丸長方形	1.80	1.10以上	0.50	肥前系染付（268）　土師質土器（269）　硯（270）粉挽臼（271）　銭貨（386）	江戸時代　南側の一部調査区域外
457	32		Ⅳ	第２	土坑	楕円形？	1.60以上	1.15	0.10	土師器　瓦器（293）　常滑甕	中世　北側削平
458	32		Ⅳ	第２	土坑	楕円形？	2.10以上	2.00以上	0.46	土師器　常滑焼（294）	中世
459	32		Ⅳ	第２	土坑		1.70以上	1.10以上	0.74	土師器　瓦器（295）　常滑焼　瓦	中世
471	31		Ⅳ	第１	土坑	楕円形	1.65以上	1.00	0.18	肥前系染付・白磁（272）　堺・明石系陶器（273）施釉陶器	江戸時代
472	31		Ⅳ	第２	土坑	楕円形	1.25	1.20	0.49	肥前系染付・白磁（274）　無釉陶器　土師器　山茶碗	江戸時代
477	32		Ⅳ	第３	ピット	円形	0.20	0.19	0.54	土師器（296）　常滑焼	中世
481	32		Ⅳ	第３	ピット	円形	0.30	0.30	0.44	瓦器（297）　山茶碗	中世
488	39		Ⅴ	第１	土坑	楕円形	0.64	0.38	1.02	肥前系染付（388・389）　瀬戸・美濃系陶器（390）土師質土器(391)	江戸時代

主要遺構一覧表（3）

遺構番号	図	図版	調査区	遺構面	遺構種類	形状	規模 長さ(m)	規模 幅(m)	規模 深さ(m)	遺物	備考
490	39		Ⅴ	第１	土坑	円形	0.57	0.56	0.21	肥前系染付・白磁　京・信楽系陶器（392）	江戸時代
491	37･39	18	Ⅴ	第１	土坑	円形	1.20	1.15	0.58	肥前系染付（393）　瀬戸・美濃系染付　京・信楽系陶器（394）　瀬戸・美濃系陶器（395）　土師質土器　瓦　銅製品（581）	江戸時代　溜桶状
493	37･39	18･20	Ⅴ	第１	土坑	楕円形	1.25	1.00	0.66	肥前系染付（397）　瀬戸・美濃系染付（396）　京・信楽系陶器（398・399）　瓦質土器　土師質土器	江戸時代　溜桶状
501	39	30	Ⅴ	第１	土坑	隅丸方形	1.04	0.68	0.25	肥前系染付（400）　瀬戸・美濃系白磁？（401）　堺・明石系陶器（402・403）　土師質土器（404）　瓦質土器（405）	江戸時代
502	39	30	Ⅴ	第１	土坑	隅丸方形	1.10	0.85	0.35	肥前系染付？（406）　瀬戸・美濃系陶器（407）　肥前系陶器（408）　土師質土器　瓦	江戸時代
505	40		Ⅴ	第１	土坑	隅丸方形?	0.65	0.60	0.27	肥前系染付　瀬戸・美濃系染付（409）　瀬戸・美濃系陶器	江戸時代　506より古
506	40	30	Ⅴ	第１	土坑	円形	0.65	0.64	0.36	肥前系染付？（410～412）　施釉陶器（413）　堺・明石系陶器（414）　土師質土器（415）	江戸時代　505より新
510	41		Ⅴ	第１	土坑	楕円形	0.80	0.70	0.47	肥前系染付（437）・白磁（438）　瀬戸・美濃系陶器（439）　京・信楽系陶器（440）	江戸時代
512	40		Ⅴ	第１	土坑	不整楕円形	1.60	0.76	0.32	肥前系染付（417）　瀬戸・美濃系染付（416）　京・信楽系陶器（418）　砥石（419）　瓦質土器	江戸時代
513	40・41	30・31	Ⅴ	第１	土坑	楕円形？	1.00	0.53以上	0.46	肥前系染付（420・422？・424）　瀬戸・美濃系染付（421）　産地不明染付（423）　産地不明陶胎染付（425）　京・信楽系陶器（426～432）　丹波焼（433）　土師質土器（434～436）	江戸時代　北側調査区域外
514	41		Ⅴ	第１	土坑	楕円形	0.75	0.66	0.30	肥前系染付　瀬戸・美濃系陶器（441）　土師質土器	江戸時代
515	38･41･42	18･20･31･32	Ⅴ	第１	溝	Ｌ字状	21.00以上	3.50	0.70	肥前系染付（442～451）・白磁（452）・青磁（453）　肥前系陶器（457）　京・信楽系陶器（454・455・458・460～462）　瀬戸・美濃系陶器（456・459）　堺・明石系陶器（463～465）　備前焼（466）　土師質土器（467～470）　瓦（471）	江戸時代
515－2	42	32	Ⅴ	第１	土坑	円形	1.12	1.10	0.20	肥前系染付（472～475）　京・信楽系陶器（476）　土師質土器（477・478）　海亀甲羅	江戸時代　遺構515の底
516	42		Ⅴ	第１	土坑	楕円形	1.05以上	0.80	0.55	肥前系染付（479）　瀬戸・美濃系染付（450）　産地不明染付（481）　堺・明石系陶器（482）　施釉陶器	江戸時代　北側調査区域外
529	43	32	Ⅴ	第１	土坑？		3.85	2.00以上	0.42	肥前系染付（483・485？）・白磁（486）　陶胎染付（484）　京・信楽系陶器（487・488）　瀬戸・美濃系陶器（489）　丹波焼（490）　土師質土器（491 492）	江戸時代　遺構530の上部　同一遺構の可能性もあり
530	43	33	Ⅴ	第１	土坑	隅丸方形	3.0	2.00以上	0.44	肥前系染付（493～496）・白磁（498）　南紀男山焼染付（497）　肥前系陶器（499）　京・信楽焼陶器（500・501）　産地不明陶器（502）	江戸時代　遺構529の下
532	43･44	33	Ⅴ	第１	土坑	円形？	1.30以上	1.30以上	0.84	肥前系染付（503～507）　肥前系陶器（509）　京・信楽系陶器（508・510・511）　堺・明石系陶器（512・513）　土師質土器（514～516）　砥石（517）　硯（518～521）　瓦（522）	江戸時代
533	44		Ⅴ	第１	土坑	楕円形	0.98	0.75	0.30	肥前系染付　土師質土器（523）	江戸時代
537	44		Ⅴ	第１	ピット	円形	0.28	0.28	0.09	肥前系陶器（524）	江戸時代
560	38･46	19	Ⅴ	第３	溝	直線状	6.10以上	0.60～0.70	0.20～0.30	土師器（546）　青磁　山茶碗	中世　遺構569・602と繋がる？
569	38	19･20	Ⅴ	第３	溝	直線状	6.30以上	0.60～0.80	0.20～0.35	土師器	中世　遺構560・602と繋がる？
570	44		Ⅴ	第２	土坑	隅丸方形?	0.96以上	0.96以上	0.26	肥前系白磁　肥前系陶器　土師質土器（525）	江戸時代　東・南が削平
572	37	20	Ⅴ	第２	埋桶	楕円形	1.15	1.00	0.57	肥前系染付　施釉陶器	江戸時代　桶直径約80cm
579	37･44	33	Ⅴ	第２	埋桶	楕円形	1.12	1.00	0.60	肥前系染付（526・527）・白磁　施釉陶器　堺・明石系陶器　土師質土器	江戸時代　桶は抜かれている？
580	37･44	20･33･34	Ⅴ	第２	埋桶	楕円形	1.15	0.98	0.57	肥前系染付（528～533）　京・信楽系陶器（534）　堺・明石系陶器（535）　土師質土器（536～540）	江戸時代　桶直径約70cm
585	46		Ⅴ	第３	土坑	隅丸方形?	0.62	0.20	0.15	土師器（546～648）	中世
587	46		Ⅴ	第３	土坑	円形	0.67	0.66	0.11	瓦器（549）	中世
600	38･46･48	19･20	Ⅴ	第３	溝	直線状	15.00	3.00	0.80	土師器（550）　瓦器　常滑焼　備前焼　瓦　鉄釘	中世
601	45		Ⅴ	第２	土坑	楕円形	0.90	0.82	0.35	肥前系染付（543）　瀬戸・美濃系染付（541・542）　瀬戸・美濃系陶器（544）　土師質土器	江戸時代
602	38･46	19･20	Ⅴ	第３	溝	直線状	5.60以上	1.40	0.52	土師器　青白磁	中世
351	47		Ⅵ	第１	土坑？		6.00以上	5.00以上	0.65	肥前系染付・色絵（586）・白磁（597）　瀬戸・美濃系陶器（587）	江戸時代　大型の落ち込み
352	47		Ⅵ	第１	礎石掘形	隅丸方形	0.45	0.35		肥前系染付（589）・白磁（590）　肥前系陶器（591）　京・信楽系陶器（592）　瀬戸・美濃系陶器（594）　土師質土器（593）	江戸時代
380	47		Ⅵ	第１	礎石掘形	隅丸方形?	0.65以上	0.25以上	0.35	瀬戸・美濃系染付（595）	江戸時代

出土遺物観察表（１）

番号	図	図版	地区	遺構等	種 類	産地	器種	口径	高さ	底径 つまみ径	残存率	備　　考
1	7		Ⅰ区	10	染付	肥前系	鉢蓋	(7.9)	―	―	口縁部15%	体部外面施文
2	7		Ⅰ区	19	瓦		軒丸瓦	瓦当13.4	―	―	―	周縁狭くやや高い　左巻き三つ巴　　頭尖り尾半周以上　珠文小さく14個？
3	7		Ⅰ区	31	染付	肥前系	小杯	(6.7)	2.6	(2.4)	40%	体部外面笹文　二次焼成
4	7		Ⅰ区	44	土師質土器		焙烙	(24.1)	5.2	(25.0)	45%	丸底　口縁部は内傾　底・体部の境は鈍い
5	7	23	Ⅰ区	44	土師質土器		焜炉	―	―	(28.8)	50%	円筒状　高台は両側面の端部が抉れ、前面には強い刺突による装飾
6	7	23	Ⅰ区	44	土師質土器		焜炉	―	―	24.3	40%	体部は丸みを帯びる　高台に円穴と凹線　高台端部の一部に抉り　焚口は弧状
7	7		Ⅰ区	47	施釉陶器	瀬戸・美濃系	鉢	―	―	5.9	底部100%	外面露胎　内面長石釉　見込み部に目跡
8	7		Ⅰ区	55	白磁	肥前系	杯(端反)	(6.6)	4.1	(3.0)	40%	
9	7		Ⅰ区	55	白磁	肥前系	杯(端反)	(6.5)	3.7	(3.2)	30%	
10	7		Ⅰ区	55	施釉陶器	瀬戸・美濃系	筒形香炉	(14.6)	10.0	(9.4)	30%	内面・底部外面露胎　灰釉に長石釉掛け
11	7	23	Ⅰ区	55	施釉陶器	瀬戸・美濃系	大皿	23.3	4.5	12.4	95%	高台付近部分的に露胎　内面に鉄絵　見込み部の３方向に目跡
12	7	23	Ⅰ区	57	染付	肥前系	皿	(12.9)	3.1	(8.7)	40%	蛇ノ目凹形高台　体部外面唐草・内面牡丹唐草　見込み部三方割銀杏
13	7		Ⅰ区	57	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(26.1)	―	―	口縁部8%	Ⅱ型式（＊）　擂目単位７本/2.3cm
14	8		Ⅰ区	60	染付	肥前系	丸碗	―	―	(4.2)	底部40%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ
15	8		Ⅰ区	60	土師質土器		焙烙	(29.0)	―	(27.4)	口縁部6%	丸底　底・体部の境は鈍い　体部・口縁部は内湾気味に直立
16	8		Ⅰ区	60	瓦		平瓦	長さ25.9	幅23.0	厚1.6	98%	
17	8		Ⅰ区	60	瓦		平瓦	長さ27.4	幅24.0	厚1.6	99%	
18	8		Ⅰ区	61	施釉陶器	瀬戸・美濃系	腰錆碗	(10.0)	―	―	口縁部15%	内面灰釉　外面凹線を境に上は灰釉・下は鉄釉
19	8		Ⅰ区	61	施釉陶器	丹波焼	壺	(13.4)	―	―	口縁部30%	口縁部は肥厚し受口状となる。褐釉　内面は露胎
20	8		Ⅰ区	61	瓦		鳥衾	瓦当14.9	―	―	60%	周縁幅広で低い　左巻きの三つ巴　尾は短い　珠文は大きく12個　丸瓦部凹面ゴザ状圧痕のち内叩き　上面に拒鵲の穴３箇所
21	8	23	Ⅰ区	113	染付	肥前系	端反碗	10.2	5.7	3.7	80%	見込み部と体部外面に施文　線文様が基本
22	8	23	Ⅰ区	113	染付	瀬戸・美濃系	端反碗	8.8	4.75	3.7	90%	見込み部と体部外面に草花文？
23	8	23	Ⅰ区	113	染付	瀬戸・美濃系	端反碗	8.6	4.2	2.9	90%	口縁端部錆釉　見込み部と体部外面施文　篆書文
24	8	23	Ⅰ区	113	染付	瀬戸・美濃系	端反碗	8.4	4.0	3.0	95%	口縁端部錆釉　見込み部と体部外面に施文　外面は「賈」と植物文様　高台内に朱書　焼継ぎあり
25	8		Ⅰ区	113	白磁	肥前系	杯	7.3	2.6	3.1	70%	
26	8	24	Ⅰ区	113	染付	肥前系	蕎麦猪口	(10.2)	8.1	(7.8)	40%	蛇ノ目凹形高台　体部外面草花の菱繋　口縁部内面四方襷　見込み部松竹梅
27	8	24	Ⅰ区	113	染付	瀬戸・美濃系	皿	9.5	2.0	5.4	70%	見込み部に鶴・波濤・銘等をスタンプしたのち呉須をかける
28	8	24	Ⅰ区	113	染付	肥前系？	鉢	(17.4)	6.1	(9.2)	50%	口縁部折り曲げて玉縁状　体部外面は（）で４分割して宝文　口縁部内面雷文　見込み部咬龍文　南紀男山焼？
29	8		Ⅰ区	113	施釉陶器	京・信楽系	行平鍋	(19.6)	11.1	10.4	30%	口縁部受口状で露胎　体部上半トビガンナ・鉄釉　内面灰釉
30	8		Ⅰ区	113	施釉陶器	京・信楽系	合子蓋	6.7	1.2	―	100%	上面灰釉　下面露胎
31	8		Ⅰ区	113	土師質土器		灯明皿	(8.2)	1.2	―	30%	底部ヘラ切りのちナデ
32	8		Ⅰ区	117	染付	肥前系	小碗	(7.2)	3.5	(2.6)	40%	体部外面に紅葉文
33	8		Ⅰ区	117	施釉陶器	京・信楽系	土瓶	(7.7)	―	―	口縁部20%	口縁部短く直立　　口縁端部露胎　体部外面上位は連続沈線
34	8		Ⅰ区	117	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(39.2)	―	―	口縁部10%	Ⅱ型式（＊）　体部外面回転ヘラケズリ　擂目の単位９本/3.1cm
35	8		Ⅰ区	119	青磁染付	肥前系	丸碗	―	―	(4.6)	底部40%	外面のみ青磁釉　貫入あり　内面見込み部二重圏線
36	8		Ⅰ区	119	施釉陶器	京・信楽系	土瓶蓋	―	―	―	―	落とし蓋　上面は灰釉　下面は露胎
37	8		Ⅰ区	119	施釉陶器	京・信楽系	鉢	―	―	6.6	底部30%	高台付近露胎　外面灰釉　内面灰釉と黄釉を掛け分け葉文を施す　目跡あり
38	8		Ⅰ区	119	土師質土器		焙烙	―	―	―	―	丸底　体部・口縁部短く外傾
39	8		Ⅰ区	126	染付	瀬戸・美濃系	小皿	(6.1)	1.9	3.1	30%	内外面松等の文様　高台内に銘
40	8		Ⅰ区	126	施釉陶器	肥前系	鉢	―	―	7.7	底部100%	高台付近露胎　高台に白土を塗る　外面鉄釉　内面は鉄釉に白土を掛けてハケ目文様（渦巻き・波状文）のち透明釉　見込み部は蛇ノ目釉剥ぎ
41	8		Ⅰ区	126	無釉陶器	常滑焼	捏鉢	―	―	(19.0)	底部20%	底部端に高台
42	8		Ⅰ区	126	土師質土器		焙烙	(25.5)	―	(25.8)	口縁部50%	丸底　底・体部の境は比較的明瞭　体部・口縁部は厚く、短く内傾
43	9		Ⅰ区	126	瓦		軒丸瓦	瓦当14.4	―	―	60%	周縁幅広で低い　左巻きの三つ巴　尾は短い　珠文は大きく12個　丸瓦部凹面ゴザ状圧痕のち内叩き
44	9		Ⅰ区	143	染付	肥前系	筒茶碗	―	―	(4.2)	底部80%	体部外面菊花？氷裂文　高台内角「福」　見込み部二重圏線内に手描き五弁花文
45	9	24	Ⅰ区	127	施釉陶器	瀬戸・美濃系	練鉢	(22.0)	10.5	(14.0)	70%	灰釉　外面底部付近露胎　見込み部に５cm前後の目あと５箇所
46	9		Ⅰ区	127	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(28.2)	―	―	口縁部20%	Ⅰ型式（＊）　体部外面下反回転ヘラケズリ　擂目の単位８本/2.4cm
47	9		Ⅰ区	127	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(20.7)	7.6	(9.4)	25%	ⅠまたはⅡ型式（＊）　体部外面は部分的に回転ヘラケズリ　擂目の単位は９本/1.8cm
48	9	24	Ⅰ区	127	石製品		粉挽臼	(27.4)	7.6	―	50%	上臼　挽き面の中心に芯棒受けの鉄を埋め込む　挽き木挿入孔あり　挽き面は８分割される
49	9	24	Ⅰ区	129	染付	肥前系	丸碗	(10.0)	4.7	3.9	85%	体部外面丸内にコンニャク判の蔦文
50	9		Ⅰ区	129	染付	肥前系	小丸碗	(9.1)	5.3	(3.7)	20%	体部外面半裁菊花文
51	9		Ⅰ区	129	染付	肥前系	小丸碗	(8.6)	5.0	(3.5)	30%	体部外面笹・鳥等の文様　見込み部一重圏線内に文様
52	9		Ⅰ区	129	施釉陶器	京・信楽系	土瓶	(6.7)	6.7	(4.5)	40%	体部上半連続して沈線　底部付近露胎　底部端に突起

出土遺物観察表（２）

番号	図	図版	地区	遺構等	種 類	産地	器種	口径	高さ	底径 つまみ径	残存率	備　　考
53	9	24	Ⅰ区	129	施釉陶器	京・信楽系	鍋	(21.1)	11.6	(8.3)	80%	鉄釉両手鍋　把手はアーチ状　体部外面下半は露胎 底部端の３方向に突起
54	9		Ⅰ区	129	施釉陶器	京・信楽系	鍋	(13.5)	―	―	40%	鉄釉両手鍋　把手はアーチ状　体部外面下半は露胎
55	9		Ⅰ区	129	施釉陶器	瀬戸・美濃系	水注	(6.7)	―	―	口縁部50%	灰釉　口縁部短く直立　肩部に櫛状工具による直線文
56	9		Ⅰ区	129	土師質土器		灯明皿	6.2	1.1	3.0	98%	底部回転糸切　内面透明釉
57	9		Ⅰ区	129	瓦		軒丸瓦	瓦当14.6	―	―	瓦当60%	周縁幅広で低い　左巻きの三つ巴　尾は短い　珠文は大きく12個か
58	9		Ⅰ区	129	瓦		軒丸瓦	瓦当14.9	―	―	瓦当60%	周縁幅広で低い　左巻きの三つ巴　尾は短い　珠文はなし
59	9		Ⅰ区	129	瓦		軒平瓦	瓦当幅25cm	瓦当高さ3.6	―	瓦当95%	均整唐草文　両脇の幅広い
60	11		Ⅰ区	9	瓦器		椀	(14.2)	―	―	口縁部15%	内面ミガキ　13世紀
61	11		Ⅰ区	12	瓦器		椀	(13.5)	―	―	口縁部15%	内面ミガキ　13世紀
62	11		Ⅰ区	62	土師器		皿	(10.0)	3.3	(6.2)	30%	外面ヨコナデによる段が顕著
63	11		Ⅰ区	62	土師器		小皿	(8.6)	1.8	―	15%	底部は厚く、薄い体部・口縁部が短く外傾
64	11		Ⅰ区	62	土師器		釜	―	―	―	―	口縁部強く外反　端部を上方へ摘み上げ　端部外面にくぼむ
65	11		Ⅰ区	62	青磁	龍泉窯系	皿	―	―	―	―	内面口縁部下に圏線　13世紀
66	11		Ⅰ区	62	白磁	閩南系	碗	―	―	―	―	口縁端部は玉縁状　Ⅳ類　13世紀第１四半期
67	11		Ⅰ区	63	瓦器		椀	(15.5)	―	―	口縁部15%	内・外面ミガキ　12世紀
68	11		Ⅰ区	63	施釉陶器	瀬戸・美濃系	天目碗	(11.2)	―	―	口縁部10%	鉄釉　高台付近は露胎　16世紀前半
69	11		Ⅰ区	63	青磁	同安窯系	碗	―	―	―	―	外面櫛目文　内面口縁部下に一条圏線　12世紀第２四半期
70	11		Ⅰ区	63	白磁	閩南系	碗	―	―	(5.6)	底部10%	高台は高い　高台付近露胎　Ⅴ類　13世紀第１四半期
71	11	24	Ⅰ区	74	瓦器		椀	(14.8)	(4.35)	(5.2)	40%	皿状の器形　ミガキ不明　13世紀
72	11		Ⅰ区	76	瓦器		椀	(14.7)	4.2	(5.2)	30%	体部内面細く密なミガキ　見込み部分割ループ状ミガキ　12世紀
73	11		Ⅰ区	134	土師器		甕	(20.9)	―	―	口縁部12%	口縁部は強く屈曲して外傾
74	11		Ⅰ区	75	弥生土器		壺	―	―	―		肩部に直線文と波状文　弥生時代中期
75	11	25	Ⅰ区	90	弥生土器		水差形土器	(14.0)	29.9	(4.7)	60%	口縁部に２個一対の紐穴　肩部に横位の把手　体部中位やや上に刻み目　体部下半焼成後穿孔　弥生時代中期
76	11	25	Ⅰ区	91	弥生土器		細頸壺	7.1	24.7	5.0	70%	黒斑あり　底部側面穿孔　結晶片岩含む　弥生時代中期
77	12		Ⅰ区	撹乱	染付	肥前系	碗蓋	10.2	2.4	4.2	60%	体部外面牡丹唐草文　内面口縁部四方襷文・天井部二重圏線内に唐草文？
78	12		Ⅰ区	撹乱	青磁染付	肥前系	(朝顔形) 碗蓋	8.9	3.9	4.1	95%	内面口縁部四方襷文　見込み部二重圏線内に形骸化したコンニャク判の五弁花文
79	12		Ⅰ区	機械掘削時	染付	肥前系	広東碗	―	―	(6.1)	底部50%	見込み部と体部外面に染付　高台内に朱書「海蔵大・」
80	12		Ⅰ区	機械掘削時	染付	肥前系	丸碗	(9.8)	5.0	3.5	60%	体部外面「井」と蕪を３個ずつ　蕪はコンニャク判 見込み部は二重圏線内にコンニャク判文様
81	12		Ⅰ区	撹乱	染付	肥前系	御神酒徳利	―	―	(4.9)	底体部90%	梅瓶形　体部外面蛸唐草
82	12		Ⅰ区	撹乱	白磁	肥前系	紅皿	4.9	1.4	1.4	100%	貝殻状　型押し成型　外面体部下半以下露胎
83	12		Ⅰ区	撹乱	施釉陶器	肥前京焼風	皿	―	―	3.7	底部100%	高台付近露胎　見込み部に山水文　高台内に刻印「小松吉」
84	12		Ⅰ区	撹乱	施釉陶器	瀬戸・美濃系	溲瓶	(6.0)	14.6	12.1	95%	天井部に宝珠様を呈する中空の把手　鉄釉　内面・外底部は露胎　軟質
85	12		Ⅰ区	撹乱	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(29.4)	10.7	―	口縁部10%	ⅠまたはⅡ型式（＊）　擂目単位８本/3.5cm
86	12		Ⅰ区	撹乱	施釉陶器	備前焼	甕	59.4	―	―	10%	三石入？　玉縁状の口縁外面に凹線３条　自然釉が厚く掛かる
87	12		Ⅰ区	撹乱	土製品		人形	―	―	―	80%	衣冠装束　両型造りで貼り合せて成形　底部に穿孔
88	12		Ⅰ区	撹乱	土師器		小皿	(7.0)	1.3	(4.4)	25%	平底　底部回転ヘラ切り
89	12		Ⅰ区	排土中	山茶碗		碗	―	―	(7.2)	底部25%	内面部分的に自然釉　見込み部平滑に擦る
90	12		Ⅰ区	第３層	山茶碗		碗	―	―	(8.6)	底部20%	高台内回転糸切り
91	12		Ⅰ区	撹乱	山茶碗		碗	―	―	(8.0)	底部40%	
92	12		Ⅰ区	撹乱	山茶碗		皿	―	―	(4.6)	底部30%	底部回転ヘラ切　内面全体自然釉　重ね焼きの天
93	12		Ⅰ区	機械掘削時	青磁	龍泉窯系	碗	―	―	―	口縁部5%	鎬蓮弁文　釉厚い　14世紀第１四半期
94	12		Ⅰ区	６０	青磁	龍泉窯系	皿	―	―	3.2	底部100%	平底　底部付近露胎　13世紀
95	12		Ⅰ区	機械掘削時	青磁	龍泉窯系	皿	―	―	(3.2)	底部70%	平底　外底部露胎　見込み部片切彫文様　13世紀
96	12		Ⅰ区	撹乱	白磁	閩南系	碗	―	―	(7.0)	底部40%	高台付近露胎　Ⅴ類　13世紀第１四半期
97	12		Ⅰ区	第３層	石製品		砥石	―	―	―	―	両面使用　破損
98	12		Ⅰ区	地山直上	弥生土器		直口壺	(15.8)	―	―	口縁部25%	結晶片岩含む　搬入品　弥生時代中期
99	12		Ⅰ区	128	弥生土器		壺	―	―	―	頸部20%	７本単位の櫛描直線文２条　弥生時代中期
100	12		Ⅰ区	18	弥生土器		水差形土器	―	―	―	把手50%	アーチ状横位の把手　弥生時代中期
101	12		Ⅰ区	142	弥生土器		壺	―	―	(5.8)	底部30%	体部下半縦方向のヘラミガキ　弥生時代中期
102	12		Ⅰ区	撹乱	弥生土器		壺	―	―	(7.4)	底部25%	底部外面ハケのちナデ　弥生時代中期
103	12	25	Ⅰ区	撹乱	弥生土器		高杯	(22.0)	―	―	口縁部12%	杯部の破片　体部と口縁部の境に凹線文２条　弥生時代中期
104	12	25	Ⅰ区	機械掘削時	弥生土器		高杯	―	―	―	脚柱部100%	円筒状中空　上下にヘラ描直線文　弥生時代中期
105	12		Ⅰ区	10	弥生土器		高杯	―	―	―	脚柱部30%	円筒状　中空であるが上下から粘土を詰める　３段のヘラ描直線文帯　弥生時代中期
106	12		Ⅰ区	撹乱	弥生土器		高杯	―	―	13.0	裾部15%	「ハ」の字に広がる　弥生時代中期
107	13		Ⅰ区	16	鉄製品		釘	4.4以上	0.5	0.4	90%	断面角　腐食が著しい
108	13		Ⅰ区	20	鉄製品		釘	3.7以上	0.5	0.3	90%	断面角　腐食が著しい
109	13		Ⅰ区	82	鉄製品		釘	約6.0	0.6	0.35	100%	屈曲する　断面角　木質残る
110	13		Ⅰ区	16	銅製品		筆軸	5.9以上	0.55	―	100%	円筒の振り出し式　筆先わずかに遺存　外面に線刻文様
111	13		Ⅰ区	20	銅製品		不明	2.1	1.9	0.25	100%	円盤状　周縁を折り返す　中央より偏った位置に円穴
112	14		Ⅰ区	113	骨製品		針？	6.1	3.5	2.5	100%	基部にらせん状の溝
113	14		Ⅰ区	19	銭貨		寛永通寶	2.55	2.47	0.145	100%	古寛永　1636～1659年

出土遺物観察表（３）

番号	図	図版	地区	遺構等	種 類	産地	器種	口径	高さ	底径 つまみ径	残存率	備　　考
114	14		Ⅰ区	撹乱	銭貨		寛永通寶	2.51	2.53	0.14	100%	背「文」　1668～1683年
115	14		Ⅰ区	撹乱	銭貨		寛永通寶	2.53	2.49	0.19	100%	
116	14		Ⅰ区	撹乱	銭貨		寛永通寶	2.48	2.47	0.12	100%	
117	14		Ⅰ区	第３層	銭貨		永楽通寶	2.5	2.52	0.16	100%	初鋳1408年　鋳上がり悪く穴があく
118	18		Ⅱ区	630	青磁染付	肥前系	朝顔形碗	(10.9)	―	―	口縁部20%	外面青磁釉　内面口縁部四方襷文
119	18		Ⅱ区	647	染付	肥前系	碗蓋	―	―	3.9	70%	体部外面山水文？　呉須の発色よく施文は丁寧
120	18		Ⅱ区	672	青磁染付	肥前系	鉢	(21.8)	7.6	(11.2)	30%	蛇ノ目凹形高台　内面体部は青磁釉　内面口縁部波濤文・見込みは線で区画して幾何学文様　外面体部唐草文　高台内角「福」？
121	18		Ⅱ区	672	施釉陶器	瀬戸・美濃系	腰錆碗	―	―	3.7	底部100%	内面灰釉　外面下反飴釉　畳付露胎
122	18		Ⅱ区	682	染付	肥前系	皿	12.4	4.1	4.3	50%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　内面二条圏線の上に二重線の斜格子文
123	18	25	Ⅱ区	682	施釉陶器	肥前系	皿	12.1	3.5	4.4	90%	内面銅緑釉で見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　外面灰釉で高台付近露胎
124	18		Ⅱ区	682	白磁	肥前系	小皿	6.4	1.4	3.6	90%	全釉
125	18		Ⅱ区	682	染付	肥前系	仏飯器	―	―	3.4	60%	外面底部露胎　碗部外面の染付文様不明
126	18		Ⅱ区	682	施釉陶器	丹波焼	徳利	―	―	7.8	60%	外面鉄釉　部分的に自然釉かかる
127	18		Ⅱ区	682	土師質土器		焙烙	(31.9)	7.3	(33.4)	60%	丸底　体部は底部から直角気味に折れ、やや内傾　焼成後に開けた２個一対の小孔が２方向対称にある　それらと直交する方向の口縁端部上面には焼成前の小孔が１個ずつ
128	18		Ⅱ区	682	石製品		硯	長10.9	幅5.1	高1.4	80%	陸部が溝状にくぼむ　砥石に転用？
129	18		Ⅱ区	670	瓦器		椀	(13.6)	5.5	(5.9)	25%	内面体部疎らなミガキ　13世紀
130	18	25	Ⅱ区	685	山茶碗		碗	―	―	7.6	底部100%	高台内回転ヘラ切り　畳付・見込み部擦って平滑にする　スス付着
131	18	25	Ⅱ区	702	山茶碗		碗	―	―	8.0	底部90%	高台内回転糸切り　畳付に籾殻痕が多数
132	18		Ⅱ区	709	石製品		石鍋	―	―	(22.6)	底部17%	平底　外面底体部ケズリ　外面スス付着
133	18		Ⅱ区	668	石製品		石鍋	―	―	―	―	端部は上方に面をもつ　体部に切断痕あり転用品か？
134	18	25	Ⅱ区	694	黒色土器		椀	(14.4)	―	―	25%	内面と外面口縁部黒色化　内面細く密なヘラミガキ　金雲母含む
135	18	25	Ⅱ区	694	土師器		皿	(12.9)	2.6	(6.4)	50%	平底　体部強いヨコナデ　多条の段
136	18	25	Ⅱ区	694	土師器		甕	(14.4)	―	―	17%	口縁端部を外方へ摘み出す　結晶片岩含む
137	18	25	Ⅱ区	654	弥生土器		高杯	22.6	25.0	12.7	95%	脚部に円穴７箇所　中実の脚柱部に３段のヘラ描き直線文（単位６・７本）　口縁垂下部上位に２条の凹線文
138	18	25	Ⅱ区	654	弥生土器		水差形土器	9.6	―	―	ほぼ100%	把手はアーチ状で肩部に横位で付す　頸部にヘラ描き直線文　口縁に１条と４条の凹線文　底部は焼成後に打ち欠く
139	18		Ⅱ区	撹乱	無釉陶器	備前焼	壺	(15.4)	―	―	口縁部25%	外面口縁端部下に1条の沈線　肩部に３条単位の櫛波状文　16世紀
140	18		Ⅱ区	撹乱	施釉陶器	瀬戸・美濃系	練鉢	(23.3)	13.3	15.8	60%	灰釉　高台付近は露胎　見込み部に５・６cmの目跡が４箇所
141	19		Ⅱ区	682	石製品		碁石	2.16	2.14	0.48	100%	黒
142	19		Ⅱ区	撹乱	銭貨		寛永通寶	2.835	2.81	0.15	100%	背11波
143	19		Ⅱ区	表採	銭貨		寛永通寶	2.48	2.515	0.16	100%	
144	19		Ⅱ区	694	銭貨		口平元寶	2.46	2.48	0.14	100%	篆書　背面型ずれする
145	23		Ⅲ区	724	土師質土器		灯明皿	5.8	0.9	2.8	100%	内面透明釉　外底部は回転糸切り　スス付着
146	23		Ⅲ区	724	土師質土器		灯明皿	7.2	1.3	3.9	75%	内面透明釉　外底部は回転糸切り　スス付着
147	23	26	Ⅲ区	731	染付	肥前系	丸碗	9.6	5.5	3.8	55%	体部外面菊花文　高台内渦「福」
148	23		Ⅲ区	731	染付	肥前系	丸碗	―	―	4.3	底部100%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　外面草花文
149	23	26	Ⅲ区	731	施釉陶器	瀬戸・美濃系	筒形香炉	(10.6)	6.3	(10.8)	30%	３方向に粘土を付して脚　灰釉　外面底部と内面は露胎
150	23		Ⅲ区	731	施釉陶器	肥前系	碗	―	―	3.8	底部80%	畳付は露胎　白土でハケ目文様
151	23		Ⅲ区	731	土師質土器		焙烙	(30.0)	―	(30.6)	口縁部30%	丸底　底・体部の境はわずかに角をなし、体部は内傾
152	23	26	Ⅲ区	732	染付	肥前系	碗	11.3	5.6	4.5	85%	高台「ハ」の字　外面二種の変形字を全面　内面口縁部四方襷文　見込み部二重圏線内に変形字
153	23		Ⅲ区	732	染付	肥前系	鉢	―	―	9.0	底部100%	蛇ノ目凹形高台　外面文様不明　見込み部二重圏線内に松竹梅文
154	23	26	Ⅲ区	732	染付	肥前系	御神酒徳利	(1.2)	8.5	2.8	95%	体部外面に笹文と梅花文
155	23		Ⅲ区	732	施釉陶器	京・信楽系	端反碗	(8.8)	5.1	3.2	40%	高台付近露胎　高台内墨書「ウアヨ　モヤヨ」
156	23		Ⅲ区	732	施釉陶器	京・信楽系	火入	―	―	(7.2)	底部20%	外面底部・内面露胎　外底部墨書
157	23		Ⅲ区	732	施釉陶器		蓋	(8.4)	1.8	3.4	50%	外面鉄釉　底面回転糸切り調整
158	23		Ⅲ区	732	施釉陶器		秉燭	―	―	(4.2)	50%	鉄釉　平底で中央部に円穴　灯芯台は欠損
159	23		Ⅲ区	732	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(31.7)	―	―	口縁部12%	Ⅰ～Ⅱ型式（＊）　体部上位の一部回転ヘラケズリ　擂目の単位は12本/3.9cm
160	23		Ⅲ区	732	土師質土器		灯明皿	8.7～8.9	1.55	3.4	100%	内面透明釉　外底部回転糸切り調整
161	23		Ⅲ区	732	土師質土器		焙烙	(33.3)	―	(34.2)	60%	丸底　底・体部の境は角をなし、体部は内傾　口縁部の２方向？を外側に拡張し、上方から刺突
162	23	26	Ⅲ区	733	染付	肥前系	丸碗	(10.0)	5.4	4.4	40%	体部外面藤文
163	23		Ⅲ区	733	染付	肥前系	丸碗	9.9	52	4.2	60%	体部外面草花文
164	23		Ⅲ区	733	施釉陶器	丹波焼	小壺	―	―	8.0	底部100%	褐釉　畳付は露胎で砂付着
165	23		Ⅲ区	733	無釉陶器	備前焼	擂鉢	(32.0)	―	―	口縁部15%	擂目は10本/2.3cm　口縁部下に重ね焼き痕　使用痕顕著　17世紀後半
166	23		Ⅲ区	740	施釉陶器	京・信楽系	土瓶	(11.9)	―	―	20%	外面体部中位から口縁部にかけて施釉　体部中位より上トビガンナ
167	23		Ⅲ区	740	瓦		丸瓦	-	幅13.9	高6.5	50%	釘留め用の円穴を１個穿つ
168	23		Ⅲ区	755	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(26.8)	―	―	20%	Ⅱ型式（＊）　体部外面部分的に回転ヘラケズリ　櫛の単位は12本/3.１cm
169	23		Ⅲ区	755	瓦		軒丸瓦	瓦当径 14.8	―	―	50%	周縁幅広で低い　左巻きの三つ巴は頭が大きく尾が短い　珠文は大きく12個　瓦当面キラコ

出土遺物観察表（４）

番号	図	図版	地区	遺構等	種 類	産地	器種	口径	高さ	底径 つまみ径	残存率	備　　考
170	23		Ⅲ区	755	瓦		丸瓦	長24.2	幅13.6	高6.4	80%	凸面ヘラケズリ　凹面タタキ
171	24		Ⅲ区	761	染付	肥前系	小碗	―	―	3.1	底部100%	体部外面に施文
172	24		Ⅲ区	762	染付	肥前系	皿	(12.9)	2.7	(7.2)	30%	高台内に冷め割れ　内面体部と見込み部に施文
173	24		Ⅲ区	596	無釉陶器	備前焼	擂鉢	(36.2)	―	―	口縁部10%	口縁部を上方へ拡張　17世紀前半
174	24		Ⅲ区	771	施釉陶器	肥前系	碗	―	―	(5.8)	底部50%	灰釉　畳付は露胎　細かい貫入
175	24		Ⅲ区	771	施釉陶器	瀬戸・美濃系	火入？	(13.7)	9.8	8.7	30%	筒形　鉄釉　外面底部付近と内面体部・底部は露胎
176	24	26	Ⅲ区	844	染付	肥前系	広東碗	10.6	6.3	5.7	98%	体部外面草花文　見込み部一重圏線内に文様
177	24		Ⅲ区	844	土師質土器		焙烙	(33.9)	―	―	30%	丸底　底・体部の境は角　体部は内傾　口縁部の２方向？を外側に拡張
178	24	26	Ⅲ区	847	染付	肥前系	端反碗	10.5	5.6	4.4	80%	体部外面太線・二重の格子・竹文　口縁部内面は太線見込み部一重圏線内に七宝様の文様
179	24		Ⅲ区	851	染付	肥前系	端反碗	(9.9)	6.1	(4.2)	40%	体部外面鳥・松の文様　内面口縁部櫛歯文　見込み部は一重圏線内に松竹梅？　焼き継ぎ痕３箇所　高台内に朱書
180	24		Ⅲ区	851	施釉陶器	京・信楽系	灯明受皿	10.7	1.6	4.5	70%	平底　内面施釉　受部は１箇所に抉り
181	24		Ⅲ区	851	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(35.9)	14.5	(13.8)	70%	Ⅱ型式（＊）　擂目の単位12本/3.8cm
182	24	26	Ⅲ区	851	瓦質土器		焜炉	―	―	(15.5)	底部70%	高台の４方向に貫通しない円形の刺突　外面ヘラミガキで光沢をもつ
183	24	26	Ⅲ区	858	染付	肥前系	小丸碗	(8.8)	5.5	(3.7)	60%	体部外面竹文　見込み部二重圏線内に文字？
184	24		Ⅲ区	858	青磁染付	肥前系	朝顔形碗	(11.01)	6.8	(4.4)	40%	外面青磁釉　内面口縁部四方襷文　見込み部二重圏線内に五弁花文
185	24		Ⅲ区	858	染付	肥前系	紅猪口	(6.5)	3.1	2.5	70%	体部外面に笹文
186	24		Ⅲ区	858	白磁	肥前系	徳利	3.3	―	―	口縁部100%	口縁部円筒状で長い　端部屈曲
187	24		Ⅲ区	858	施釉陶器	京・信楽系	灯明皿	(8.4)	1.7	(3.2)	25%	灰釉　外面底・体部は露胎　内面に櫛目（３本単位）
188	24		Ⅲ区	858	施釉陶器	瀬戸・美濃系	鉢	―	―	(8.4)	底部70%	灰釉　細かい貫入　高台付近露胎　見込み部に目跡（３方向？）
189	24		Ⅲ区	860	染付	肥前系	小丸碗	(8.3)	5.8	3.4	40%	体部外面稲束文　見込み部に文様
190	24		Ⅲ区	860	土師質土器		焙烙	(30.9)	6.1	(31.6)	20%	丸底　体部は屈曲して上方へ
191	24		Ⅲ区	861	染付	肥前系	碗	―	―	(3.9)	底部100%	釉は白濁している　外面斜線で区画して多数の珠文　見込み部は一重圏線内の渦巻き文を直線で８分割
192	24		Ⅲ区	861	染付	肥前系	ひだ皿	8.3	2.0	4.7	100%	施釉は雑で体部の一部も露胎となる　口縁部錆釉　内面山水文
193	24		Ⅲ区	861	施釉陶器	肥前系	灯明皿	5.4	1.4	2.5	100%	底部回転糸切り　内面施釉　口縁部スス付着
194	24		Ⅲ区	861	施釉陶器	京・信楽系	水注蓋	(4.1)	2.8	―	40%	灰釉　上面のみ施釉　細かい貫入
195	24		Ⅲ区	651	染付	肥前系	小皿	(5.7)	1.5	(2.8)	50%	体部外面に笹？文
196	24		Ⅲ区	891	施釉陶器	肥前系	火入	―	―	(6.5)	底部25%	筒形　灰釉　高台部と内面露胎　高台内冷め割れ
197	24		Ⅲ区	653	施釉陶器	肥前系	呉器手碗	―	―	(4.6)	40%	灰釉　畳付は露胎　細かい貫入
198	24	26	Ⅲ区	865	瓦器		椀	(14.6)	5.4	5.0	40%	内面ミガキ不明　12世紀
199	24		Ⅲ区	875	山茶碗		碗	―	―	(7.6)	底部50%	
200	24		Ⅲ区	922	土師器		皿	(15.0)	―	―	口縁部 10%	
201	25		Ⅲ区	表土撹乱	染付	肥前系	碗蓋	10.3	3.3	5.2	90%	体部外面花弁文+蝶文　内面天井部二重圏線内に文字？　つまみ内の偏った位置に葉文
202	25	27	Ⅲ区		染付	肥前系	筒茶碗	(6.5)	5.7	(3.5)	60%	体部外面半菊文と菱形文を交互に施す　口縁部内面四方襷文　見込み部コンニャク判五弁花文
203	25		Ⅲ区	撹乱	染付	瀬戸・美濃系？	端反碗	10.9	5..7	3.6	80%	体部外面花弁文　内面口縁部は圏線間にアトランダムな斜線文　見込み部一重圏線内に「寿」文　南紀男山焼？
204	25	27	Ⅲ区	撹乱	染付	肥前系	皿	(26.6)	4.3	(17.0)	40%	体部外面花唐草文　内面体部は分割して唐草文と花菱文を交互に描く　見込み部は松竹梅文　焼継ぎ痕あり
205	25	27	Ⅲ区	撹乱	施釉陶器	肥前系	碗	4.9	7.0	4.5	95%	灰釉　畳付は露胎　細かい貫入
206	25		Ⅲ区	表土撹乱	施釉陶器	京・信楽系	（端反）碗	―	―	3.0	底部100%	高台付近露胎　貫入　高台内に墨書「ウアヨ　モヤヨ」　155とセット？
207	25		Ⅲ区	表土撹乱	施釉陶器	瀬戸・美濃系	丸碗	(12.5)	7.4	5.7	30%	灰釉　細かい貫入　高台付近露胎　見込み部に目跡　高台内に墨書「志ミつや茂八」
208	25		Ⅲ区	表土撹乱	施釉陶器	京・信楽系	火入	―	―	(5.4)	底部55%	筒形　褐釉　底部・内面露胎　高台内墨書
209	25		Ⅲ区	表土撹乱	施釉陶器	肥前系	鉢	―	―	6.0	40%	外面灰釉で高台部は露胎　内面銅緑釉で見込み部は蛇ノ目釉剥ぎ
210	25		Ⅲ区	表土撹乱	施釉陶器	京・信楽系	灯明皿	8.2	1.5	3.5	100%	灰釉　外面露胎　底部回転糸切り　口縁部に芯の跡（スス）
211	25		Ⅲ区	表土撹乱	土製品		家形	―	―	―	―	切妻の屋根部分　萱葺きを表現？
212	25		Ⅲ区	撹乱	土師質土器		焙烙	(27.9)	―	―	口縁部5%	口縁部内傾　口縁部・体部の境付近に断面三角形の鍔
213	26			723	鉄製品		釘	約8.0	0.6	0.5	100%	断面角　木質残る
214	26		Ⅲ区	766	鉄製品		不明	6.2	6.2	0.6	100%	環状の円盤
215	26		Ⅲ区	766	銭貨		天保通寶	4.9	3.24	0.28	100%	初鋳1835年
216	26		Ⅲ区	766	銭貨		寛永通寶	2.41	2.41	0.11	100%	
217	26		Ⅲ区	766	銭貨		寛永通寶	2.385	2.405	0.12	100%	古寛永　1636～1659年
218	26		Ⅲ区	766	銭貨		寛永通寶	2.53	2.53	0.13	100%	背「文」　1668～1683年　方孔を丸にする
219	26		Ⅲ区	表土撹乱	銭貨		寛永通寶	2.47	2.45	0.14	100%	古寛永　1636～1659年
220	26		Ⅲ区	表土撹乱	銭貨		寛永通寶	2.495	2.48	0.18	100%	
221	26		Ⅲ区	表土撹乱	銭貨		寛永通寶	2.415	2.52	0.13	100%	
222	26		Ⅲ区	表土撹乱	銭貨		熙寧元寶	2.35	2.36	0.125	100%	初鋳1068年
223	30		Ⅳ区	155	土師質土器		焙烙	―	―	―	―	丸底　体部は屈曲してやや内傾する
224	30		Ⅳ区	161	土師質土器		皿	(7.3)	1.5	(2.1)	30%	底部回転糸切り　内面墨書・梵字
225	30		Ⅳ区	161	土師質土器		皿	(8.0)	1.5	3.3	40%	底部回転糸切り　内面墨書・梵字
226	30		Ⅳ区	166	土師質土器		皿	(7.5)	1.1	(4.7)	40%	底部回転糸切り　内面墨書・梵字・漢字「如律令」
227	30		Ⅳ区	166	土師質土器		皿	(7.3)	1.1	(3.9)	20%	底部回転糸切り　内面墨書・梵字・漢字
228	30		Ⅳ区	169	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(25.8)	―	―	口縁部15%	Ⅱ型式（＊）　体部外面回転ナデ+回転ヘラケズリ　擂目の単位11本/3.3cm
229	30		Ⅳ区	169	瓦		軒丸瓦	瓦当14.3	―	―	―	周縁幅広で低い　左巻きの三つ巴　尾は短い　珠文は大きく12個か

出土遺物観察表（５）

番号	図	図版	地区	遺構等	種 類	産地	器種	口径	高さ	底径 つまみ径	残存率	備　　考
230	30		Ⅳ区	170	染付	肥前系	碗	－	－	4.0	底部100%	体部外面蛟龍文　見込み部松竹梅　焼継ぎ痕　高台内朱書　393とセット
231	30		Ⅳ区	170	染付	肥前系	碗蓋	(9.1)	3.0	(3.4)	40%	体部外面蛟龍文　高台内変形字　内面口縁部雷文　内面天井部松竹梅　392とセット
232	30	27	Ⅳ区	170 100	染付	瀬戸・美濃系	端反碗	8.9	3.9	3.0	90%	体部外面草花文　内面口縁部は雷文？　見込み部は「寿」
233	30		Ⅳ区	229	染付	肥前系	碗	10.4	8.3	4.5	65%	外面体部帆船文・口縁部四方襷文
234	30		Ⅳ区	229	施釉陶器	京・信楽系	土瓶蓋	8.2	2.3	4.2	50%	上面鉄釉　つまみ欠損
235	30		Ⅳ区	229	土師質土器		焙烙	(25.0)	－	(26.2)	口縁部20%	丸底　体部は屈曲して内傾　口縁端部上方から小孔（配置不明）
236	30		Ⅳ区	231	施釉陶器	京・信楽系	端反碗	(9.4)	－	－	口縁部30%	灰釉　細かい貫入　高台付近露胎
237	30		Ⅳ区	231	施釉陶器	京・信楽系	徳利	－	－	－	－	外面鉄釉
238	30		Ⅳ区	231	土製品		卸皿	－	－	－	－	卸部は方形状で　左右に縁
239	30		Ⅳ区	236	施釉陶器	肥前系	皿	－	－	(5.6)	底部50%	内面銅緑釉　見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　外面灰釉　高台付近露胎　畳付・見込み部に目跡
240	30	27	Ⅳ区	238	染付	肥前系	片口鉢	22.8	8.8	10.0	80%	蛇ノ目凹形高台　内面体部青磁釉　外面唐草文　凹底部二重方形枠内渦「福」　内面口縁部波濤文・花文　見込み部二重圏線内に牡丹文と抽象的な花文を２個ずつ対象に描く
241	30		Ⅳ区	238	染付	肥前系	鉢	(15.6)	6.3	(9.7)	50%	蛇ノ目凹形高台　口縁部輪花　体部外面唐草文　外面は花唐草文　見込み部は圏線内に花唐草文
242	30	27	Ⅳ区	238	施釉陶器	京・信楽系	土瓶	10.0	14.1	10.2	50%	底部側面の３方に突起　注穴は４個　鉄釉　外面タンパン掛け流し　外底部露胎　肩部に凹線２条と波状文
243	30	27	Ⅳ区	238	施釉陶器	丹波焼	甕	(30.4)	29.0	16.4	70%	端部を内外に大きく拡張　鉄釉　外面にタンパンを掛け流し　外底部露胎　肩部に多条の凹線
244	31		Ⅳ区	246	染付	肥前系	皿	(13.4)	4.1	(7.5)	40%	体部は唐草文　体部内面は区画して草花文
245	31		Ⅳ区	255	染付	瀬戸・美濃系	四方皿	－	－	1辺3.7	底部100%	見込み部花文を型押しし、周囲に呉須を塗布する
246	31		Ⅳ区	262	施釉陶器	京・信楽系	合子蓋	3.7	1.5	－	95%	上面施釉　細かい貫入
247	31		Ⅳ区	264	染付	肥前系	小碗	8.0	4.5	4.0	60%	高台部露胎　体部外面草花文・梵字　見込み部一重圏線内に篆書
248	31		Ⅳ区	264	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	－	－	－	－	Ⅰ～Ⅱ型式（＊）　体部外面回転ヘラケズリ
249	31		Ⅳ区	264	土師質土器		焙烙	(28.0)	－	(25.8)	口縁部80%	丸底　底・体部の境はやや丸みを帯びる　体部はわずかに外傾
250	31		Ⅳ区	267	施釉陶器	丹波焼	甕	(27.4)	－	－	口縁部15%	口縁端部内外に拡張　外面鉄釉　口縁端部から内面は灰釉
251	31		Ⅳ区	268	染付	肥前系	杯	7.5	3.7	2.9	85%	体部外面笹文
252	31		Ⅳ区	275	染付	肥前系	碗蓋	10.0	3.0	4.0	45%	体部外面梅花文　内面天井部草花文
253	31		Ⅳ区	277	染付	肥前系	碗蓋	(10.2)	2.5	(4.0)	50%	体部外面山水文？　内面口縁部四方襷文　内面天井部二重圏線内に鷺文
254	31		Ⅳ区	277	染付	肥前系	碗蓋	(10.0)	2.9	(5.5)	45%	体部外面は花唐草　内面天井部は一重圏線内に十字花文
255	31	27	Ⅳ区	277	染付	肥前系	碗	(11.0)	5.5	(3.8)	40%	「ハ」の字の高台　体部外面草花文　内面口縁部四方襷文　見込み部草花文？
256	31	28	Ⅳ区	277	染付	肥前系	広東碗	11.8	6.7	5.4	60%	体部外面竹・蝶文　見込み部は二重圏線内変形字
257	31	28	Ⅳ区	277	染付	肥前系	碗	8.3	4.6	3.2	75%	体部外面蓮弁文　見込み部一重圏線内に文様
258	31	28	Ⅳ区	277	染付	肥前系	蓋付鉢	(7.4)	4.2	(4.3)	40%	筒形　畳付と口縁端部付近が露胎　体部外面梅花文
259	31		Ⅳ区	277	白磁	肥前系	杯	7.6	3.8	3.2	50%	施釉は雑で、高台付近の所々が露胎
260	31		Ⅳ区	277	染付	肥前系	皿	(18.4)	3.8	(7.6)	40%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　内面草花文　見込み部コンニャク判五弁花文
261	31		Ⅳ区	277	白磁	肥前系	猪口	(5.0)	2.9	(2.8)	50%	
262	31	28	Ⅳ区	277	施釉陶器	瀬戸・美濃系	端反碗	(9.6)	4.6	(4.0)	40%	畳付は露胎　細かい貫入　体部外面白土で刷毛目文様
263	31		Ⅳ区	277	施釉陶器	京・信楽	土瓶	10.7	12.1	7.3	60%	底部側面の３方向に突起　灰釉　内面と外面の体部中位から底部にかけて露胎　注口欠損
264	31		Ⅳ区	277	無釉陶器	堺・明石系	植木鉢	(21.0)	－	－	口縁部40%	口縁部外方に拡張
265	31		Ⅳ区	277	土師質土器		焙烙	(32.7)	－	(34.3)	口縁部30%	丸底　体部は屈曲して内傾　口縁部の２方向に把手状の拡張部
266	31		Ⅳ区	277	土師質土器		秉燭	5.0	1.9	2.4	100%	平底　内面中央に灯芯台
267	31		Ⅳ区	277	瓦質土器		鍋	(25.0)	－	－	口縁部60%	口縁部は屈曲して強く外傾　左右対称に台形状の把手
268	31		Ⅳ区	453	染付	肥前系	杯	(7.2)	4.1	2.8	50%	体部外面笹文
269	31		Ⅳ区	453	土師質土器		焙烙	－	－	－	－	丸底　体部は屈曲してやや外傾
270	31		Ⅳ区	453	石製品		硯	長9.1	幅3.9	高1.25	95%	方形　外縁に朱漆塗布　裏面線刻「高嶋本青石」
271	31		Ⅳ区	453	石製品		粉挽臼	28.0	10.4	－	－	下臼
272	31		Ⅳ区	471	白磁	肥前系	仏飯器	－	－	3.5	脚部100%	外底部露胎
273	31		Ⅳ区	421	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	－	－	－	－	Ⅱ型式（＊）　体部外面ヘラケズリ　擂目の単位は６本/1.7cm
274	31		Ⅳ区	472	白磁	肥前系	小杯	5.8	2.1	2.4	95%	
275	32		Ⅳ区	185	瓦質土器		鍋	－	－	－	－	口縁部下に横方向に開く鍔
276	32	28	Ⅳ区	185	山茶碗		碗	－	－	(6.8)	底部４0%	
277	32	28	Ⅳ区	185	山茶碗		皿	－	－	4.8	底部100%	底部回転糸切り
278	32		Ⅳ区	185	無釉陶器	常滑焼	甕	－	－	－	－	体部外面に菊花のスタンプ文
279	32		Ⅳ区	185	青磁	龍泉窯系	碗	－	－	5.35	底部60%	粗い貫入　高台内は部分的に露胎　体部外面は片切彫の蓮弁文　13世紀第３四半期
280	32		Ⅳ区	195	土師器		皿	(13.0)	3.3	－	25%	
281	32	28	Ⅳ区	195	土師器		甕	(26.0)	－	－	口縁部40%	口縁部は「く」の字に屈曲　口縁端部を上方へ拡張
282	32	28	Ⅳ区	195	無釉陶器	常滑焼	甕	－	－	－	－	外反する口縁の端部を上下に拡張　14世紀
283	32		Ⅳ区	203	山茶碗		碗	－	－	7.7	底部100%	高台内回転糸切りのち一部ナデ
284	32		Ⅳ区	205	山茶碗		碗	－	－	7.8	底部100%	高台内回転糸切り
285	32		Ⅳ区	210	瓦器		椀	(15.0)	－	－	口縁部20%	内面分割ミガキ　見込み部はループ状　12世紀
286	32		Ⅳ区	213	瓦器		椀	－	－	(6.0)	底部30%	見込み部ループ状のミガキ

出土遺物観察表（６）

番号	図	図版	地区	遺構等	種 類	産地	器種	口径	高さ	底径 つまみ径	残存率	備　　考
287	32		Ⅳ区	289	瓦器		椀	(15.6)	－	－	口縁15%	口縁端部内面に浅い沈線　内面体部同心円状・見込み部平行線のミガキ
288	32		Ⅳ区	300	瓦器		鉢	(18.4)	(7.2)	(10.4)	30%	内面ナデ後細いミガキ
289	32		Ⅳ区	301	土師器		小皿	(9.4)	1.35	－	20%	摩滅により調整不明
290	32		Ⅳ区	301	青磁	龍泉窯系	碗	－	－	－	－	口縁部外反　無文
291	32		Ⅳ区	304	土師器		小皿	(8.0)	1.7	(5.5)	50%	底部回転ヘラ切り
292	32		Ⅳ区	327	白磁	閩南系	碗	－	－	－	－	口縁部わずかに外反　Ⅴ類　13世紀第１四半期
293	32		Ⅳ区	457	瓦器		椀	－	－	4.1	底部100%	見込み部斜格子状のミガキ
294	32		Ⅳ区	458	無釉陶器	常滑焼	鉢	－	－	－	－	口縁端部に沈線　内面自然釉かかる
295	32		Ⅳ区	459	瓦器		碗	(14.1)	5.3	5.1	30%	体部は腰が張る　ミガキ不明
296	32	28	Ⅳ区	477	土師器		皿	12.7	3.3	－	60%	
297	32		Ⅳ区	481	瓦器		椀	－	－	(4.6)	底部20%	ミガキ不明
298	33		Ⅳ区	表土撹乱	染付	肥前系	碗蓋	9.9	2.7	5.0	95%	外面体部・つまみ内不明文様　内面天井部扇面
299	33	28	Ⅳ区	第２層	染付	肥前系	丸碗	9.7	5.6	3.8	80%	施釉は雑　体部外面草花文　高台内に記号様の染付
300	33		Ⅳ区	表土撹乱	染付	肥前系	丸碗	9.9	5.2	3.8	60%	体部外面草花文
301	33		Ⅳ区	表土撹乱	染付	肥前系	丸碗	(10.5)	4.8	(3.8)	60%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　体部外面梅花文
302	33		Ⅳ区	第２層	染付	肥前系	碗	(12.4)	6.7	4.6	70%	体部外面菖蒲文　内面口縁部四方襷文　見込み部二重圏線内にコンニャク判五弁花文
303	33		Ⅳ区	第２層	染付	肥前系	丸碗	11.4	5.25	4.3	60%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　砂多量に付着　体部外面コンニャク判のカエデ文を４方向
304	33	28	Ⅳ区	撹乱	染付	肥前系	碗	11.0.	5.7	4.5	70%	高台「ハ」の字　体部外面は松文・蓮弁文　口縁部内面四方襷文　見込み部二重圏線内に松文
305	33	28	Ⅳ区	撹乱	染付	肥前系	広東碗	10.6	6.1	5.2	70%	畳付露胎　砂付着　体部外面梅花文　見込み部一重圏線内に文字？
306	33	28	Ⅳ区	撹乱	染付	肥前系	碗	10.75	6.1	3.8	80%	高台細くて高い　体部外面に松竹梅文　見込み部に省略化した松竹梅文
307	33		Ⅳ区	撹乱	染付	肥前系	端反碗	12.4	5.1	4.4	70%	高台内冷め割れ　見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　体部外面松葉文　見込み部コンニャク判五弁花文
308	33	29	Ⅳ区	第２層	染付	肥前系	皿	(21.0)	4.8	(12.0)	40%	外底部ハリ支え痕　体部外面唐草文　高台内一重圏線内に「大明年・」　口縁部錆釉　内面は花唐草文
309	33		Ⅳ区	表土撹乱	染付	肥前系	皿	14.1	3.1	8.0	65%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　体部内面草花文　見込み部コンニャク判五弁花文
310	33		Ⅳ区	第２層	染付	肥前系	皿	9.8	2.6	4.8	70%	体部外面唐草文　高台内面一重圏線内に銘？　内面体部は区画してジグザグ文と半円文を交互に描く　見込み部はコンニャク判五弁花文
311	33		Ⅳ区	２層	染付	肥前系	皿	(14.2)	2.9	(6.6)	50%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　内面体部唐草文　見込み部コンニャク判五弁花文
312	33		Ⅳ区	表土撹乱	染付	肥前系	皿	11.9	3.8	3.9	95%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　内面体部は二本線による斜格子文
313	33		Ⅳ区	撹乱	染付	肥前系	皿	12.75	3.8	4.3	95%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　内面体部は二本線による斜格子文
314	33		Ⅳ区	撹乱	染付	肥前系	皿	10.5	2.5	4.7	75%	内面は鶴・雲・山文の染付
315	33		Ⅳ区	撹乱	染付	瀬戸・美濃系	皿	10.0	2.2	5.9	70%	高台内冷め割れ　見込み部は藤・葡萄？などの文様を型押し、呉須を塗布する　口縁部錆釉
316	33		Ⅳ区	撹乱	染付	肥前系	ひだ皿	10.2	2.5	5.6	70%	内面に山水楼閣文　口縁部錆釉
317	33	29	Ⅳ区	第２層	染付	肥前系	ひだ皿	(14.2)	4.3	(7.4)	50%	体部外面花唐草　内面菊花型押し　見込み部鳳凰・花文　高台内二重枠に丸「福」の銘
318	33	29	Ⅳ区	表土撹乱	染付	肥前系	そば猪口	7.3	5.8	5.0	70%	粗い貫入　体部外面菊花文・氷裂文
319	33		Ⅳ区	２層	染付	肥前系	蓋杯鉢	5.7	3.0	3.0	60%	口縁端部は露胎　体部外面氷裂文
320	33		Ⅳ区	撹乱	染付	肥前系	御神酒徳利	－	－	3.6	底体部100%	体部外面蛸唐草　変形蓮弁文
321	33		Ⅳ区	撹乱	染付	肥前系	急須蓋	7.0	2.2	－	100%	口縁端部付近露胎　上面口縁部雷文で体部は退化した龍？文
322	33		Ⅳ区	表土撹乱	白磁	肥前系	皿	(13.2)	3.2	7.1	50%	蛇ノ目凹形高台　輪花型押し　見込み部目跡２箇所以上
323	33		Ⅳ区	表土撹乱	白磁	瀬戸・美濃系	皿	(11.4)	2.5	(7.4)	40%	焼継ぎ痕　高台内朱書あり
324	33		Ⅳ区	撹乱	白磁	肥前系	小皿	4.8	1.3	2.3	100%	ミニチュア？
325	33		Ⅳ区	第２層	施釉陶器	瀬戸・美濃系	天目碗	(10.0)	6.6	4.35	40%	鉄釉　高台付近は露胎
326	33		Ⅳ区	撹乱	施釉陶器	瀬戸・美濃系	腰錆碗	(9.0)	5.2	4.0	50%	畳付露胎　内面から口縁部外面まで灰釉　外面底・体部鉄釉　体部外面に沈線４条
327	33	29	Ⅳ区	撹乱 表土	施釉陶器	瀬戸・美濃系	腰錆碗	9.6	5.5	3.8	85%	畳付露胎　内面灰釉　外面上半灰釉・下半鉄釉　体部中位に沈線５条
328	33		Ⅳ区	２－１層	施釉陶器	瀬戸・美濃系	ひだ皿	12.7	2.4	5.4	80%	灰釉　畳付は露胎　細かい貫入
329	33		Ⅳ区	表土撹乱	施釉陶器	肥前系	溝縁皿	(13.6)	2.75	(6.2)	20%	内面と外面の口縁部付近白色の釉？　外面底・体部露胎
330	33		Ⅳ区	撹乱	施釉陶器	肥前系	皿	12.2	3.5	4.2	80%	高台付近露胎　外面灰釉　内面灰釉の上に銅緑釉　見込み部蛇ノ目釉剥ぎ
331	33	29	Ⅳ区	撹乱	青磁	肥前系	腰袴香炉	8.6	4.35	3.6	60%	高台部と内面底・体部は露胎　透明感のある釉
332	33		Ⅳ区	撹乱	施釉陶器	京・信楽系	灯明皿	7.0	1.5	2.9	75%	内面施釉　細かい貫入　底部回転糸切り　見込み部目跡３箇所
333	33		Ⅳ区	表土撹乱	施釉陶器	京・信楽系	土瓶蓋	9.2	3.85	3.3	100%	上面鉄釉　体部外面トビガンナ
334	33		Ⅳ区	撹乱	施釉陶器	京・信楽系	急須蓋	6.4	2.1	1.9	60%	上面と下面中央付近に鉄釉
335	33		Ⅳ区	第２層	施釉陶器	瀬戸・美濃系	(壺・甕)蓋	(14.3)	2.9	6.5	45%	釦状のつまみ　底部回転糸切り　上面鉄釉
336	33		Ⅳ区	撹乱	施釉陶器	京・信楽系	土瓶蓋	9.7	2.5	4.4	75%	折り返しのつまみ　上面は銅緑釉　下面は露胎
337	33		Ⅳ区	第２層	無釉陶器	備前焼	擂鉢	(27.6)	－	－	口縁部15%	擂目の単位は７本/2.5cmで、やや間隔をあけて施す　外面口縁部に重ね焼きの痕跡　17世紀
338	34	29	Ⅳ区	遺構検出時	土師質土器		皿	8.5	1.5	4.4	95%	底部回転糸切り　内面に梵字　漢字「急急如律令」異体字　地鎮用？　339とセット？
339	34	29	Ⅳ区	遺構検出時	土師質土器		皿	8.8	1.5	5.2	80%	底部回転糸切り　内面に梵字　漢字「姓　未歳　男」異体字　地鎮用？　338とセット？
340	34		Ⅳ区	第２層	土師質土器		皿	(7.2)	1.0	(4.3)	25%	底部回転糸切り　内面に梵字ほか　地鎮用？

出土遺物観察表（７）

番号	図	図版	地区	遺構等	種 類	産地	器種	口径	高さ	底径 つまみ径	残存率	備　　考
341	34	29	Ⅳ区	遺構検出時	土師質土器		灯明皿	5.7	1.2	4.5	100%	内面から外面口縁付近まで透明釉　底部回転糸切り 見込み部に梵字を書く　地鎮用？　342とセット？
342	34	29	Ⅳ区	遺構検出時	土師質土器		灯明皿	6.1	0.8	4.5	100%	内面から外面口縁付近まで透明釉　底部回転糸切り 見込み部に梵字を書く　地鎮用？　341とセット？
343	34		Ⅳ区	第２－１層	土師質土器		灯明皿	5.6	0.9	3.4	100%	内面から外面口縁付近まで透明釉　底部回転糸切り 見込み部に梵字を書く　地鎮用？　344とセット？
344	34	29	Ⅳ区	第２－１層	土師質土器		灯明皿	5.4	0.7	3.6	100%	内面から外面口縁付近まで透明釉　底部回転糸切り 見込み部に梵字を書く　口縁部に付着物あり　地鎮用？　343とセット？
345	34	29	Ⅳ区	表土撹乱	土師質土器		灯明皿	5.6	1.05	3.3	90%	内面から外面口縁付近まで透明釉　底部回転糸切り 346とセット？
346	34		Ⅳ区	表土撹乱	土師質土器		灯明皿	5.5	0.9	3.8	60%	内面から外面口縁付近まで透明釉　底部回転糸切り 345とセット？
347	34		Ⅳ区	第２－１層	土師質土器		灯明皿	5.5	0.75	3.8	ほぼ100%	内面から外面口縁付近まで透明釉　底部回転糸切り 348とセット？
348	34		Ⅳ区	第２－１層	土師質土器		灯明皿	5.45	1.05	3.1	100%	内面から外面口縁付近まで透明釉　底部回転糸切り 347とセット？
349	34		Ⅳ区	遺構検出時	土師質土器		灯明皿	6.45	1.3	3.4	95%	内面から外面口縁付近まで透明釉　底部回転糸切り
350	34		Ⅳ区	遺構検出時	土師質土器		焙烙	(27.0)	－	(27.8)	口縁部20%	丸底　体部は屈曲し内傾する　体部中位に焼成後の穿孔
351	34		Ⅳ区	撹乱	土師質土器		糖漏	－	－	9.0	底部100%	底部中央に円穴　底部側面より円穴目掛けて小孔 底部付近の体部側面に「・・大吉・・」の刻印
352	34		Ⅳ区	撹乱	瓦質土器		羽釜	(24.8)	－	－	口縁部10%	口縁部下に横方向に開く鍔　口縁部外面に４条の凹線
353	34		Ⅳ区	撹乱	土製品		十能	－	－	－	50%	掬部は隅丸方形か　把手は断面台形で掬部に貼付
354	34		Ⅳ区	第２層	石製品		砥石	－	幅5.2	－	－	破片
355	34		Ⅳ区	第２層	石製品		硯	－	幅7.5	高1.7	－	陸部中央に溝状のくぼみ
356	34		Ⅳ区	第２層	土製品		土錘	長5.2	幅1.3	－	95%	棒状のものに粘土を巻いて成型
357	34		Ⅳ区	第２－２層	土師器		皿	(15.0)	3.2	－	25%	底部はやや丸みをもつ　口縁部は外反する
358	34		Ⅳ区	撹乱	土師器		皿	(14.8)	3.2	－	25%	底部はやや丸みをもつ　口縁部は外反する
359	34		Ⅳ区	第２層	土師器		皿	(11.2)	(3.5)	－	30%	底部は丸みを帯びる　指押さえ顕著
360	34		Ⅳ区	第２－２層	土師器		皿	(10.8)	1.75	－	25%	底部は平坦　底・体部の境は明瞭でない　器壁は厚い
361	34		Ⅳ区	撹乱	瓦器		皿	9.5	1.45	7.45	60%	平底　体部は斜め上方へ短く延びる　ミガキ不明
362	34		Ⅳ区	撹乱	土師器		土釜	－	－	－	－	口縁部は強く外反する　口縁端部を上方へ拡張　内面頸部ヨコハケ
363	34		Ⅳ区	２層	瓦器		椀	－	－	(5.0)	底部25%	高台三角形　ミガキ不明
364	34		Ⅳ区	撹乱	青磁	龍泉窯系	碗	(16.0)	－	－	口縁部10%	外面鎬蓮弁文　13世紀第３四半期
365	34		Ⅳ区	第２層	青磁	龍泉窯系	碗	(16.0)	－	－	口縁部15%	内面劃花文　13世紀第２四半期
366	34		Ⅳ区	撹乱	青磁	龍泉窯系	碗	－	－	－	－	稜花碗　内面に片切彫の文様　13世紀第２四半期
367	34		Ⅳ区	２層	青磁	龍泉窯系	碗	－	－	－	－	粗い貫入　内面片切彫り劃花文　13世紀第２四半期
368	34		Ⅳ区	２層	青磁	龍泉窯系	碗	－	－	－	－	釉は薄い　口縁端部露胎　外面櫛目文　片切彫文　13世紀第２四半期
369	34		Ⅳ区	第２層	青磁	龍泉窯系	碗	－	－	－	－	粗い貫入　口縁部外面に雷文　15世紀後半
370	34		Ⅳ区	撹乱	青磁	龍泉窯系	碗	－	－	(5.4)	底部30%	畳付から高台内部露胎　粗い貫入　外面線描蓮弁文 15世紀後半
371	34		Ⅳ区	撹乱	青磁	龍泉窯系	碗	－	－	(5.6)	底部40%	高台内露胎　見込み部に片切彫の文様　13世紀第２四半期
372	34		Ⅳ区	撹乱	青磁	同安窯系	碗	－	－	4.7	底部100%	兜巾高台　高台付近露胎　施釉は雑　高台部に鉄カンナのノッチング痕　13世紀第１四半期
373	34		Ⅳ区	第２－２層	白磁	閩南系	碗	－	－	(6.0)	底部30%	高台付近露胎　鉄カンナのノッチング痕　見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　Ｖ類　13世紀第１四半期
374	34		Ⅳ区	撹乱	青磁	龍泉窯系	鉢	－	－	－	－	口縁部は直立した後外傾　釉は透明感があって厚い 14世紀
375	34		Ⅳ区	第２層	青磁	龍泉窯系	皿	－	－	(6.0)	底部20%	腰折れ　釉は透明感があって厚い　粗い貫入　13世紀
376	34		Ⅳ区	撹乱	青磁	同安窯系	皿	－	－	(5.0)	底部20%	平底　釉は透明感があって厚い　外底部露胎　粗い貫入　13世紀第１四半期
377	34		Ⅳ区	第２層	青磁	同安窯系	皿	－	－	(5.1)	底部20%	平底　細かい貫入　外底部露胎　見込み部櫛目文　13世紀第１四半期
378	34		Ⅳ区	撹乱	須恵質土器	東播系	捏鉢	(28.0)	－	－	口縁部10%	口縁部を上方へ拡張　13世紀前半
379	34		Ⅳ区	撹乱	無釉陶器	常滑焼	甕	－	－	－	－	口縁部強く外反　口縁端部をわずかに上方へ拡張　自然釉　12世紀？
380	34		Ⅳ区	第２－２層	無釉陶器	常滑焼	鉢	－	－	－	－	口縁端部を内外へわずかに拡張する　15世紀
381	34		Ⅳ区	第２－２層	滑石製品		石鍋	－	－	－	－	体部は内湾して立ち上がる　口縁端部は上方に面
382	34		Ⅳ区	遺構検出時	須恵器		甕	(15.4)	－	－	口縁部15%	口縁部外面に波状文　内外面全体に自然釉
383	35		Ⅳ区	撹乱	銭貨		寛永通宝	2.31	2.32	0.12	100%	
384	35		Ⅳ区	撹乱	銭貨		寛永通宝	2.32	2.31	0.1	100%	
385	35		Ⅳ区	遺構検出時	銭貨		寛永通宝	2.22	2.2	0.14	100%	
386	35		Ⅳ区	453	銭貨		寛永通宝	2.56	2.55	0.19	100%	
387	35		Ⅳ区	第２－１層	銭貨		？	－	－	－	100%	銭文不明　中国銭と思われる
388	39		Ⅴ区	488	染付	肥前系	皿	(12.2)	4.0	(4.8)	35%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　体部内面二重線による斜格子文
389	39		Ⅴ区	488	染付	肥前系	小杯	(5.8)	2.2	(2.6)	50%	体部外面笹文　釉は透明感がなく気泡が生じる
390	39		Ⅴ区	488	施釉陶器	瀬戸・美濃系	杯	(6.0)	4.0	3.3	40%	灰釉　細かい貫入　高台付近露胎
391	39		Ⅴ区	488	土師質土器		灯明皿	(6.5)	1.4	(3.3)	50%	外底部回転糸切り　内面透明釉　口縁部にスス付着
392	39		Ⅴ区	490	施釉陶器	京・信楽系	碗	－	－	3.7	底部95%	灰釉　細かい貫入　高台付近露胎　外面黄色・茶色の色絵
393	39		Ⅴ区	491	染付	肥前系	碗蓋	(9.2)	2.7	2.7	70%	体部外面二本線で鋸歯状に区画して捻り文様　口縁部内面帯状文様　見込み部二重丸を半裁して捻り状の文様
394	39		Ⅴ区	491	施釉陶器	京・信楽系	植木鉢	(12.6)	－	－	口縁部30%	灰釉　体部内面は露胎
395	39		Ⅴ区	491	施釉陶器	瀬戸・美濃系	練鉢	(29.2)	－	－	口縁部20%	口縁部玉縁状　灰釉　外面タンパン流し掛け

出土遺物観察表（８）

番号	図	図版	地区	遺構等	種 類	産地	器種	口径	高さ	底径 つまみ径	残存率	備　　考
396	39		Ｖ区	493	染付	瀬戸・美濃系	端反碗	(9.0)	4.0	(2.9)	60%	体部外面篆書文　見込み部不明文様　口縁部錆釉　呉須は濃い青
397	39		Ｖ区	493	染付	肥前系	小杯	(6.0)	2.3	(2.6)	50%	体部外面笹文　呉須は黒っぽい
398	39		Ｖ区	493	施釉陶器	京・信楽系	土瓶蓋	6.7	4.4	2.1	100%	宝珠様のつまみ　口縁部は垂下　体部に蒸気穴　上面施釉
399	39		Ｖ区	493	施釉陶器	京・信楽系	灯明皿	6.1	1.3	2.5	100%	灰釉　上面施釉
400	39		Ｖ区	501	染付	肥前系	碗蓋	(8.3)	2.5	3.4	70%	外面藤・菊等の花・蝶の文様　つまみ内一重圏線内に変形字銘　内面口縁部四方襷文　天井部一重圏線内に花文？
401	39		Ｖ区	501	白磁	瀬戸・美濃系	皿	(11.0)	2.4	(6.8)	25%	焼継ぎ痕　高台内朱書
402	39	30	Ｖ区	501	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(32.2)	11.9	17.3	60%	Ⅱ型式（＊）　体部外面回転ヘラケズリ・ナデ　擂目の単位は12本/3.6cm　見込み部の擂目放射状　明石
403	39	30	Ｖ区	501	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	40.7	16.9	19.4	70%	Ⅱ型式（＊）　体部外面回転ヘラケズリ　擂目の単位は９本/3.7cm
404	39		Ｖ区	501	土師質土器		焙烙	(30.5)	4.0	―	口縁部20%	丸底　底・体部の境は鈍い角　体部は短く直立
405	39		Ｖ区	501	瓦質土器		羽釜	(22.9)	10.4	―	口縁部50%	口縁部下に横方向に開く鍔　口縁部外面に４条の凹線
406	39	30	Ｖ区	502	染付	肥前系？	皿	12.3	2.9	7.4		蛇ノ目凹形高台　口縁部玉縁状　見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　体部内面二重線による格子文　見込み部二重線による斜格子文　焼継ぎ痕あり　南紀男山焼？
407	39		Ｖ区	502	施釉陶器	瀬戸・美濃系	火入	(10.0)	―	―	口縁部25%	灰釉　内面露胎　外面口縁下凹線１条　体部中位に沈線を４条以上引き、その上下に花文を型押し
408	39		Ｖ区	502	施釉陶器	肥前系	碗	―	―	4.5	底部90%	鉄釉に白土で刷毛目文様　体部外面波状　内面放射状
409	40		Ｖ区	505	染付（色絵）	瀬戸・美濃系	仏飯器	6.2	6.2	4.9	98%	脚部内面露胎　脚部外面圏線　体部外面半菊花文
410	40		Ｖ区	506	染付	肥前系	碗	(10.9)	6.1	(4.3)	30%	体部外面花唐草　口縁部内面雷文　見込み部松竹梅文　染付は細線で描く
411	40	30	Ｖ区	506	染付	肥前系？	皿	(17.9)	4.6	(7.7)	30%	ひだ皿　蛇ノ目凹形高台　口縁端部染付　体部外面唐草文　内面は花唐草文を型押しし、その後染付　焼継ぎ痕あり　南紀男山焼？
412	40		Ｖ区	506	染付	肥前系？	皿	(12.2)	2.9	7.0	25%	ひだ皿　蛇ノ目凹形高台　体部外面波状文様　口縁部内面雷文　見込み部草花文？
413	40		Ｖ区	506	施釉陶器	？	？	―	―	(9.5)	底部50%	外底部・内面露胎　外底部・体部下半に墨書
414	40		Ｖ区	506	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(30.4)	―	―	口縁部12%	Ⅰ型式（＊）　体部外面回転ヘラケズリ　擂目の単位10本/3.4cm
415	40		Ｖ区	506	土師質土器		焙烙	(29.4)	―	(29.8)	口縁部15%	丸底　体部はほぼ直立する　口縁部はやや肥厚する
416	40		Ｖ区	512	染付	瀬戸・美濃系	皿	13.2	2.6	6.9	80%	ひだ皿　蛇ノ目凹形高台　呉須は濃い青　体部外面唐草文　見込み部と体部内面は同じ花文
417	40		Ｖ区	512	染付	肥前系	皿	(13.2)	3.5	(8.0)	50%	体部外面唐草文　高台内二重圏線内に渦福？　体部内面草花文　見込み部コンニャク判五弁花文
418	40		Ｖ区	512	施釉陶器	京・信楽系	土瓶蓋	―	2.9	4.9	50%	つまみは菊花状　上面施釉
419	40		Ｖ区	512	石製品		砥石	―	幅5.3	厚0.8		
420	40		Ｖ区	513	染付	肥前系	端反碗	(10.4)	6.2	3.9	50%	体部外面野草文・露文　内面口縁部露文　見込み部二重圏線内に楕円状の染付
421	40	30	Ｖ区	513	染付	瀬戸・美濃系	端反碗	9.0	3.9	2.7	100%	内外面蔓文　内面中央に渦巻き文　呉須は濃い青
422	40	30	Ｖ区	513	染付	肥前系？	鉢	(21.6)	7.2	(10.4)	50%	蛇ノ目凹形高台　体部外面松葉文　高台外面櫛歯文　口縁端部斜め方向の刻み目　口縁部内面雷文　見込み部竹文・椿文　南紀男山焼？
423	40		Ｖ区	513	染付	？	仏飯器	(6.1)	6.3	4.8	70%	脚部内面露胎　体部・裾部外面牡丹唐草文
424	40	30	Ｖ区	513	染付	肥前系？	蓮華	―	―	―	90%	内面に花文　側面にも染付　呉須は濃い青
425	40	30	Ｖ区	513	陶胎染付	？	油壺	2.1	4.7	4.3	99%	細かい貫入　体部上位に笹文
426	40		Ｖ区	513	施釉陶器	京・信楽系	水注	(6.8)	9.7	7.0	60%	平底　体部は円筒状　灰釉　外底部露胎
427	40	31	Ｖ区	513	施釉陶器	京・信楽系	行平鍋	(14.5)	7.1	7.3	70%	体部上半は鉄釉・トビガンナ　内面灰釉　口縁部内外面と体部下半・外底部は露胎
428	40		Ｖ区	513	無釉陶器	京・信楽系	合子蓋	7.5	1.1	―	100%	体部は円盤状　口縁部は短く垂下する　外面墨書？
429	40		Ｖ区	513	施釉陶器	京・信楽系	行平鍋蓋	10.2	3.6	2.6	85%	灰釉　細かい貫入　口縁付近露胎　体部外面らせん状に凹線
430	40		Ｖ区	513	施釉陶器	京・信楽系	行平鍋蓋	(15.6)	4.7	4.0	50%	灰釉　口縁部付近露胎　体部外面褐釉で草状の文様
431	40		Ｖ区	513	施釉陶器	京・信楽系	灯明皿	5.9	1.5	2.9	100%	内面施釉　細かい貫入　口縁部にスス付着
432	40	31	Ｖ区	513	施釉陶器	京・信楽系	灯明皿受台	5.8	3.7	4.0	85%	体部は鼓状　受部の一部に抉り　灰釉　底部の内外面は露胎
433	40	31	Ｖ区	513	施釉陶器	丹波焼	徳利	3.2	21.4	9.4	90%	体部円筒状　鉄釉　外底部と内面底・体部露胎
434	40		Ｖ区	513	土師質土器		焙烙	(32.0)	―	(32.6)	口縁部30%	丸底　底・体部の境は角をなす　体部は直立
435	41	31	Ｖ区	513	土師質土器		箱形七輪	―	―	―	70%	二重構造　内側円形　サナ付き　四角の送風窓に戸
436	41		Ｖ区	513	土師質土器		焜炉	(20.5)	20	(17.0)	40%	円筒形　二重構造　楕円形の窓
437	41		Ｖ区	510	染付	肥前系	端反椀	(11.6)	5.4	4.7	30%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　体部外面松葉文　口縁部内面波状文様　見込み部コンニャク判五弁花文
438	41		Ｖ区	510	白磁	肥前系	小杯	5.5	2.4	2.1	95%	
439	41		Ｖ区	510	施釉陶器	瀬戸・美濃系	杯	(5.6)	3.3	(2.7)	50%	灰釉　高台付近露胎　露胎部葉回転ヘラケズリ
440	41		Ｖ区	510	施釉陶器	京・信楽系	土瓶蓋	(8.0)	―	―	80%	つまみは両側より折り返し　鉄釉　下面は露胎
441	41		Ｖ区	514	施釉陶器	瀬戸・美濃系	鉢	(30.0)	―	―	口縁部25%	口縁部水平に折れる　灰釉　外底部付近露胎
442	41	31	Ｖ区	515	染付	肥前系	朝顔形碗	(11.0)	5.8	4.0	40%	体部外面草花文
443	41	31	Ｖ区	515	染付	肥前系	丸碗	(9.9)	5.7	4.0	60%	体部外面草花文　高台内一重圏線内に文字様の染付
444	41		Ｖ区	515	染付	肥前系	皿	(12.7)	3.95	4.6	50%	施釉は雑　体部内面二重線による斜格子文
445	41	31	Ｖ区	515	染付	肥前系	皿	13.0	3.7	4.7	80%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　内面体部葉文
446	41		Ｖ区	515	染付	肥前系	皿	12.5	3.5	4.2	80%	施釉は雑　見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　体部内面二重線による文様
447	41		Ｖ区	515	染付	肥前系	皿	(14.6)	4.25	(8.2)	40%	体部外面唐草文　高台内二重圏線内に文様　体部内面扇面文
448	41	31	Ｖ区	515	染付	肥前系	皿	13.2	4.0	7.5	95%	口縁部錆釉　体部外面唐草文　高台内二重圏線内に変形字　内面体部扇面文　見込み部二重圏線内にコンニャク判五弁花文

出土遺物観察表（９）

番号	図	図版	地区	遺構等	種 類	産地	器種	口径	高さ	底径 つまみ径	残存率	備　　考
449	41		Ｖ区	515	染付	肥前系	御神酒徳利	―	―	4.3	底部100%	梅瓶形　体部外面蛸唐草
450	41		Ｖ区	515	染付	肥前系	御神酒徳利	―	―	2.7	底体部100%	体部外面笹文　梅鉢文
451	41		Ｖ区	515	染付	肥前系	御神酒徳利	―	―	2.8	底部100%	体部外面笹文　梅鉢文
452	41		Ｖ区	515	白磁	肥前系	紅猪口	6.6	2.5	2.5	95%	
453	41	32	Ｖ区	515	青磁	肥前系	香炉	10.3～11.2	8.0	5.5	75%	筒形　口縁楕円形　畳付と内面底・体部は露胎
454	41	32	Ｖ区	515	青磁	京・信楽系	小壺	5.5	5.4	4.0	85%	陶器質の胎土　内面露胎
455	41		Ｖ区	515	施釉陶器	京焼系	碗	(9.2)	5.6	2.9	50%	高台付近露胎　体部外面紺色と黄土色の点状文様
456	41		Ｖ区	515	施釉陶器	志野焼	皿	(11.3)	1.8	(6.8)	25%	長石釉　細かい貫入　高台内の一部露胎
457	41		Ｖ区	515	施釉陶器	肥前系	皿	(16.7)	4.3	(5.8)	45%	灰釉　見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　高台付近露胎　高台内「ワラ」の墨書
458	41	32	Ｖ区	515	施釉陶器	京・信楽系	火入	(9.5)	8.0	5.5	60%	筒形　高台付近露胎　見込み部に目跡３箇所　体部外面に肌色と茶色の花文　高台脇に「サカ？」の墨書
459	42	32	Ｖ区	515	施釉陶器	瀬戸・美濃系	水注	(4.3)	9.5	7.2	70%	飴釉　高台付近と内面の一部が露胎　肩部に櫛目文
460	42	32	Ｖ区	515	施釉陶器	京・信楽系	土瓶蓋	(9.8)	2.8	4.0	80%	つまみは亀　底部回転糸切り　上面施釉・らせん状に沈線
461	42		Ｖ区	515	施釉陶器	肥前系	灯明皿？	(8.2)	2.3	2.9	50%	外底部回転糸切り　内面鉄釉　見込み部に重ね焼きの痕跡
462	42		Ｖ区	515	施釉陶器	京・信楽系	鍋	(17.5)	8.3	―	口縁部25%	左右対称にアーチ状の把手　鉄釉　体部下半は露胎
463	42		Ｖ区	515	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(27.0)	―	―	口縁部20%	Ⅰ型式（＊）　体部外面回転ヘラケズリ・ナデ　擂目の単位10本/2.5cm
464	42		Ｖ区	515	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(27.0)	10.0	(14.6)	25%	Ⅱ形式（＊）体部外面は回転ヘラケズリ・ナデ　擂目の単位13本/3.3cm　見込みの擂目は放射状　明石
465	42		Ｖ区	515	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(35.7)	14.3	(17.7)	20%	Ⅰ型式（＊）　擂目の単位７本/3.3cm
466	42		Ｖ区	515	無釉陶器	備前焼	擂鉢	―	―	(18.0)	底部25%	体部端に高台　擂目の単位９本/2.3cmで体部から見込み部まで連続して施す　17世紀末
467	42		Ｖ区	515	土師質土器		灯明皿	9.6	1.8	3.6	80%	内面透明釉　底部回転糸切り　口縁部灯芯跡顕著
468	42		Ｖ区	515	土師質土器		灯明皿	7.6	1.35	3.0	95%	内面透明釉　底部回転糸切り　口縁部灯芯跡顕著
469	42		Ｖ区	515	土師質土器		焙烙	(29.0)	7.0	(29.6)	15%	丸底　底・体部の境は丸みを帯びる　体部はやや内傾し深い　体部中位に焼成後の穿孔２箇所以上
470	42		Ｖ区	515	土師質土器		焙烙	(32.8)	―	(34.8)	口縁部10%	丸底　底・体部の境は屈曲し、体部は内傾
471	42		Ｖ区	515	瓦		軒丸瓦	瓦当14.2	―	―	瓦当95%	周縁幅広で低い　左巻きの三つ巴は頭が大きく尾が短い　珠文は大きく12個
472	42		Ｖ区	515-2	染付	肥前系	丸碗	10.7	5.1	3.9	65%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　体部外面梅花文
473	42	32	Ｖ区	515-2	染付	肥前系	碗	11.0	5.0	4.1	90%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　体部外面梅花文
474	42		Ｖ区	515-2	染付	肥前系	皿	(11.1)	2.1	(8.1)	30%	蛇ノ目凹形高台　体部外面唐草文　見込み部山水文？釉は透明感がない
475	42		Ｖ区	515-2	染付	肥前系	杯	(7.0)	3.9	3.3	50%	体部外面笹文
476	42		Ｖ区	515-2	施釉陶器	京・信楽系	碗	(9.8)	5.1	(3.6)	45%	灰釉　高台付近露胎　体部外面に染付
477	42		Ｖ区	515-5	土師質土器		秉燭	4.8	2.2	2.6	100%	外型成型　灯芯台にスス付着
478	42		Ｖ区	515-2	土師質土器		焙烙	(27.0)	―	(27.8)	口縁部10%	丸底　底・体部の境は比較的明瞭で、体部はほぼ直立
479	42		Ｖ区	516	染付	肥前系	碗蓋	(9.6)	2.4	3.4	30%	体部外面「福」文・花文　つまみ内部花文　内面口縁部雲？文　内面天井部一重圏線内に「寿」文
480	42		Ｖ区	516	染付	瀬戸・美濃系	端反碗	(9.6)	5.4	(4.2)	50%	体部外面山水文　口縁部内外面は幅広の圏線　見込み部一重圏線内に文様
481	42	32	Ｖ区	516	染付	？	碗	(8.9)	4.4	3.3	90%	体部外面の３方向に蛟龍文
482	42		Ｖ区	516	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(14.9)	―	―	口縁部5%	Ⅰ型式（＊）　擂目の単位11本/2.8cm
483	43	32	Ｖ区	529	染付	肥前系	碗蓋	9.8	3.2	5.6	80%	体部外面楼閣？文　高台内と内面天井部は同様の不明文様
484	43	32	Ｖ区	529	陶胎染付	肥前系？	端反碗	9.6	4.6	(4.0)	60%	畳付露胎　体部外面松原文・雁文
485	43		Ｖ区	529	染付	肥前系？	鉢	(15.9)	5.6	(9.3)	40%	蛇ノ目凹形高台　口縁部玉縁状　外面体部源氏香文？内面牡丹文　南紀男山焼？
486	43		Ｖ区	529	白磁	肥前系	小皿	4.6	1.0	2.6	100%	ミニチュア
487	43		Ｖ区	529	施釉陶器	京・信楽系	蓋	7.4	1.75	―	95%	灰釉　細かい貫入　下面露胎
488	43		Ｖ区	529	施釉陶器	京・信楽系	水注	―	―	7.5	底部100%	円筒形　注口はＵ字状　灰釉　細かい貫入　外底部は露胎で「三八」の墨書
489	43		Ｖ区	529	施釉陶器	瀬戸・美濃系	水鉢	(30.0)	15.3	(18.0)	30%	灰釉に緑釉と鉄釉を流し掛け　高台付近露胎　体部外面ヘラ描き文・刺突文　見込み部目跡
490	43		Ｖ区	529	施釉陶器	丹波焼	甕	(31.0)	―	―	口縁部5%	口縁部内外に拡張　内面自然釉　外面は褐釉に鉄釉を掛け流し
491	43	32	Ｖ区	529	土師質土器		焼塩壺	(5.8)	(8.2)	―	90%	底は平坦で体部は円筒状　口縁部はわずかに外反　器壁は厚い
492	43		Ｖ区	529	土師質土器		焙烙	(32.4)	―	(32.8)	口縁部25%	丸底　底・体部の境は屈曲する　体部は短く外反
493	43		Ｖ区	530	染付	肥前系	(端反)碗蓋	(10.0)	2.5	(3.6)	45%	体部外面「福」「寿」文・花文　つまみ内部花文　内面口縁部雲？文　内面天井部一重圏線内に「寿」文　焼継ぎ痕あり
494	43	33	Ｖ区	530	染付	肥前系	丸碗	10.0	4.8	4.0	50%	体部外面二重網目文
495	43		Ｖ区	530	染付	肥前系	皿	―	―	6.0	底部100%	蛇ノ目凹形高台　体部外面松原文　高台内の凹部に朱書　体部内面文様不明　見込み部文様？
496	43		Ｖ区	530	染付	肥前系	蕎麦猪口	(7.8)	5.7	6.0	40%	高台内露胎　口縁部錆釉　体部外面若松文
497	43	33	Ｖ区	530	染付	南紀男山焼	皿	(21.0)	4.0	(13.2)	30%	体部外面宝文　高台内二重圏線内の二重枠内に「南紀男山」　銘を消す　体部内面芙蓉手文様で窓を設けて宝文と花弁文を交互に配する　見込み部は鳥文
498	43		Ｖ区	530	白磁	肥前系	小杯	6.2	2.15	3.0	90%	
499	43		Ｖ区	530	施釉陶器	肥前系	鉢	(21.8)	―	―	口縁部20%	鉄釉　口縁端部のほか体部の内外面の一部が露胎　体部外面に白土で刷毛目
500	43		Ｖ区	530	施釉陶器	京・信楽焼	土瓶蓋	7.5	18.5	3.8	80%	折り返しのつまみ　灰釉　下面露胎
501	43		Ｖ区	530	施釉陶器	京・信楽系	土瓶蓋	7.4	2.0	4.5	90%	粘土を捻ったつまみ　灰釉　細かい貫入　下面露胎
502	43	33	Ｖ区	530	施釉陶器	？	秉燭	6.0	5.4	4.3	90%	平底の中央に釘穴　灯芯台欠損　鉄釉　外底部露胎
503	43	33	Ｖ区	532	染付	肥前系	碗蓋	10.2	3.0	5.5	80%	体部外面とつまみ内は柳文　内面天井部は鷺文

出土遺物観察表（10）

番号	図	図版	地区	遺構等	種 類	産地	器種	口径	高さ	底径 つまみ径	残存率	備　　考
504	43		Ⅴ区	532	染付	肥前系	丸碗	(9.7)	4.9	4.0	40%	体部外面草花文
505	43		Ⅴ区	532	青磁染付	肥前系	朝顔形碗	(11.2)	6.8	(4.0)	50%	外面青磁釉　口縁部内面四方襷文　見込み部二重圏線内にコンニャク判五弁花文
506	43		Ⅴ区	532	染付	肥前系	小杯	5.6	1.6	2.9	100%	体部外面笹文
507	43		Ⅴ区	532	染付	肥前系	小杯	5.6	2.1	2.6	100%	胎土は陶器質　施釉は雑　体部外面笹文
508	43		Ⅴ区	532	施釉陶器	京・信楽系	杯	(6.4)	2.5	(2.5)	50%	灰釉　細い貫入　畳付・高台内露胎
509	43		Ⅴ区	532	施釉陶器	肥前系	御神酒徳利	—	—	3.0	底部95%	高台付近・内面露胎　体部外面銅緑釉
510	43		Ⅴ区	532	施釉陶器	京・信楽系	土瓶蓋	—	3.0	4.1	50%	菊花状のつまみ　鉄釉　下面は露胎　露胎部の調整は回転ヘラケズリ
511	43		Ⅴ区	532	施釉陶器	京・信楽系	鍋	(20.8)	—	—	20%	左右対称にアーチ状の把手　灰釉　外面体部付近は露胎
512	44		Ⅴ区	532	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(30.9)	10.9	14.4	40%	Ⅱ型式（＊）　体部外面回転ナデで部分的に回転ヘラケズリ　擂目の単位８本/2.6cm
513	44		Ⅴ区	532	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(34.1)	12.1	(17.4)	30%	Ⅱ型式（＊）　体部外面回転ナデで部分的に回転ヘラケズリ　擂目の単位９本/2.9cm
514	44		Ⅴ区	532	土師質土器		灯明皿	6.0	1.3	2.4	99%	底部回転糸切り　内面透明釉　口縁部スス多量に付着
515	44		Ⅴ区	532	土師質土器		焙烙	(31.8)	—	(32.6)	口縁部30%	底・体部の境は屈曲　体部は内傾　左右対称に口縁部の拡張部あり　上方から２個一対の刺突
516	44		Ⅴ区	532	土師質土器		糖漏	—	—	9.0	底部100%	平底　底部中央に円穴　底部側面より円穴向けて小孔
517	44		Ⅴ区	532	石製品		砥石	—	幅6.1	高1.0		破片
518	44	33	Ⅴ区	532	石製品		硯	長15.3	幅6.0	高1.7	—	方形硯　裏面方形の浅い抉りあり、中央に「本高島石」の線刻
519	44		Ⅴ区	532	石製品		硯	—	幅6.05	高2.35		方形硯　使用痕顕著
520	44	33	Ⅴ区	532	石製品		硯	—	幅4.8	高1.2	—	方形硯　海部の一部が欠損　裏面方形の浅い抉りあり、中央に「大極上本・高島石」の線刻
521	44		Ⅴ区	532	石製品		硯	—	幅7.3	高2.4	80%	海部の一部欠損　陸部中央溝状に深くくぼむ
522	44		Ⅴ区	532	瓦		軒丸瓦	瓦当14.8	—	—	瓦当95%	周縁幅広で低い　左巻きの三つ巴は頭が大きく尾が短い　珠文は大きく12個
523	44		Ⅴ区	533	土師質		焜炉	—	13.2	20.0	60%	体部は丸みを帯びる　高台に円穴　高台端部の一部に抉り
524	44		Ⅴ区	537	施釉陶器	肥前系	碗	—	—	4.2	底部95%	鉄釉　白土で刷毛目文様
525	44		Ⅴ区	570	土師質土器		焙烙	(24.2)	—	—	30%	丸底　底・体部の境は明瞭でない　体部はやや内傾し深い
526	44		Ⅴ区	579	染付	肥前系	丸碗	10.0	5.0	3.8	80%	畳付露胎・砂付着　体部外面二重網目文　呉須は黒っぽい
527	44	33	Ⅴ区	579	染付	肥前系？	皿	12.5	2.7	6.9	90%	蛇ノ目凹形高台　口縁部は玉縁状　高台内は凹部以外露胎　内面山水文　見込み部ハマの痕跡　南紀男山焼？
528	45	33	Ⅴ区	580	染付	肥前系	碗	(11.2)	5.9	4.6	70%	高台「ハ」の字状　体部外面山（岩）文？　蓮弁文　内面口縁部四方襷文　見込み部二重圏線内に山文
529	45	34	Ⅴ区	580	染付	肥前系	皿	13.6	4.2	8.0	95%	体部外面唐草文　高台内一重圏線内に変形字　体部内面唐草文　見込み部コンニャク判の五弁花文
530	45		Ⅴ区	580	染付	肥前系	皿	(13.0)	3.9	6.7	80%	体部外面唐草文　高台内一重圏線内に変形字　体部内面扇面文・草花文　見込み部コンニャク判五弁花文
531	45		Ⅴ区	580	染付	肥前系	皿	(13.1)	3.1	6.0	60%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ　体部内面省略化した草花文　見込み部コンニャク判五弁花文
532	45		Ⅴ区	580	染付	肥前系	皿	(10.1)	2.7	(5.8)	40%	高台内冷め割れ　体部外面唐草文　高台内一重圏線内に変形字？　内面流水文・紅葉文
533	45		Ⅴ区	580	染付	肥前系	小杯	(6.0)	1.9	(2.7)	50%	釉は白濁　体部外面染付
534	45		Ⅴ区	580	施釉陶器	京・信楽焼	杯	(6.3)	3.6	(3.0)	40%	灰釉　細かい貫入　高台付近露胎
535	45		Ⅴ区	580	無釉陶器	堺・明石系	擂鉢	(31.0)	12.4	(13.8)	35%	Ⅰ～Ⅱ型式（＊）　体部外面回転ヘラケズリ・ナデ　擂目の単位９本/3.0cm
536	45		Ⅴ区	580	土師質土器		灯明皿	9.3	1.9	3.6	90%	内面透明釉　底部回転糸切り
537	45		Ⅴ区	580	土師質土器		灯明皿	9.2	2.0	4.0	95%	内面透明釉　底部回転糸切り
538	45		Ⅴ区	580	土師質土器		灯明皿	(9.5)	1.7	(4.0)	50%	内面透明釉　底部回転糸切り　見込み部に「明光山」の刻印
539	45		Ⅴ区	580	土師質土器		焙烙	32.0	—	34.8	50%	丸底　底・体部の境は角をなし、体部はやや内傾　口縁部左右対称に把手状の拡張部　拡張部上端より２個一対の穿孔　体部把手下に焼成後の穿孔
540	45	33	Ⅴ区	580	土師質土器		糖漏	(34.3)	30.8	11/4	90%	平底　底部中央に円穴　底部側面より円穴向けて小孔　体部下半に「・・大吉」のスタンプ
541	45		Ⅴ区	601	染付	瀬戸・美濃系	端反碗	(11.2)	5.4	(4.2)	50%	体部外面帆船文　内面口縁部雷文？　見込み部一重圏線内に文字？
542	45		Ⅴ区	601	染付	瀬戸・美濃系	皿	(10.3)	2.2	(6.0)	50%	畳付露胎　口縁部錆釉　見込み部文様を型押し、呉須を塗布する　焼継ぎ痕
543	45		Ⅴ区	601	染付	肥前系	御神酒徳利	—	5.5	2.6	80%	高台付近露胎　体部外面笹文　梅花文　呉須は青い
544	45		Ⅴ区	601	白磁	瀬戸・美濃系	小碗	(8.3)	4.6	3.6	60%	
545	45		Ⅴ区	560	山茶碗		碗	—	—	(8.6)	底部50%	内面自然釉付着
546	46		Ⅴ区	585	土師器		皿	(12.9)	3.6	(5.2)	40%	底部平坦気味　口縁部はわずかに外反する
547	46		Ⅴ区	585	土師器		皿	(12.1)	2.8	(6.0)	20%	底部は平坦気味
548	46		Ⅴ区	585	土師器		小皿	(9.2)	1.1	(6.5)	20%	底部は平坦気味　体部は浅い
549	46		Ⅴ区	587	瓦器		椀	(14.2)	4.6	(4.5)	30%	断面三角形の高台　ミガキ不明
550	46		Ⅴ区	600	土師器		小皿	(8.5)	1.2	—	10%	底部は平坦気味　体部は浅い　歪みが大きい
551	46		Ⅴ区	600東	無釉陶器	備前焼	甕	(19.0)	—	—	口縁部15%	口縁部は強く外反する　口縁端部を上面に１条の凹線　13世紀前半？
552	46		Ⅴ区	602	青白磁	景徳鎮	合子蓋	(3.6)	1.3	—	25%	円盤状の体部縁辺部を意図的に面取りするように打ち欠く　口縁部は垂下　上面施釉　浮き彫りの文様　12・13世紀
553	47	34	Ⅴ区	撹乱	染付	肥前系	碗蓋	10.5	3.2	5.6	90%	体部外面竹文・人物文（僧形）　つまみ内部枠内に変形字銘　内面天井部花文
554	47		Ⅴ区	表土撹乱	染付	肥前系	碗蓋	9.4	3.4	4.1	80%	体部外面梅鉢文　内面天井部一重圏線内に「寿」

出土遺物観察表（11）

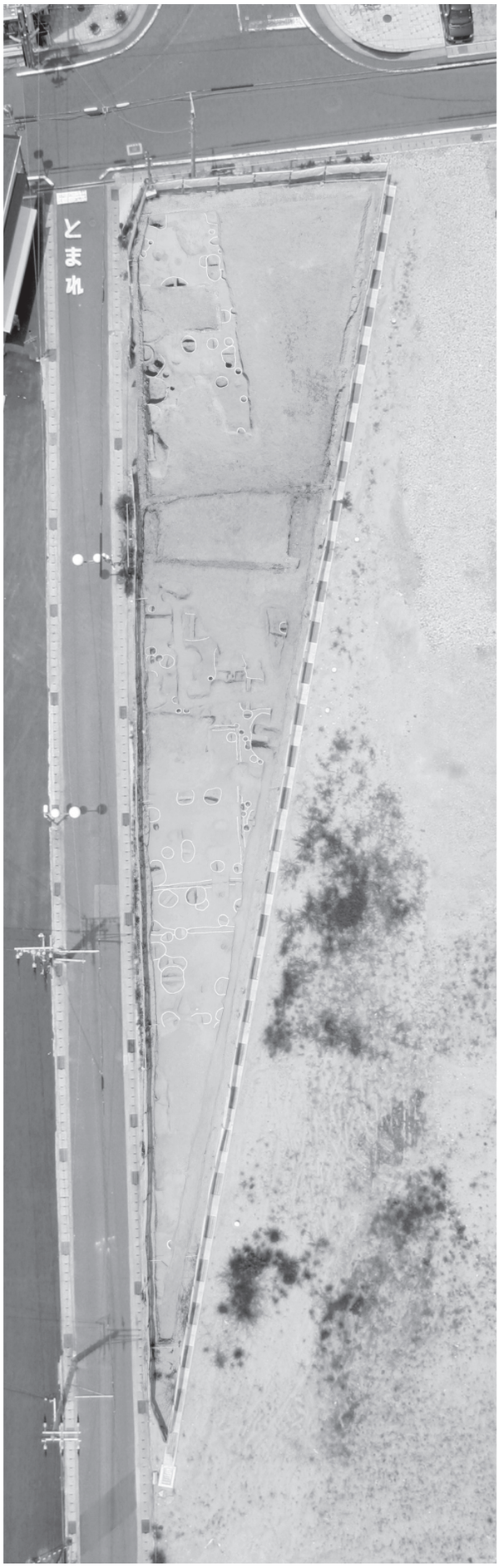
番号	図	図版	地区	遺構等	種 類	産地	器種	口径	高さ	底径 つまみ径	残存率	備　　考
555	47		Ⅴ区	撹乱	染付	肥前系	丸碗	(9.6)	5.5	3.9	50%	体部外面二重網目文　呉須の色は薄い
556	47		Ⅴ区		染付	肥前系	丸碗	9.8	4.8	3.8	60%	体部外面二重網目文
557	47		Ⅴ区	撹乱	染付	肥前系	皿	(13.3)	4.3	(7.6)	45%	体部外面唐草文　高台内枠内に「福」？　体部内面扇面文　見込み部二重圏線内にコンニャク判五弁花文
558	47		Ⅴ区	表土撹乱	染付	肥前系	ひだ皿	10.4	2.4	5.2	80%	口縁端部錆釉　内面山水文
559	47	34	Ⅴ区	表土撹乱	染付	？	鉢	(21.5)	6.4	(10.7)	40%	二重の高台　口縁部は外方に巻き込んで玉縁状　内側の畳付露胎　体部外面牡丹唐草文　内面牡丹文　ロクロの成型痕顕著　南紀男山焼？
560	47		Ⅴ区	表土撹乱	染付	肥前系	仏飯器	6.0	5.7	3.6	90%	体部外面半菊文
561	47		Ⅴ区	表土撹乱	白磁	肥前系	小皿	7.7	2.2	3.5	95%	見込み部蛇ノ目釉剥ぎ
562	47		Ⅴ区	表土撹乱	白磁	肥前系	徳利	3.2		6.8	―	畳付・内面底・体部露胎
563	47	34	Ⅴ区		施釉陶器	肥前系	呉器手碗	(8.9)	7.0	4.9	70%	灰（黄）釉　細かい貫入　畳付露胎
564	47	34	Ⅴ区	表土撹乱	施釉陶器	瀬戸・美濃系	水鉢	(29.4)	14.6	18.9	60%	灰釉　高台付近露胎　体部部分的にタンパン流し掛け　体部外面ヘラによる文様　見込み部目跡５箇所（もともと６箇所？）
565	47		Ⅴ区	表土撹乱	施釉陶器	？	秉燭	―	―	3.9	脚部100%	平底の中央に釘穴　体部内面中央に灯芯台（欠損）　鉄釉　体部下半・脚部は露胎
566	47		Ⅴ区	表土撹乱	施釉陶器	京・信楽系	蓋	7.5	1.5	4.0	90%	つまみは釦状　上面に薄い灰釉　底部は回転糸切り
567	47	34	Ⅴ区	撹乱	陶器	堺・明石系	擂鉢	37.6	14.1	(15.3)	80%	Ⅲ型式（＊）　方口は形骸化　体部外面上部回転ヘラケズリ　擂目は10本/3.3cm
568	47		Ⅴ区	表土撹乱	土製品		トチ	―	―	6.1	―	窯道具
569	47		Ⅴ区	表土撹乱	石製品		硯	―	幅6.8	高2.9	―	海部の一部
570	47		Ⅴ区	遺構検出時	土師器		皿	(14.8)	3.3	―	20%	底は平坦気味
571	47		Ⅴ区	遺構検出時	土師器		皿	(14.6)	3.9	―	25%	底はやや丸みを帯びる　口縁部肥厚
572	47		Ⅴ区	490	土師器		小皿	(7.0)	1.4	―	85%	体部は平坦気味　体部は短く外上方に開く
573	47		Ⅴ区	表土撹乱	土師器		小皿	(7.8)	1.2	(6.1)	25%	平底　体部は短い　見込み部に放射状の圧痕
574	47		Ⅴ区	515	瓦器		椀	(14.4)	4.2	(4.7)	40%	断面台形～三角形の低い高台　内面体部同心円状のミガキ　見込み部平行線ミガキ　12世紀
575	47		Ⅴ区	515	瓦器		椀	15.1	4.8	4.6	70%	断面台形の低い高台　体部外面指押さえ　内面ミガキ不明
576	47		Ⅴ区	515	瓦器		皿	8.7	1.7	―	90%	底部は丸みを帯びる　内面ループ状のミガキ　12世紀
577	47		Ⅴ区	表土撹乱	山茶碗		碗	―	―	(8.4)	底部50%	高台内回転糸切り
578	47		Ⅴ区	515	山茶碗		碗	―	―	(8.0)	底部40%	高台内回転糸切り
579	47		Ⅴ区	表土撹乱	青磁	龍泉窯系	皿	(10.0)	―	―	口縁部30%	稜花皿　釉は厚い　口縁部内面型押しの花文等あり
580	48		Ⅴ区	600	鉄製品		釘	約6.0	0.5	0.4	95%	断面四角　頭部片方に折り曲げて成型
581	48		Ⅴ区	491	銅製品		火箸	約21.7	0.5	0.5	100%	断面は円形　基部は一段太くなる
582	48		Ⅴ区	表土撹乱	石製品		火打石	2.9	1.9	1.1	100%	チャート製
583	48		Ⅴ区	第２層	石製品		碁石	2.15	2.1	0.6	100%	黒碁石　ほぼ正円　扁平
584	48		Ⅴ区	530	鹿角製品		刀装具	4.0	2.9	1.9	98%	柄尻　宝文線刻　銘？
585	48		Ⅴ区	表土撹乱	銭貨		元豊通寶？	2.43	2.44	1.35	100%	初鋳1078年
586	51		Ⅵ区	351	染付 （色絵）	肥前系	端反碗	(9.4)	4.5	(3.0)	40%	体部外面区画して源氏香文・花文
587	51		Ⅵ区	351	白磁	肥前系	杯	(7.1)	2.9	2.6	40%	口縁部外反
588	51		Ⅵ区	351	施釉陶器	瀬戸・美濃系	練鉢	(13.0)	―	―	口縁部100%	口縁部玉縁状　灰釉
589	51		Ⅵ区	352	染付	肥前系	湯呑茶碗	(7.2)	5.0	4.0	45%	胎土は陶器質　体部外面草文？ほか
590	51		Ⅵ区	352	白磁	肥前系	碗	(19.5)	6.1	4.6	40%	
591	51		Ⅵ区	352	施釉陶器	肥前系	皿	(11.8)	2.35	(6.4)	35%	灰釉　高台付近露胎　見込み部目跡　唐津　17世紀
592	51		Ⅵ区	352	施釉陶器	京・信楽系	灯明皿	(6.2)	1.5	(2.6)	40%	灰釉　細かい貫入　外面露胎　スス付着
593	51		Ⅵ区	352	土師質土器		焙烙	―	―	―	―	丸底　底・体部の境は鈍い角　体部中位に焼成後の穿孔
594	51		Ⅵ区	352	施釉陶器	瀬戸・美濃系	水鉢	(30.0)	―	―	口縁部15%	灰釉　タンパン流し掛け　ヘラによる線状文様・刺突文
595	51		Ⅵ区	380	染付	瀬戸・美濃系	端反碗	(11.9)	5.5	3.9	30%	文様不明
596	51	34	Ⅵ区	表土撹乱	染付	瀬戸・美濃系	碗蓋	(9.4)	3.3	3.8	60%	体部外面竹・梅鉢　内面口縁部雷文？　天井部一重圏線内に花文
597	51		Ⅵ区	表土撹乱	染付	肥前系	丸碗	(12.1)	6.2	4.6	70%	体部外面丸文　高台内一重圏線内に変形字　見込み部二重圏線内にコンニャク判五弁花文
598	51		Ⅵ区	第２層	染付	肥前系	碗	(11.2)	5.7	4.2	60%	高台「ハ」の字　体部外面は松文・蓮弁文　口縁部内面四方襷文　見込み部二重圏線内に松文
599	51	34	Ⅵ区	表土撹乱	染付	瀬戸・美濃系	端反碗	(8.8)	4.4	3.3	50%	体部外面波濤文？　見込み部雷文内に「大化年製」
600	51	34	Ⅵ区	表土撹乱	染付	肥前系	稜花皿	(12.9)	4.0	7.2	70%	蛇ノ目凹形高台　体部外面唐草文　内面芙蓉手　窓に丸文・花文・竹文　見込み部に草・鳥文
601	51		Ⅵ区	表土撹乱	染付	南紀男山焼	火入	(10.1)	―	―	底部45%	筒形　外底部露胎　体部染付不明　体部下端部に「南紀男山」銘
602	51		Ⅵ区	表土撹乱	染付	肥前系	御神酒徳利	7.0	6.2	2.7	100%	底部付近露胎　体部外面梅花文　笹葉文
603	51		Ⅵ区	表土撹乱	白磁	瀬戸・美濃系	皿	9.8	2.2	5.2	85%	木型打ち込み成型　見込み部双喜文
604	51		Ⅵ区	表土撹乱	白磁	肥前系	菊皿	(13.0)	3.4	7.6	65%	蛇ノ目凹形高台　菊花型押し　口縁端部錆釉
605	51		Ⅵ区	表土撹乱	白磁	肥前系	小杯	5.7	2.0	2.3	80%	
606	51		Ⅵ区	表土撹乱	白磁	肥前系	紅皿	4.9	1.6	1.3	100%	貝殻状　型押し成型　外面の一部露胎
607	51		Ⅵ区	表土撹乱	施釉陶器	丹波焼	徳利	4.4	26.2	8.7	100%	褐釉　イッチン描きによる文字３方向
608	51		Ⅵ区	表土撹乱	施釉陶器	京・信楽系	灯明受皿	11.9	2.1	4.7	80%	灰釉　内面施釉　細かい貫入
609	51		Ⅵ区	撹乱	施釉陶器	京・信楽系	灯明受皿	6.2	1.2	2.5	90%	灰釉　内面施釉　細かい貫入
610	51		Ⅵ区	表土撹乱	山茶碗		碗	―	―	7.2	底部100%	
611	51		Ⅵ区	表土撹乱	山茶碗		皿	―	―	4.2	底部100%	底部回転糸切り

＊は白神典之氏の分類による（註１）

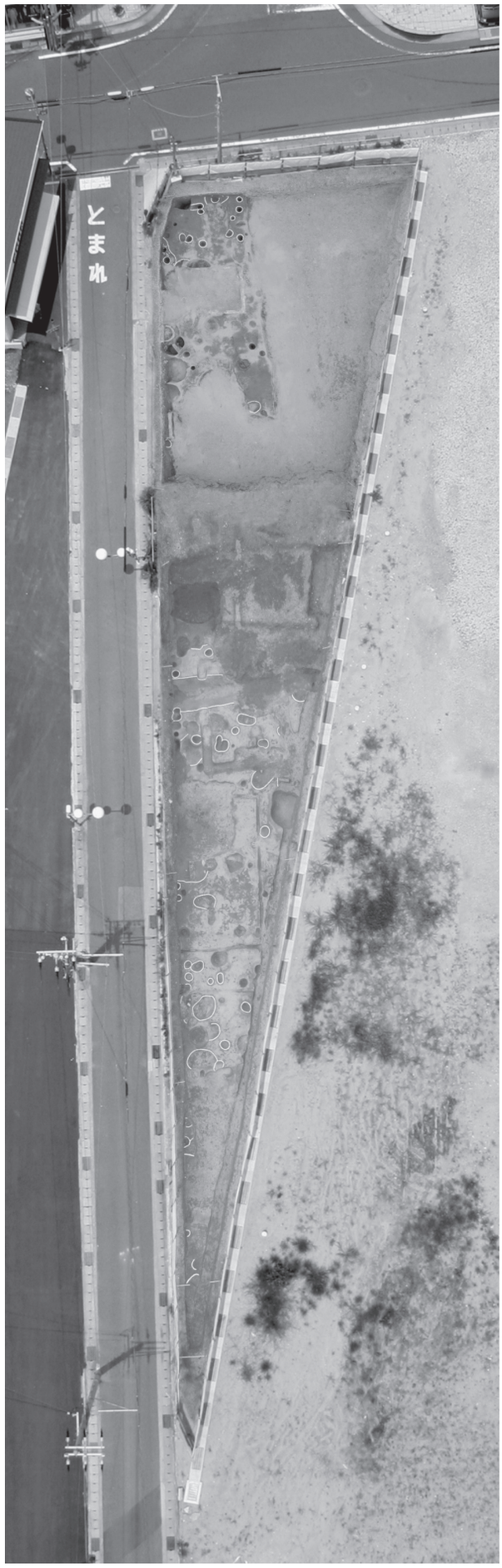
1．田辺市街遠景
（北から）

2．田辺城の現状
（北から）

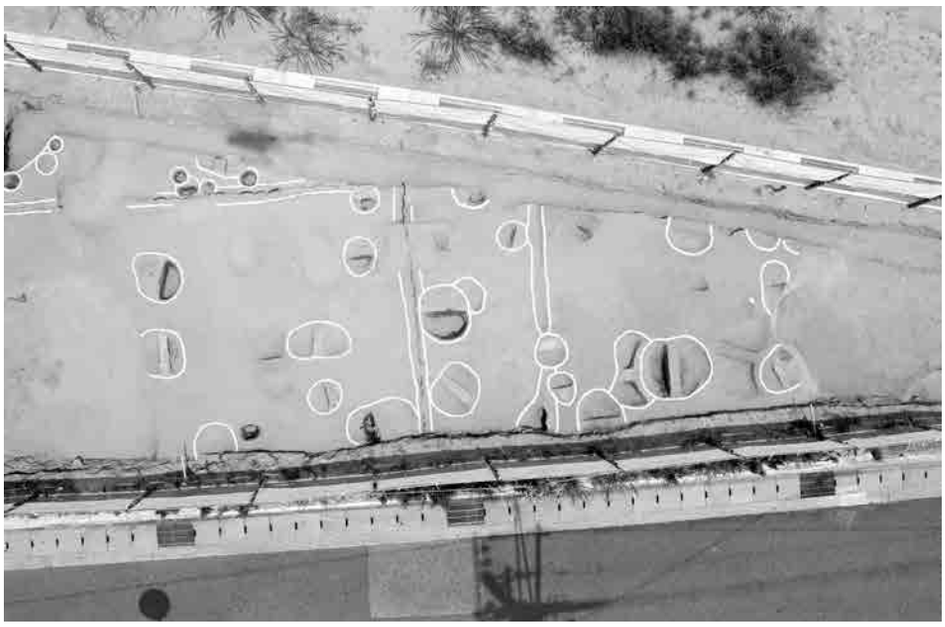
3．調査地近景
（西から）



1．Ⅰ区　第１遺構面全景（上空から）



2．Ⅰ区　第２遺構面全景（上空から）

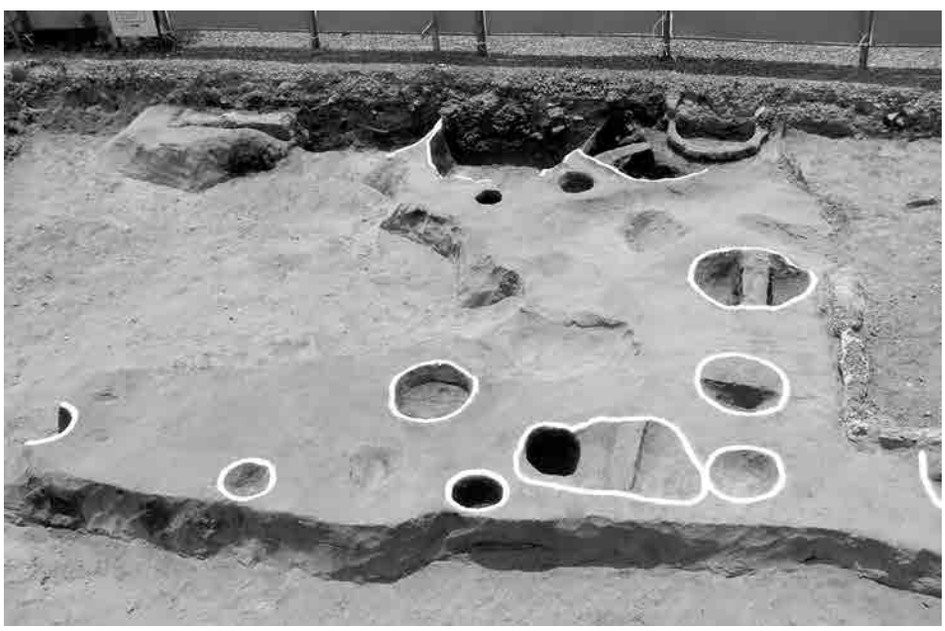


1．Ⅰ区　第１遺構面
土坑群（上空から）

2．Ⅰ区　第２遺構面
土坑群（上空から）

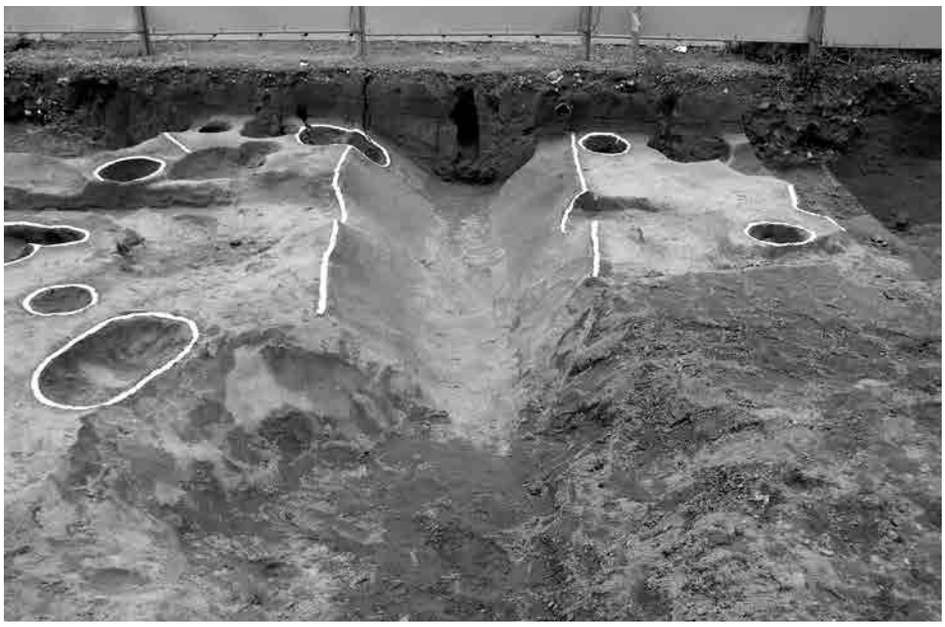
3．Ⅰ区　第２遺構面
掘立柱建物１ほか
（上空から）

1．Ⅰ区　第１遺構面
遺構60（西から）



2．Ⅰ区　第１遺構面
遺構126～129ほか
（北から）

3．Ⅰ区　第２遺構面
遺構62（北から）

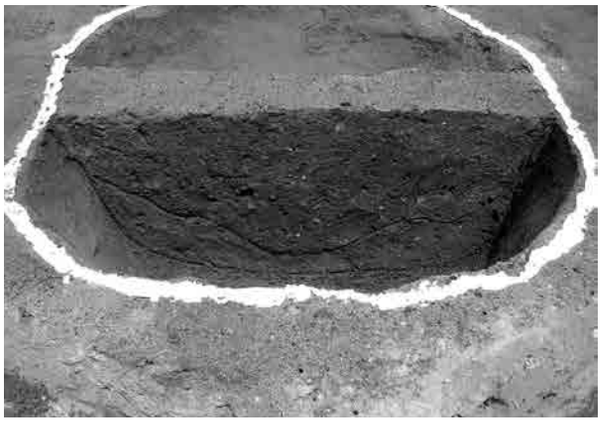


1．Ⅰ区　第２遺構面
遺構63（北から）

2．Ⅰ区　第２遺構面
遺構90（西から）

3．Ⅰ区　第２遺構面
遺構91（西から）

１．Ⅰ区　第１遺構面　遺構60断面（西から）



２．Ⅰ区　第１遺構面　遺構10断面（東から）

３．Ⅰ区　第１遺構面　遺構44断面（西から）

４．Ⅰ区　第１遺構面　遺構57断面（東から）

５．Ⅰ区　第２遺構面　遺構９・74（東から）

６．Ⅰ区　第２遺構面　遺構74遺物出土状況（北から）

７．Ⅰ区　第２遺構面　遺構90遺物出土状況（西から）

８．Ⅰ区　第２遺構面　遺構91遺物出土状況（西から）

Ⅱ区全景（上空から）

1．Ⅱ－１区全景（東から）

2．Ⅱ－２区全景（西から）

1．Ⅱ区　遺構654（南から）

2．Ⅱ区　遺構672断面（西から）

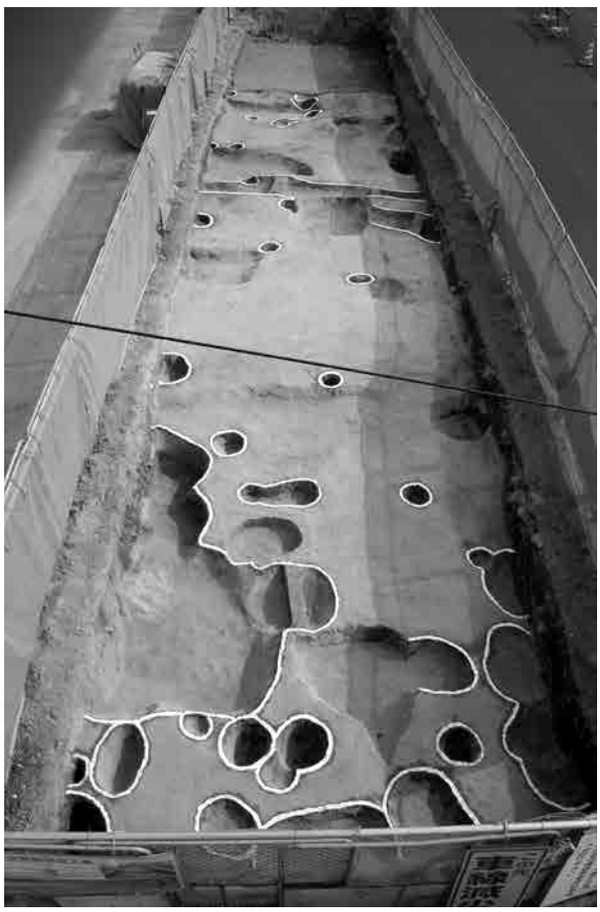
3．Ⅱ区　礎石列１・遺構699（上から）

4．Ⅱ区　遺構694断面（南から）

5．Ⅱ区　遺構654断面（西から）

1．Ⅲ区　第１遺構面全景（上空から）

2．Ⅲ区　第２遺構面全景（上空から）



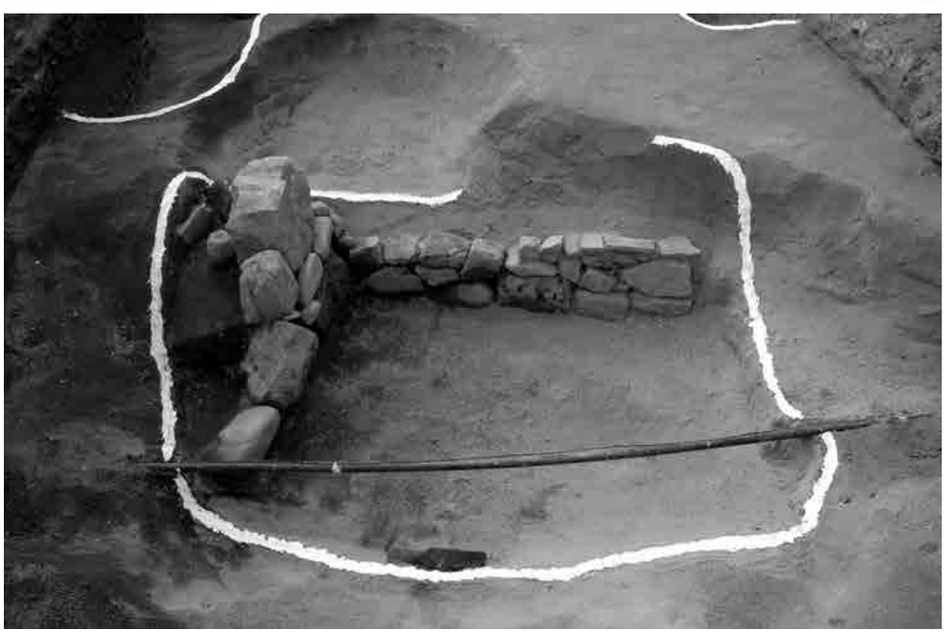
1．Ⅲ－１区全景（西から）

2．Ⅲ－２区　第２遺構面全景（西から）

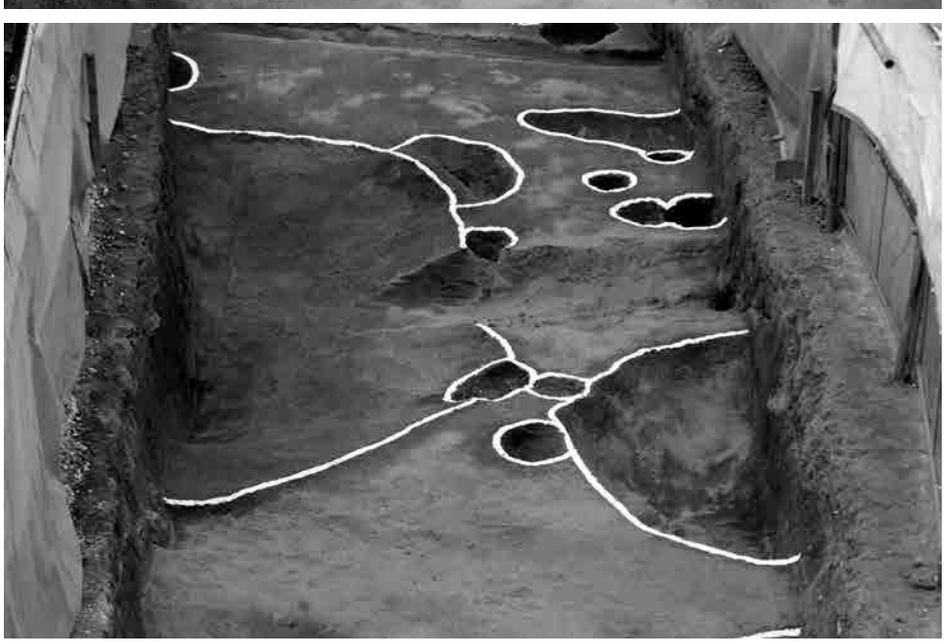
3．Ⅲ－４区　第１遺構面全景（西から）

4．Ⅲ－４区　第２遺構面全景（西から）

1．Ⅲ区　第１遺構面
遺構755（北から）



2．Ⅲ区　第１遺構面
遺構766（東から）



3．Ⅲ区　第２遺構面
遺構803（東から）

1．Ⅳ－１・２区　第１遺構面全景（上空から）

2．Ⅳ－１・２区　第２・３遺構面全景（上空から）

1．Ⅳ－３区　第１遺構面全景（東から）

2．Ⅳ－３区　第２遺構面全景（東から）

3．Ⅳ－４区　第１遺構面全景（西から）

4．Ⅳ－４区　第３遺構面全景（西から）

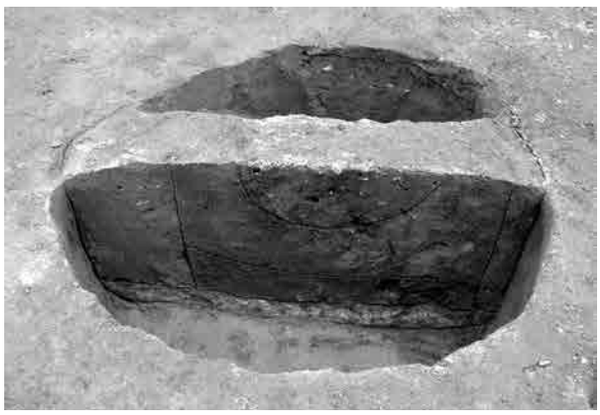
1．Ⅳ－１区　第２遺構面
土坑群（東から）

2．Ⅳ－２区　第２遺構面
（西から）

3．Ⅳ－２区　第３遺構面
（西から）

１．Ⅳ区　第１遺構面　礎石建物１（東から）

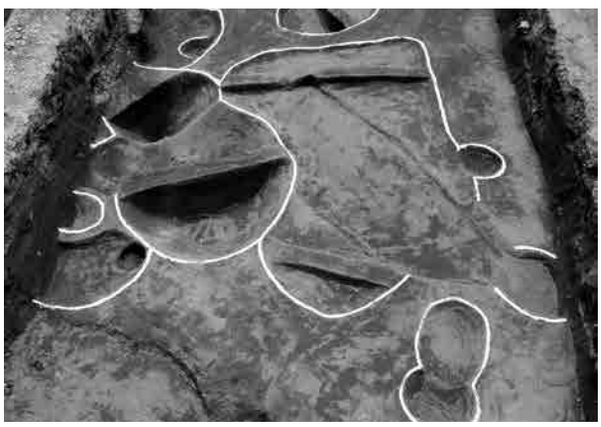
２．Ⅳ区　第１遺構面　遺構453（南から）



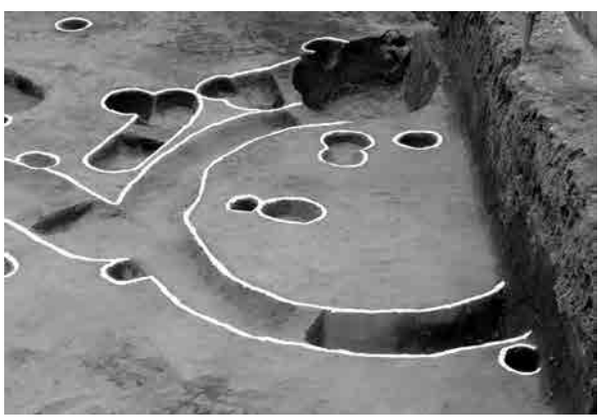
３．Ⅳ区　第２遺構面　遺構264断面（南から）

４．Ⅳ区　第２遺構面　遺構277断面（南から）

５．Ⅳ区　第２遺構面　遺構185断面（北東から）



６．Ⅳ区　第２遺構面　遺構210・213（西から）



７．Ⅳ区　第３遺構面　遺構320（東から）

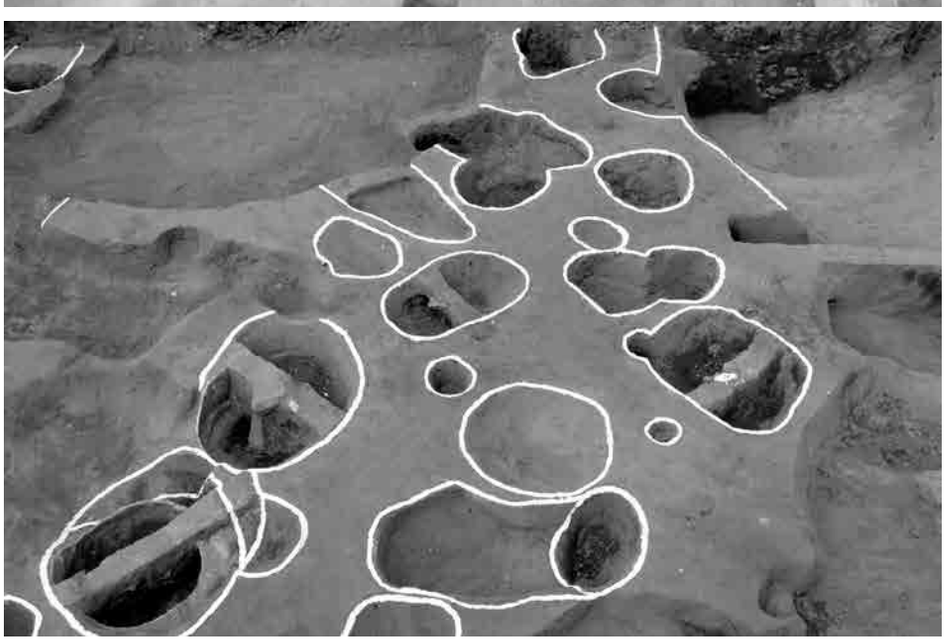
８．Ⅳ区　第２遺構面　遺構459断面（南から）

1．Ⅴ区　第１遺構面全景（上空から）

2．Ⅴ区　第３（２）遺構面全景（上空から）

1．Ⅴ区　西側
第１遺構面・遺構515
（西から）

2．Ⅴ区　東側
第１遺構面
（南西から）



3．Ⅴ区　第１遺構面
西部土坑群
（南西から）

1．Ⅴ区　西側
第３（２）遺構面
（東から）

2．Ⅴ区
第３（２）遺構面
遺構600・602
（南東から）

3．Ⅴ区
第３（２）遺構面
遺構560・569
（南西から）

１．Ｖ区　第１遺構面　遺構515断面（南から）

２．Ｖ区　第１遺構面　遺構493断面（北東から）

３．Ｖ区　第１遺構面　遺構530断面（北東から）

４．Ｖ区　第２遺構面　遺構580断面（北から）

５．Ｖ区　第２遺構面　遺構572断面（西から）

６．Ｖ区　第３遺構面　遺構569断面（北東から）

７．Ｖ区　第３遺構面　遺構600断面（南東から）

８．Ｖ区　第３遺構面　遺構602断面（南東から）

1．Ⅵ区　第１遺構面全景（上空から）

2．Ⅵ区　第３（２）遺構面全景（上空から）

1．Ⅵ区
第１遺構面全景
（南西から）

2．Ⅵ区
第３（２）遺構面全景
（南西から）

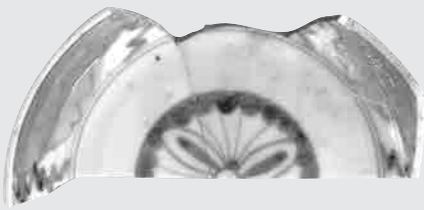
3．Ⅵ区
第１遺構面　遺構350
（北西から）

5

6

11

21



12

22

23

24

Ⅰ区出土遺物

26

28

45

27

48

49

53

71

75

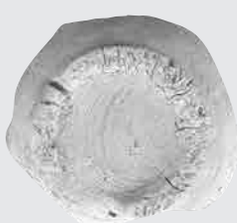
76

103

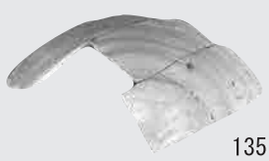
104

123

130


131

134


135

136

137

138

147

152

154

178

198

149

162

176

182

183

204

205

242

243

202

232

240

255

257

262

277 278

282 281

296

299

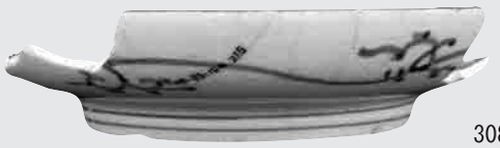
256

258

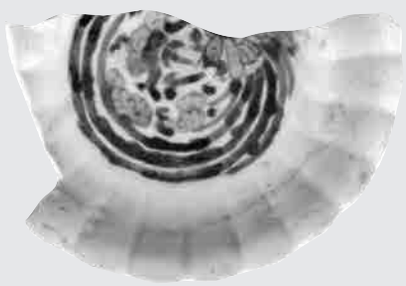
304

305

306



308



317

341

342

318

327

331

339

338

344

343

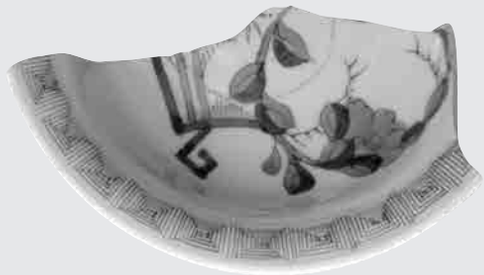
402

403

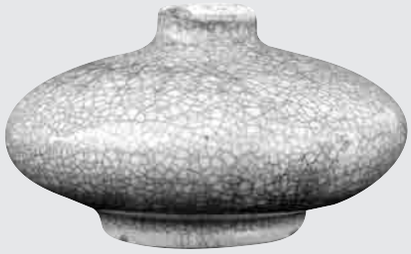
411

406

421



422



425

424

427

432

433

435

443

442

445

448

453

454

458

459

460

473

481

483

491

484

Ⅴ区出土遺物

502

503

526

527

528

497

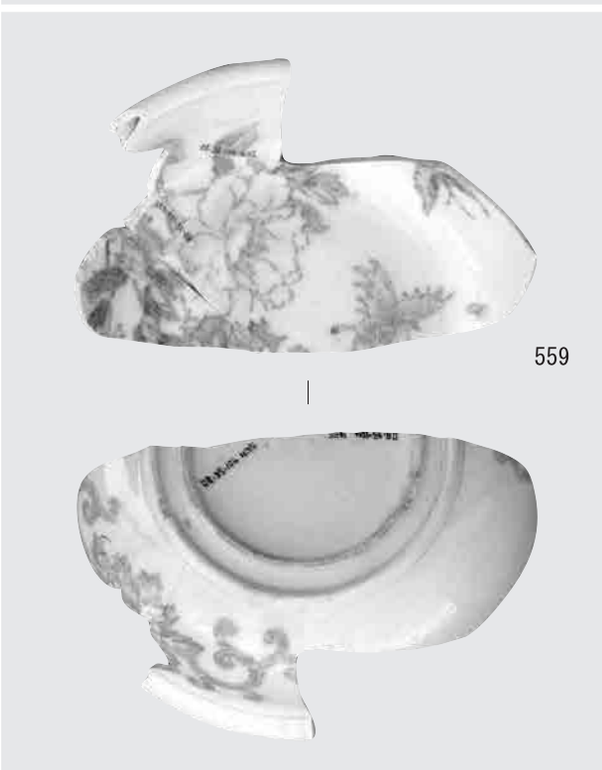
520

518

540

529

553


559

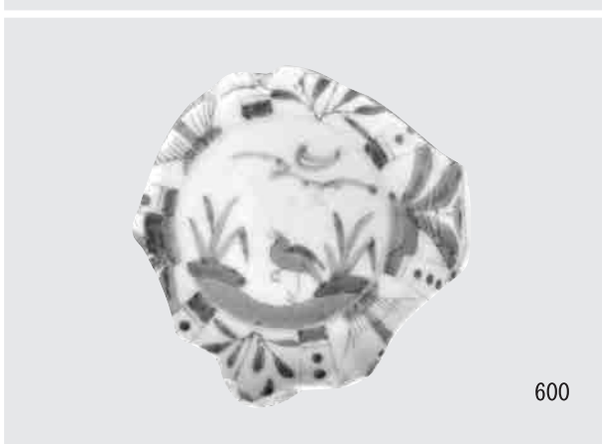
601

563

564

567

597


600

報告書抄録

ふりがな	たなべじょうかまちいせき
書名	田辺城下町遺跡
副書名	元町新庄線外１線道路改良事業に伴う発掘調査報告書
編著者名	川崎　雅史
編集機関	財団法人　和歌山県文化財センター
所在地	〒640－8404　和歌山県和歌山市湊571－1　　TEL　073-433-3843
発行年月日	西暦2010年６月10日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たなべじょうかまち 田辺城下町 いせき 遺跡	わかやまけん 和歌山県 たなべし 田辺市 みなみしんまち 南新町・ みなと 湊	30206	104	33° 43′ 56″	135° 22′ 50″	第１次調査 20070515～ 20070731	330	道路改良事業
						第２次調査 20080327～ 20081226	1587	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田辺城下町遺跡	散布地	弥生時代	土壙墓	弥生土器	砂丘上の墓地
		平安時代	土坑	黒色土器、土師器、銭貨	
		平安時代末～室町時代	掘立柱建物、溝、井戸、土坑	土師器、瓦器、山茶碗、輸入磁器、国産陶器、石鍋、銭貨	中世の集落
		江戸時代	礎石建物、石組土坑、溝、土坑	国産陶磁器、土師質土器、鉄滓、銭貨、鉄釘	城下町の町屋を構成する遺構

要約	田辺城は紀州徳川家の付家老であった安藤氏の居城で、田辺城下町遺跡はその城下町の東側を範囲としている。遺跡の立地は、会津川河口左岸に形成された砂丘上で、遺跡内には古銭や弥生土器の出土地がある。道路改良工事に伴う発掘調査において弥生時代の供献土器を伴う土壙墓が見つかり、周辺に墓域が展開していたことが分かった。中世の遺構としては掘立柱建物や溝・井戸などが検出され、集落が形成されていたことが窺える。建物や溝の軸方向は、江戸時代や現在の地割に沿うもので、田辺の地割りは中世に形作られたものであると考えることができる。江戸時代の遺構としては、礎石建物や溝･石組土坑などが検出され、これらは城下町の町屋を構成するものであるといえる。出土する江戸時代の遺物には前半代のものはなく、ほとんどが後半代以降で、なかでも幕末頃のものが大勢を占めている。調査区付近が町屋として画期を迎えるのは江戸時代でも終わり頃になってからであると考えられる。遺物には日常雑器や生活道具が揃っており、茶道具や碁石などの出土もあり、当時の生活を復元することが可能である。

田辺城下町遺跡
－元町新庄線外１線道路改良事業に伴う発掘調査報告書－

2010年６月10日

編集・発行　財団法人　和歌山県文化財センター
印刷・製本　白光印刷株式会社